大正六年九月十四日　第三種郵便物認可・昭和七年九月二十七日　印刷納本・昭和七年十月一日發行　（毎月一回一日發行）

建築と社會

昭和七年十月一日第十五輯第十號

10

創立滿十五年記念號

日本建築協會

登録商標 OHNO SHUTTER PATENTE

日米特許一二個・實用新案登錄四六個併用

大野式防火捲上ケ戸

〔特許大野式シヤッター〕

主要製品

大野式シヤッター

大野式ルーブルシヤッター

大野式工場用軸承

大野式轉子入軸筐

大野式轉子入戸車

大野式廻轉軸抵抗測定機

各種防火扉

日英米佛特許三一個・實用新案五九個併用

特許不二サッシ

受托營業

合資會社 大野製作所

東京市芝區三田四國町二番地・電話三田(45)三七三七 三七三八

取付出張員駐所・大阪市此花區上福島中二・電話福島(45)五八八

會告

協會紋章ノ件

當協會ノ紋章ハ今回次ノ通決定致シマシタ



協會員胸章ノ件

當協會員胸章ヲ上記會告ノ紋章ニ從ヒ調製致シテアリマス壹個金壹圓也ニテ御頒チ致シマスカラ御佩用ヲ願ヒマス

追テ建築倶樂部會員胸章ハ當協會員タルコトヲモ兼ネ表ハスモノデアリマス

創立滿十五年記念建築通俗大講演會

會場　大阪中央公會堂
日時　昭和7年11月2日(水)午後1時

開會の辭	古宇田實君
都市建築改造の急務	波江悌夫君
建築と社會	片岡安君
住居問題の將來	葛野壯一郎君
社寺建築の過去と將來	天沼俊一君
世界の建築傾向	武田五一君
閉會の辭	池田實君

映畫
上海市街戰と建築被害の實況
大震火災による建築被害の實況
滿洲都市文化施設及時局に關する實況

主催　社團法人 日本建築協會

會　　告

別項會告の本會創立滿十五年記念事業計畫はその後着々と準備が進み本十月を中心として花々しく遂行されますがその內決定のものを揭記すれば次の通りであります。

1. 綠ケ丘保健住宅博覽會

會　場　　阪急沿線伊丹　綠ケ丘
會　期　　10月10日～11月10日　（1ケ月間の豫定）

2. 大美野田園都市住宅博覽會

會　場　　南海高野線　大美野田園都市
會　期　　10月10日～11月10日　（1ケ月間の豫定）

3. 住み良い家の展覽會

會　場　　南海高島屋
會　期　　11月1日～11月13日

4. 建築通俗大講演會

會　場　　大阪中央公會堂
日　時　　11月2日(水)午後1時開會

5. 主要建築物及工場の見學旅行

第1回　　大阪、京都、奈良の方面　（豫定）
第2回　　東京、山陰、九州の方面　（豫定）
第3回　　鮮滿、臺灣の方面　　（豫定）

6.「建築と社會」記念特輯號

發　行　濟

7. 記念圖書出版

A　住宅圖案集（定價1圓　送料10錢）（刊行濟）
B　大阪市地質調査圖表　（計畫中）
C　大正昭和大建築圖集　（計畫中）

8. 記念祝賀大會

會　場　　大阪中央公會堂
日　時　　11月2日（水）

昭和七年十月

社團法人　**日本建築協會**

綠ヶ丘保健住宅博覽會概要

趣　旨　關西に於ける建築家の唯一の團體たる日本建築協會は、其創立滿十五年の記念事業として數多の目論見を發表して居りますが、其内の一つとして阪急電車の沿線伊丹町綠ヶ丘の清澄閑雅なる高燥にして、眺望絶佳なる土地を卜し、其協會が賞を懸けて募集した優秀なる設計案で、其協會の會員自身が施工した價格低廉にして完全なる數十の住宅を新築し、之れを綠ヶ丘保健住宅博覽會と稱して、我協會がかねて住宅に對する理想を世に發表し世の公平なる批判を仰がふとして居るのであります。

現今の世情は、云ふまでもなく世界的不況の影響を多大に蒙つて、人々の住宅に對する要求も亦大邸宅を建つるよりは、融通自在なる小規模の住宅を希望する傾向が見へて居ります、我博覽會の出品住宅は、之を希望者に分讓せんとする目的である故に努めて其等の希望に添ふように、其大さを延坪三十坪以下とし、其敷地の賣價をも破格の割引價格として居るのであります。

住宅の機能は、主として其間取りの巧拙にかゝつて居り、其外觀の美醜は建築樣式操作の手腕の優劣にかゝつて居ります、今回發表の出品住宅は、會員の手腕が其等の點に關して遺憾なく發揮されて居ると信じます。

住宅建築は、我邦に古來より傳統的に發達し來つた樣式と、明治以後次第に採用され來つた歐洲の樣式とが、昭和の時代になつて渾然融和して一新樣式を樹立せんとして居るの機運に向ふて來ました、今回の住宅博覽會の出品は、我邦在來の輕快なる住宅樣式と、合理的なる歐洲式住宅との内容とを、一小住宅に盛らんとする試作であるとも云へるのであります、最低の價格を以て最高の理想を獲得せんとする協會の努力に同情を惜しませられざることを大方の諸賢に懇願する次第であります。

會　期　自昭和7年10月10日
　　至　同　年11月10日

會　場　阪急沿線伊丹綠ケ丘住宅地

綠ケ丘住宅地は、阪急電鐵伊丹終點より北十丁餘離れたる處に在り、老松一帶に生ひ茂り、二つの幽邃なる大池水を圍んだ丘陵で、東は箕面、池田の連山を望み遠く東南に生駒、金剛の連峰を一眸の裡に收め、西北は寶塚、六甲、甲山の諸山を眼前に見上げ、眺望絶佳土地高燥にして地相上亦之に適し實に都人士の理想鄉たる住宅地であります。

住宅出品者

住宅出品者は、本協會をはじめ關西に於ける有數の左記建築請負業者其他が、模範的に社會奉仕の精神を以て、奮つて數戸宛出品したものであります。

あめりか屋	新　組
淺野彌三郎	大林組住宅部
大倉土木株式會社大阪出張所	鹿　島　組
梶　山　組	鴻　池　組
竹中工務店	竹井秀吉
中井組	日本建築協會
日本相互住宅株式會社	間組大阪支店
橋本萬次郎	矢　島　組
八尾組	吉　川　組
綠ケ丘土地建物株式會社	（五十音順）

敷地及建物

出品住宅の敷地及建物は大體左で通りであります

1. 土地區劃、道路等一般設備は完成して居ります
2. 敷地は一戸當り百坪内外
3. 土地賣價は一坪金十四圓乃至十八圓（特別の土地を除く）
4. 建物は延面積二十坪乃至三十坪内外
5. 建築費は延一坪當り金百圓内外（造作並疊建具附）
6. 電燈、給水、庭園、門、生垣等の設備をなす
7. 價格は土地建物及附屬設備を含み總額金四千圓内外（價格等は出品住宅の門前に表示いたしてあります）

賣　却

出品物の賣約及賣却は綠丘土地建物株式會社（大阪市北區堂島堂ビル四階、會期中は現地博覽會事務所に出張）が之に當りますから購入御希望者は同社へ御申込みを願ひます

優　待

1. 會期中の賣約に對しては土地代金に付特に一割五分引とし尚建築代金に付ても特に相當の割引を致します
2. 出品住宅購入者には阪急電鐵（伊丹―大阪若は神戸間）一ケ年の無料乘車券一枚を贈呈いたします

昭和七年十月

主　催　日本建築協會
後　援　阪神急行電鐵株式會社
同　大阪時事新聞社
同　綠丘土地建物株式會社

顧　問　兵庫縣知事　白根竹介
同　大阪府知事　縣忍
同　阪神急行電鐵株式會社長　小林一三
同　大阪時事新報社長　進藤信義
同　綠丘土地建物株式會社長　深川重義
相談役　兵庫縣川邊郡伊丹町長　伴律治
同　兵庫縣伊丹警察署長　内藤常二
同　兵庫縣縣會議員　田中源之助
會　長　日本建築協會副會長　武田五一
副會長　工學博士　日本建築協會　葛野壯一郎
同　住宅委員會委員長　日本建築協會　安井武雄
　　敎化委員會委員長
日本建築協會

幹　事　今林彦太郎　小川安一郎　芝田知重
　　坪井誠一　德政金吾　古塚正治
　　增山新平　村野藤吾
委　員　有山福重郎　岡本新次郎　籠田定憲
　　加藤誠二　加藤善吉　鈴木末尾
　　波江悌夫　中島智喜　西田儀太郎
　　西村辰次郎　伴野貞三　藤井厚二
　　南信　保田虎太郎
增當常務　小川陽吉　鳥井信　森本藤吉
阪神急行電鐵株式會社
委　員　安倍親雄　浦野富造　中川敬一
　　和田啓三
綠丘土地建物株式會社
委　員　小野木新太郎　高畑乙松　高木勇
　　深川重義　村井清
大阪時事新報社
委　員　江口七郎　小堀保三郎　（五十音順）

大美野田園都市住宅博覽會概要

趣旨　關西に於ける建築家の唯一の團體たる日本建築協會は、其創立滿十五年の記念事業として數多の目論見を發表して居りますが、其內の一つとして南海電車の高野沿線大美野田園都市の清澄閑雅なる高燥にして、眺望絕佳なる土地を卜し其協會が優秀なりと認めたる設計案で、其協會の會員自身が施工した價格低廉にして完全なる數十の住宅を新築し、之れを大美野田園都市住宅博覽會と稱して、我協會がかねて住宅に對する理想を世に發表し、世の公平なる批判を仰がふとして居るのであります。

現今の世情は、云ふまでもなく世界的不況の影響を多大に蒙つて、人々の住宅に對する要求も亦大邸宅を建つるよりは、融通自在なる小規模の住宅を希望する傾向が見へて居ります、我博覽會の出品住宅は、之を希望者に分讓せんとする目的である故に努めて其等の希望に添ふように、其大さを延坪三十坪以下とし、其敷地の賣價をも破格の割引き價格として居るのであります。

住宅の機能は、主として其間取りの巧拙にかゝつて居り、其外觀の美醜は建築樣式操作の手腕の優劣にかゝつて居ります、今回發表の出品住宅は、會員の手腕が其等の點に關して遺憾なく發揮されて居ると信じます。

住宅建築は、我邦に古來より傳統的に發達し來つた樣式と明治以後次第に採用され來つた歐洲の樣式とが、昭和の時代になつて渾然融和して一新樣式を樹立せんとして居るの機運に向ふて來ました、今回の住宅博覽會の出品は、我邦在來の輕快なる住宅樣式と合理的なる歐洲式住宅の內容とを一小住宅に盛らんとする試作であるとも云へるのであります最低度の價格を以て最高の理想を獲得せんとする協會の努力に同情を惜しませられざることを大方の諸賢に懇願する次第であります。

會期　自昭和7年10月10日
　　至　同　年11月10日

會場　南海高野線北野田驛前大美野田園都市

大美野田園都市は、南海電車難波驛より車程二十五分、南海高野線北野田驛前にある、總面積四十萬坪を抱擁する一大丘陵地であります、其環境は河內和泉の境界に展開せる高燥なる自然の丘陵地にして、靜に澄む大池小池、雜木の林、森、紫にしたゝる葡萄の畑、なだらかな原と小丘、綠の河內平野、狹山黑山の松林、金剛葛城の秀峰、堺大大阪市史現のパノラマ古今の交響樂であります。

設備としては莊重廣大な近代ドイツ式の新道路網、車道と綠樹帶とペーブメントされた輕快な步道、噴水の廣場、公園道路、遊園地、衛生的な暗渠式の下水道、清澄豐富な上水道施設、高島屋賣店、小學校等完成せる理想住宅地であります。

住宅出品者

住宅出品者は、本協會をはじめ關西に於ける有數の左記建築請負業者其他が、模範的に社會奉仕の精神を以て、奮つて數戶宛出品したものであります。

今西組	大林組住宅部
大野組	關西土地株式會社
鹿島組	清水組
竹中工務店	日本建築協會
森本建築社	其他（五十音順）

敷地及建物

出品住宅の敷地及建物は大體左の通りであります

1. 土地區劃、道路、上水、下水等の設備は完成して居ります
2. 敷地は一戶當り百坪內外
3. 土地賣價は一坪金十二圓乃至十五圓
4. 建物は延面積十五坪乃至三十坪內外
5. 建築費は延一坪當り金百圓內外（造作並疊建具附）
6. 電燈、給水、庭園、門、生垣等の設備をなす
7. 價格は土地建物及附屬設備を含み總額金四千圓內外（價格等は出品住宅の門前に表示いたしてあります）

賣却

出品物の賣約及賣却は關西土地株式會社（大阪市東區今橋二丁目二九、會期中は現地博覽會事務所に出張）が之に當りますから購入御希望者は同社へ御申込みを願ひます

優待

1. 會期中の賣約に對しては土地代金に付特に一割五分引とし尙建築代金に付ても特に相當の割引を致します
2. 出品住宅購入者には南海鐵道（難波北野田驛間）一ケ年の無料乘車券一枚を贈呈いたします

昭和七年十月

主催　日本建築協會
後援　南海鐵道株式會社
同　夕刊大阪新聞社
同　關西土地株式會社

顧問　大阪府知事　縣　忍
同　南海鐵道株式會社長　岡田意一
同　夕刊大阪新聞社長　前田久吉
同　關西土地株式會社長　橫江萬治郎
相談役　大阪府南河內郡大草村長　高內由松
同　大阪府南河內郡野田村長　西田增治郎
同　大阪府福田警察署長　淺川政雪
會長　日本建築協會副會長工學博士　武田五一
副會長　日本建築協會住宅委員會委員長　葛野壯一郎
同　日本建築協會敎化委員會委員長　安井武雄

日本建築協會
幹事　今林彥太郎　小川安一郎　芝田知重
　　坪井誠一　德政金吾　古塚正治
　　增山新平　村野藤吾
委員　芦田政一　飯高達夫　木村寬一
　　久保田廉　久保田筆雄　小西一良
　　澁谷五郎　須藤隼人　中村義雄
　　藤本正一　松本儀八　松丸盛一郎
　　山脇友三郎　八木盛二
擔當常務　小川陽吉　鳥井信　森本藤吉

南海鐵道株式會社
委員　大野養一　鯉淵佐橘　清水浩
　　二階賢　廣川龍雄　味村亨
　　山田久太郎　吉村茂　吉田卯之吉

關西土地株式會社
委員　今井英雄　梶田四郎　北垣熊之介
　　建谷辰治

夕刊大阪新聞社
委員　小畠正幸　鷲石武　（五十音順）

創立滿十五年記念事業計畫に就いて

我日本建築協會は大方各位の熱誠なる御贊助と懇切なる御後援とに依り本會當初の目的達成に邁進し苟も建築に關聯する事項は理論と實際に依據して汎くその實現と指導とに膺り着々功を收め、常に建築界の先驅となりて社會公益のために活躍し今や我國に於ける最も有力なる團體の一として成長し恰も本年を以て創立滿十五年を迎へるに到りたるは洵に慶福の至りで深く感謝する次第であります。

顧れば本會は大正六年春三月關西建築協會と名づけて創立せられ、大正八年一月日本建築協會と改稱し逐年隆盛となり、大正十五年十月組織を社團法人に更めいよいよその基礎を堅實にし、會員の如きも內地は勿論遠く鮮、滿、臺、支那等に亘りその數今や 1300 名を越ゆるの大を致せり。この間月刊雜誌「建築と社會」を發行し號を重ぬること 178 或は建築關係圖書を出版したるもの十數種に及ぶ、又一面各種の委員會を常設して都市計畫、法規、敎化、資料、災害强度、設備、住宅等に關し不斷の調査研究を遂げ、その結果を天下に公表し攻究に供し、或は建築に關する重要なる意見を要路に建白し、或は嘗て我國に於ける嚆矢とも云ふべき住宅改造博覽會を催して著しき成果を擧げ、或は時に展覽會を開催して建築の知識普及を計りたる等建築界の進步發達に資したる事蹟は蓋し尠少ならざるものあるを自信するものであります。

古來男子十五歲に達すればこれを一轉機として元服し祝福するの習あり。本會は今元服の好歲を迎ふ、卽ちこれを記念すると共に更に一段と飛躍暢達すべきの時に到つた。茲に於て本會は過去を追想し將來に備ふるため佳き年の今秋を卜して大に意義ある記念事業並に祝賀大會を催し、以て從來常に爲さんと志しつゝもこれを達成し得ざりし事項その他を綜合し、この好機を劃してこれが淸算をなすと同時に今後層一層の進展を期し斯界のためますます貢獻する所あらんとする次第であります。

今下に滿十五年記念事業並に祝賀大會計畫の大綱を揭げて大方の熱心なる戮力御協贊を乞はんとするものであります。

1. 住宅博覽會の開催
2. 建築展覽會の開催
3. 住宅設計圖案の懸賞募集
4. 建築通俗大講演會の開催
5. 建築巡回講演會の開催
6. 主要建築物及工場の見學旅行
7. 「建築と社會」記念特輯號の發行
8. 圖書の出版
9. 建築會館建設の企畫
10. 記念祝賀大會の開催

追て住宅博覽會は今秋と來春との二季に分つて數ケ所に開催すべき豫定でありますが、孰れも住宅の改善改良を主眼とし各住宅設計圖案の懸賞募集に依りその優秀なる案を實地に建設する意嚮であります。

昭和七年九月

社團法人 日本建築協會



住宅圖案集

費用2500圓以內
延坪30坪以內

住宅の改善に就いて我が日本建築協會は常に非常なる努力を拂つて居る本年は當協會の創立滿十五年に當るので之が記念の一事業とし大阪近郊數ケ所に住宅博覽會の開催を計畫しまた小住宅の設計案を前後數回に亘つて廣く募集し多數の優秀なる案を獲た。

綠ケ丘保健住宅
大美野田園都市住宅
實際に建つる住宅(阪急電車經營住宅地)
生活改善健康住宅(神戸鈴蘭臺)
メートル法に依る小住宅(メートル法普及の爲め)

上記五種の住宅設計圖案 36 種を圖版 100 頁に納め滿十五年記念出版の一に充てた。世の住宅建築に趣味を有せらるゝ諸賢への唯一の權威ある寶典なることを確く信ずる。

定價 1 圓　送料 10 錢

日本建築協會創立滿十五年 記念出版

日本建築協會刊行

建築と社會

第十五輯第十號　昭和七年十月發行

創立滿十五年記念號

目　次

綠ケ丘保健住宅設計當選圖案……（1）
大美野田園都市住宅設計當選圖案……（5）
實際に建つる住宅設計當選圖案……（9）
住宅三懸賞當選圖案審査評……（13）
綠ケ丘保健住宅博覽會出品住宅圖錄……（15）
大美野田園都市住宅博覽會出品住宅圖錄……（25）
創立十五周年を顧みて……片岡安（32）
我協會の十五周年の記念の日に際して……武田五一（33）
その頃を語る座談會……（35）
最近十五年間に於ける關西建築界の變遷を語る會……（49）
協會の將來を語る座談會……（60）
本會の既往を顧みて……（70）
雜誌の變遷……（78）
綠ケ丘保健住宅博覽會開會式……德政金吾（81）
大美野田園都市住宅博覽會開塲式に參列して……坪井誠一（82）

南洋旅行漫談……武田五一（83）
耐震木造建築への一考察……巽純一（103）
鎔接と電氣鎔接（下）……鶴田明（130）

國際新建築……（35）
會報……（150）

祝創立滿十五年記念

本社及工場　大阪市外神崎驛北側
電話 土佐堀(44)七三二七・七三二八・七三二九
尼ケ崎　一一七七

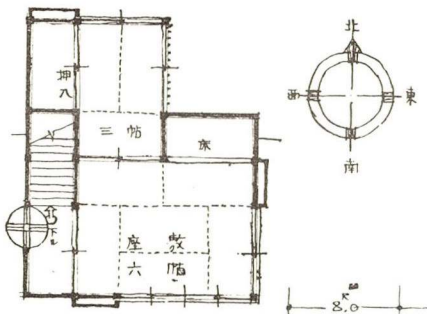
日本エレベーター製造株式會社

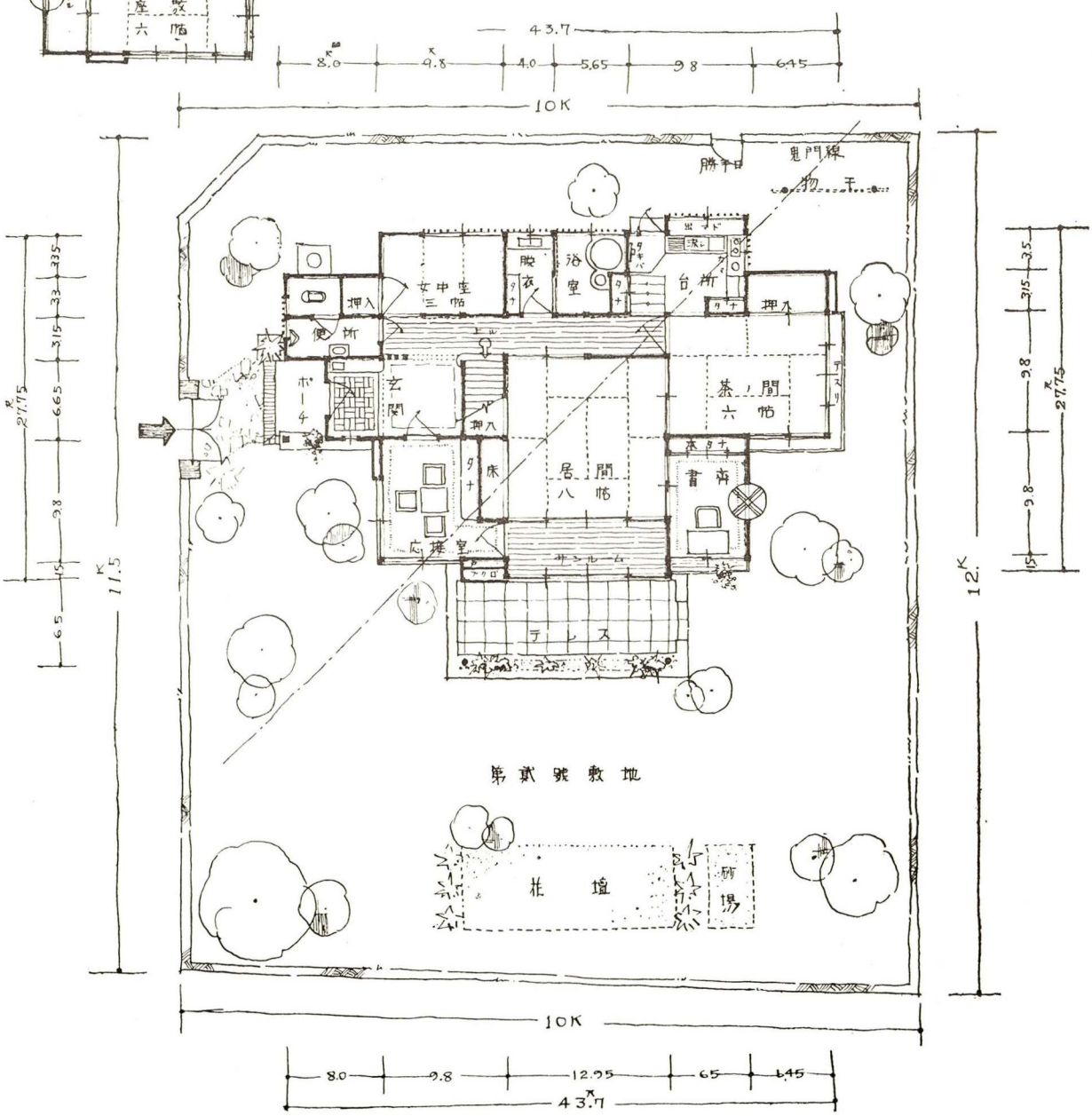
大阪營業所　大阪市大同ビル六階
電話 土佐堀(44)二八七三

東京支店　東京驛前丸ビル五階
電話丸ノ内(23)三〇七三・三〇七四

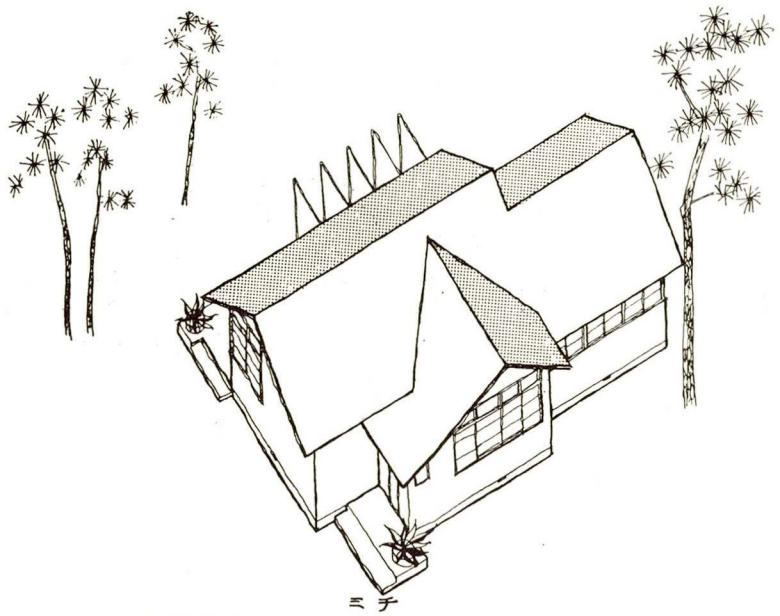
敷　地　西開2號地 118.47坪
建　坪　1階 23.25坪　2階 6.5坪　延坪 29.75坪
家　族　夫婦 子供2人　女中1人
構　造　木造耐震構造 割栗地形 土臺廻りコンクリート打、土臺ボルド締木造和小屋
外　部　米松下見板張、鐵網張モルタル塗白セメント凹凸仕上、木部防腐劑塗布コンクリート見掛りは人造石塗
内　部　洋室眞壁、漆喰塗、和室砂壁、木地仕上、天井洋室トマテックス張、和室、杉竿緣天井
屋　根　土居葺の上日本瓦葺4寸勾配
浴　槽　丸型長州風呂　便所　大正式便所







綠ヶ丘保健住宅設計當選圖案　　1等　　山口正雄君



新しく家庭を持つ人の爲に

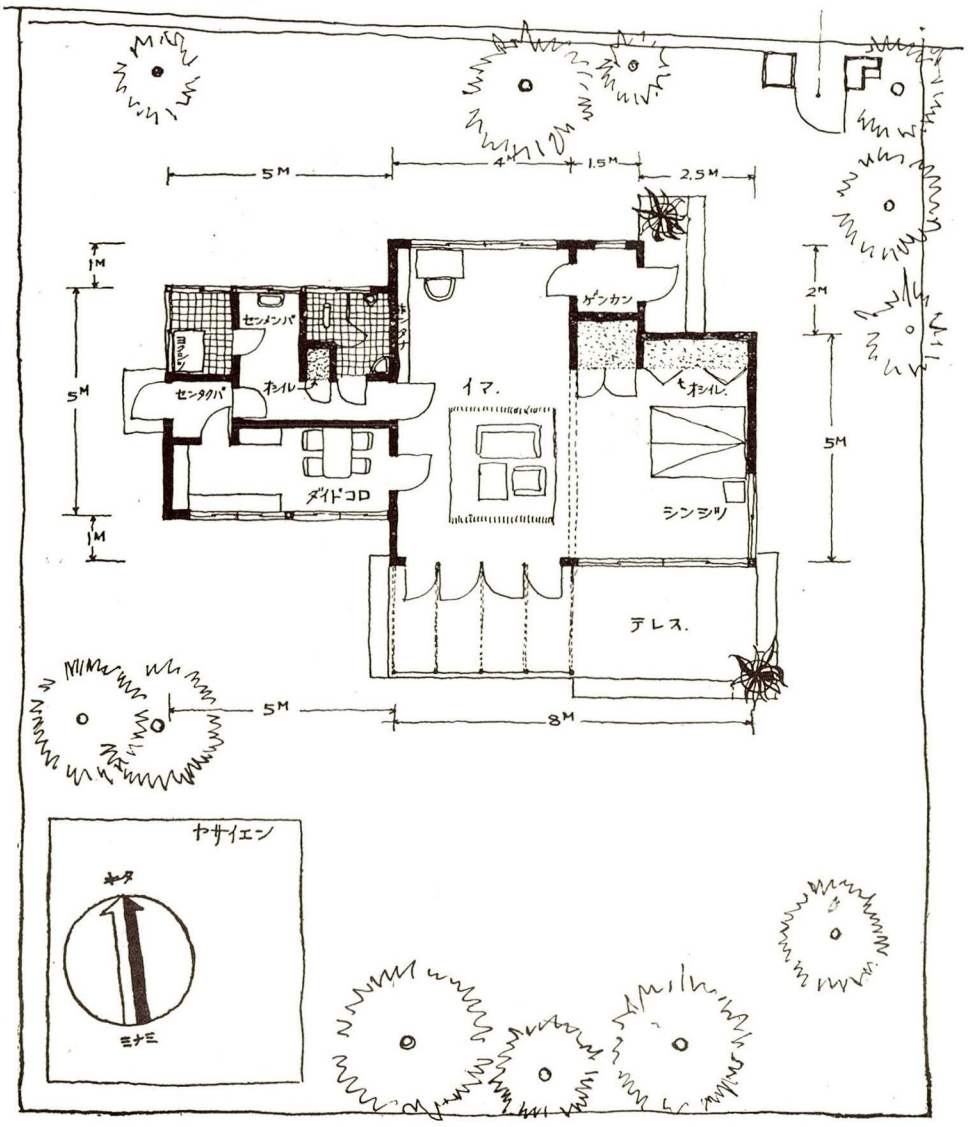
敷　地　神樂塚 14號地 14

5.2坪

建　坪　71平方米(2 .51坪)

構　造

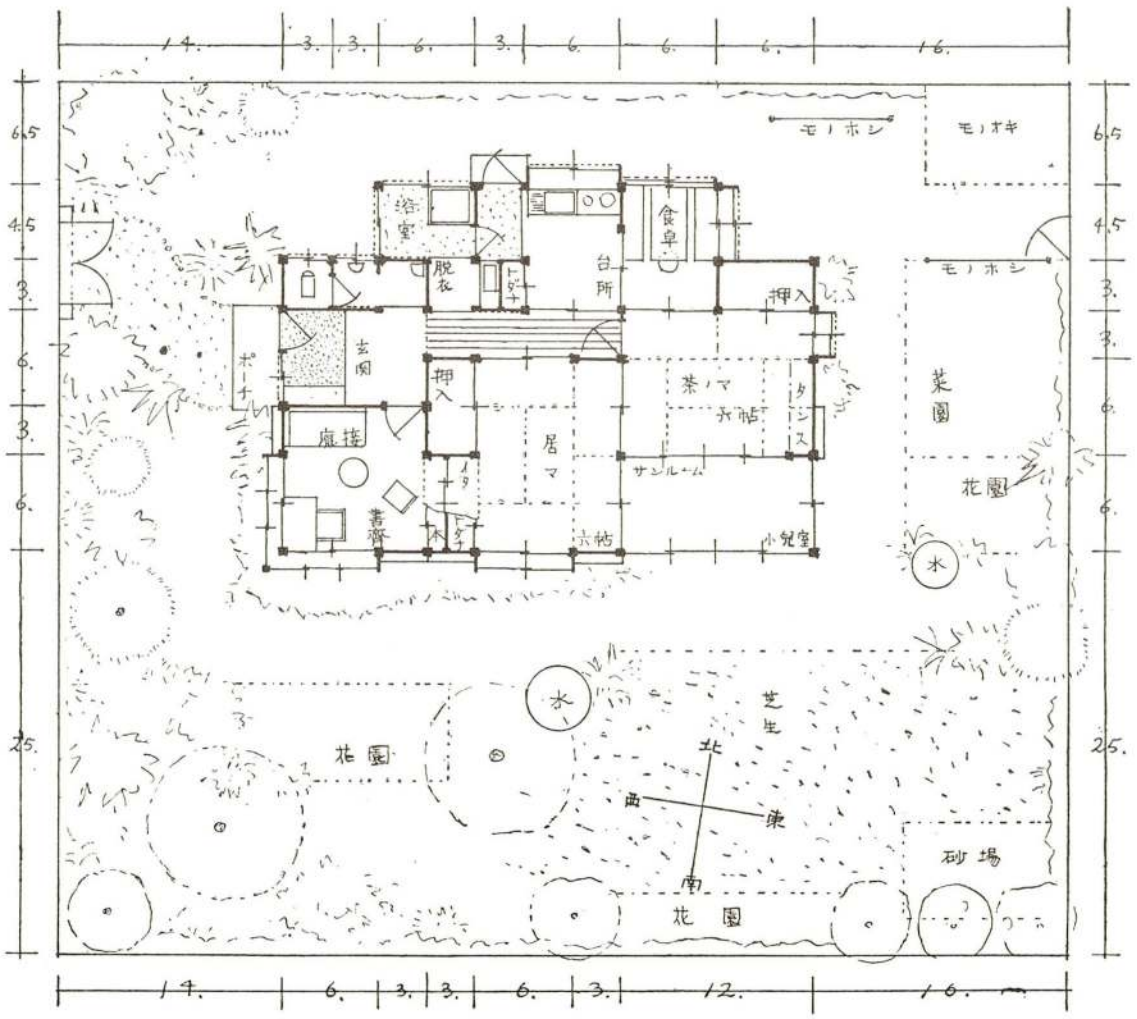
トロッケンバウ、屋根外廻りの壁はアスベスト・スレート張、内壁はライオン・ボード張 但し浴室、便所は腰廻りはタイル張、天井はトマテックス張、床は米松張、但し浴室と便所はタイル張。



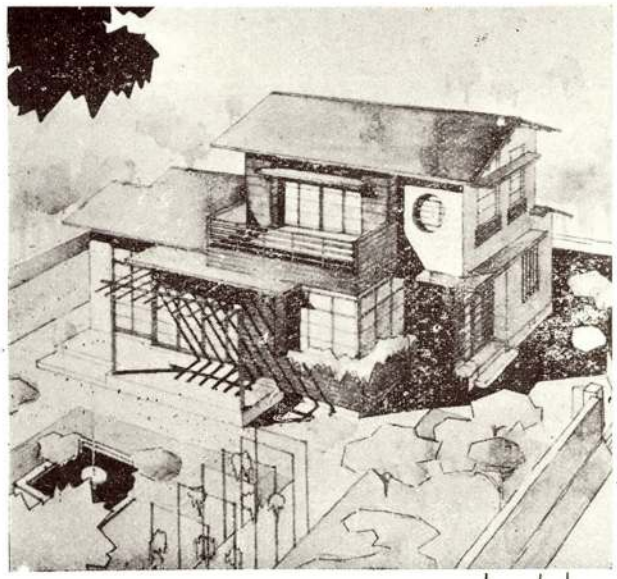
×2　　綠ケ丘保健住宅設計當選圖案　　2等　　佃　十　俊君

敷地　東盛25號地 94.5坪
坪敷　19.125坪
家族　夫婦に子供1,2人
プラン　コムパクトで且狭苦しくない樣各室相互間の關係に留意しました。押入は鴨居上を利用します。小食堂は主婦にとつて種々便利に使はれます
通風　西風のため廣く應接室西側に掃出し窓を設け本戸棚の下から居間へ通風します。又各所に格子を使用してあります故夜の通風に都合がよい。屋根裏床下の通風も心掛けてあります軒出を大として又庇を各所に設けた
浴室　大正式風呂はガス又は無煙釜。

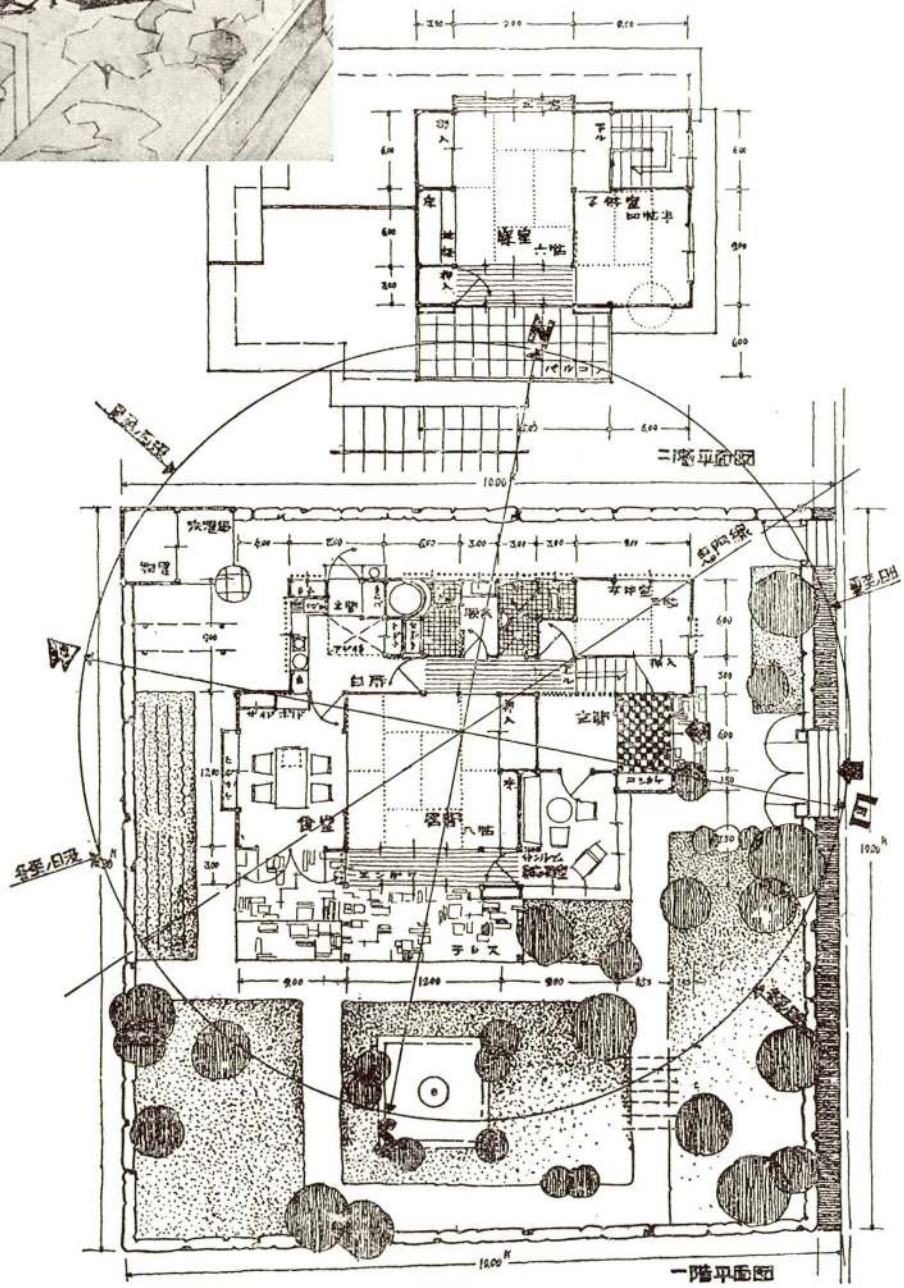




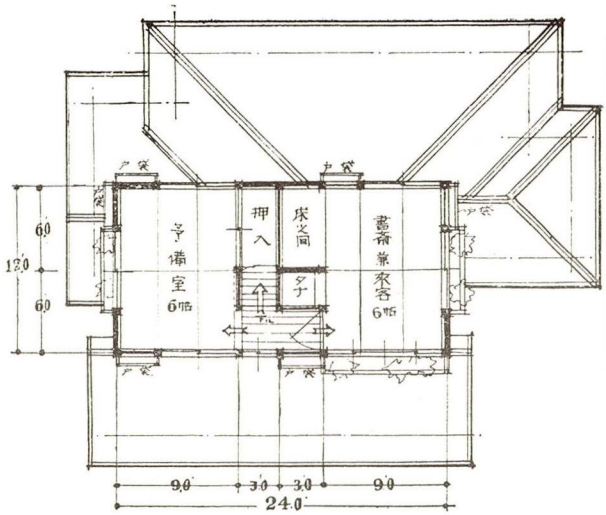
綠ヶ丘保健住宅設計當選圖案　　3等1席　　筑紫太郎君　　3×

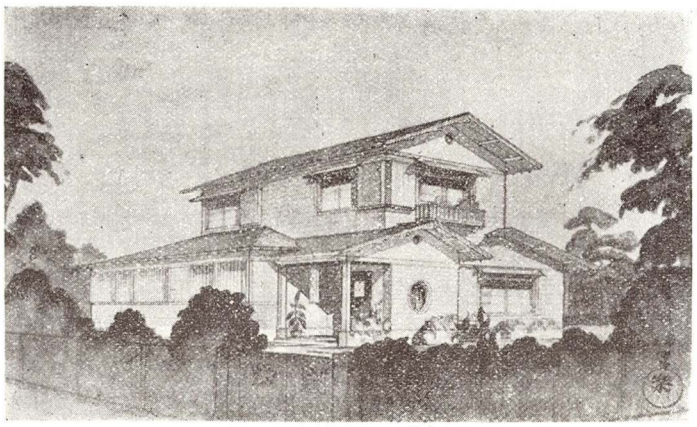


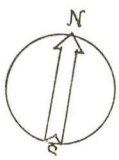
敷　地　東盛 13號地 101坪
坪　數　1階 21.25坪　2階 8.75坪
　　延坪 30坪
　　建築費　2700圓 家族5.6人位
構　造　木造粟地形、土臺廻りコンクリート打ち、和小屋
外　部　鐵網張りの上モルタル塗、白セメント塗一部下見板ペンキ塗、ポーチ、床及テレス床は鐵平石貼付
内　部　全部漆壁、和室砂壁、竿縁天井、洋室天井、漆喰塗ペンキ仕上
屋　根　4寸5分勾配、黒色大平瓦葺
浴　槽　徑2尺5寸、長州風呂、改良汲取便所

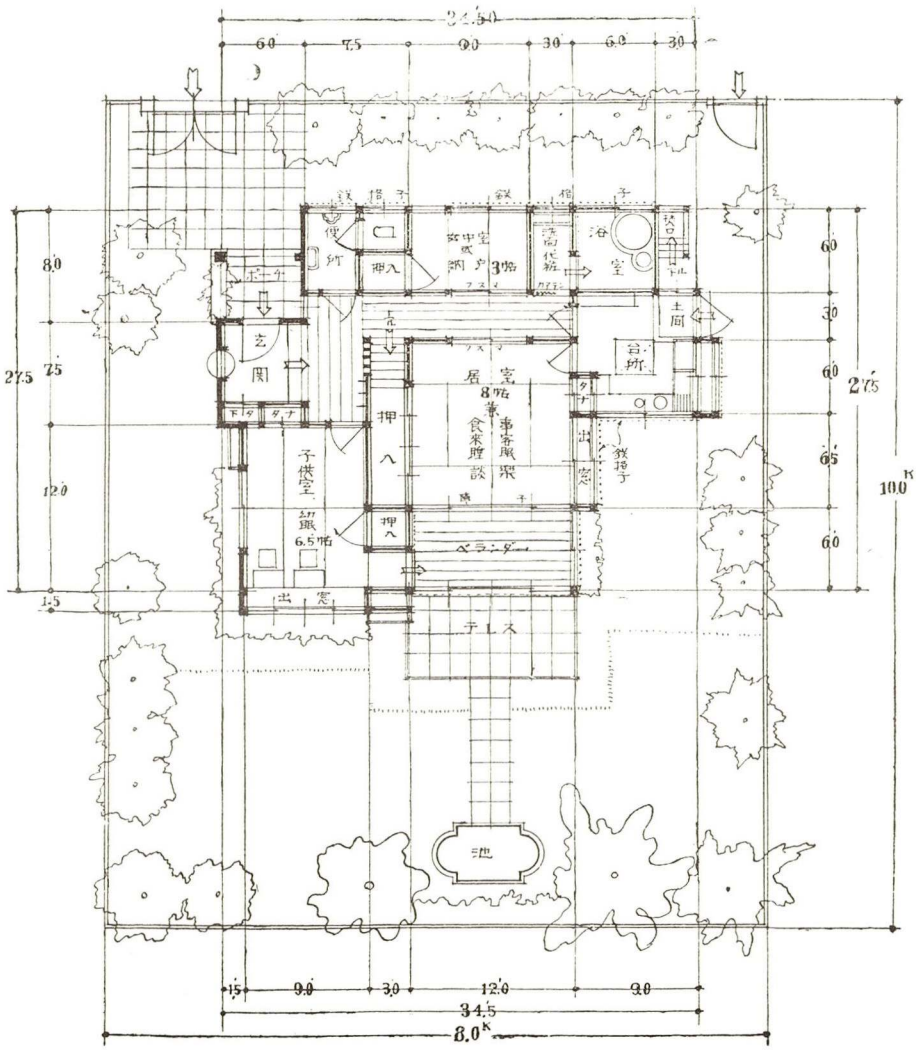


× 4　綠ヶ丘保健住宅設計當選圖案　3等2席　堀　武　雄君



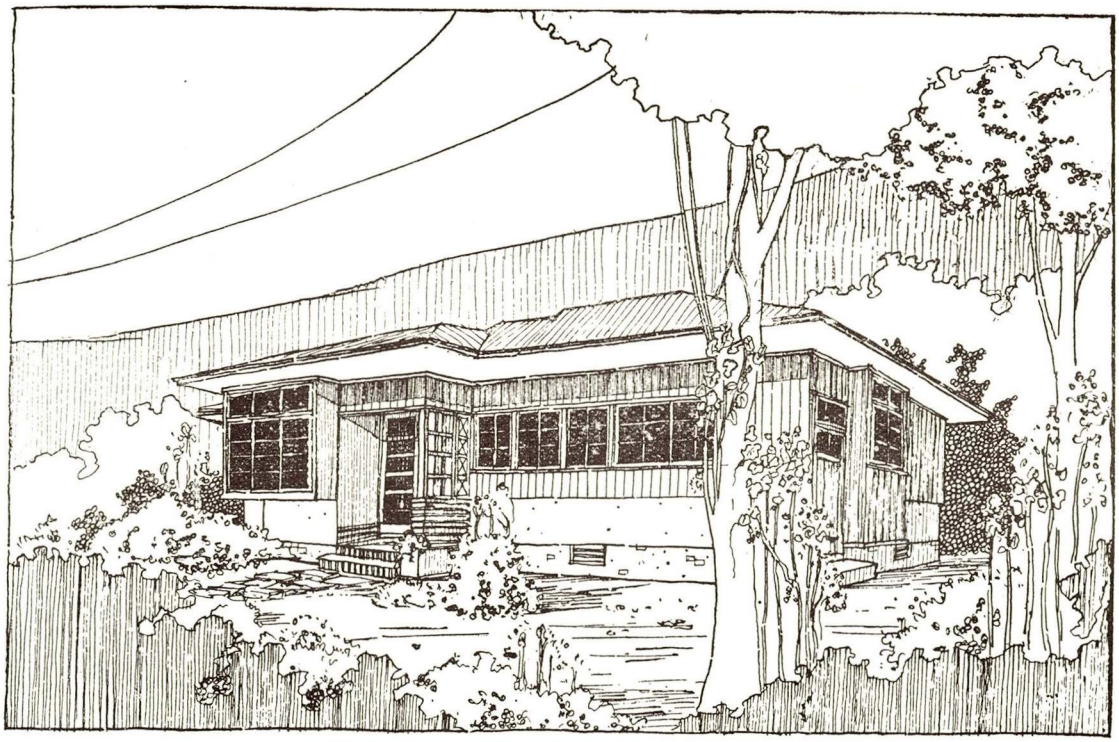


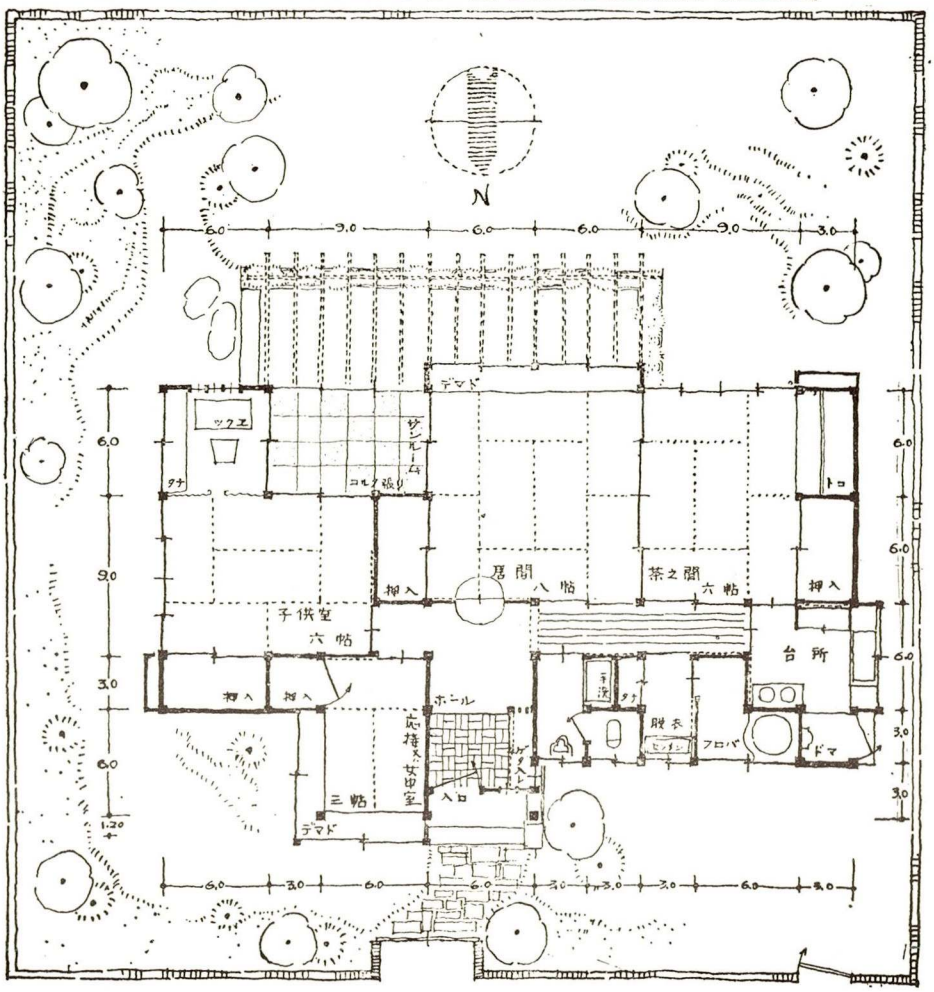




敷　地　80坪
坪　數　1階 21.12坪
　　2階 8坪
延　坪　29.12坪
建築費　2350圓
軒　高　1階 10尺　2階 20尺
　夫婦子供2人、女中1人、計5人
構　造　割栗地形土臺廻りコンクリート打ち和小屋
外　部　米松下見板張一部白漆喰木部ペンキ又はステイン塗、布コンクリート見掛りは人造仕上。ポーチ廻り及テレスは鐵平石張窓雨戸無き個所は鐵格子ペンキ塗
内　部　全部眞壁和室疊敷、砂壁竿椽天井、柱、敷居、鴨居、長押其他雜作材は米栂、天井板は米杉杢板、臺所、廊下、浴室、便所等は色漆喰、木部生地及ペンキ塗、屋根4寸勾配、土居葺、日本葺、浴槽丸型長風呂、便所大正式便所

大美野田園都市住宅設計當選圖案　1等　川部吉助君　5×





敷　地　23坪
坪　數　76.5坪（8.5間×9間）
建築費　1840圓
構　造　割栗地形土臺廻りコンクリート打ち和小屋
外　部　米松縦板張り一部白モルタル塗木部ステイン又はペイント塗布コンクリート廻りは人造石塗
内　部　全部眞壁和室砂壁竿縁天井臺所、廊下、浴室便所等は漆喰木部生地及ペイント塗居間八疊は敷物敷壁紙張りとして洋間として扱ふて可なるべし
屋　根　平安瓦葺、勾配4寸

平面及配置図

× 6　大美野田園都市住宅設計當選圖案　　2 等　　楠 田 忠 男君

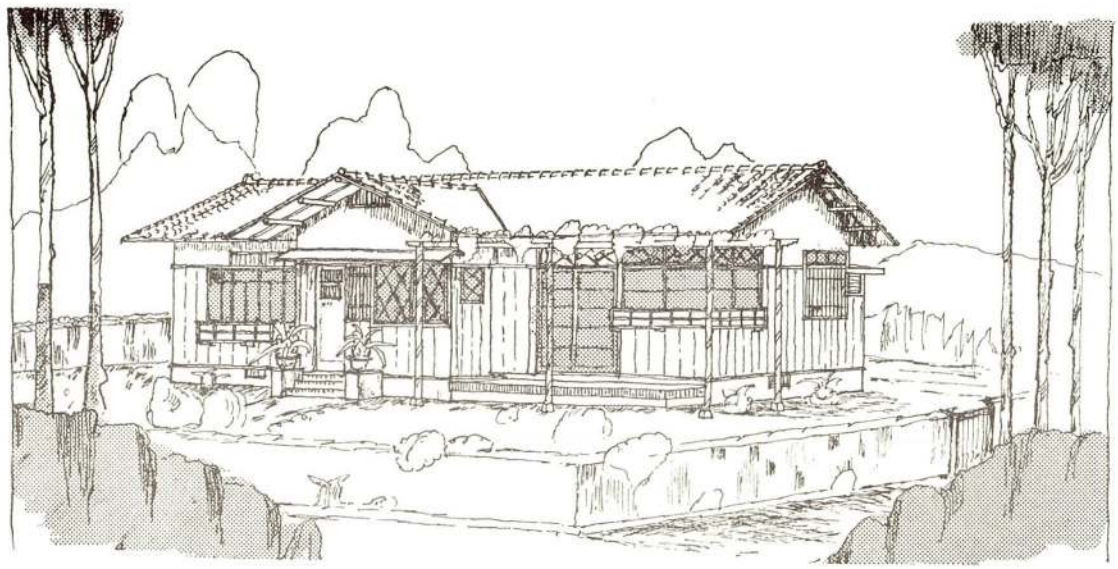
坪数 22.8坪

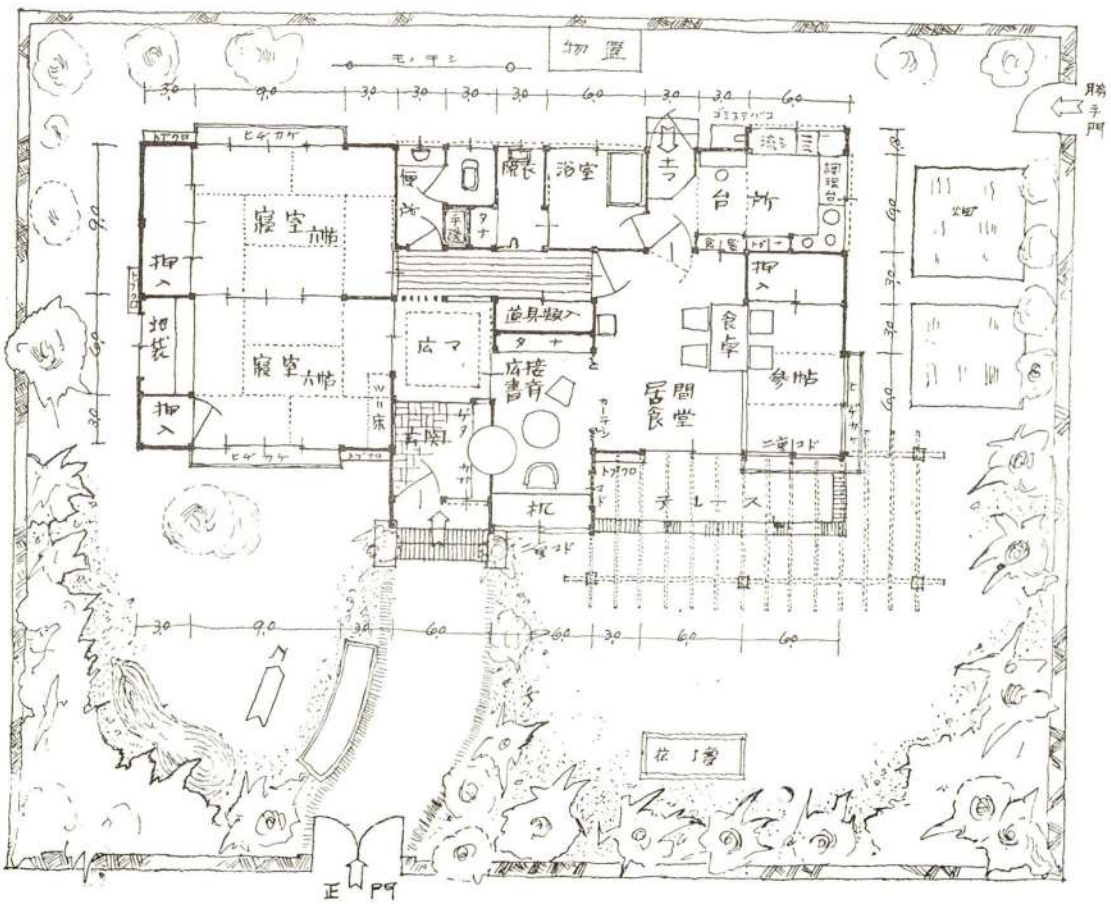
外部
腰廻り豆砂利入モルタル塗、壁體土蔵造杉板張（しぶ塗、堅仕上げ）上部漆喰磨仕上

内部
眞壁漆喰塗及り（居間書齋壁張部ラッカー塗、日本間砂壁）

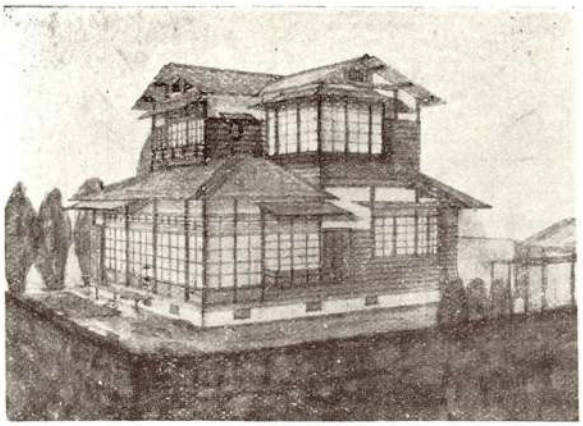
床
居間、書齋及應接室パンキラミ樣甲板張

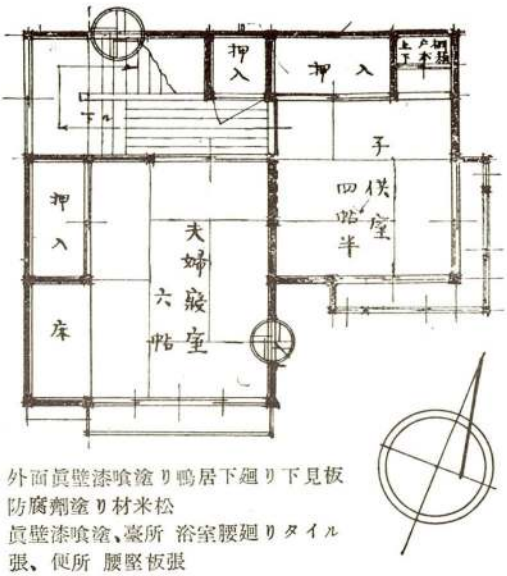
便所
大正式改良便所





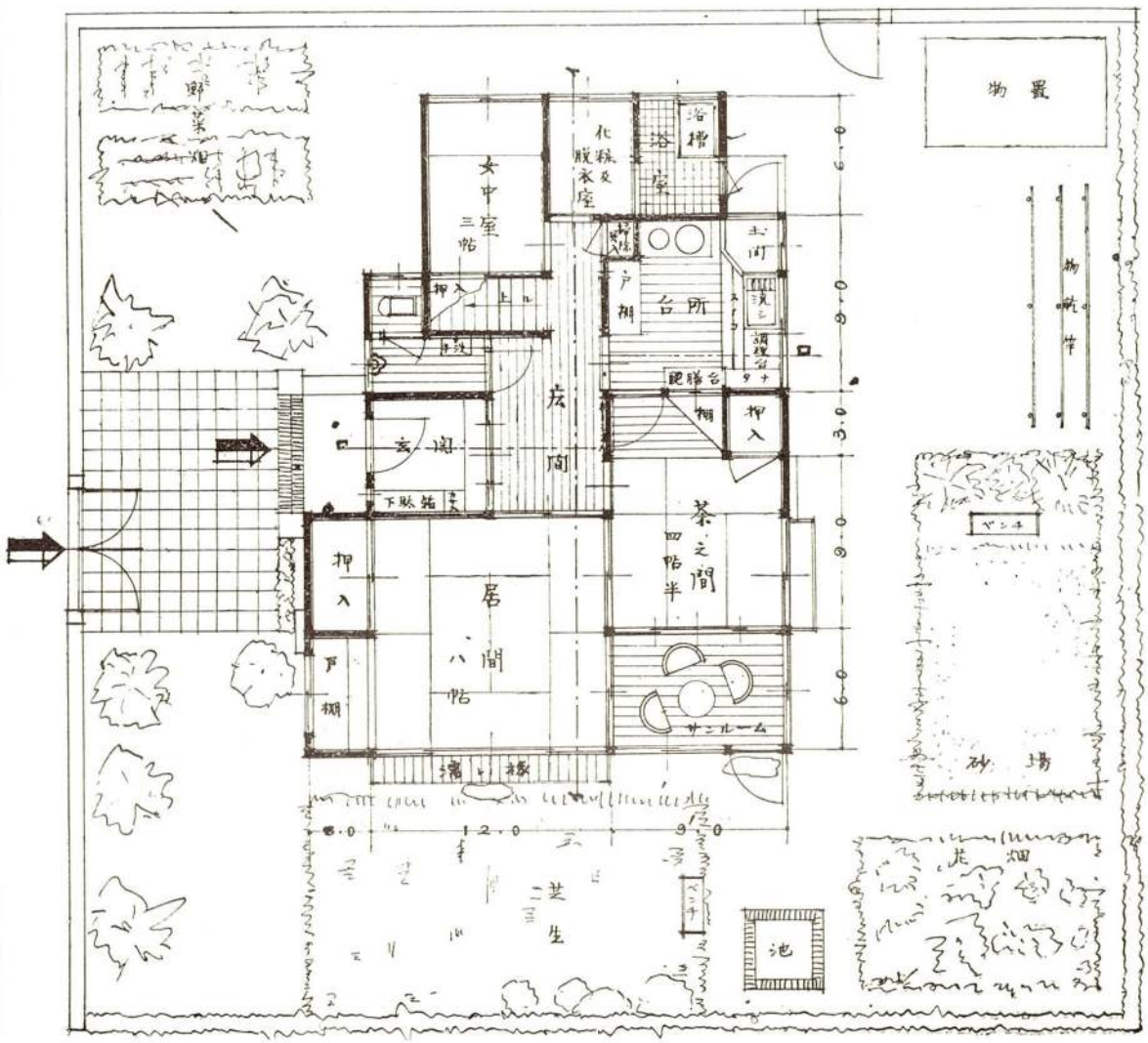
大美野田園都市住宅設計當選圖案　　3等1席　　金子春夫君　　7×



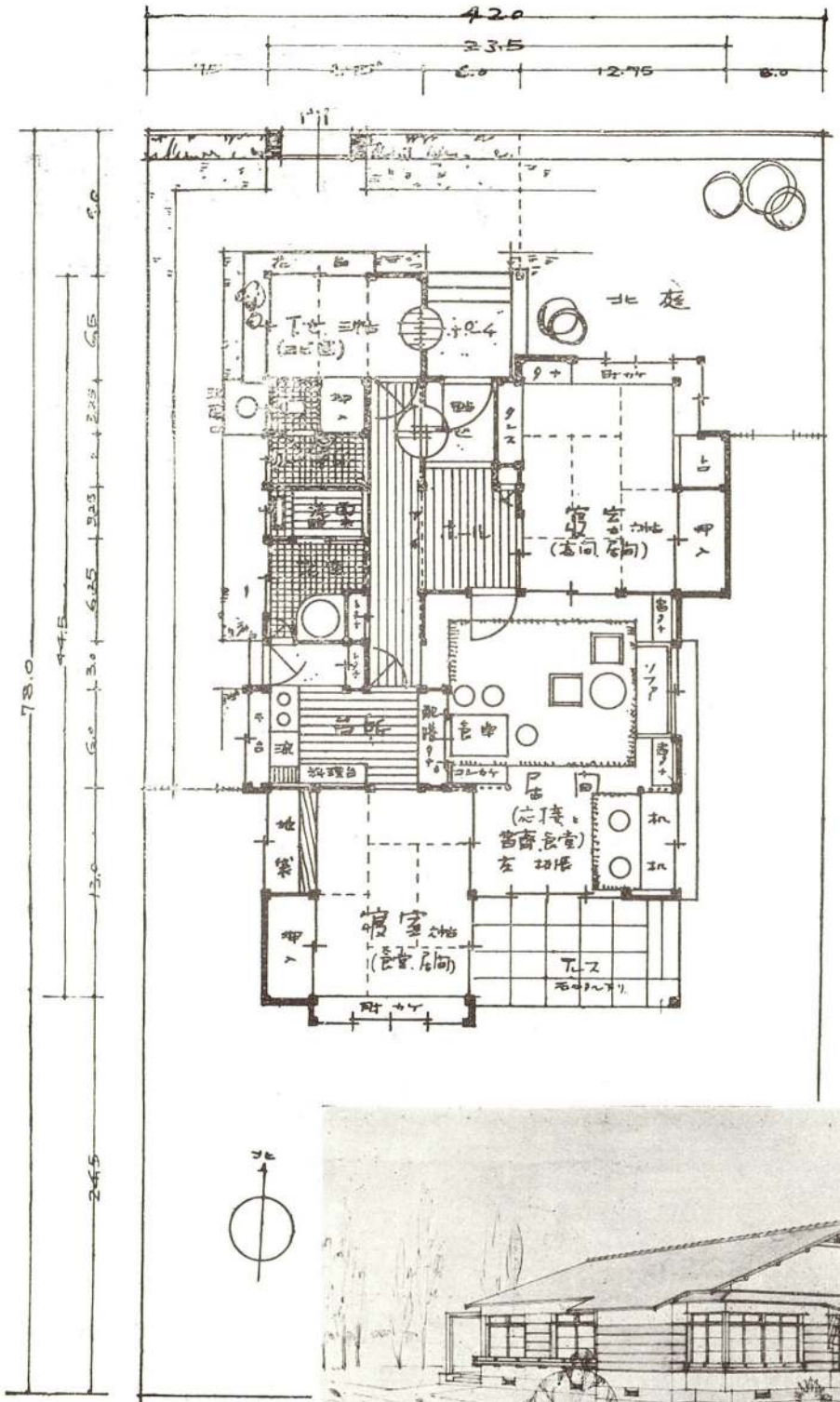


敷　地　76.5坪(8.5間×9間)
坪　数　1階 19坪、2階 9坪
延　坪　28坪
建築費　2300圓
基　礎　土臺迄コンクリート打割栗石地形
屋　根　日本瓦葺
柱　　米杉3寸5分並材

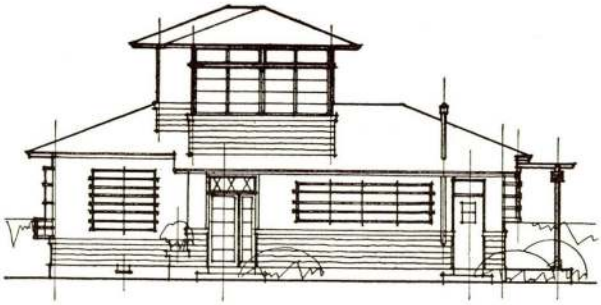
外　部　外面眞壁漆喰塗り鴨居下廻り下見板防腐劑塗り材米松
内　部　眞壁漆喰塗、臺所 浴室腰廻りタイル張、便所 腰壁板張
床　　東立式板張り材米杉
天　井　浴室漆喰塗他は竿縁又は猿頬縁天井
便　所　内務省改良便所

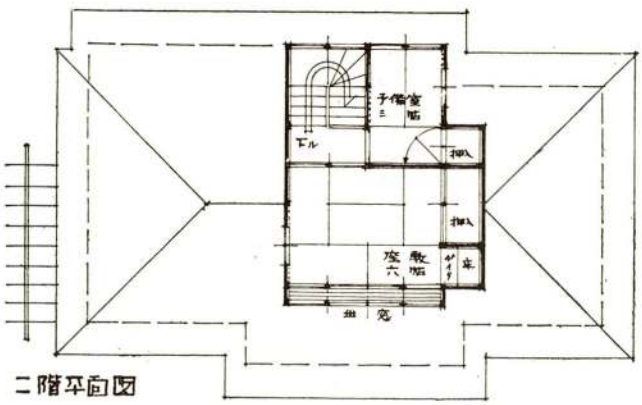


× 8　大美野田園都市住宅設計當選圖案　　3等2席　　田邊由次君

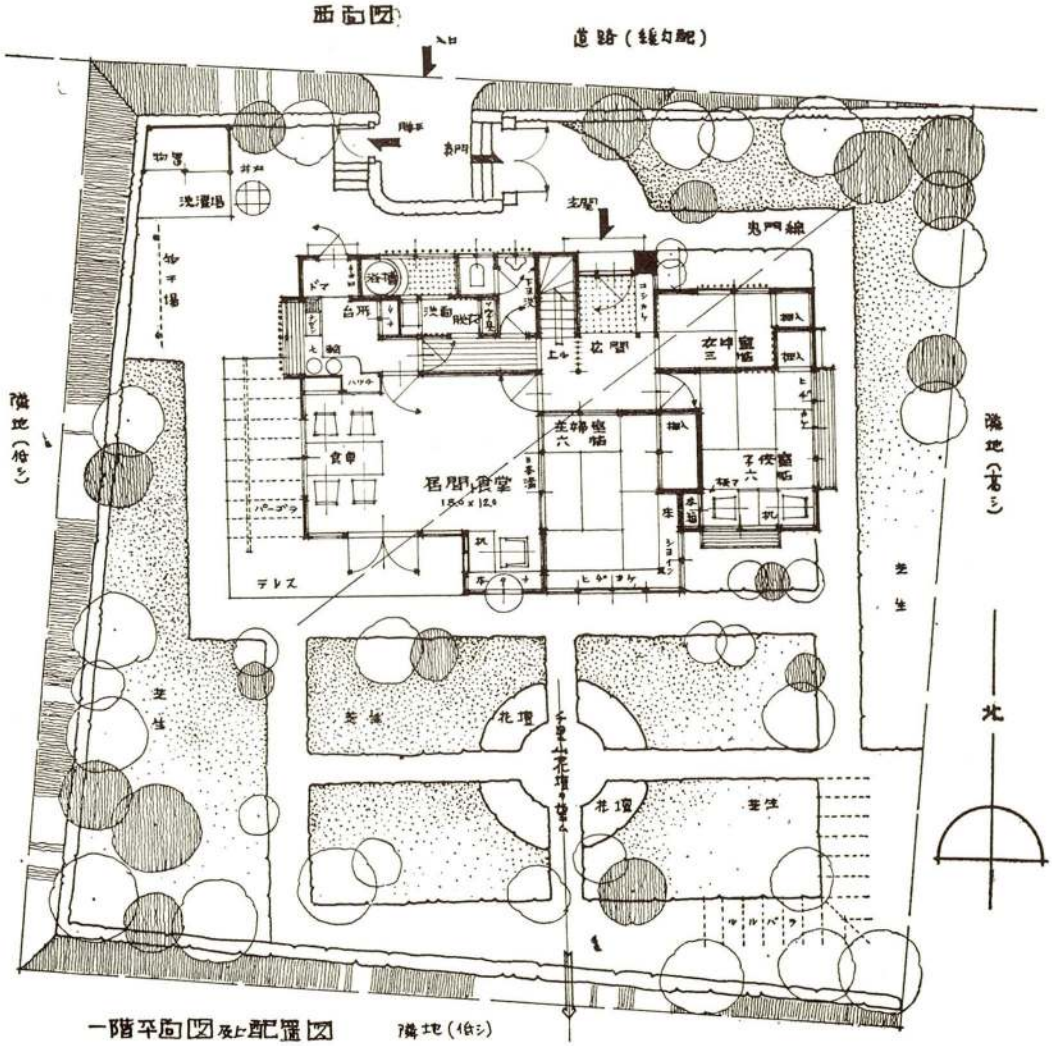


敷地　91坪(7間×13間)
坪数　26.2坪
軒高　12尺
屋根　4寸5分勾配和風引掛桟瓦一文字葺
庇　亜鉛引鉄板葺(南及西側窓上一部)
外壁　白色セメントモルタル塗掻取り仕上一部板張エタナール塗
内壁　タイル張板張の部分を除き真壁仕上
柱　米栂及杉3寸5分角混用



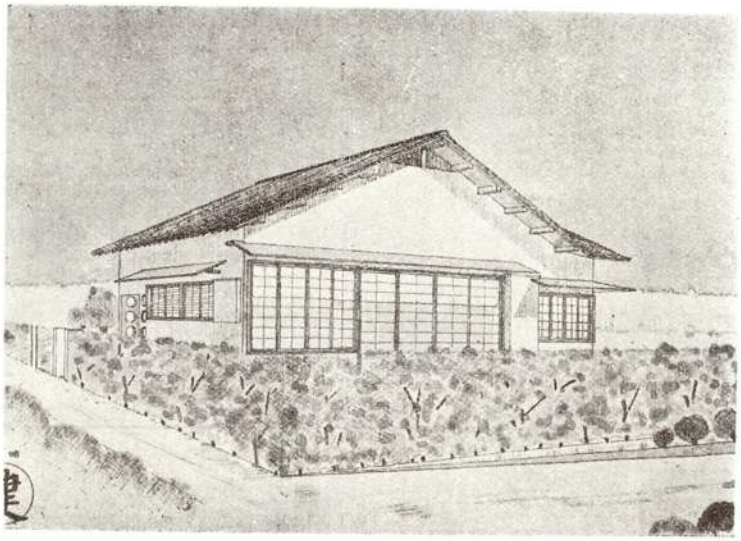


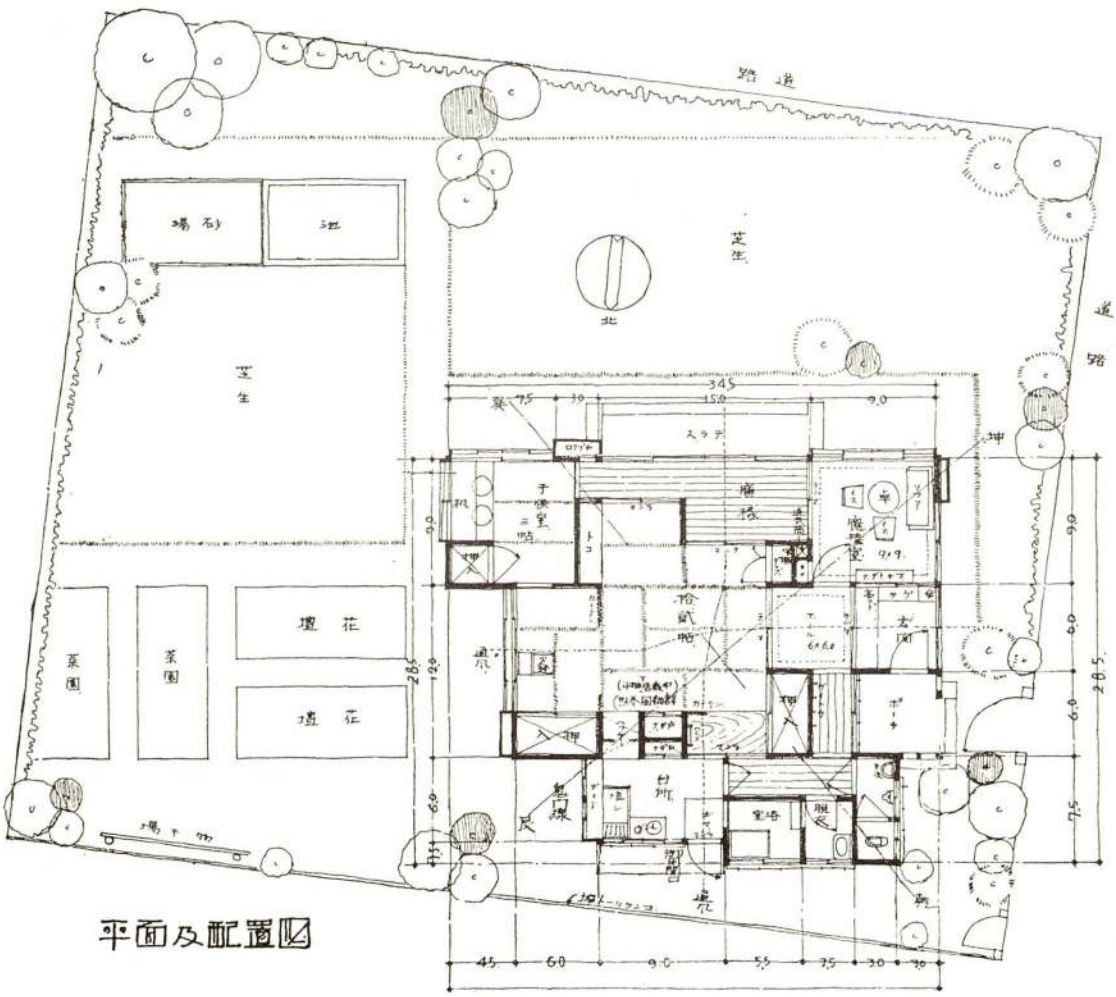
敷　地　131坪
坪　數　1階 22.8坪　2階 7.0坪　延坪 29.8坪
建築費　2600圓　家族5人內外
構　造　割栗地形土臺廻りコンクリート打和小屋
外　部　大壁白セメント塗一部米松換肌にペンキ塗布コンクリート見え掛りはリシン塗
內　部　全部眞壁和室砂壁竿縁天井居間及臺所廣間廊下は漆喰天井木部生地及びペンキ塗
屋　根　瓦桟勾配 0.4 太平瓦葺



一階平面図及び配置図

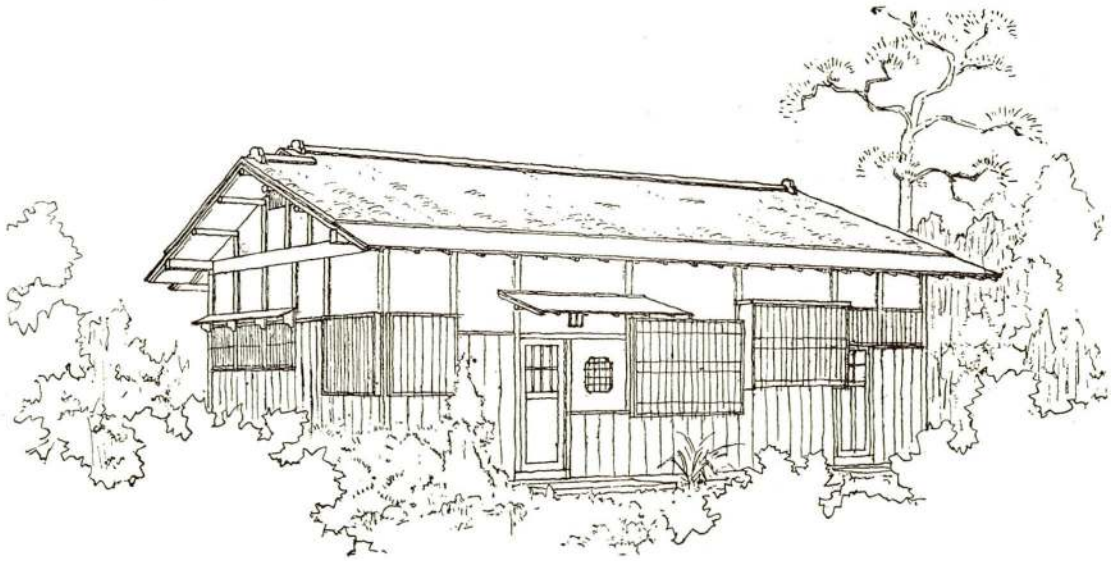
敷　地　115.0坪
坪　數　21.625坪　外にポーチ1坪
家　族　夫婦子供2人程度
構　造　基礎混凝土、土臺檜又は　押4寸角、柱米栂4吋半角程度としワニスステイン仕上一般外壁は在來土藏壁に準ずる小舞竹入り準土藏壁とし外裝を石綿スレート白セメントスプレイ仕上の新考案とし一抹の簡素味と近代味とを加へたり、屋根は引掛桟瓦及亞鉛引鐵板瓦葺とし外部木部はクレオソート塗内部壁、内部は在來眞壁塗、漆喰仕上及一部壁紙貼床、融通性多き疊敷とし、應接室、ホール等はキルク貼りの上日本在來の板、浴室、玄關等は人造石研花崗を用ふ板貼りの個所は米栂椽甲出仕上天井、子供室、應接室等トマテツクス其他は竿椽天井

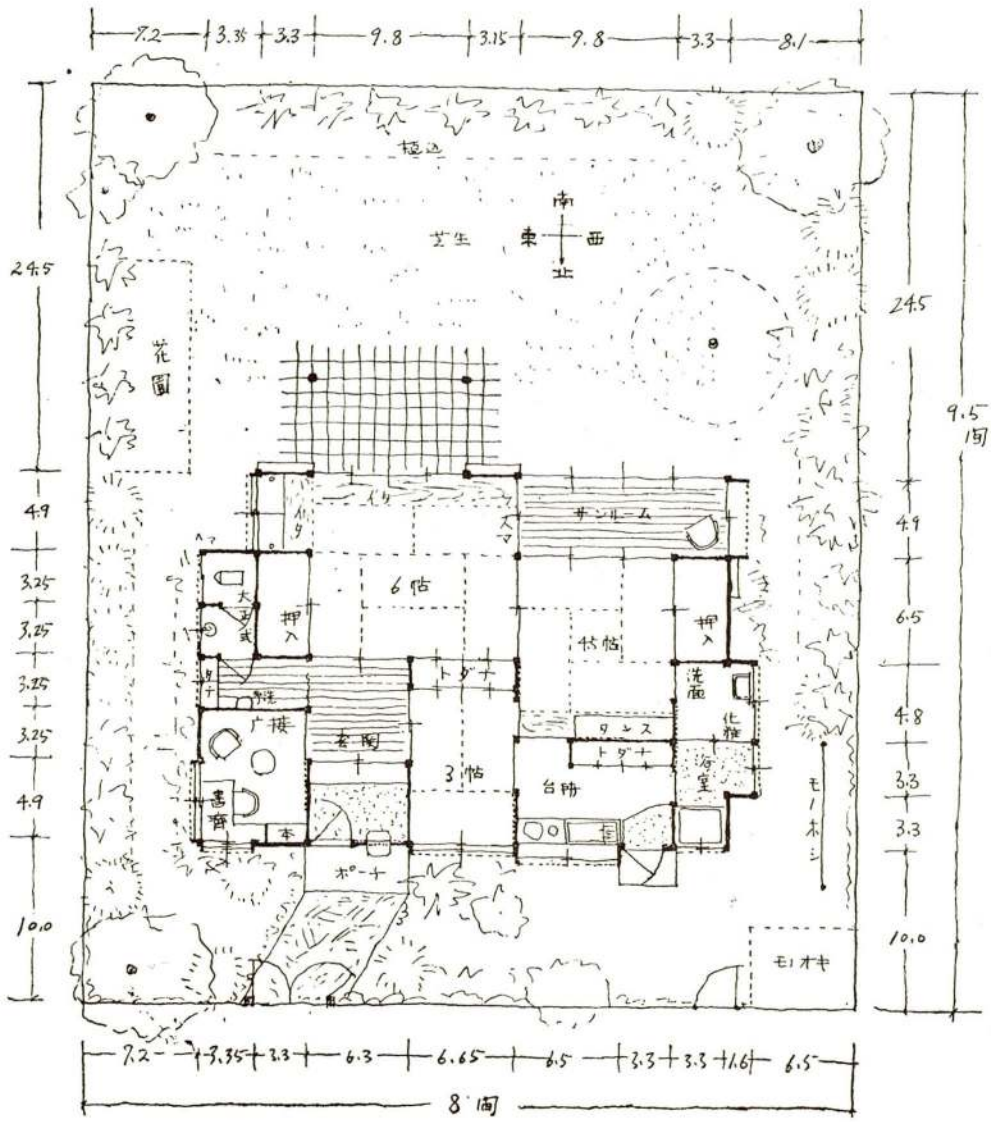




平面及配置圖

實際に建つる住宅設計當選圖案　　3等1席　　久保田健祿君　11×





建　坪　17.44坪
敷　地　76坪(京間)

構　造　眞壁、和小屋、柱下コンクリート割栗地形土臺下コンクリート布石割栗地形

外　觀　緩勾配で軒妻の出の多い屋根が外觀の主體をなします軒先は瓦を葺かず銅板張りとします色彩は白壁と羽目板其他木部の淡褐色

平　面　廊下等をとらず坪數を利用し且無理をせず費用のかからぬ様努めました外觀も簡單であります

實　用　疊敷の室を多くとり實際的としこれに簡單な費用のかからぬ最小限度の應接間を設けました押入も鴨居上小壁込利用します

室の廣さ　6疊は板の間によつて相當の廣さがあります又4疊半にタンス置場をとり3疊は巾を6尺6寸5分(柱心々)としてせまい感じを除きます

防　暑　東西南北の通風があり且各居室に西日の影響が少い様になつて居ます

× 12　實際に建つる住宅設計當選圖案　　3等2席　　筑紫太郎君

綠ヶ丘保健住宅設計圖案審査概評

審　査　員

小川安一郎　　蒔野壯一郎　　藤井　厚二　　南　　信　　村野　藤吾

（審査會缺席　古宇田　實　　武田　五一　　本間　乙彦　　松井貴太郎）

此度の懸賞募集は應募期間が比較的に短かつたことに基因したであらうが遺憾乍ら應募總數が少なかつた。しかしこれだけの應募圖案を見たことは相當に意義もあり且つ成功と云つていい。審査は二日間に亘つて嚴密に行はれ先づ 28 通を抽き第二次に 15 通を殘し第三次には 7 通を得てこれに等級を附した。

各案それぞれ苦心の跡は認めらるゝが前回本會が募集した「メートル法に依る實用安價小住宅設計懸賞圖案」と殆んど類似の作品が散見されまた前同樣に傑出したる作品にも乏しかつた。應募圖案中特に目についたのは設計が容易であるためか平屋建が多く二階家が少なかつたことである。この點では 1 等に入選した圖案の如きは相當努力の跡があり、自然審査員の同情も一層集つたわけである。

1　等

プランは大體無難なものでよくまとまつてゐるそして眞面目である點努力の作であり實用的である點が注目を惹いた。

しかし門とポーチとの關係が少し窮窟である。且つ八帖の居間は採光に少し不充分の憾がありはしまいか。また書齋と應接室とを殊更らに分けたのはこの程度の家としては如何かと思ふ。

臺所の配置は出色であるが少し贅澤にも思はれる。臺所に於ける電燈の配置には一考を要す。

2　等

プランは頗る簡單明快で且つ徹底してあるのは賞するに價す。只多少生硬なる嫌はあるが建物と敷地との關係も上々である。

構造を明瞭に示してゐないのは折角の設者計の氣持やトロツケン・パウの特徴に徹底を缺ぐと云はなければならぬ。臺所に食卓を設けたのは斯種の家として適當であらう。

3 等 1 席

非常にスマートであり明朗性のある申分のないもので 2 等とその順位を爭つたものである。しかも小さく且つ經濟的で本懸賞設計の募集趣意に最も適合したる唯一のものと云へやう。惜しむらくは製圖法は甚だ拙劣である。

3 等 2 席

平面外觀ともに勝れてゐるが木造としての構造に少し無理がある。殊に二階の陸屋根の如きはそれで、斯種の住宅としては餘りに費用を要するであらう。坪數に於ても最大限度に採つたことは不賛成である。

大美野田園都市住宅設計圖案審査概評

審　査　員

酒井勇三郎　　新名　種夫　　高橋　榮治　　坪井　誠一　　中西　六郎

松本　儀八　　安井　武雄　　（審査會缺席　　武田　五一　　永澤　毅一）

今回の懸賞募集は應募期間の短期であつたことゝ同種類の懸賞募集が重なつたなどのために應募圖案が豫想より少かつた。然し概して近來レベルが著しく進歩したが傑出した作品は遺憾乍ら乏しかつた。朧を得て蜀を望む尙應募者諸君に一層の奮起を望むでおく。

建築實施豫定場所から云ふと二階家の方が適當ではなかつたかと想像されるが相不變二階家より平屋建の設計の方が多かつた。

審査は二日に亘り頗る愼重に先づ 21 案を更らに 11 案を最後に 6 案を抽きそれに順位をいれた

1　等

敷地と建築物との配置は割合によく纏まり巧である。プランも洗練されてゐて間取もまづ無難だがエレベーションの取扱方にも少し注意してほしかつた。又利用される部屋の少ないのは瑕瑾だが全體の配置も、採光、通風などもまた臺所の取扱にも良く考慮が拂はれてある。たゞ開戸が多いのはこれを少なくし引戸に替へた方が實用的ではあるまいか。が大體に於て欠點の少ない作品で二階家としては傑出のものであつた。なほ在來の方位から云ふとこの案は所謂方位 欠點があるが審査に當つてはこの問題は考慮のうちに入れなかつた

2 等

この案は平屋建の圖案中白眉のものとして隨一に推した。坪數の割合に利用の出來る部屋をかなり巧にとつてある。そして設計が從順で丁度米の飯のやうな感じがする。應接室と女中部屋との位置をおきかへ、臺所の配置に注意したならば更らに完全するのではなからうか、炊事場はやゝ小さい感がある。

1等と同じくこれも亦エレベーションの取扱に一考を要し、建てゝからの恰好に淋しみの伴ふ憾がある。

3 等 1 席

建ち上つた恰好は2等のそれよりはよいのではなからうか。間取の配置、其他の取扱は自由で無難である。平屋建の作品としては本案も2等とともに出色のものであらう。

3 等 2 席

間取の配置は一般的であるがドローイングが洗練を欠き頗る拙い。

實際に建つる住宅設計圖案審査概評

審査員

清水 榮二　澁谷 五郎　武田 五一　瀧澤 眞弓　波江 悌夫

長谷部鋭吉　古塚 正治　松井清之助　本野 精吾

この懸賞募集は應募期間が長かつた關係からか相當の應募圖案がありしかも優秀なる作品が比較的に多かつたのは審査に當る者として愉快に感じた。昨今は住宅懸賞募集の企が多いので自然應募者に於てもより良き精進となり、研究の機會となり、努力となつた結果と見られる。この點多大の收獲を得たことは最も意義あり且つ喜ばしい現象と思つた。

總體、間取の配置、採光、換氣等ともによく考案されてゐる、只無闇に建具が多くて落着を欠いだものや、開戸でいゝ所を引戸にしたのが隨所にあつたが此種の家では餘り經濟上の點から歡迎したものではない。又玄關脇に云ひ合せた樣に便所をとつてあるのが多かつたがこれは如何だらう。

審査は頗る嚴密なもので初め 19 案を抽き、更らに 13 案を選りその中から7案を得てこれに等級を附した。

1 等

この案は餘程實際に慣れた經驗家の作品と見へて設計には申分がない、しかも窮屈なる敷地にかくも巧妙に纏め得たる作者の手腕は敬服に價するそして實施するに於ても此種住宅の條件に最もよく當嵌つたものと云へやう。臺所まはりは行届いてゐるが臺所への入口の間仕切には改良の餘地があらう。風呂場、便所の配置もよろしい。肘掛窓の下は物置とか何んとか利用すべきであらう。

2 等

エレベーションが比較的にあかぬけがしてゐなく、構造上多少二階に無理があるやうに思はれる又利用される部屋が一階に比して二階のそれが餘り不充分で小屋裏を利用する工夫をしては如何であらうか。臺所、風呂場まはりの少々こもつてゐる點はまだまだ改良の餘地がある。一體此種住宅として贅澤であり、また建具の多いのは經濟上少し難であらう。

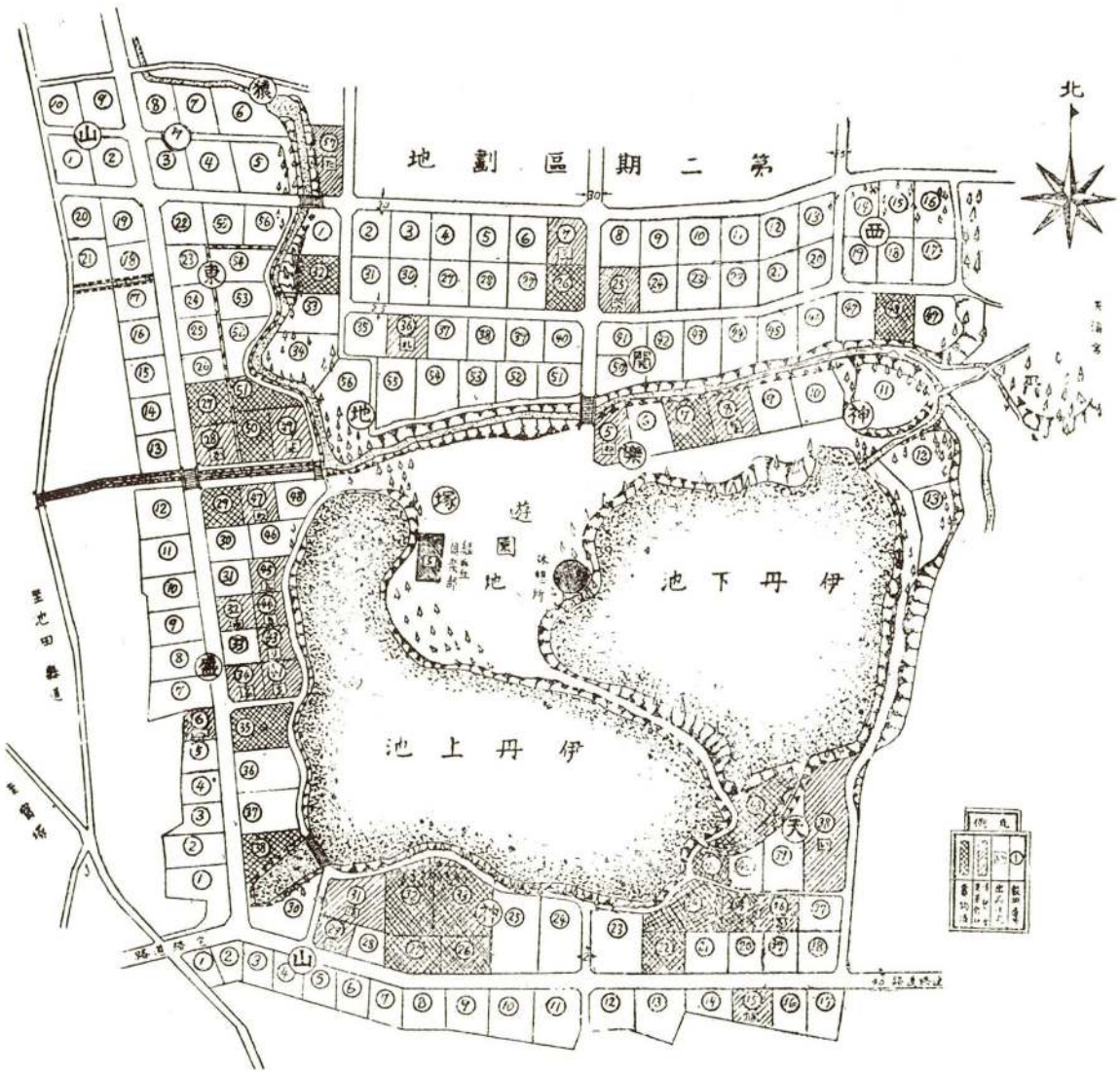
3 等 1 席

プランは無難で相當の努力が拂はれて注意も行届いてゐる。たゞ玄關の側に四箇の丸が入れてあるが之は意味のないもので住宅としは一考を要す

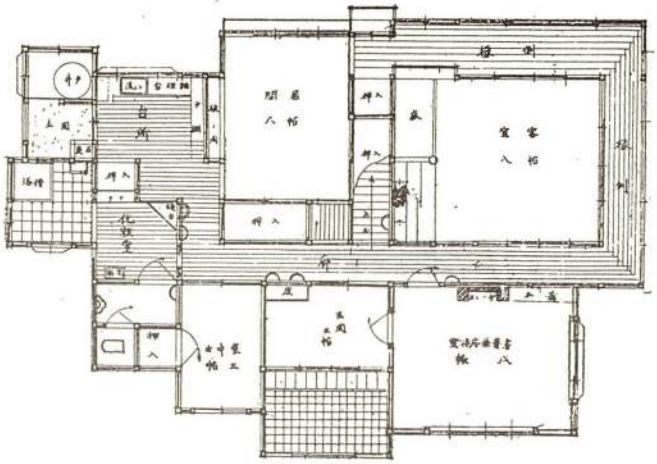
3 等 1 席

家が狹い割合に廣く利用されてゐる點を推稱したい。難を云へば玄關と居間とが見透されることであらう。

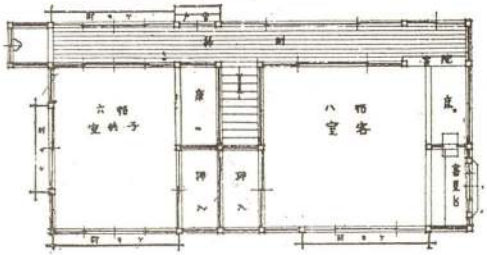
絲ヶ丘博覽會場土地區劃圖

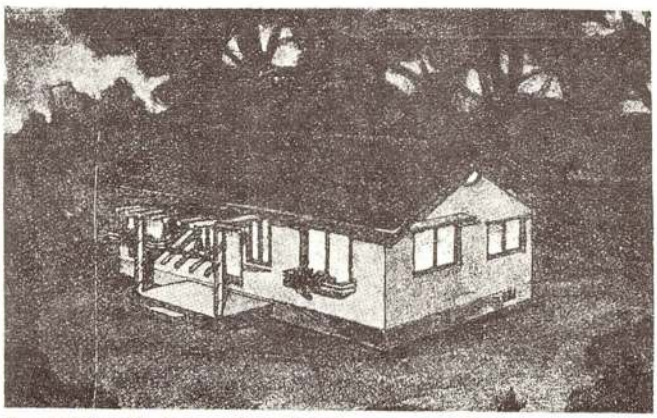


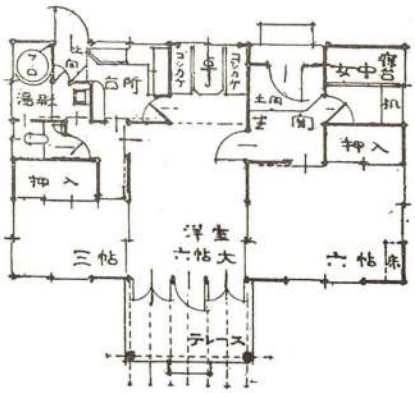




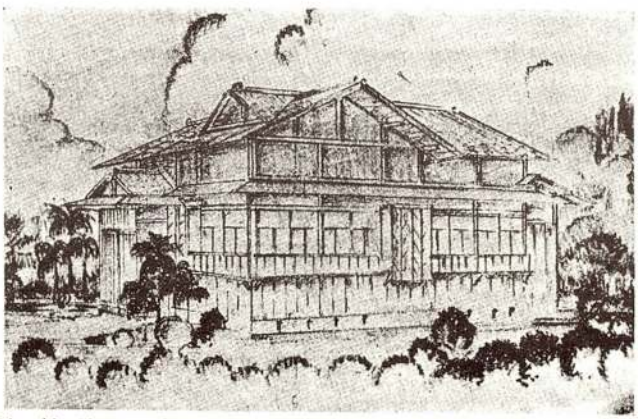
い　綠ヶ丘土地建物株式會社　　敷地 天神山 38號地 384坪
坪數 延42坪5

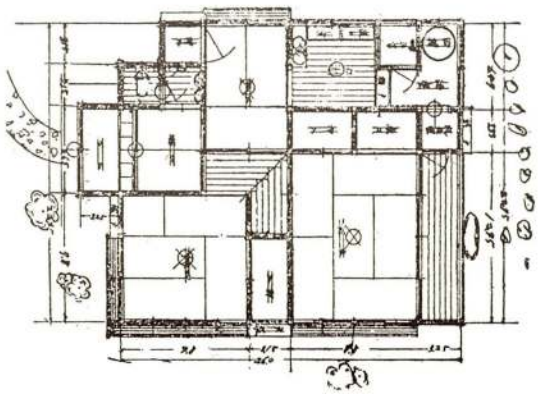




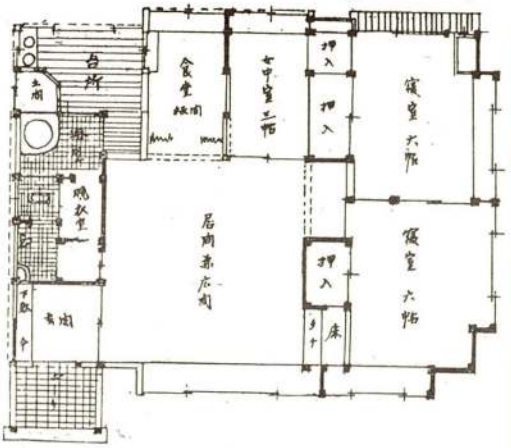


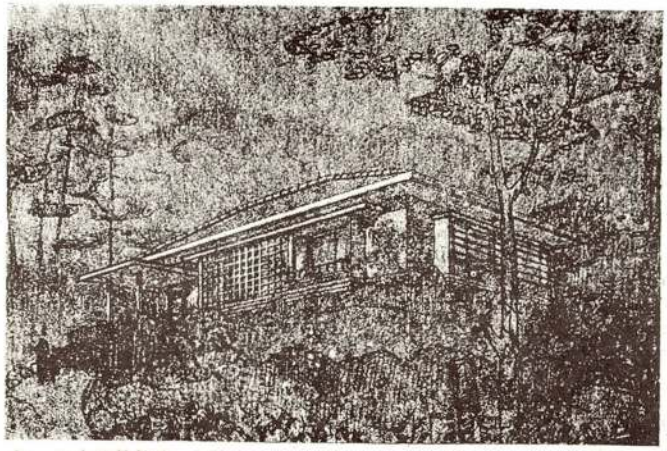
ろ　あめりか屋　敷地 天神山 36號地　9坪　坪數 17坪6(テレス1坪76)



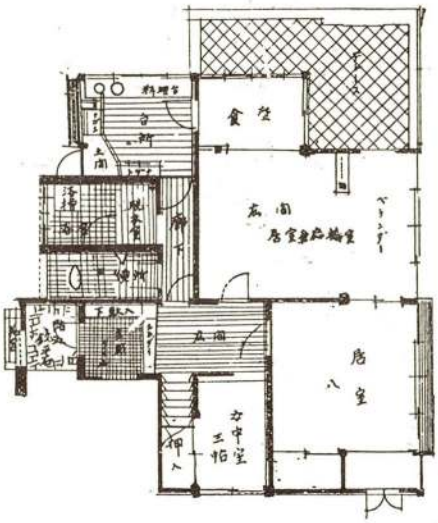


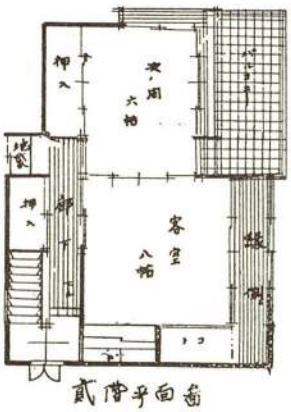
は　新工務所　　敷地 天神山 14號地 61坪　坪數 16坪75



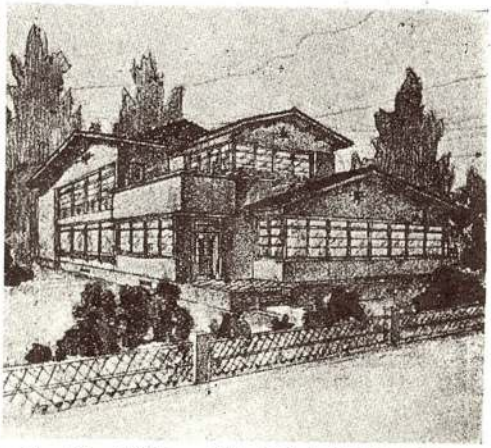


に　日本建築協會　　敷地 天神山 29號地 92坪　坪數 延28坪19



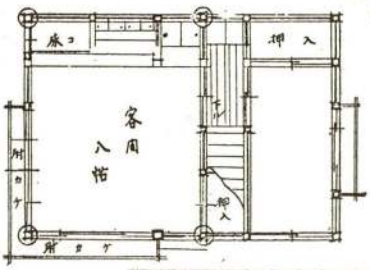


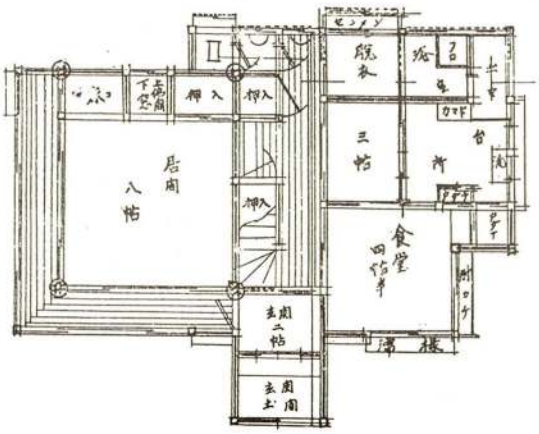
南面平面圖

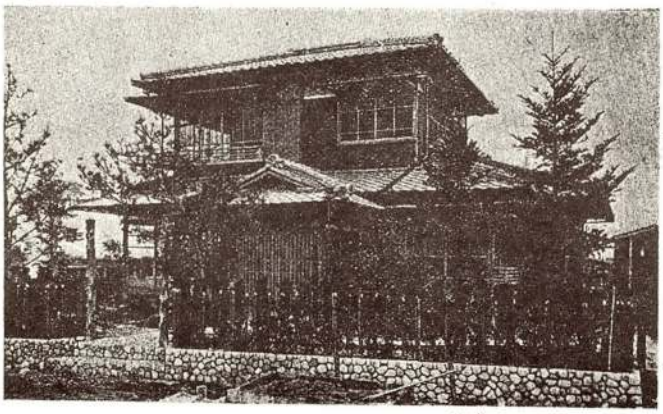


ほ　矢島組　　敷地 天神山 31號地 166坪

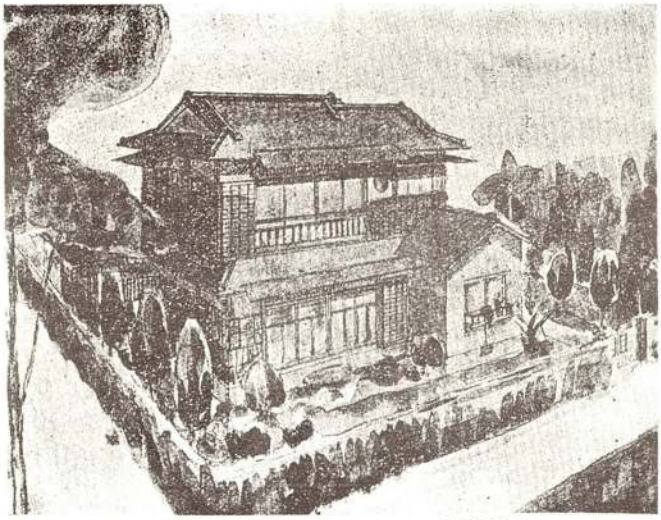
坪數 {1階 27坪46
{2階 16坪45



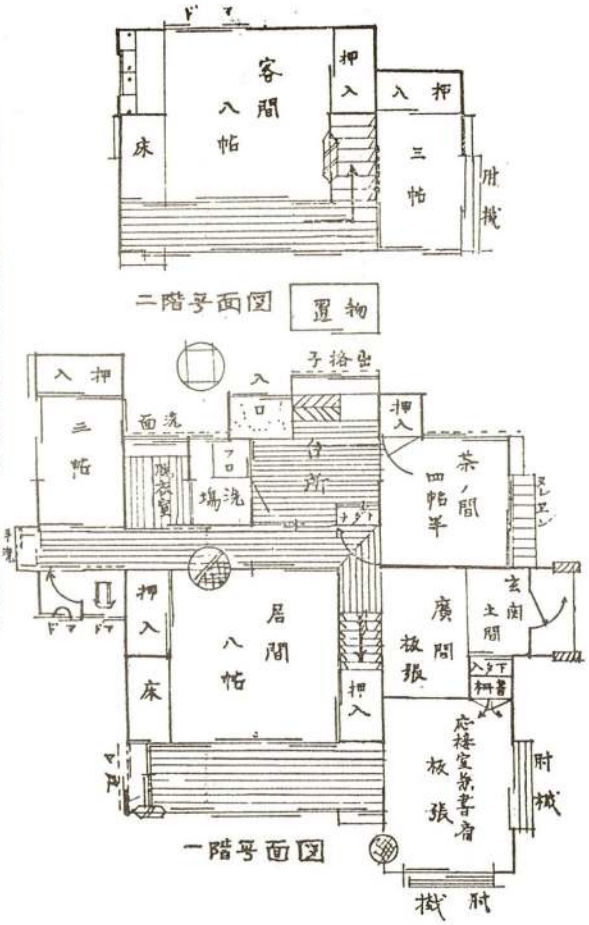


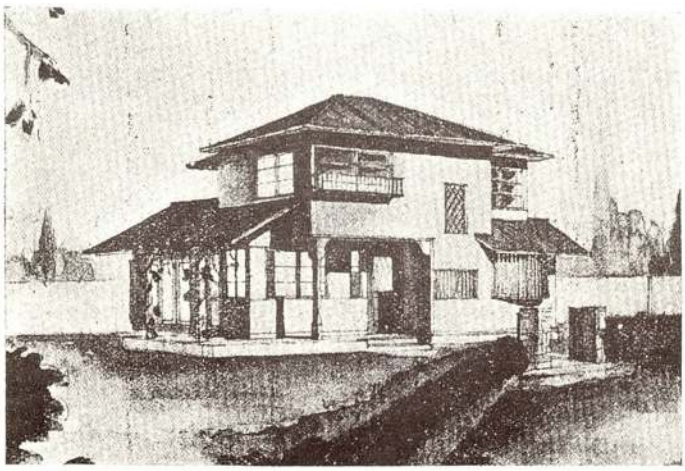


へ　橋本組　　敷地 東盛 6號地 71坪　坪數 {1階 22坪29
{2階 10坪17

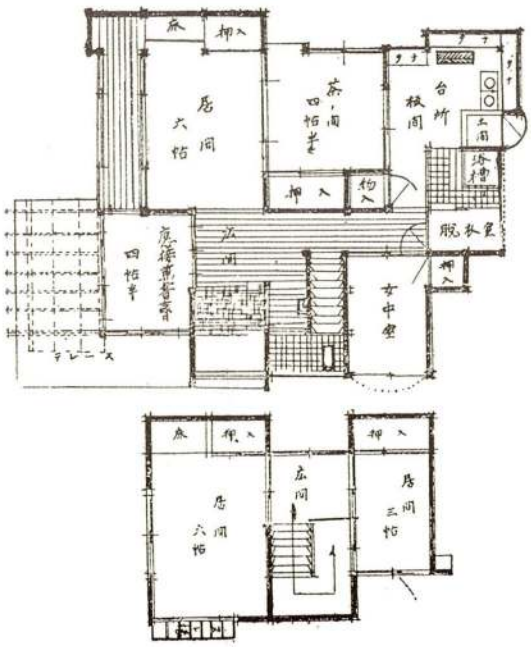


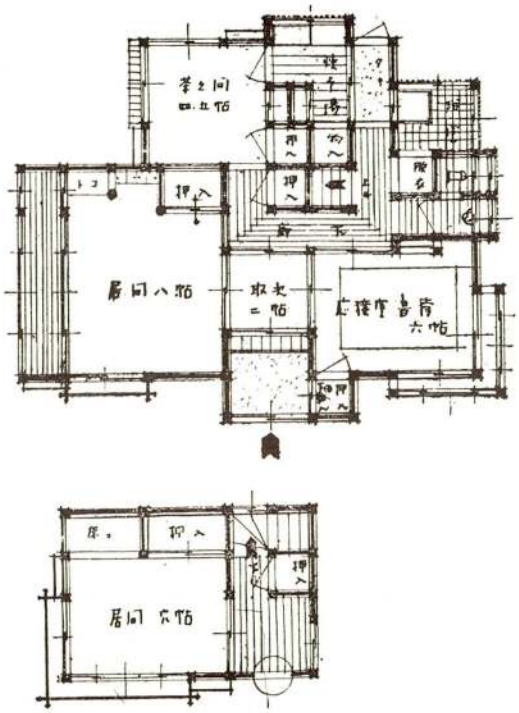
と　吉川組　　敷地　東盛 34號地 93坪　坪數 {1階 29坪 / 2階 11坪





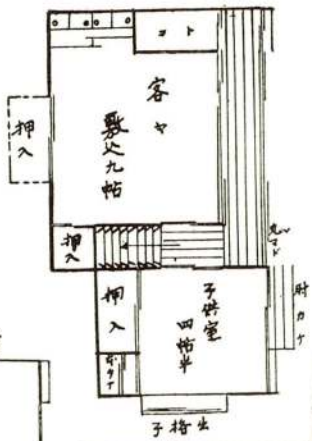
ち　鴻池組　　敷地　東盛 41號地 121坪　　坪數 {1階 21坪69 / 2階 9坪08

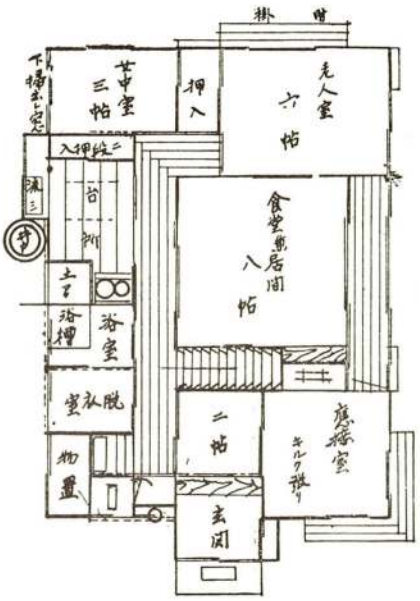


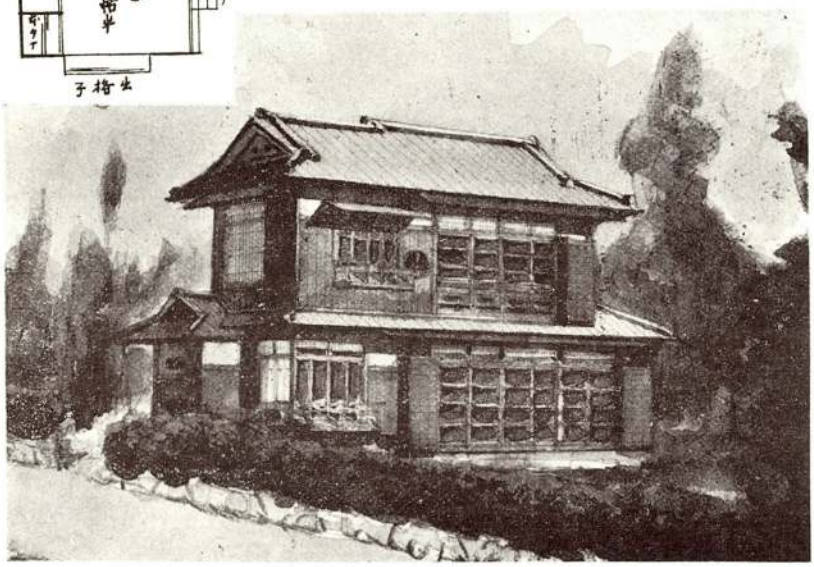




り　中井組　　敷地 東盛 45號地 92坪　　坪數 {1階 23坪37 / 2階 7坪05

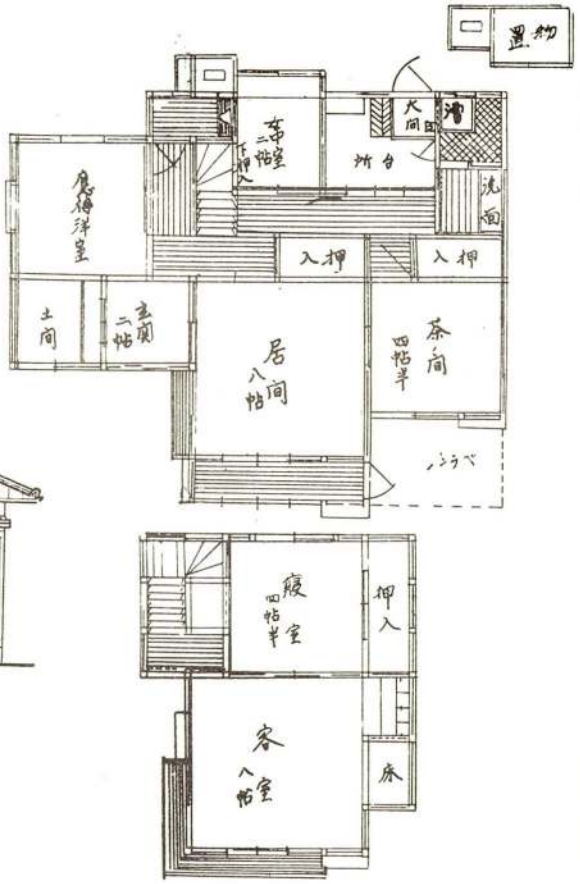




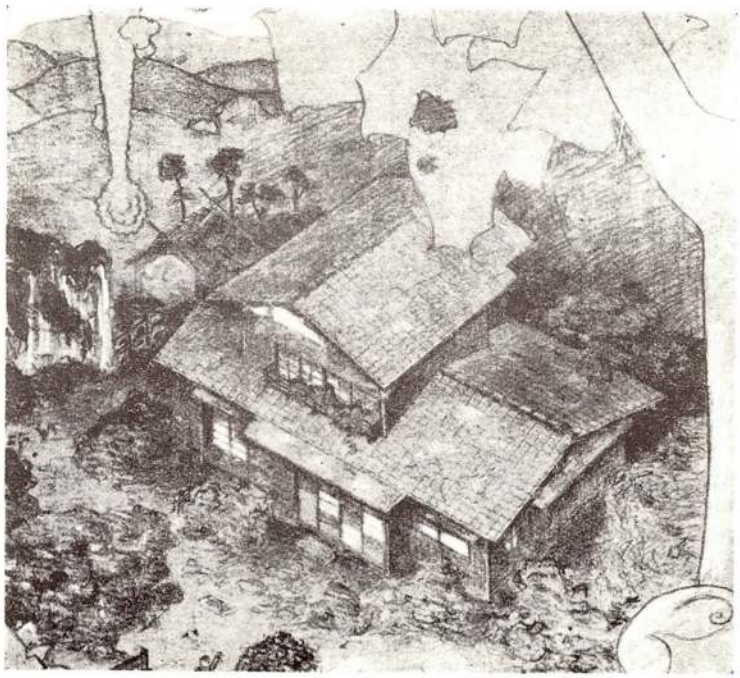


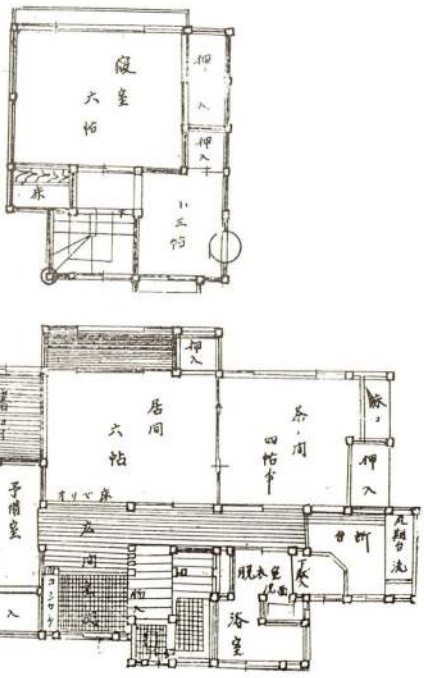
ぬ　八尾組　　敷地 東盛 32號地 90坪　坪數 {1階 26坪28 / 2階 11坪12



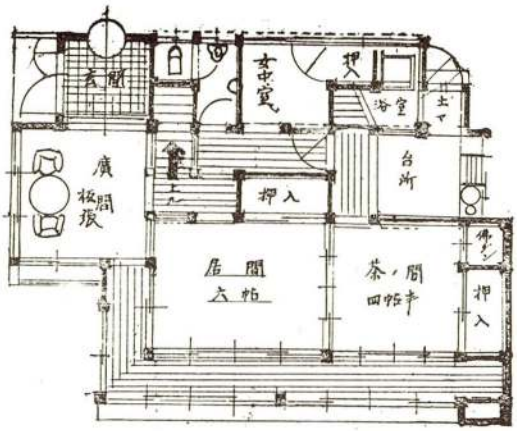


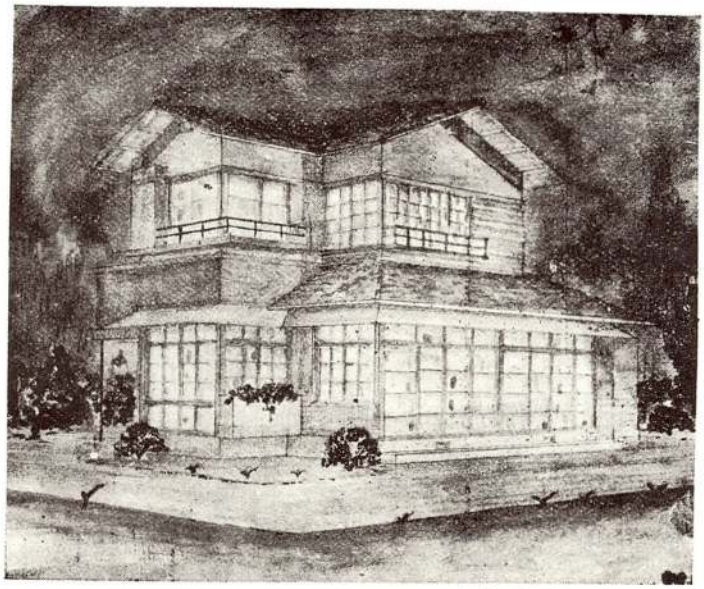
る 梶山組　　敷地 東盛 44號地 92坪　　坪數 {1階 24坪 / 2階 10坪87



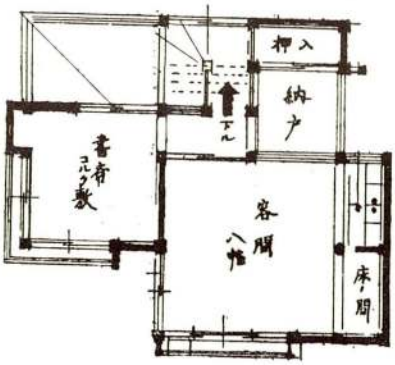


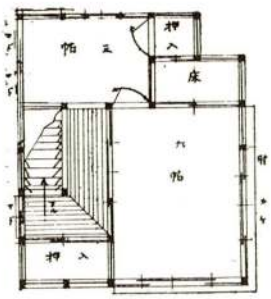
お 日本建築協會　　敷地 東盛 45號地 95坪　　坪數 26坪85

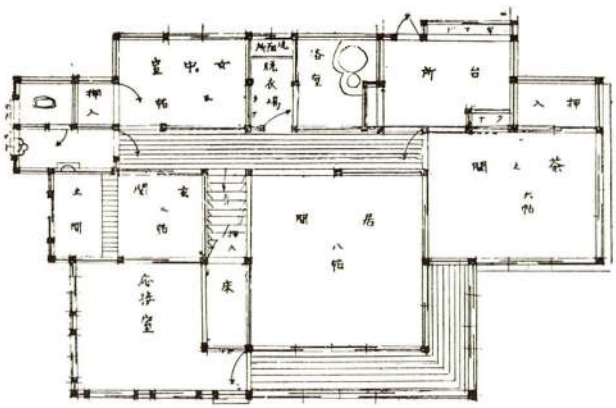




わ　鹿島組　　敷地 東盛 47號地 95坪　坪數 1階 18坪64 / 2階 11坪69

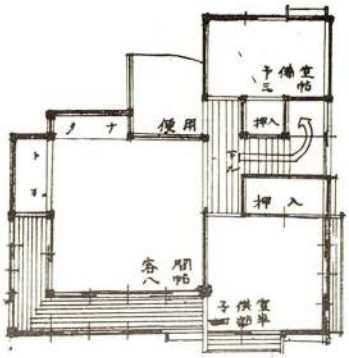


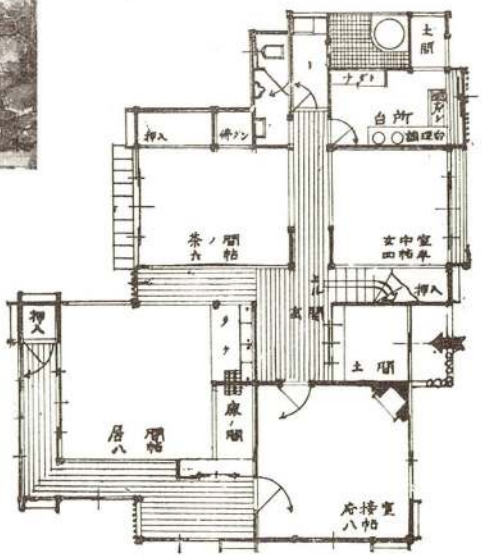




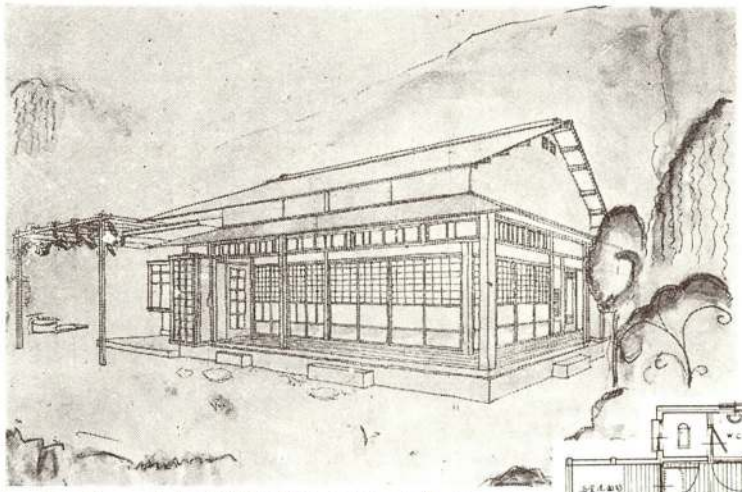
か　日本相互住宅株式會社　　敷地 東盛28號地 105坪　坪数 延29坪25



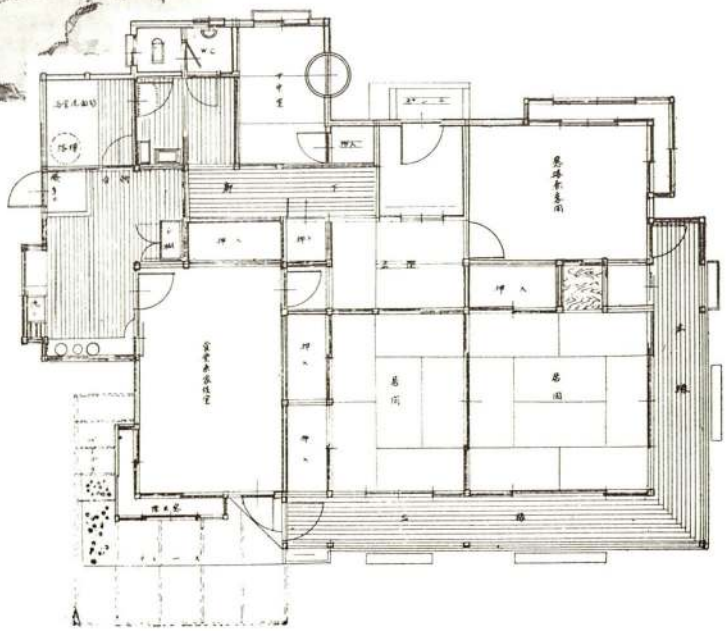


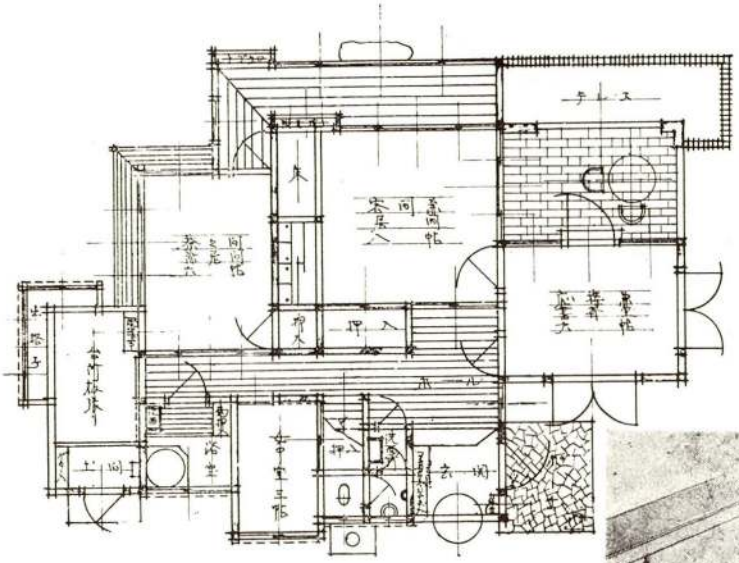


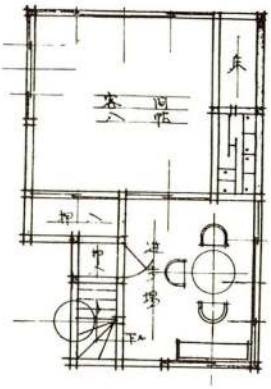
た 大林組　敷地 西開 58號地 120坪　坪數 延49坪42

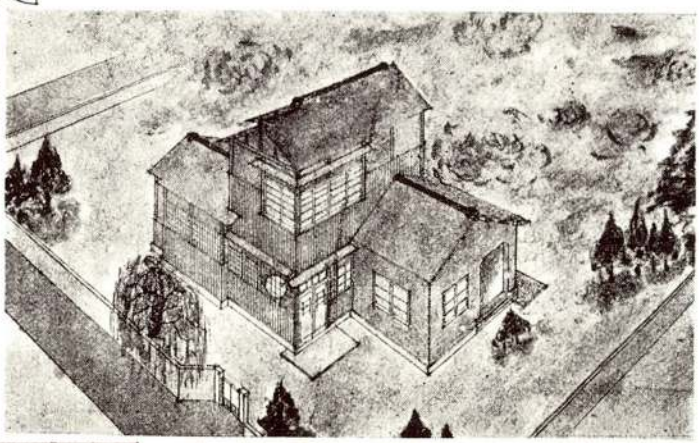


れ 間 組　敷地 西開 36號地 110坪　坪數 34坪5



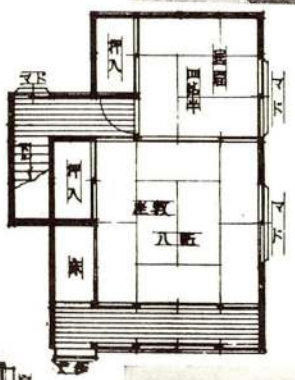


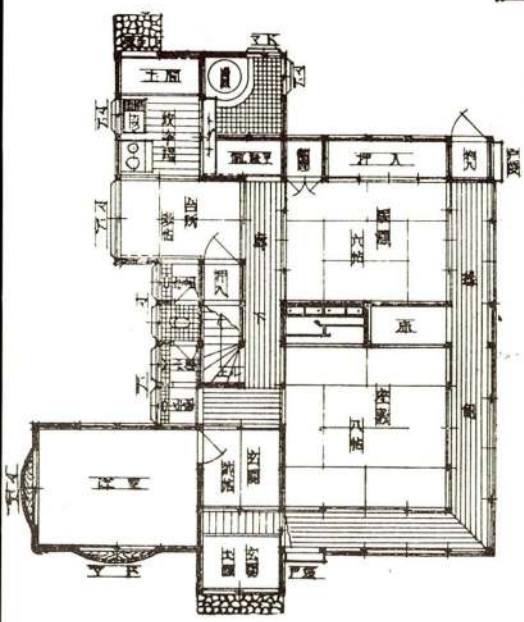


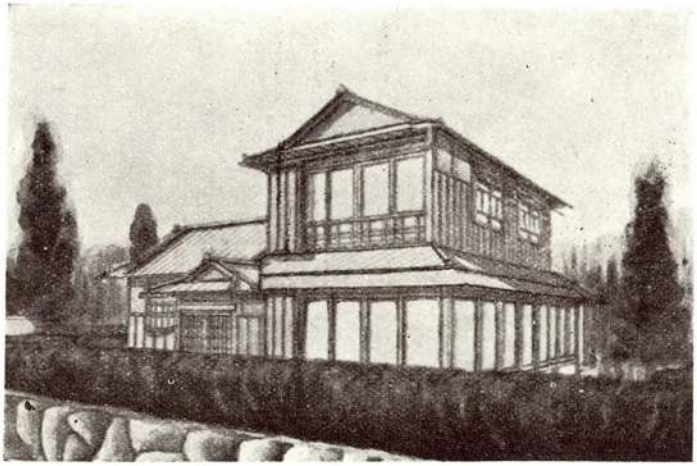


そ　竹井工務店　　敷地 西開 7號地 132坪

坪數 {1階 31坪79 / 2階 10坪58

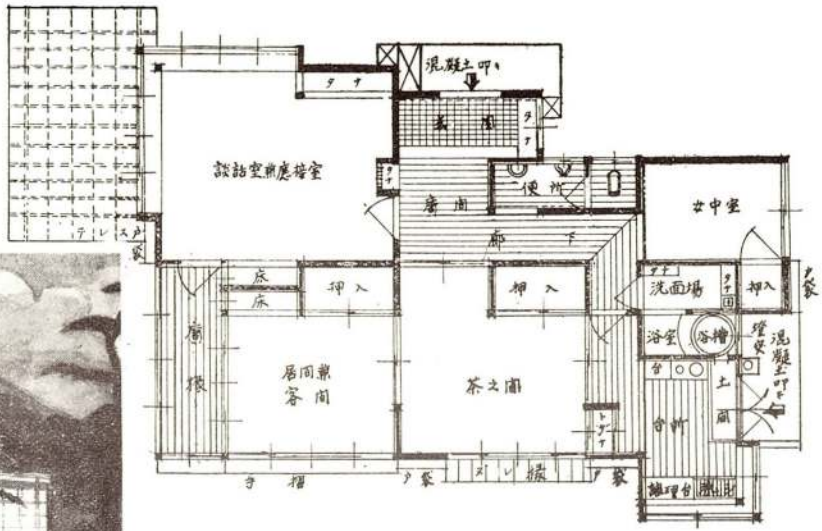




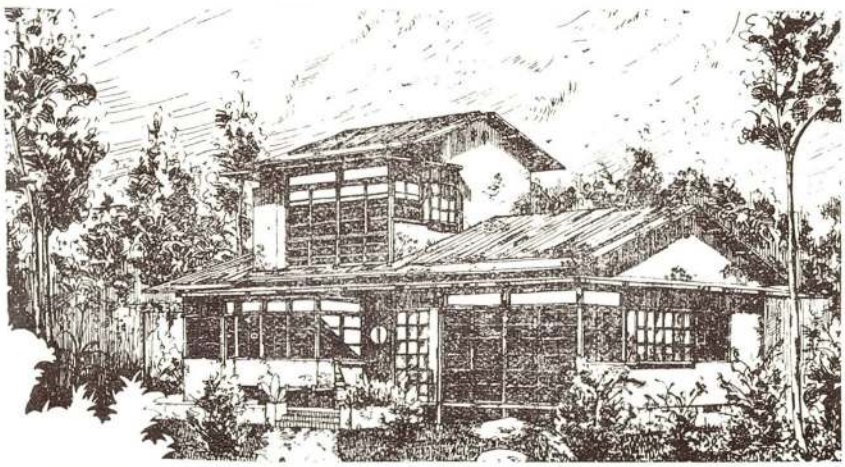


つ　淺野工務店　　敷地 西開 8號地 119坪　坪數 延29坪88



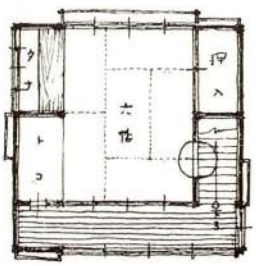


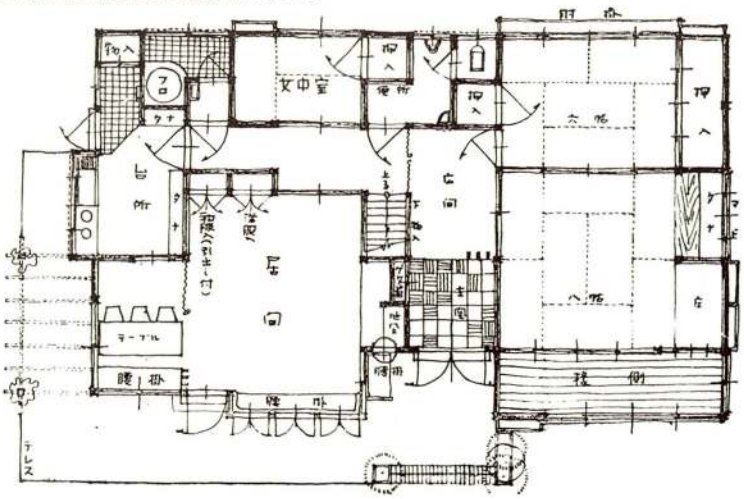
ね 大倉組土木部　　敷地 神樂塚 119坪　坪數 26坪53



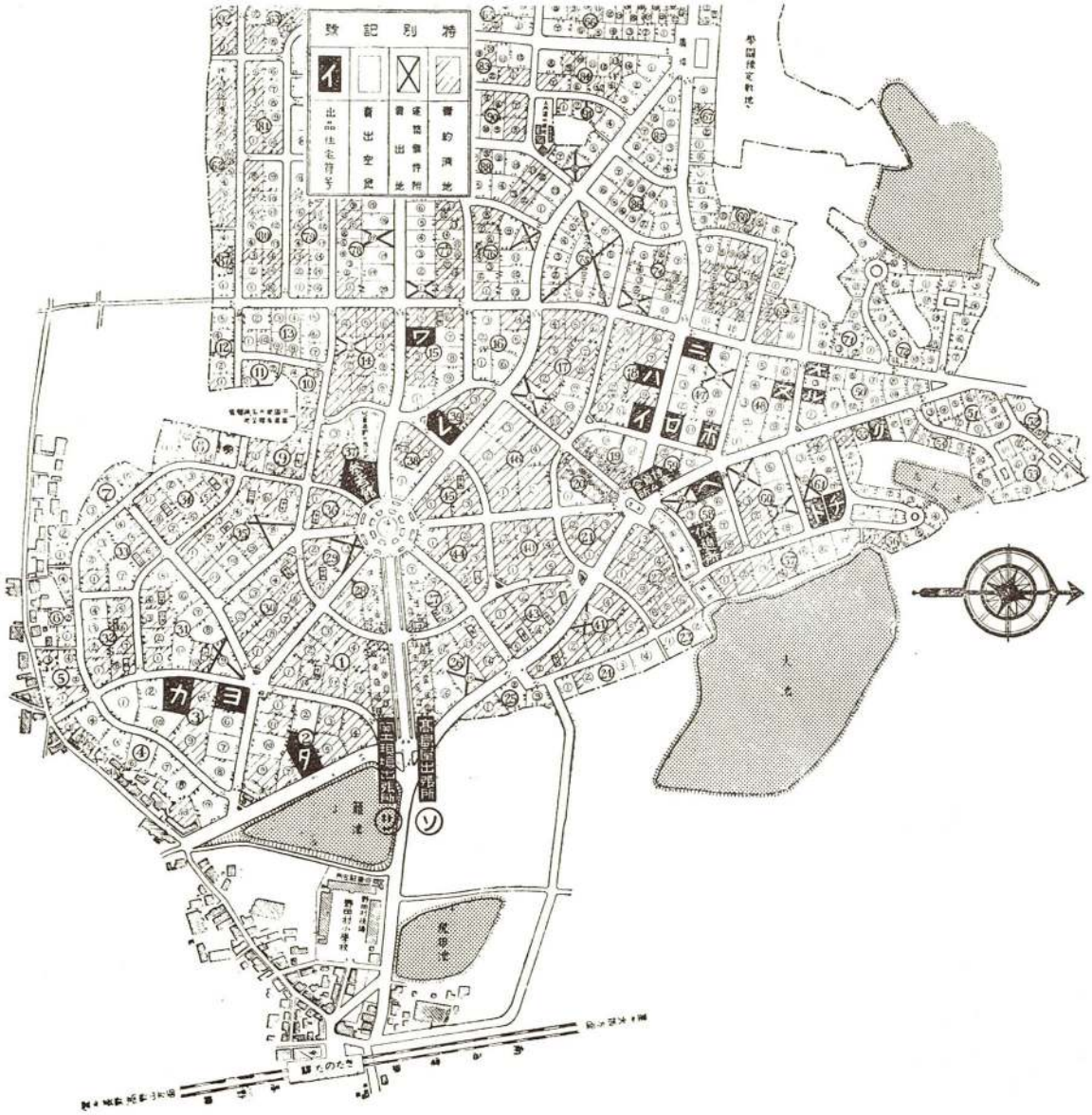
な 竹中工務店　　敷地 神樂塚 6號地 161坪

坪數 {1階 31坪64
{2階 7坪84

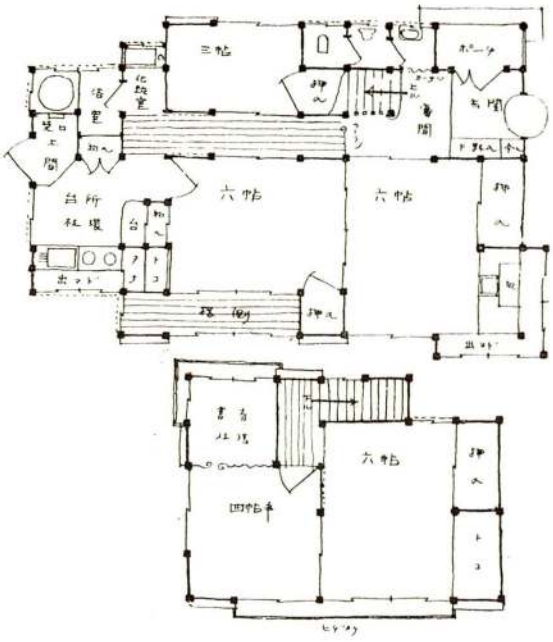




大美野田園都市住宅博覽會場

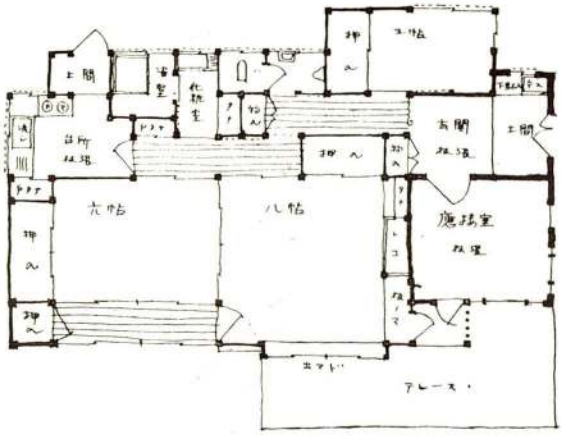






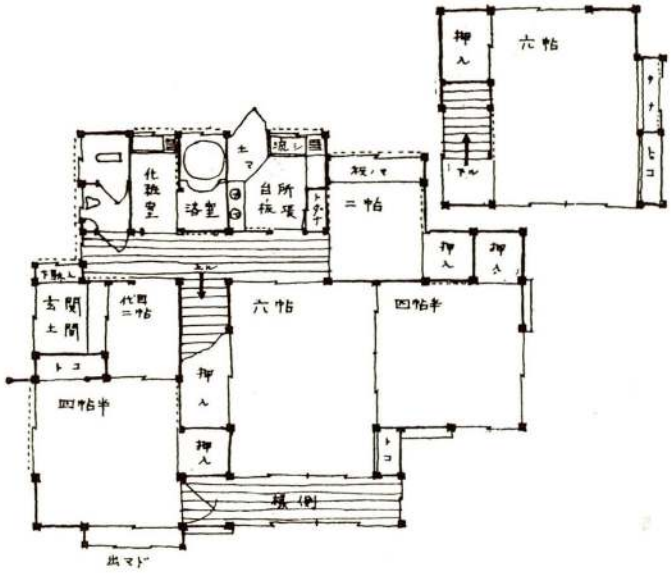
イ 竹中工務店　敷地 107坪27　坪数 { 1階 20坪91 / 2階 9坪71 }



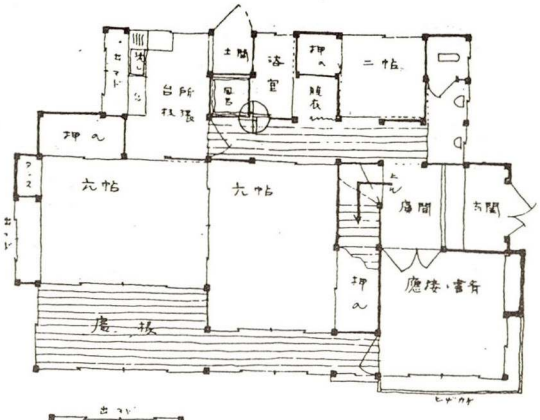


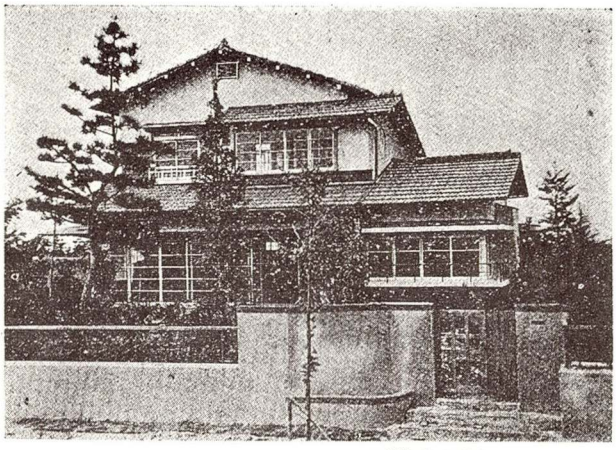
ロ 清水組　敷地 105坪48　坪数 26坪6（納屋1坪）



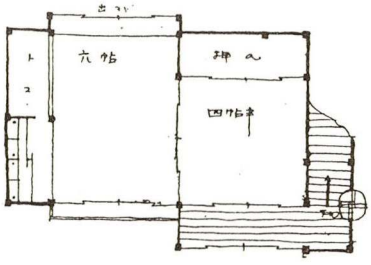


ハ 大林組　敷地 116坪96　坪数 { 1階 19坪66 / 2階 5坪06 }



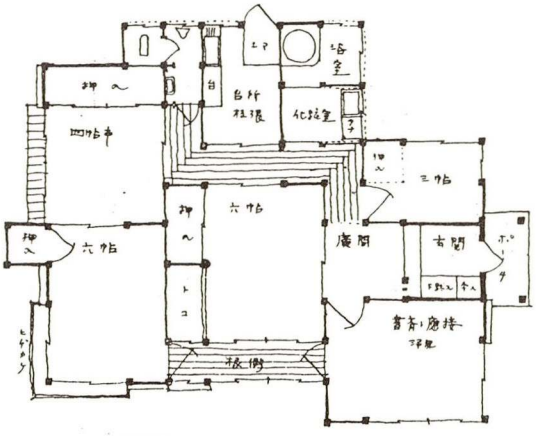


二　鹿島組　敷地 111坪80　坪數 { 1階 2 坪25 / 2階 8坪





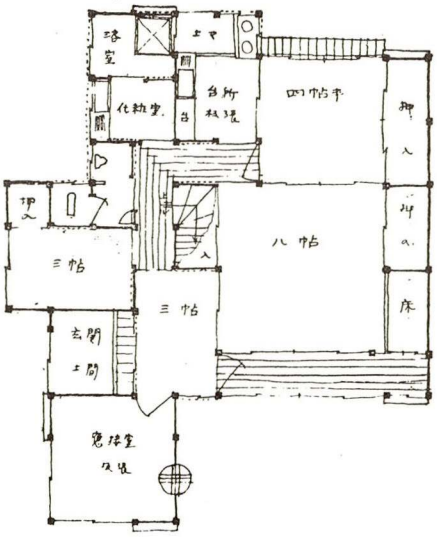
ホ　日本建築協會　敷地 1.5坪19　坪數 27坪6

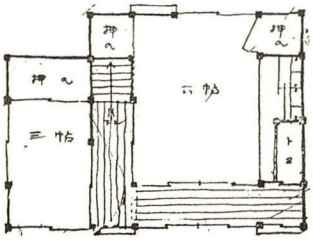


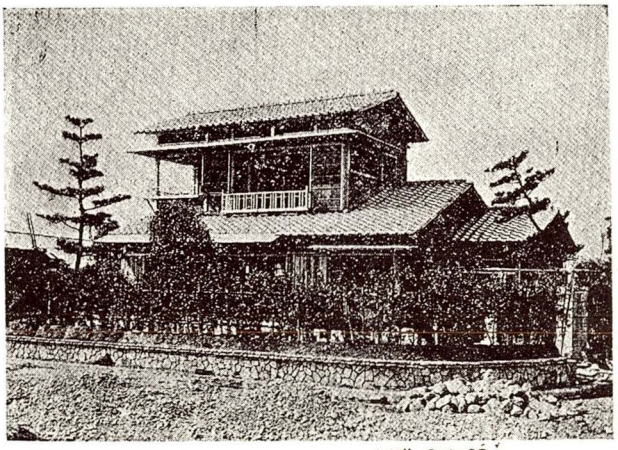


ヘ　關西土地株式會社

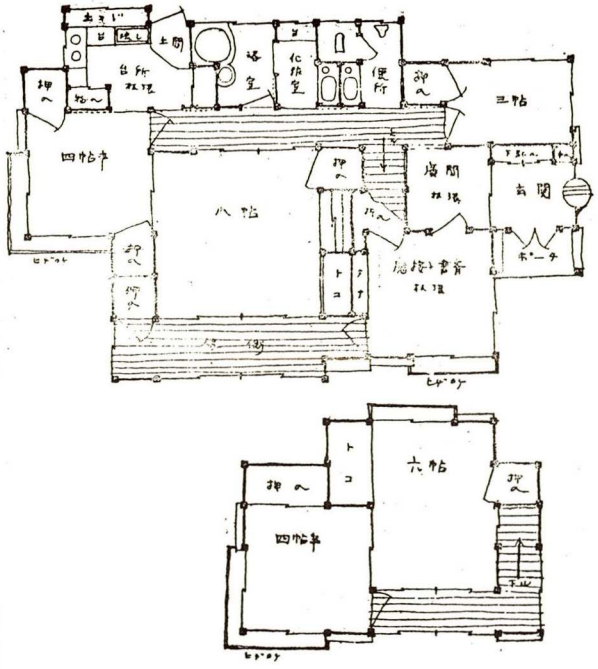
敷地 126坪11　坪數 { 1階 25坪03 / 2階 9坪76

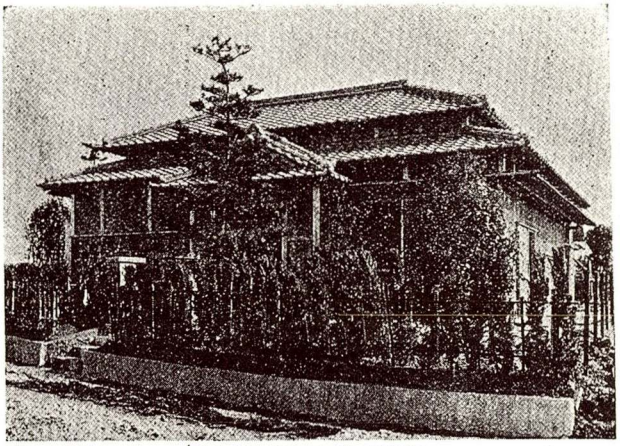




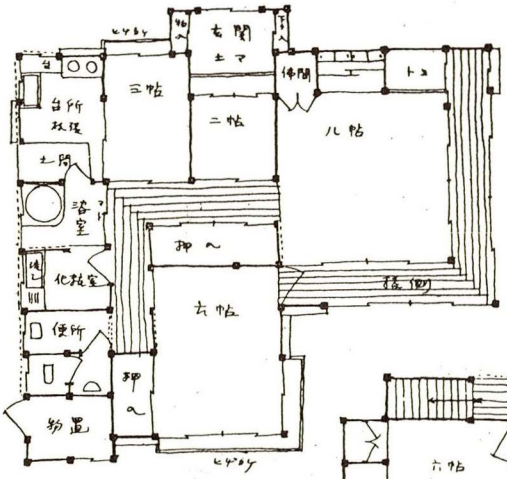


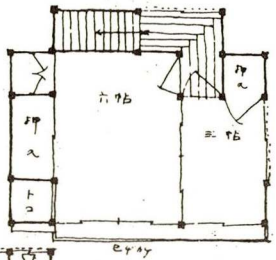
ト 今 西 組　敷地 104坪67　坪數 { 1階 27坪02 / 2階 9坪51

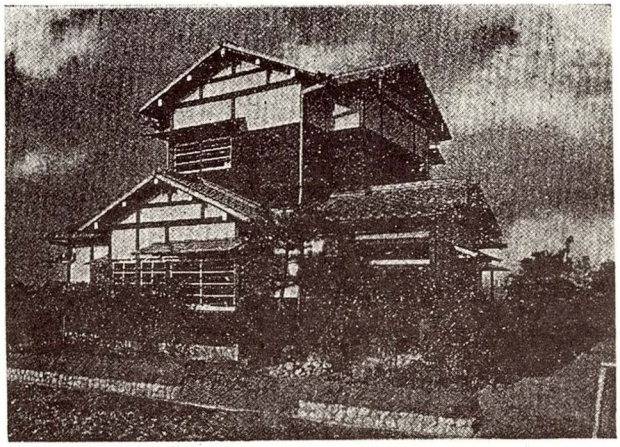




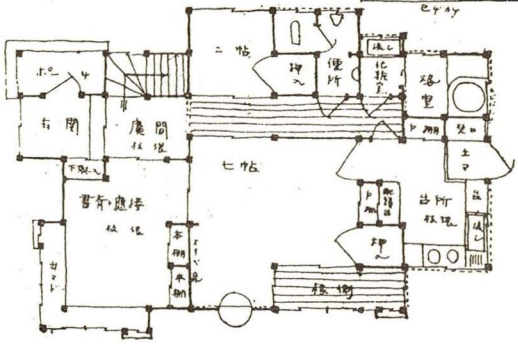
チ 大野勝之助　敷地 85坪77　坪數 25坪67

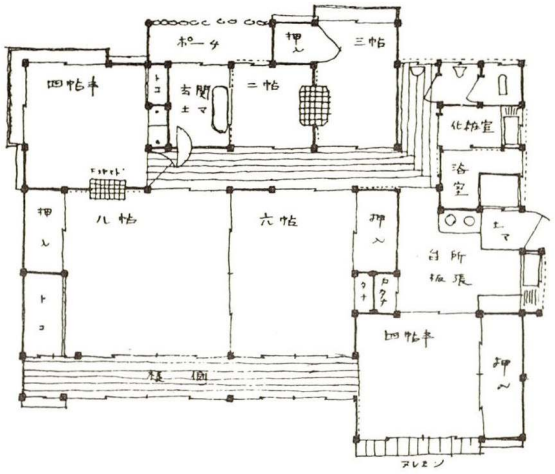


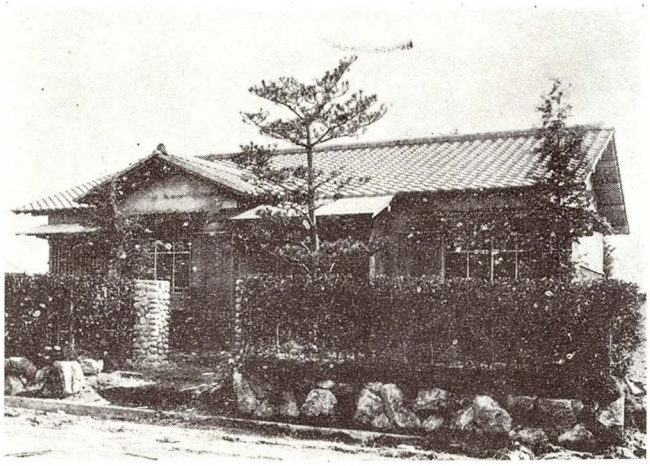




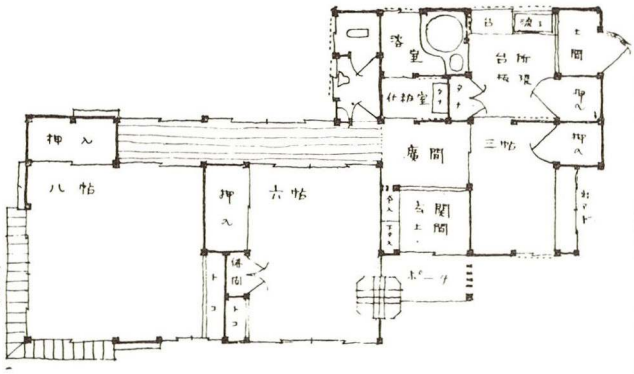
リ 日本建築協會　敷地 76坪16　坪數 { 1階 18坪95 / 2階 8坪05





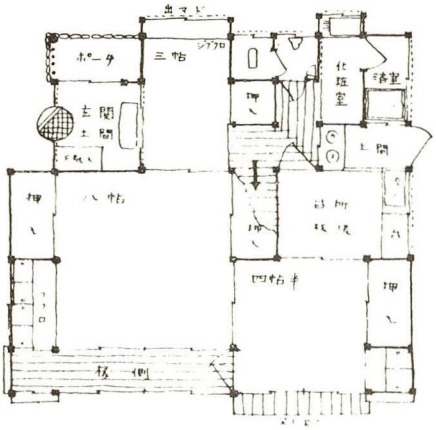


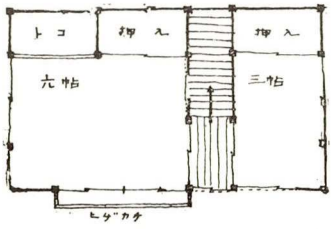
又 關西土地株式會社　敷地 90坪22　坪數 31坪19

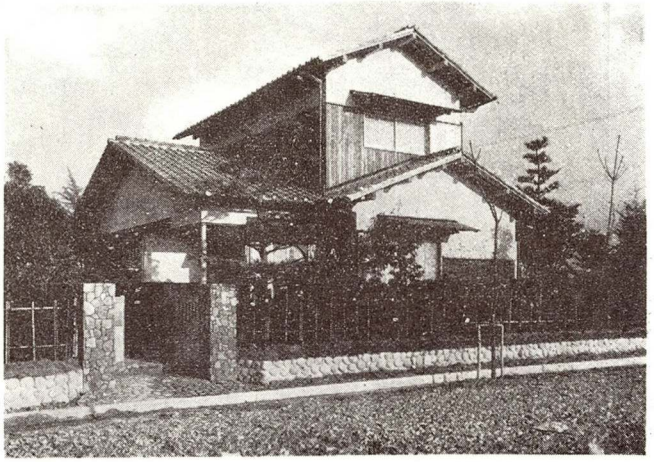




ル 森本建築社　敷地 73坪70　坪數 20坪02

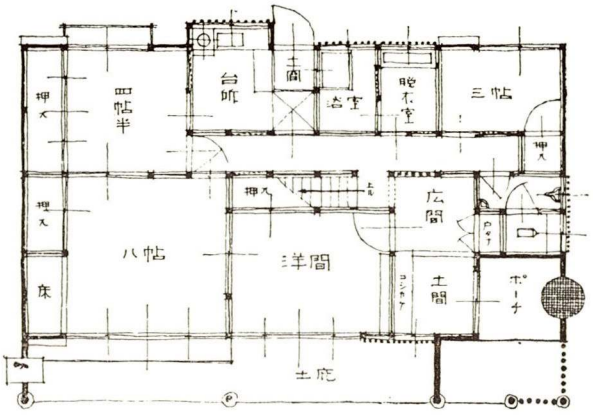


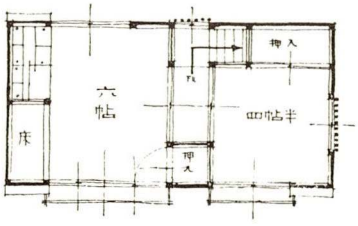




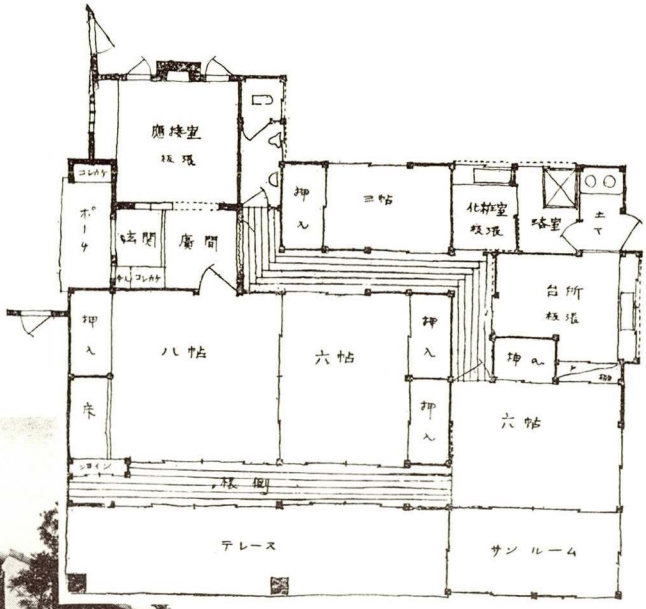
オ 關西土地株式會社　敷地 73坪03　坪數 { 1階 20坪16 / 2階 8坪18

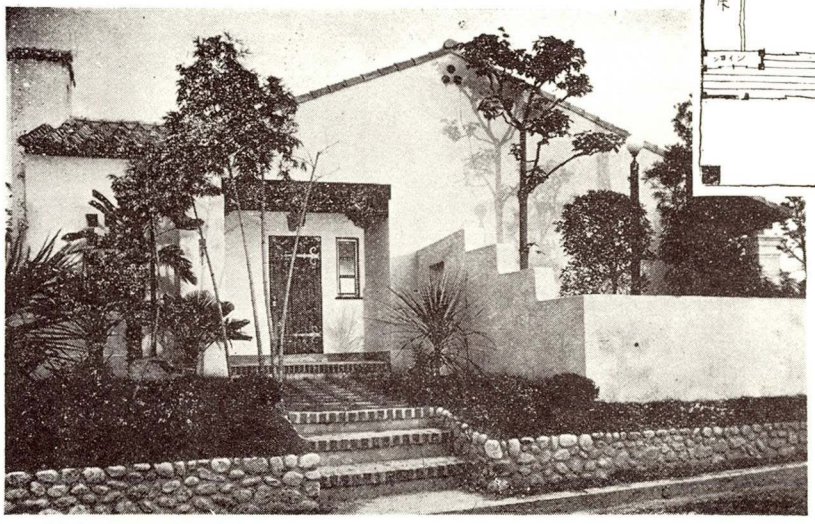




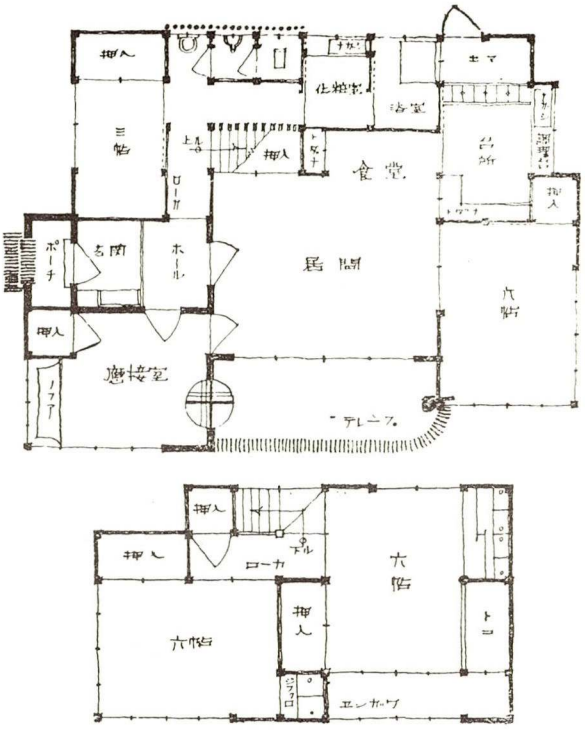


ワ 關西土地株式會社　敷地 117坪04　坪數 { 1階 32坪33 / 2階 9坪32



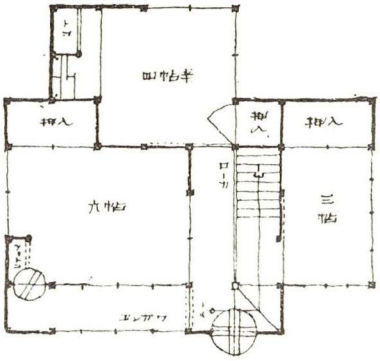


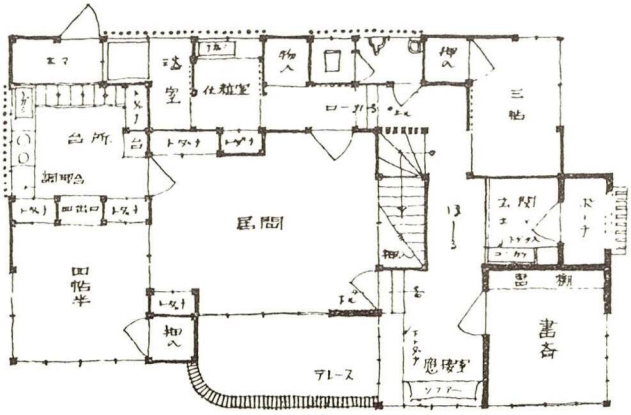
カ 關西土地株式會社　敷地 189坪42　坪數 40坪67

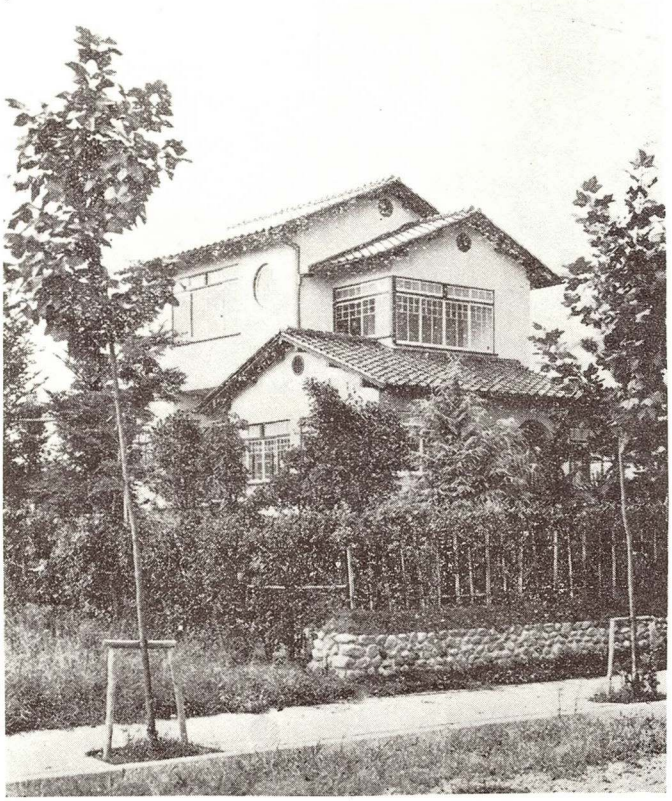




ヨ　關西土地株式會社　敷地　158坪37　坪數 { 1階　25坪81 / 2階　12坪50







タ　關西土地株式會社　敷地　187坪51　坪數 { 1階　27坪42 / 2階　13坪57

創立拾五周年を顧みて

片岡安

本會の創立は大正六年の春であつて、丁度本年に至り滿拾五年を經たのである、その間可なりの變遷をなしたけれども未だ一度も弛緩狀態を呈したことなく、常に緊張せる努力を續けて今日に迨んだ事實は、關係者一同の誇として慶賀すべき點であると信ずる。凡そ如何なる團體に於てもその創立の際に考へられた重大なる使命は星霜を經るに從ひ、漸次その軌道を外れて他の方向に轉ずる傾向を有するものであり、又その方向轉換も時世に順應する爲めに必要なことである場合も少くないのであるが、本會の如くその當初に畫ける方策を終始一貫して緊張裡にその開發に進みつゝ來たような團體は稀に見る實例であると言つても過言ではない。而してその主要なる原因は言ふまでもなく會員一同がその目的貫徹の爲めに一致協力して少しも倦まなかつたからである。更に詳しく言へば我々が建築といふ專門を基礎として社會を指導せんとする奉仕の信念が强かつたからである。又一面に我協會の取つて立つた其目的が我國の社會の實情として如何にも緊急なものであつたとも本會が過去十五年間一本筋の軌道を眞面目に進み來つた原因であると見られるのである。

獨り建築界と言はず我國の各方面の專門界は何れも他方面と無關係に直進するの嫌が甚だ濃厚であり、且つ同一の專門界に於ても各自又孤獨的に否排他的に進まんとする傾向が著しいのである。學術研究の方面に於て他の意見と懸け離れたる學說の多數に現はることは研究の進步を促がす所以であるから、時には大に歡迎すべき事柄であるが、同しき專門界に於て各自獨立に對社會的活動をなすことは如何なる場合に於ても何等益がないのみならず、其業界の進步を妨げ其結果社會指導の目的を達成し得ざる憾がある。凡そ如何なる事業でも僅かに一人の手腕にて成功した例はない、必ずや多數同志の援護がなければならないのである。況してや事社會全般の進運に關係ある廣汎にして且つ永遠の將來を有する指導機關に於ては、その專門界の凡ての人々がよく一致協力し社會奉仕の一念に燃えて緊張裡にその努力を惜まず活動するようでなければ、その目的を達成することは不可能である。我日本建築協會は創立當時の我世相の欠陷と建築界の不統一にして眞面目ならざる態度に目覺め、その革新の爲めに奮起したる關西方面の有志一同の團體として生れたのであつて、その當初より社會の指導機關としての重大なる責務を十分に自覺して堅實なる進展を續けたのである。即ち環境の事情と建築術が我社會に負ふ當然の責務が我々有志を堅固に團結せしめたのである。

我協會創立匆々着手した仕事は多種多樣であつたが、その最も力を盡したのは建築物法の制定を促進したことであつた。引き續きその施行に關する行政施設の運用を圓滑ならしむることであつた。その努力の經過はこゝには述べぬけれども、我國都市の根本的改造を急要とする點に於て都市計畫法の制定及その普及を全國の都市に宣傳する事業と密接なる關係にある爲めに、我協會は大正七年一月以來建築學會及日本建築士會と相提携し或は單

獨に熱心なる運動を繼續して來たのである。都市計畫法及建築物法の二大法典が大正八年の春の議會を通過し、先づ以て六大都市に施行さるゝようになつたのは主として我協會の眞劍なる努力に負ふと言つても過言ではない。

以上の外我協會が全力を傾倒して計畫した事業は阪急沿線櫻ヶ丘に於ける大正十一年の實物住宅博覽會の開催であつた。同博覽會は恐らく我國に於ける空前絶後のものであつたと言ひ得る程大規模に行はれたのである。中產階級に適切なる改良住宅二十五箇をそれぞれ適當なる敷地に配置し建設したる外、建坪五百坪を有する博覽會館には住宅建設に關係ある材料、設備及設計圖の陳列をもなし、五十萬圓の資金を投じ約六ヶ月間の準備行爲と六十日間の開筵に依り十數萬の觀覽者に住宅改良の向ふところを會得せしためのである。又大正十二年の關東大震災善後策に對し大阪府市の依頼により簡易組立病院の建設に努力したことを始め、防火建築促進に關する公開講演、その他建築に關する民衆の常識を涵養すべく建築展覽會を開催せること數回に及び、引續きその方針を進めつゝある。更に本年の拾五周年を迎ふるを機會とし本會の目的に副へる各種の事業を實行中である、その詳細はここに述ぶることを省略するけれども、本會が創立以來終始一貫會員の協力により社會の開發に努力しつゝあることをこの記念事業に依つて最も明白に証明するのである。本誌に於て會員各自が我協會の過去の業蹟を追想し、現在の我社會に於ける建築界の地位を展望し、更に將來の進路を檢討せんとする計畫は正に我協會の第二次發展の門出として大に慶賀すべきことである。

我協會の十五周年の記念の日に際して

武　田　五　一

過ぎ去つた十五年の歲月は短かく思はれるものである。其當時の思ひ出は數日前に起つたものゝようにも思ひ出され偲ばれる。オキナ會を解散して、新たに組織された關西建築技術者の新團體たる日本建築協會に其全部を合併する相談をしたことも餘り遠い過去ではないようにも思はれるが、其當時にやつと小學校を出たばかりの小供は、もう既に大學を卒業してしまふて居る。しかし協會の之れから先きの十五年は決して短かいものではないであらふ。思ふに十五年は所謂一と昔半であり人生で云へば其生涯の四分一である。夢のように過ぎた小兒期から漸く青年期に入るの時期であり、希望に滿ち滿ちたる時機でもあり誘惑に陷り易い危險千萬な第二期とも見られるのである。

我日本建築協會も去る大正六年浪花の地に孤々の聲を擧げてから今日まで事務所を移轉すること五回、會員の數も增減はありながら兎にも角にも、今日では一千三百名と云ふ多數の會員を抱擁する鬱然たる一大有力なる協會となつてしまふたのである。發會の當初に於て我々會員の有して居た、東京の建築學會に對抗せんとする關西に於ける一大勢力たら

んとする理想には、未だ達しては居ないが、其遂行して來た業績は、どこに出しても決して恥かしいものではない筈である。他の建築者の會に於て未だ試みたことのない住宅の實物を出陳する住宅博覽會の大規模なものを箕面の櫻ガ丘に幾多の犧牲を拂ふて大成功裡に敢行して以來東京に於ても之れに追從したものが行はれ、我協會でも既に十回に垂んとする開會が試みられ、之れが爲めに我關西地方に於ける住宅の一般的傾向には一段の改良進歩が目に見へて現はれ來たつたとは爭はれない事實である　殊に近年我國都市に加へられつゝある都市改良の計畫及市街地建築物の保安上著るしき効果を收めつゝある市街地建築物法規の制定に關しては我協會は、天下に率先して其主義主張を宣言し、上は政府當局より下は一般市民に對し、'建白に講演に、全く血みどろな奮鬪努力を全會員諸士が盡した其効果空しからず、遂に今日の情況に立ち至つたこと、或は社會人に對して建築に對する關心を喚び起す爲め或は一般建築の常識を社會人に普及せしむる爲め講演に講習に或は著作に由つて世に與へた刺戟は決して鮮くないことは世間が擧つて認めて居られることであらうと思はれる。其一面に於て會員自身の智識をより向上せしむる爲に見學に大會に常に協會としては其努力を惜まず。天災地變に由て建築物の大破壞の起る度び毎に多數の會員を其現地に派遣して其原因罹災の程度等を研究せしめ以て現在の不幸を救ひ將來の禍根を絶滅せしめんとして居ることは數ふるに暇のないほどであつた。かくの如き奮鬪の歷史も要するに、其黎明時代の若々しさの賚であつた。今後の我協會の行程にも赫々たる未來のあることは疑ひはないが、今日の時機は云ふまでもなく前代未聞の沈滯の時期であり重大危機である。殊に吾人建築者に取つては他の職業のものよりは一層悲觀すべき材料が前途に山積して居ることは爭へない事實である。其影響する所我協會の前途に一抹の暗影がないとは云へない。吾人は協會の將來を樂觀すると同時に又一點恐懼の念を抱かないわけには行かないのである。しかし何事も努力によつて解決する。我協會々員の堅實なる結合は之等難關を突破し得ることはさして困難なる問題ではないと吾人は信じて居るのである。

洋々たる前途に邁進する勇氣を發揮する時機に於ては殊更ら穩健なる考察と熟慮とが必要であることを忘れてはならない。思ふに建築の學と術とは其內容極めて多岐多端である建築家の任務及其協會たる團體の任務亦重大なりと云はざるを得ない。其範圍は形似の上下に涉り、國家國民が之れを消費する經費は我國のみにても年々數億圓の巨額に達して居る。之れを合理的に經濟的に構成消費することを指導する任務は一に吾人建築家の双肩に懸つて居る所謂自力更生の實現には我建築協會も其重責の一部を負ふて居ることを思へば將來我協會のなすべき事業には洋々たるものがあるのである。我協會の指導精神は建築家と社會との接觸を企圖し我社會に飽くまで合理的にしてビトルビヤの所謂シンメトリヤとオイリスシヤとを有する建築を出現せしめんとするにあるのである。

吾人は將に東亞に一大飛躍をなさんとするの日を迎へんとする產みの惱みを經驗しつゝあるのである。此時に於て我協會今後の十五年の第二期を迎へんとすることは、其處に幾多の困難もあるにはあるが、一面に於て思ひ設けざる何等かの好運を豫言せられて居るような氣もするのである。此祝福すべき日本建築協會第二期の初頭に當り吾人の悅びの一端を述べた次第である。

その頃を語る座談會

——本會創立當時の懐舊——

池田　實氏　今林彦太郎氏　大林賢四郎氏　片岡　安氏
葛野壯一郎氏　木子七郎氏　小林　悉氏　武田五一氏
高橋榮治氏　波江悌夫氏　野村一郎氏　藤井厚二氏
（出席者五十音順）　鷹取　陽

本會が呱々の聲を擧げたのは大正六年春陽二月、そして關西の建築家三十九名が一致團結して社會と接觸を保ち國家的建築の建設に努め建築界の發展興隆を冀つて立つたのでしたそれから本年で滿十五年を經過致しましたが、われらのこの主張、運動は慨ね貫徹されまたされつゝ現在の有力なる大團體となつたことは誠に慶祝に禁へない次第であります。そのころこれ等運動に參加せられた京阪神に御在住の方々を九月十三日協會創立を最初に打合せをした由緒ある魚岩（大阪堂島）にお集りを願つて「その頃を語る座談會」を催しましたところそれからそれへと懐舊の話盡きず言句次第に熱を帶びて**創立に到るまでの事情、その頃の世相世態及建築界、その頃の建築界の人々、その頃に於ける會員の意氣込、創立當初の本會の樣子、その後の協會の起伏と目立つた事業、將來の協會とその動向**、等に就いて語り去り語り來つて近頃にない感銘深いそして意義ある會であつた、因に御出席の豫定であつた小笠原朝、置鹽章、河合幾次、設樂貞雄、宗兵藏、田中豐輔、永瀬狂三、橋本勉、長谷部銳吉、日高胖、松本禹象、光安惠之助、本野精吾の諸氏は御差支の爲缺席された、尙當夜名古屋の佐藤四郎氏からは祝電を寄せられた。

高橋—本日は大變お忙しい所をお出席下さいましてどうも有難うございました。丁度本年が日本建築協會の創立滿十五年に當りますので、先達來御承知の通りそれを記念に種々の事業を始めて居ります、雜誌の方も來月は記念號を出す豫定にして居ります。丁度協會が創立致します時の最初の會が此魚岩で催されましたので、その當時御出席なさいました皆樣、又その當時御盡力下さいました御方々に再び十六年目の今夕此處にお集り願ひまして、この協會の創立に至る經緯やその當時の事情經過等を回顧して當時の追想談を御聞かせして戴きたいと存じます。では先づ最初この協會がどう云ふ風にして、どうして如何なる動機から生れるに至つたかといふ事情から御願いたします。

創立に至るまでの事情

池田—所謂有史以前と云ふやつだネ。

波江—それは片岡さんにオキナ會のお話を先づ願つて……それが流れなんだから……

片岡—有史前を僕が語らう。創立當時のことは茲にちやんと、非常によく書いてあるから（雜誌創刊號から會報を抜書したものを指す）會を催す時のスタートなり、この會の生れる四五年も或は十年も遡つての事情の追想談を簡單に申し上げやう、私は大阪にオフイスがなかつた明治三十八年頃、先づ大阪でオフイスを開いて、さうして大阪に於ける先輩

同窓の人と相當親しく附合ひ、同時に東京方面に於ける古い人、片山、曾禰兩博士或はもう少し降つて伊東、塚本兩博士、又、自分等の同窓よりもう少し年寄の人、降つた人、斯う云ふ人々と相當交つたものでありますが、その間に感じた事は、建築家がどうも自分の城に立籠つて、それで先づ自分の命ぜられた仕事、或は自分が從事してゐる仕事に骨を折る事以外には一足も出ない。廣く建築界の全體の統制とか進歩と云ふ事については餘り感興を有つて居らぬ、無關心のやうに見えた、それを建築學會などでは多少考へて居る如く見えたがさて却々うまくゆかない、一面どんどん建築家は殖えるし、さう云ふ機關が不充分なためにどうも建築と云ふ一つの大きな團體が對社會的の存在を明かにする事がどうも出來ない恨みがある、又自分等同士の事で云ふと先輩を誤解して惡く云つて見たり、同窓との間に何んだか感情の行違ひがあつたり、官廳方面の人と民間の人との間の交渉が不充分であつたり、どうも其間の圓滑さを缺き、從つて建築界全體の對社會的存在が不充分であると云ふことになるので、どうしても之はお互に懇親をもつと結ばなければならんぢあないかと云ふことを深く感じたので、それで同士と語らひまして、少くとも關西に居る者丈けは仲好く、色々の問題はあるだらうけれども、仲の善い交際をしやうぢやないかと云ふので、當時關西にその名を知られた先輩同窓の人々にも相談をして、さうして一夕會を催した、さうして之からお互ひに愉快な交際をしやうぢあないか、一つの懇親を結び同業者の團體を作らうではないか、と云ふので相談した所が、それはよからう一年に少くとも二回位ひは集つてやらうと、云ふので出來たのがオキナ會と云ふ會で、名前は後から決つたが、大阪、京都、奈良の頭文字を取つて、大阪のオ、京都のキ、奈良のナと云ふ頭文字を取つてオキナ會と云ふ名を付けた。京都では武田君の外誰が居つたかね、

波江—京都ぢあ龜岡さん。永瀬さん。

片岡—一井君は後から入つた、奈良には關野君が居つた、(關野さんは間もなく上京されてゐたといふ人があつた) 奈良には土屋君、加護谷君、大阪には辰野博士と河合浩藏氏、河合幾次氏、秋吉金德氏、年齡順で云ふとそれから野村君と僕と其外に山口、設樂、船越欽哉の三君が居た。

波江—それに茂庄五郎さんと、神谷邦淑さんとが居られました。

片岡—住友の野口孫一君、日高胖君を合せて十二三人、それ丈けの會員で春秋二回本當のはめを外した、今から思ふと奈良にいつて菊水で泊つた、それから中の島の錦水ちよつと粋な旅舘兼料理屋、あそこで大いに痛飲淋漓と云ふ會をやつた、今の大阪ホテルに日本舘があつてそこでもやつた事もあつてとても愉快であつた、老若相提携して懇親を結ぶ丈けの意味でやつた、それがオキナ會で懇親の以外には出なかつた、だから團體としての意識を強くすることには向かはなかつた、所がその當時の東京の樣子を申上げる必要がある、東京では建築學會の會員が殖えて、「わけい會」とかアンブリ會とか色々建築家の小さな團體があつて全體の統制が殆んど取れない、お互ひに惡口を云つたり、變なことになつて

居るので之ではどうも困りはしないかと云ふて、東京で段々話をすると、困るんだ、何とかせねば困るんだと云ふことであつたし又私の友人の意見なんぞも段々徴して見ると關西では一つ堅實な團體を作れさうなものぢあないかと云ふので、それから從來のオキナ會では不充分だから、大體オキナ會も年を經て月例の飯食ひ會になつて居るので、段々會員の數は殖えて居るけれども、努力も拂はず、會員となるべき資格の人が段々澤山殖えて居るけれども、古い會員丈け集つてゐるんぢあ、いかんから段々殖えた會員に檄を飛ばして、健全なる建築同業者の團體を作つて、建築界對社會と云ふ、この關係に於いて建築界を目覺ませるべく一つ努力しようぢあないか、と云ふのがこの最初の集りであつたのであります、その話は茲に書いてある通り。

波江—東京では大學を中心の木葉會と云ふのがあつた。

池田—オキナ會と云ふのをやつてるうちに若い人も入つて來た、所が何時會をやつても年寄りばかり集つてゐるので若い者は面白くない、こんどは若い者が集つたものが建坊會と云つて集るやうになつた。

大林—建坊會は丁度吾々が建坊會の末期なんです、その年頃は丁度明治の四十四年頃ですね、前に遡つて十年間をこの建坊會の會員にしたんです、建坊會の發會式は寶塚でしたかね。

木子—箕面の榛野村のラヂウム溫泉です。

大林—ラヂウム溫泉で會名の投票をした時に……

木子—ボンボンだからと云ふので建坊會になつた。

池田—僕が入れられるかどうかの境目の所で、漸く若い者と云ふ所に入れて貰つた。

波江—そのラヂウム溫泉に集つたのは誰々でした。

葛野—あの時、幹事は僕だつた、加護谷君と池田君に僕、それから牛村喜勇君

大林—北村耕造さんも居りましたね、建坊會の會名を投票する時に居りましたぜ。

木子—日高さんも入つて居たやうに記憶する……

波江—ラヂウム溫泉に集つた者は何名位だつたらう。

葛野—十五六人で橋本君も居つた。そして建坊會を作つた。專ら建築學會の支部を置いたらどうかと云ふ事が話題になつたと思ふ。

大林—あの時集つたのは十人以內です。あの時初めて建築學會の支部を置いたらどうかと云ふ……

池田—支部にするか別な會にするか大變議論があつた。

大林—それがあつてもう少しそれを練らうと云ふ事になつて、水曜會に變つて來た、每週水曜に雪が降つても雨が降つても集つたね。

池田—あつちのカフエーに行つたり、こつちで飮んだりして大いにやつたね。

波江—ラヂウム溫泉の會の直後に、僕に電話をかけて大勢建築家が寄つて、どうも謀反

會らしいと云ふので、それについては何だか團體を組織して大いに活動しようぢあないかと云ふ風なものだと云ふのだつた、それは面白いから一つそれについてもう少し會の案を練つたらどうか、丁度片岡さんが矢張り關西オキナ會の餘り會合が度々なくつて、オキナ會も寂れるし若い者と年をとつてゐる者と融合的に行かぬし、何とか一致團結して大いな會合を開かうぢあないか、と云ふ話があつたし、丁度もつて來いと云ふので……

木子—話があつた所ぢあない、片岡さんは一體君等怪しからんと云はれるんだ、さういふ會合を兩方一緒になつて大きくして社會的の大きな團體にして力强くやらなくつちやいかん、馬鹿を云へと云ふやうな事だつた。

波江—東京で事件が起つたのは建築學會の會長をやめさせやうと云ふ運動が當時起つたそれは怪しからんと云ふ譯ですね、だんだん樣子を探つてみると、さう云ふデマばかりではない、辰野さんに會長を今度やめて貰ふと云ふ中堅の連中か、ドンブリ會の連中かは知らないけれども、さう云ふ運動のある事をきいて、段々調べて見るとどうも事實らしい。それから東京に野村さんが行かれる、片岡さんと私も行つて建築學會の總會に出てみるとさう云ふ空氣がある、その總會でやりましたね、その結果は矢張り辰野さんが當選されたんです、地方の團體は必ず自分に投票して呉れると云ふ事を云つて居られた、その結果の報告を兼ねてこの吾々の協會の創立總會をこゝで(魚岩)開いた事になつて居る。

片岡—その時の事情を僕がちよつと此機會に述べて置く必要があると思ふ、一體技術界の先輩と云ふものは非常に强い力を持つて居つて、後から出て來る者は、徹底的にその尻尾に付いて行かなければならぬ空氣が濃厚だつたからそのためにドンブリ會の連中は憤慨して、どうも辰野博士ばつかりがいつまでも學會、技術界にのさばつてゐるのは何事だ、と云ふので其結果、辰野さんの會長を止めさせやうと云ふ運動が濃厚になつた、その運動の張本人は「ドンブリ」會で、檄を飛ばして、僕の所には來なかつたけれども色々の方面に今度の會長は塚本にしよう、辰野博士を投票して呉れるなと云ふ事を地方に言つてやつた、東京は手紙丈けではなく運動してさうして、排斥してしまはふと云ふ事をやつて居ると聞いたもんだから、佐野君に會ふて聽いてみたし、又塚本君にも會つて聽いてみると、もう既にやつて了つた、運動は九分九厘までやつてしまつて居るから、今頃云はれてもどうする事も出來ぬぢあないか、と云ふ事で結局は今更動かすことが出來ぬにしても學會で何も辰野博士が横暴だ、怪しからんと云ふやうな譯のものではない、所謂順序よくやると云ふ事で、君等の目的ならば辰野博士を罷めさせる事はなんでもない話、まあ目の前では辰野博士なる哉と云ふ顏をして置いて總會の投票でバサツと落ちてゐると云ふやうな、暗討をせんでももう相當の年齡になつてゐるから罷めさせて了つたらどうか、無理な事をせんでもいいぢあないか、塚本君にきいてみるとどうももういかんかも知れぬ、佐野さんがやつて了つて僕等も實は弱つてゐるんだ、と云ふ話、僕が行つて色々話をすると尤もだ、辰野博士の心理はよく知つて居るんだから、强ひてそんな事をしなくつてもと思ふんだが、

東京には不幸にしてそう云ふ團體がない爲めに、皆勝手に若い者が寄つてゐるから、さう云ふ事になつたが能く話は判つて居るから、と云ふので愈總會になつて蓋を開けてみると、塚本君の票も相當多かつたやうに思ふが、結局辰野博士の方が多かつた、それは地方の人は手紙丈けだから何だか來てゐるな位ひで、見なかつた人もあらうし、從來の慣習で會長は辰野博士だと投票した者も相當多數あつた爲に又會長になつた。而して其後の話だが辰野博士はさう云ふことを思はずに僕は罷めたい、今度は曾禰君を推薦したいと思ふと佐野君に云ふと、それは困る、曾禰博士は辰野博士よりも未だ老人ぢあないか、とてもいかぬと云ふので反對したが、會長は五年も十年もするんぢあない、一、二年だからいいぢあないかと、段々他の人も話をして中途で佐野君が折れて了つて、來年の總會には、と云ふ事になつたが、其翌年だつたと思ふ、その時の空氣が佐野君を中堅に決めて老人を排斥しなければならぬと云ふ強い熱心に、前後も踏まずに建築界ノ刷新をしようと云ふ考へかも知らぬがやつて居つた。段々話した結果、それを塚本君が口を入れてお互ひに提携すると云ふ事になつた。丁度之は騒動のあつたその年だつたかと思ふ。

波江—其事件の報告の意味でこの魚岩で會を開いた。…時は大正六年の三月でした

片岡—それは學會の總會は其年の一月だらう、二月に集つた所を見ると、その騒動と云ふのが投票で辰野博士が當選した、その後仕末だつたと思ふ。

波江—茲に書いてある『東の岸を洗ひ、西の岸を打つ』と云ふ事はその意味です（抜書を指す）ドンブリ會の中堅であつた佐藤さん北村さん等の意見は當時カンカンの意見だつた。

片岡—技術界と功績上の先輩とは違ふと云ふのでとても佐野君など手強かつた。

波江—田邊さんなんかも活躍した方だ。

葛野—佐野君のクラスの人が兎に角働いた譯ですね、此連中が『ドンブリ會』の連中だね。

波江—私は辰野先生に話した事がある、かう云ふ風らしい、と、さうすると辰野さんは、いや俺は實際罷めたいんだと云ふやうな話があつた。

大林—さうすると東の方が前なんですな、それはラヂウム温泉に集つた時より大分前でせう。

波江—水曜會は創立總會がすんでからそれまでの間の色々の事を練るために出來たのである。

大林—さうぢああありません、水曜會は前にも云つたとほり途中から片岡さんがさう云ふ部分的の事はいかん、矢張り大きなものに仕やうぢあないかと云ふので、水曜會の方は進んで來て居つた。

波江—それは建坊會ぢあないかな。

藤井—時事新報の向ひ側の通りを入つた所の角のお茶屋か何かで會をやつて、僕が幹事で會費が高くて叱られた事がある。建坊會から後に水曜會が出來て、僕等はつまり大正でせう、それで大正會も出來たんです、水曜會に大正會も出來て居つて、それぢあいかんか

ら一緒にしようと云ふので……

大林—要するに水曜會の出來たのは大正五年位です、それに名前は矢張り建坊會で通して居つて、建坊會もあつてその中に水曜會も出來た。

葛野—水曜會七八人乃至十人以内の會員がパウリスタの二階で、物置みたいな所で會則なんかを水曜會で練つたものだ。

大林—水曜會のそれは末期ですね、かなり賑つた。

葛野—大正六年の初めだつたね。

片岡—それは無論前だらう。

藤井—水曜會、大正會の前に若い者が一ぺん集つたやうな氣がするが、ないですか。

波江—三月十七日のこゝでの會合が動機だつたと思ふが。

藤井—その前に何かやらうぢあないかと云ふので、こゝで集つて發會式を向ふでやつたやうな氣がするんですがね。

波江—會則を作らうと云ふので會合したんです。

大林—所へ多分、片岡さんから話が出て來たんぢやないかと思ふ、大きなものにしようと云ふ、こう云ふお話があつたためにさう云ふ分解した建築團體が澤山あるのを強力なものにして、それを一緒にしたらどうかと云ふ説が起つた。

波江—それを謀りに行つた事があるね。

大林—水曜會もあり大正會もあり、又色々の會もある、さう云ふものをうつて一丸として協會のやうなものにしたらどうかと云ふ事が一番の趣旨だつたやうに思ふ

波江—さうするとそれは二月中の事でせうね、此總會は三月ですから、二月中に水曜會が盛んに活躍したためだね。

藤井—終始集つて居つたのは大正會も寄つて話をして居つた

波江—大正會の出來たのは何時頃でしたか。

藤井—建坊會と云ふものがないやうになつてからです、渡邊さんと僕と幹事をした事がある。

大林—建坊會は四十四年までです。

藤井—決つて居りましたか？

大林—殆ど決つて居つた。水曜會が出來た時分から、大正會とは分離した。

波江—大正五年まではグラジエートの會は北の新地でやつた、會費五圓。川うのや豐田屋でやつたり、橋本さん前田さんなどが幹事になつて居た。

今林—大正五年の暑い時分だつたと思ひますがね、濱寺の日柄喜だつたと思ふ、そこで吾々にも出て來いと云ふので出席しましたが一番尻です、同僚の人は誰も居らぬ、私がたつた一人で人體お前等本當の會員ぢあないか知らんけれども、とにかく淋しさうだからお前も入れてやると云ふ話で、一晩おつき合ひをして居つたけれども、どうも連中は居らぬ

し、隅に本當に小さくなつて居つた、大正會が出來たのはそれから以後です。それで僕は癪に觸つて了つて。あの連中の所へ行つても威張つて居つてとても寄り付けん、その癖、會費は當り前に取るし、彼奴等とは止めやうと云ふので、連中にも報告して……

木子—中西甚作君はいつも來て居つた。

今林—大正五年卒業頃ですからね、水曜會とは餘程後です。

波江—さうすると大正會と水曜會と建坊會と云ふものがあつたのだね。

木子—建築家の若い連中が建坊會、その內の七八人が水曜會だ。

藤井—水曜會はよつぽど後から出來たんですね。

大林—大正五年時代以後の期間であつた。

今林—パウリスタに集つたりして。

大林—目的をどう云ふ文句にするかと云ふので三日位かかつたですね。

池田—目的の文句に何か希望がついたものだつたね。

波江—本筋の方は詮衡委員が五名出來て、關西建築クラブと云ふ案を練つて創立總會にかかつて居る、その時に本會を關西建築クラブと稱すとか其外目的、會員、會合、役員、役員選擧までやつて居る譯なんだ、これは本會雜誌の第一號に委しく出て居ります。その結果オキナ會を解散して、そうしてその時殘つて居る會費四十三圓三錢と云ふものを建築クラブが引き繼いだ。之に平行して水曜會が、建築クラブでは物足らぬと云ふので案を練つて建築クラブの會議にかけて建築協會になつた。

當時の世相と建築界

高橋—その當時の世相といひますか世態とでもいひますか、それはどういふ樣子でしたでしやうか、又建築界の方面の事情はどうでしたか。

池田—明治末にかけて若い建築家が澤山出來た、大阪の建築界もその當時から活躍した、戰爭で景氣はよくなつて來たし、大いによかつたですね。

片岡—ロシアと戰爭すると云ふ事も目覺めの原因となつたかも知れぬが、其時の事情を一寸お話する、其後でも却々、その頃ではエンヂニアーだとか、アークテクトの先輩と云ふ者は、建築界よりも土木の方はもつとひどいが、土木界では沖野技監なんかに睨まれたら蛙が蛇に睨まれたよりももつと恐ろしいものだつた、建築界でもさう云ふ話がある、先輩が、あれあいかんと一言云つたので立派な就職口がフイになつてしまつた事等もあつた言つた本人は別に惡く云ふ心算でも何んでもないんだ、單に自分があの男を好かんといふ位の程度だつたのだらう、それ程先輩と云ふ者の一言がその人の位置を左右する、古參のエンヂニアは、まあ大御所的で惡く言ふと橫暴で若い人に非常に苦手であつた。土木でも鑛山でも機械でも、先輩のエンヂニアと云ふものはとても大きな發言權を持つて居つた。それがその時分の世相なんだ、それはよくない、若い者も反省しなければならぬ、反抗して

喧嘩をしてはどつちも位置が下る、だから先輩なり中堅なり今の若い人も共に意見を交換して親しくしてやらなければならぬものだと云ふ事を痛感せしめたんだ。

木子—もう一つその時分から云ふ事があつた。船成金なんか澤山出來て、學校を出ない人でも大いに威張つてゐたのに建築家は一向地位が上らない、それはいやに城郭を構へて排他的にやるからいかぬ、建築家の地位を向上するために、こう云ふ事が出來たらと言ふやうな事もあつたんです。ちやんと機運が向いて居つた譯ですね、一致團結をする。

その頃に於ける會員の意氣込

波江—會が出來て見ると議案が出來て、委員會が出來てそれを研究しようと云ふ項目に現行大阪府建築規則改正、都市建築法規、經濟上より見たる建築材料、建築施工上の改良、仕樣書及契約書の案、下級民住宅問題、建築に關係する時事問題、建築從事者及職工に關する問題、建築に關する迷信及傳說の調査、建築に關する報酬問題、建築士法案、都市住宅と、大きな問題ばつかりだ、その中で一番問題になつたのは都市計畫の問題です、大正六年からやつたんですね。

片岡—それは大正六年からです、たしかその年の十二月の例會を電氣クラブの二階でやつた時に、僕がそれは前からどうしても協會を作らねばいかぬと云ふので色々議案を練つて居つたのだ、それは都市計畫と云ふ意味ではない、建築物法、建築條例の制定を急がなければならぬ。之は建築學會も過去二十年努力して案を作つたけれども、其儘東京市長の机の引出しに入つたまゝだ、それでは仕樣がないと云ふので建築學會では建築條令實行促進委員會と云ふものが出來た丈けで一回も開かず其儘になつてゐると云ふことを知つてゐたので、之は關西の團體が中心となつて後藤新平さんが內務大臣だから、之を動かすに限ると思つて之を關西建築協會で徹底的に了解を得べく努力したいと云ふことを諮つた。さうすると中には、そんな事をやつたつてどうですかな、と云ふ人もあつたけれども、それはそうぢあない、一寸心當りもあるんだから、さう云ふ御心配なら充分役員で自信があるから、皆賛成して呉れますか、と云ふと、結構だからやらうぢあないかと云ふので、確か十八日かと思ふがその議案を讀み上げた所が皆賛成した。それからそれをすぐに手紙でその儘建築學會に送つて、斯う云ふ事にしやうと思ふが、之はかねて努力して居られるが一緒にやるかどうか、やらなければ關西建築協會でやるがと云つ　やつた。一方建築士會にも手紙を出した、さうすると二日程たつと、電報が來て至急上京して呉れ、聽きたい事がある、御趣旨には大賛成だから手紙丈けでは判らぬから、是非上京して呉れと云ふので、それから皆の了解を得て、決定した案をそれ丈けの事で行くんだから、皆なに相談しなくてもいゝと思つて、二十四日に行つた所、建築士會も是非出て呉れと云ふことであるし、それをやるんぢあ、建築學會は實行委員會があるが委員會を開いて居らなかつたが、あの手紙によつて直ぐ委員會を開いたさうだ。大賛成で一緒にやるにはどうしてやるかと云ふ事

を協議したいと言ふので來て貰つたと云ふ事で、それから藤原俊雄と云ふ人が東京市會參事會員で、內務大臣とも接近して居るし都合がいゝ、都市協會の幹事をして居つたので都市協會も一緒にやりたいと云ふ、それで關西建築協會、建築學會、都市協會、建築士會、此四つの團體が一緒にやらうと云ふ事で、此原案はこつちから書いていつた通りにして、四つの會の名前を附けてさうして之を只やつたんぢあいかんから、後藤さんに徹底的に說明して、そこでイエスか、ノーを聞こうと言ふので、後藤さんの都合を藤原君に聞かした、確か二十五日でしたか翌日かに會ふと云ふので、帝國ホテル跡の內務大臣官舍に行つて建議案を出して說明した、所が後藤さんは、それは技術家論で、世の中の事は複雜なものでさう簡單なものぢあないよと一蹴する、諄々と說いてこれは書生論でも技術家論でもない、世界各國の都市とも建築物法のない所はない、建築物は現代文化の中心をなすんだから、さう云ふ貴下のやうな事を云つては困る、貴下は技術家であつて、さう云ふ事は判る筈だけれども一寸おかしい、內務省に最近、都市計畫課と云ふものが出來たが、此骨は市區改正であるが、同時にパラレルに行くものは建築で、都市計畫課を內務省に作つた位ならどうしてもかう云ふものは當つて置く必要がある、よくどうか下僚とも御協議下さいと云つて私はもう直ぐ大阪に歸つた。後藤內相も直ぐ次官の水野錬太郎氏、都市計畫課長の池田宏氏に、此案をそつくり見せた、さうすると水野氏も池田氏も之は內務行政の中樞をなすべき問題であつて、內務行政は之から此方に向つて行かなければならぬと思つてゐる、それを建築の方面の人がさう云ふ事を云つて來たのは渡りに舟で大いに盡力して貰はなければならぬと云ふので、後藤さんはびつくりして直ぐ會ひたい、いつ會へるかと云ふて向ふから云つて來た。そこで二月六日（大正七年）に會つた。さうするともうすつかり話が變つて居つてね、それは內務省は大賛成だ、君等に教へて貰つたやうだが、自分達も何とかやり度いと思つて居つたから、大いに盡力して呉れ、至急調査會の豫算を取るから、豫算は其當時通過して居つた、不思議なことですが其年だけ何かの都合で、豫算を早く審査して、一月の末には通常豫算を通過して了つてゐた。特別豫算でもつて、豫算をごうしても總理大臣に話をして無理にも取るから、君等一つ努力して呉れ、君等の云ふ通りにすると云ふので委員も原案の通りに詮衡して調査委員會の豫算も原案の通りに取つたが、それから間もなく後藤さんは外務大臣になつて了つた。內務大臣には水野次官が大臣になつて、議會もすんで色々と準備も出來て、委員たるべき人を委員と云はないで只都市問題で御相談したいから出て呉れと云ふので委員たるべき人を皆よんだ。各方面の會長なり代表者、衛生學の柴里博士、土木の連中、建築の方では佐野君と僕とそれから塚本君が矢つぱり四團體の代表者と云ふので呼ばれた。其席で、後藤さんは外務大臣であるけれども自分が內務大臣の時に決めた案だから僕が說明する。建築の團體が是非やれと云ふので、建築と都市の問題とを一緒にして都市計畫課を作るやうになつたから、諸君御盡力を願ひたい、と云ふので、吾々四人の者は知つて居つたけれども、あとの人は其時初めて知つたや

うな事でそれは結構な事で御盡力しませうと云ふやうな事で六月に委員會が出來た、それから毎週委員會をやつた、大正七年夏から十二月まで、それは一週一回づゝ僕はその委員會に行つた。建築の方では佐野君が出た、內田君と笠原君も。大正八年の春にそれが通過してしまつた、さう云ふ關係でこつちの協會では、都市計畫關係の問題は非常に研究をした譯だ。

波江—それで都市計畫法案と市街地建築物法案の二つの案の通過のために殆ど全力を捧げた譯なんだ。

片岡—僕が向ふに行き政府や委員の意見を聽いて來たり色々やつて居つたよ。

野村—あの時の意氣込みは此大阪が建築物法を制定して吳れとリードしやうと云ふ意氣込みだつた。

波江—其頃野村さんの臺灣の都市計畫の話なぞきゝました。

葛野—なる程それは僕も覺えとる、えらい人だと思つて居つたよ。

波江—話の途中になりますけれ共、それより一寸前に東京では議院建築懸賞問題がやかましい問題になつて、その關係で建築協會では、議院建築委員會と云ふのが出來てゐるです

大林—一番喧しかつたのは僕等の學生時代です。

葛野—讀賣が盛に書いて盛になつた時、四十四年頃だつたか、それから中絕して又八釜しくなつた。

波江—それからもう一つ鐵筋コンクリートの仕事が、大正の初め頃からボツボツ起つて來て、さうして其結果、一方に國技館が燒けたり、安田倉庫が爆發したり、葦分倉庫が爆發する、神戶郵便局が燒けたり、そんな事で、所謂耐火構造を奬勵しなければいかんと云ふので講演會をやつたやうな事もあります。

其後の協會の起伏

高橋—雜誌の創刊號が大正六年九月十一日に出たことになつて居りますが、此雜誌の發行當初には、波江さんは大變御努力になつたそうですが。

波江—一號二號三號まで殆ど僕が引受けて居ました。佐藤四郎君と私と江村君ともう一人事務所に居つた人で、須藤眞仝君とこの四人が三號まで努力した譯です、後は流れがついて割合に順調にゆくやうになつた。

池田—その時分の役員には編輯の外に編輯補と云ふのがあつたね、理事が編輯は餘り判らん方が多い、其時代の方が制度がよかつたよ。

葛野—創立當初は皆潑溂たるものだよ。

片岡—それはそうだ、熱を持つて居るよ。

波江—それとその時分は政府を對手にし內務省を對手にし、とに角、非常な意氣込みだつた。一我協會も大正八年には日本建築協會と改稱した。

木子—それには片岡さんを代議士にしなければならぬ、と云ふやうな話も出たね。

波江—その揚句に、大正八、九、十年と追々法規が出來る、十年に殆ど法規が完成した。十一年に住宅博覽會をやつた。

片岡—都市計畫法が十年に出て、十一年に住宅實物博覽會を開いた。

木子—さつきから一向話が出ないけれども建築協會が生れると大江ビルが非常に活躍したものだね、何でも大江ビルだつたね。何んといつても當時唯一のビルだつたね。

葛野—電氣クラブにもよく集つたからね。

片岡—電氣クラブは安いんだ。

木子—日本建築協會と大江ビルは切つても切れない關係だ。

池田—協會の事務所も色々變つて居るね、先づ最初片岡さんの事務所に置いて戴いて創立の大正六年から十年五月まで四年間隨分長く御厄介になりました、そして京町堀の不動貯金銀行に行つた、あれは上るのに弱つたぢあないか。

片岡—裏の方に細い入口がある。

池田—通用門から入れと云つてね。僅かに四ケ月しか居らなかつたね　さうして大江ビルに行つたんだ、事務所らしい事務所に入つたのは大江ビルが初めだつた、そこで二年間それから十二年十月に堂ビルに變つた。三階の薄暗いいやな所だつた。それから三年して江商ビルに移つた。それがたつた一年だ、さうして大同ビルに四年八ケ月居つて今年朝日に移つた樣な次第なんだ。

片岡—それは少しづついい所に行つてゐる漸進主義で行つてゐるから間違ひない。

櫻ケ丘住宅博覽會

高橋—その後協會の重なる事業に付いて、一つ順々にお氣付きの所を御話願ひたいと思ひますが。

木子—何ミ云つても櫻ケ丘の住宅博覽會だね、あれは全力を注いだんだ。

片岡—普通のつり竿で大きな鯨か何かを釣つたやうなものだ、やりかけてどうにもならぬ、後藤さんを總裁にして呼んで來たりね。

葛野—何をやつても熱があつたね、全體の會員が全力を注いで居つた。

片岡—波江君なんか僕の事務所員だけれども朝から晩まで詰切りだ、事務所なんかには全然出ないで驚いたよ、しかし會の方は東京の連中が來て吃驚して居つた。

波江—東京の連中を呼んだね寶塚に、池田で一晩泊めて、めん茂樓で泊めて……

片岡—接待したもんだ、東京の連中と一緒に泊つて、松茸山に案內したかね、箕面公園を案內して、それから寶塚で。

木子—成金時代だつたんだね。

片岡—それから寶塚の歌劇を見せて。

波江—あの音樂は耳に馴れないけれども、どんどろ大師の子別れか、阿波の十郎兵衛、あの劇を見て、西洋の音樂は耳に馴れぬが涙がぽろぽろ落ちて困つたといふ話、芝居を見て音樂は何だか耳にぎごちないが、見て居ると涙が止めどなく流れて困つたと云つて居つた

高橋—大正十一年でしたか。

片岡—そうだ、あれが一年後れたら出來ぬ、地震でね。

波江—大阪では大正六、七、八、九年、多くはこの間に鐵筋コンクリートの建築物が出來たから、殆ど煉瓦造の時代は去つて鐵筋コンクリートの時代に入つた、方々の俸給が三倍にも飛上つた時だ。博覽會は全體で五十萬圓位の仕事でしたね。

片岡—實物建築をやる人は自分で建築をやつて居りますから皆全部現金で出すものとすると、請負者即ち出品者は大概一軒一萬圓位のものを出して居るんだから、二十五、六萬圓を費したことになる、外に協會は二十六萬圓ばかりを費した。

武田—二十六萬圓の金は、どうしたんです。

片岡—博覽會館を作つて居る、そこにずつと展覽をしたのでそれに金がかかるよ。

木子—博覽會がすむ頃から、不景氣になつて賣れは比較的に悪かつたね。

片岡—家が悪いんだ、一萬二千圓で、第一値が高い。さう云ふやうな家をキヤツシユで出して買ふやうな人は自分で建てる、まあ、四五千圓までと土地を入れて五六千圓がねらひ所だつたんだけれども、殆ど競爭で我も我もで遂々、一萬圓程度までに躍り上つて了つたんだ　然し兎に角大事業だつた。

波江—あの影響が多く芦屋附近の新らしい住宅に皆その影響を受けてゐるのみでなく建築界全般に及んだ、全國の住宅を造らうと云ふ人は、とに角一度は見に來たものです、參考に圖面を與れと云つて來たのも隨分あつた。

木子—文化住宅なるものを促進した譯だね。

葛野—見物人は無料も入れて延十萬人、有料が七八萬人も入つたです。

木子—あの時分に洋服を着た奥さんも出來たね、兎に角、時代をリードしたよ。

震災當時の活躍

高橋—大正十二年の震災當時の協會の事業はどうだつたですか。

波江—調査委員會で調査に行つたのが一つと、それは記錄も殘つて居りませう。

片岡—リユツクサツクをかついで妙な格好をして行つたね。

波江—あの時は新聞記者がやつて來て關東が非常な地震のやうだが、丸ビルだらうが東京海上ビルなどがつぶれるかどうか、質問を受けて返事が出來なかつた。

池田—全くあれ迄は地震については世人があまり注意を拂つて居なかつたんです。

武田—つぶれる譯がないと僕は週間朝日に書いた、よしんばつぶれても、つぶれる丈け

の價値があるのですから、つぶれてもそれ丈け後の爲になるから少しも惜むに足らぬ、と云つて置いた。

波江—返事が出來なかつた、殊に內外ビルがつぶれたと云ふ確報があると云ふので、吾々は龜裂位は出るかも知らんけれども、つぶれたとは思はんと云つて置いた。

片岡—あれ迄のデザイナーは、あれは坪當り一噸二分で出來た、或は一噸で出來たと鐵の噸數の非常に少いのを誇つて居るやうな人も澤山あつた。坪單價が安いのは根本に於いて安い理由があるのであつて、坪二百圓のものを百五十圓に値下げして結局、地震でぺしやんこになつた。

池田—協會では罹災者收容の組立式假建物を考案して、大阪、京都、兵庫の當局へ建議したり、義捐金を集めたり又横濱では罹災者救護病院の設計をしてやつた、これは大阪府が建てたんだ、其他講演會やパンフレツトや隨分活動をした。

大林—組立家屋の第一回の向ふにゆきましたのはどうでしたか、府の第一回は五千坪、第二回が二、三萬坪で、第一回も二回も私の方で全部向ふに持つて行きましたがね。

池田—東京ではどこに應用されたかね。

大林—各方面に割當て了つた。

武田—實際使つたんですか。

大林—第一回は私の方で全部向ふで建てたんで、二回は芝浦渡しでした。一回は大阪府で後のは關西聯合が大阪府にまかした分です。

高橋—當時園部文雄さんはあの組立家屋について東京か横濱かへ行つて仕事をされた樣に聞いてゐます。

池田—あの時は大阪と云ふものがあつたから、東京がよほど助かつた。

武田—とても大阪の時には援助出來ないだらうね。

片岡—やれんだらう、東京は自分は都で、よそは皆田舍と思つて居る、大阪は色々の關係で東京を兄貴分として大いに敬意を表してゐるが……

高橋—その後の事業としては。

木子—その後は茲に書いてある通り、社會教育ばかりしてゐる。

葛野—しかし地味だけれども眞面目だ。

片岡—長く續かないぢあ、大體云ふと熱の內容はゆるんで居るけれども、やつぱり續けてゐる、その方針は踏襲してゐるね。

將來の協會とその動向

高橋—それから將來どう云ふ方に向つて行くかと云ふことも一つ……

葛野—それは歷史を繰り返すんだ。

片岡—若い人必ずしもいいとは限らんけれども常識豊富で、熱あり犧牲心の强い人が相

當あるだらうと思ふ、そう云ふ人にやつぱり中心を移さなければならぬ。

武田—僕は斯う云ふ會で此頃感じてゐる、會員の內容は若い人となり、昔と大變違ふし昔はとにかく大學を卒業した連中が中心だつた、此頃はどうもさうぢあないやうな氣がする。

片岡—大學教育は段々機械化して、智識は進歩する、色々の事に從事して居るけれども社會の中心に立つと言ふ熱が、段々薄くなつて居るやうに思ふ。

武田—さうぢあないと思ふ、立つ機會がなくなつて來たんだ。

木子—もう一つ私の考へは、非常に違ふ、人間より實力と數の問題になつて來たんだから、如何に出來る人間も數には敵はぬ、だからどこ迄も大衆運動で力强く團體的にやつた者が勝ちと云ふことになる。

波江—けれども時世が變つて來て居るから建築家にファッショ運動が起るかどうか、それは別として、建築家の所謂先輩と云ふか、或は中堅以上の貴下方が熱を起させなければだめだよ。

片岡—會員は皆相當のインテリ・クラスだから目的を達する筈である、中に團體を造るも宜しい、問題は要するに人の宜しき得るにある、そしたら役員は適者を得るであらうし會の事業も益々うまく行くと思ふ、團體のやることは多少中には小供らしいこともあらうがそこは忍ばねばならん、今定款の改正もやつてゐるが要はこの運用と運用する人にある、全會員が會の仕事に熱を持つ事、關心を有することこれが會を向上發展せしむる力となるのである。

高橋—永々と御話を拜聽いたしまして有難う御座いました、座談會はこれで打ち切りましてあとは御自由に。

最近十五年間に於ける關西建築界の變遷を語る會

池田　實氏　池田谷久吉氏　小川安一郎氏　大原　芳知氏
片岡　安氏　葛野壯一郎氏　古宇田　實氏　酒井勇三郎氏
清水　榮二氏　須川廉太郎氏　武田　五一氏　高橋　榮治氏
波江　悌夫氏　古塚　正治氏　森本　藤吉氏　安井　武雄氏
（出席者五十音順）　鷹取　陽

本會が創立されて今年で滿十五年になります、この十五年間のわが建築界の發展は實にすばらしいものでありまして、本誌ではこの間の消息に詳しい諸氏を九月十七日北濱野田屋に招待して親しくその變遷の歷史を語つて頂きました、尙出席の豫定であつた岡部顯則、大林賢四郎、宗兵藏、德政金吾、松室重光、山脇友三郎の諸氏は缺席された。

高橋—座談會を初めて頂くことに致します、丁度本年は御承知の如く建築協會の滿十五周年に當りまして、色々の方面にそれを記念する爲の事業が行はれて居ります、其事業の一部として編輯の方では來月は記念號を出します、その記念號の內に三つの座談會、即ち先づ第一のは今から滿十五年以前に丁度協會の創立當時に色々と御盡力下さいました御方による集りで、その席上で創立當時の回顧談を色々伺ひました、本月末には建築協會の將來をどう云ふ風にするか、どう云ふ方向に行くべきであるかを考へる座談會を催し度いと思つて居ります、丁度本夕が其第二回の眞中の座談會でありまして、建築協會が約十五年間なしました事業を省みつゝその間の建築界の推移を振顧つてみて頂きたいと思ひまして本日お忙しい所を御面倒を煩しました、先づこの協會が創立當時の建築界の一般の狀勢から一つお初めを願ひ度いと思ひます。

創立當時の建築界

片岡—創立當時の東西の建築界と云ふ問題に就いて一寸その當時の事を追想して私の記憶を辿つて參ります、丁度この協會の出來る少し以前からヨーロツパ大戰が初まつた爲に皆な非常に困るだらうと初めは豫想されて居つたのが全然裏切られて、產業界一般經濟界が非常に膨脹した、それに從つて建築界も同時に過去十年來の狀勢より一擧に急角度に向上せしめた時代であつた、その當時は餘り氣が付かなかつたが、今日から見ると明らかにさう云ふ時期であつたことが知れる。此間も思出の話に色々の人からお話があつた如く、日本の都市計畫が、經濟界のその膨脹時に新日本の新興機運として都市計畫運動が起つたのも矢張りそれに大いなる誘引力があつたと思ふ、であるから建築技術家の數がとても之

では足りないからと云ふので、各方面に建築の學科が置かれた、各地方の工業學校に至るまで建築の科が置かれたのもその時代だ。大學、高等工業、地方工業學校を通じて建築關係の人を養はなければならぬと云ふ事が非常に認められた、それで建築家ならざれば人に非らずと云ふ程でもないが、そんなやうな氣分さへ見えた　建築界が明治十年頃から段々芽を出したのが、その時に至つて百華撩亂と云ふ狀態になつた。或る請負人に私は斯う云ふ事を云つた事がある、自分の店で斯様にどんどん大きな工事を請負ふと自分は最後には店を閉鎖しなければならぬ、どうしたら宜しいかと云ふ質問を受けた時に私はこう云ふ事を言つた事を記憶してゐる、それは建築工事を請負ふ人は單に自分の懐ろの都合のみで工事を請負つてゐる事を許さぬ、君等は新興日本の建築に對應し得る内容を有する必要がある、それには少くとも自分の店を三倍或は五倍にせねばどうにもならぬぢやないかと云つた、その時にはその人は驚いて居つたけれども結局は皆その機運に乘じて自分の店のスケールを三倍五倍にして今日の大をなすに至つたのだ　又東京大阪の兩市は無論のこと其他それに續いた大都市も皆この機運に乘じて建築物が三倍五倍と設計された、之がまあその當時の狀勢である。

波江—如何でしやう、此機會に協會で大正年間に於ける大阪の建築年表を慥らへたら、

高橋—今調べてゐる最中です、實は協會の十五年記念事業の中の出版部で大正、昭和年間の大建築物の圖集を發行する案が出て居りますので、その原案としまして先づ大正、昭和年間に出來ました目ぼしい建物の年表を作りかけて居ります、併し却々に面倒なのと資料が集まらないので困つて居りますが兎に角或る程度まで進行すれば雜誌にでも載せて戴いて皆さんの御援助を御願ひして完全に近い年表を造り度いと思つて居ります。

波江—大阪でも公會堂が出來た時分、戰爭が勃發した時にあそこの歐洲に注文した鐵骨が、行衛不明になつたと云ふやうな事があつた。

片岡—鐵骨の一部を積んだ船が大連に逃げ込んだ。それはこう云ふ思出になる、大正三年四年その時分には公會堂に使ふ鐵骨が日本では未だ出來ない、鐵筋はドイツから來たのだつたが、鐵骨の材料は皆英國から取つた、それは僅かに一千噸の鐵であつたが製鐵所で出來ない、頼めば出來ぬ事もないが長くかゝつて出來ない事でもあると、事面倒だから一纏めにして輸入した、その船の航海中に戰爭が初まつたのでその船がどうなるか判らぬと云ふ、ドイツが膠州灣に居りませう、それで危いと云ふので臺灣に逃げ込んだ、騒いで居つたが兎に角無事に來た。鐵骨で千噸も纏まると日本では一寸出來ないと云ふやうな哀れな狀態であつたと云ふ事が解る、大正四年の値段は製鐵所に注文しても八十五圓、それからイギリスから日本に來てもそれ位、だから同じ値であつて製鐵所に注文したのは却々いつ出來るか判らんのと、それからどうしても悪いのがあつたりしたものだ　その時分の工賃は大工の手間が一圓、人夫は五六十錢、平人夫は五十錢から三十錢、鳶人足七十錢位であつたと思ふ。

波江—その時分に十萬圓臺の仕事と云へば一流の仕事でしたね。

小川—住友銀行の東京支店をやる時に鐵骨を使つたが、その時分には一本一本奇麗に磨いて入れたものですが、それがその儘最近混凝土に入れるやうになつたのは何年頃からでせう。

片岡—鐵骨を混凝土で捲くと云ふ事は餘程新らしい事で、私の記憶によると日本興業銀行がそれをやつた。

建築施行法の改革

波江—大正八年頃からでせう、それから工事施工をやるに就いて大林さんや清水組やがその時分に米國へ人を送つて見學させて東京の丸の内ビルで吊り足場を作つてやる事、それからホロー・ブリツクを盛んに積む事、今迄日本でやらない事をやつてみせた、その刺戟がかなり多かつたやうに見える、當時の狀況から云ふと——

古塚—東宮御所の鐵骨は包みませぬか。

片岡—東宮御所の鐵骨建築は安全の上にも安全と云ふので、私は僅かに二回工事中に行つて見たんですが、鐵骨と云ふものは相當計算した立派なものでせうが、煉瓦の壁の中に魚の骨があるやうに、非常に堅い煉瓦が鐵骨の周圍を包んで、非常に丁寧に積んでモルタルを流し込みました、恐らく混凝土で包んだ位の煉瓦で實に頑丈なものだなあと思つて見て居つた、鐵骨なしでも完全な立派な、非常に完全な煉瓦を積みその中に更に鐵骨丈けでも保つやうな鐵骨が埋つたことを見に行つて覺えてゐる。建築界の施工上の問題だが、建築界の非常に大きな問題がその時分に解決されたと私は思ふ、それはその頃までは建築と云ふものは煉瓦を積むにも、モルタルを練るにも又塗るにも、とても深切を極めて恐らく世界の何處にもないやうな丁寧な建築をやつて來た、一例を云へば窓と窓との間に煉瓦を積むのにその寸法を三寸六分に割るといくつある、さうすると二寸餘ると云ふことになるとすると二寸を全體に割つて二厘になる、さうすると煉瓦を三寸四分に一々製圖紙を切るやうに切つて、さうして目地二分五厘なら二分五厘で、金の物指、煉瓦積みゲージと云ふのを監督が持つてゐる、それを一々當てゝ見ると云ふやうなやり方をしたもので、又糸を引いてすかして見てさうして今度はゲージに箱めた、きちつとゆかんのは直さしたと云ふやうな事で煉瓦張りには無論、建築の内外に亘つてそれをやつたものだ。さう云ふ事が建築監督の大方針であつたのを吾々が破つた。そんな神經過敏な仕事をすることは何も結果に於いて優れたとにはなら、徒らに工費が高くなり、メーカーを泣かすのみである。

何等建築の本質でないと云ふことを建築協會なぞで先づ唱へた、當時宗君なんかその舊派の急先鋒で、とても嚴重な事をして居つた、その宗君を前に置いてはよくこんな事は愚ぢやないかと云つて居つたもんだ、それでも或る部分の人は矢張やつては居たが、段々その頃からお互にさう云ふ馬鹿氣た事はやらぬと云ふ空氣が非常に濃厚になつた譯である、そ

れが大正七八年頃で終りだつたと思ふ。

須川—けれども現在から見るとその時代にやつた家は職人の技術から見ればその時代の方がよう出來て居つた。

片岡—その傾向を最も極端に裏書きしたのが帝國ホテルの完成である、羽織の裏表を着てゐるやうなもので、とてもひどい事をやつて、人間がやるんだから謬りのあるのは當然曲るのは當り前と云ふ主張であつた、又石等も職人の名前がかいてあるのを之は面白いからこの儘使はふと云ふので、八公と墨で書いたのをそのまゝ使つた、又穴があいてゐると其穴が面白いと云ふのでそのまゝ使つた、階段の踏みづらに穴があいてゐると支配人から抗議を申込んで來た、さう云はれるとそれも困ると云ふので、穴をうめたり、それ程極端にやつた、極端に精密な工事をやるのを、段々に擊退されてゐる時に極端に荒つぽい者がそこに現はれたのでそこで之でもいゝぢやないかと云ふ考へ方が一層擴がつた。

波江—大正八年に滿洲から安井さんが歸られての話にどうも街の中を歩いてもまるで廊下を歩いてゐる氣がすると云はれた。

安井—そんな事を申しましたかね、忘れましたがそれは家の建築そのものよりも道路の方が非常に關係が多かつたんぢやあないかと思ふ、私は大正二年三年と云ふ當時は大連に居りまして大正八年に初めて片岡先生の御厄介になつて戻つて來たんですが、その當時は未だ日本よりは大連の方が建築は十年位進歩して居りました、確かに歸つて來まして、その邊で牛が石のローラーをひつぱつて居るのを見ました、東京の丸の内でもそれをやつて居つた、その當時大連では既にスチーム・ローラーが御座いました、今阪神國道で使つて居る掃除ブラツシ等もありました。

初期の鐵筋混凝土造

片岡—京阪地方で一番古い鐵筋混凝土の建物は神戸の三菱倉庫です、之は高橋元吉と云ふ人が外國の書物を見て、苦しんでやつたのが神戸の三菱倉庫です、古い倉庫で大阪の建築としてやつたのは私の記憶によると安田倉庫だ。

波江—四十三年の七月頃から初めて大正二年までかゝつた。

武田—京都でやつたのは明治三十八年に商品陳列館、あれを鐵筋でやつた。

片岡—アメリカのミユージアム・システムでは、東京で海軍大學のがそれで、倉庫位な小さなものだが大倉組の專賣であつた、それを見に行つた、鐵筋混凝土の柱をうち込んで居つたが、其時に渡邊譲さんが海軍技監でね、鐵筋の太さを見せろと言ふ、向ふではどうしてもみせない、お前の方でのせる荷重さへいへばそれに耐へる家を作つてやるから、そんな事は言はぬでいゝぢやないかと、どうしても圖面を見せん、仕樣がないと云ふので委した、圖面には鐵筋の所に細い線が書いてあるけれ共、どう云ふ太さの鐵筋であるか不安で仕樣がなかつたそうだ、私は唯見學に行つたのだが、圖面は歸つてから見て見ると太

さも判る、同時に施工方法も判るとアメリカのビツクの書いて居る、又メルシユの書いて居るのと大體同じやうなものだつた所が後で斯う云ふ事をきいた、渡邊さんは俺の方のロードの三倍かけなければならぬと云つて、例へば平方尺一噸半のものなら四噸半をのせて見る、さうすると向ふは怪しからぬ、四噸半もかゝる機械がないのになんの爲めにかけて見るかと云ふので、請負人との間に議論が盡きぬ、どうなつたか知らぬが、厄介な問題を起して弱つて居たと云ふ事を聞いた。

波江—初め安田倉庫で一月もたつてから假框を外づさなければならない、所が、人夫が恐がつて外づし得なかつた、構はないから外づせと云ふので外づした、外づして見ると別に危險もなくよくもつて居るので、今度は大膽になつてその次の時には自分から安心して一月にならぬ裡に外づさして呉れと云つて弱つた位だ。

須川—さう云ふ事がありましたな、私共店に居つた時に鐵筋のビームはあぶないと云ふので矢張り同じやうに大工が入らない、誰も外づしに入らない、上からどろつと崩れたら危ないと云ふので先づ一番小さい三坪位の部屋から最初外づして見た、所が保つてゐる、大丈夫だと云ふのでそれから大きな所を外づした、又その時分の假框の板は極めて厚く、又丁寧にけづつてあつたから容易に外づれるものではなかつた、綺麗な混凝土が出來たから傷をつけてゆかなければ塗れぬやうなものを造らへたものです。

古宇田—もつと可笑しいと思ふのは三十七八年の頃でしたか、佐野君が未だ學位を持たない時分、大學からは佐野君が行き、建築の人は誰でしたか一寸思ひ出せないが、私も仲間に入つて日立鑛山に鐵筋混凝土の煙突が出來たと云ふので、建築の連中も行つたらどうかと云ふので、渡邊君などと見に行つて、いやはや鐵筋混凝土の煙突は面白いものだなアと云ふので、煙突のために鑛山まで行つた事がありますがね、初めて鐵筋混凝土の構造と云ふものを見て、佐野君あたりも大いに感心してさうして歸つた事がありますよ、今から思へば實に隔世の感があります。

武田—横濱の吉田橋が出來たあれを大いに人に見せた事がある、確かあの邊ぢや眞先きだつたね。

波江—進行中に龜裂が出來て困つたと云ふ事です初めでしたから。

武田—僕等がやつた時分は三十八年だつたかね、京都商品陳列所で、あれで家が出來ますかと云ふやうなことで、土木の方面では混凝土を使ふけれども建築の方では稀らしかつたので、職工なども見習ひによこすからと云つて、只で使つた事があります。

須川—大正二年位に藤田の本家の裏に倉庫がある、それが吾々の初めです。

小川—藤田組で鐵筋混凝土をやつた時に見學に行きました、貴方が丁度現場で大いに說明されたものでした、鐵筋混凝土と云ふものはこう云ふ風に綺麗に磨いた鐵筋が出るでしやうと云はれた、又住友銀行の東京支店の建築は大正二年頃からやりましたが、非常にその間に色々の構造が入りまして初めて煉瓦と鐵骨で床を張りましたが四階迄は煉瓦を積み

五階は鐵骨と混凝土でやりました、その時武田先生がお出でになつて鐵骨を見てどうも橋のやうな建築だなと云はれた事を覺えて居ます。

須川—それから三菱ですね、一號か二號か古いやつ、あれが關東の震災に一つも傷が出なかつたと云ふ評判ですね。

片岡—煉瓦目地にクラツパーを入れた、つまり辰野博士も熱心であり普通の煉瓦をつめて鐵骨でない、横濱正金にしても辰野博士のやつた建築は皆な如何に地震を恐れて居つたかと云ふ事が判る、そこへ鐵筋混凝土が來たから、是だと云ふので使ひ初めた、明治四十年から四十一、二年に台灣に行つてみた、さうするとこの台灣が最も熱心な鐵筋混凝土のアツプライヤア、そこで土木のその時分は新進氣鋭の連中が行つて居つた、さうして總てのものを鐵筋混凝土で試みた、それは恐らく一番早いのは台灣ではないかも知らぬが、その初期に鐵筋混凝土を土木建築に應用した數はあそこが一番多いでせう。

古宇田—井手君の話では鐵筋混凝土を使つたのは内地にも早いのがあるさうだ。

片岡—けれ共明治四十年前後から非常にどつさり多量に初めたのは台灣だ、内地では恐々やつて本當にやり初めたのは大正七年以後です、それ迄は非常に恐がつたものだ。

安井—私は明治四十年からその翌年頃はむちやくちやに盛んにやつたものです、大連の大和ホテルなどのね。

片岡—後藤さんがまだ台灣に居られるころあの台灣の總督府の懸賞を發表した、私は懇意ではなかつたが、人の紹介で汽車で會つた時丁度その懸賞が發表された時で非常にいい事をやりましたな、吾々建築家は本當に喜んで居ると云ふ話をしたら、一つやつてみたよと云はれて居つた、その時の三萬圓と云ふ懸賞は明治四十年ですよ、今の十萬圓より以上のものです、一等に十萬圓やると云へば今でも皆驚く、その時の三萬圓と云へば大變なもので、若しこの一等賞に當つたら十年遊んで食へるなあと云ふて居つた。

波江—所が一等は作らなかつたですね。

片岡—そうだその一等がなかつたので詐欺みたやうなものだ、その時の審査官が一等の價値がなければいかん、金は金だ、銀を持つて來て金だつと云つても駄目だと云ふ様な理窟で遂に一等を作らなかつた、僕等は一萬圓を取りそこなつたよ。

波江—その時先生は二等に當つたんでせう。

片岡—けれ共五千圓しか貰れなかつた。

商業建築の勃興

波江—大正八九年頃から世界大戰の影響でせうが、實業界の人がアメリカの方に頻りに行かれた、その時分にアメリカの商業建築が日本に紹介される機運になつた、その當時商業界のはまあ兎に角、オフイス・ビルを見て貰れと云ふ注文で私等も其で出掛けました、大正八九年から十年にかけて盛んなビル時代になつた譯です。

安井—ストリート・ライトは大阪毎日新聞が使つたのが大阪では初めだらうと思ひます、島田ガラスに注文して特別にそれを造らした。

波江—梅田新道の百三十銀行支店を作る時でした、その時分に新聞記者がやつてきて、かう云ふ建物を造つたら今に壊す時に弱りやせぬか、壊す時代があるとは思へんぢやないか、いや壊す時代が來るだらうと云つて居つたが、都市計畫の爲めに壊す時が來ましたがなんでもなかつた、そんなに初めに思つた程大した事はなかつたんだ。

片岡—アメリカには非常に大きな例がある、實物を見たんぢやないが、雜誌でその時分みて居つたが、鐵筋混凝土の八階の家が完成して暫くするとそれをどうしても二十階にする必要がある、いくら懸るかと云ふ事を色々の人に聞いた所が確か八萬弗か、かかるでせうと云ふので、それにやらしたがそれは非常に樂で請負人が半分以上も儲けたさうです、その仕事は梁の際をコツコツ兩方から壊していつてさうして瓦斯でもつて鐵筋を燒き切つてクレエンでさげて車につむ又柱の上と下と切つてクレエンでもつていつた、存外樂にいつたと云ふ事を覺えてゐる、日本でもそれと同じで存外樂だ。

波江—もとの阪急ビルもか非常に樂に壊れた、時世の力でせうが八年目に壊して新築された。梅田新道の百三十銀行が約九年目に壊され、大抵その時分に出來た建物は十年たたぬ裡には、時世後れとなる現在では朝日新聞社どもか五年目五年目に增築をして居られるその計畫を見ると、その增築と前の建物とは全然違ふ、時代が違ふ、だから多くの百年後を考へた建物でも時代の進歩に伴つてそこ迄ゆかぬ裡に壊さなければならぬと云ふ時代が來るやうに思ふ、之は日本の進歩が早かつたためかも知れない。

片岡—大正七八年頃その前からでもありますけれどもアメリカの當時の建築と云ふものを素人も見、玄人も見、都市の建築は宜しくアメリカの都市建築のやうなものを學ぶことは採算上非常に有利で、又實質上便利だと云ふ考へが相當行き渡つて、それで私も矢張りその機運に養はれてさう云ふことで進んでそれによつて出來たものが大正十年、十一年、十二年、地震前に出來た、地震後にもやつたがその例は今の山口銀行、野村銀行、三品取引所、私の關係した神戸のその當時の川崎銀行今の十五銀行神戸支店、私がやつたんではないが京大の日比君がやつた明海ビル、それから野村の北濱ビル、是が皆アメリカの都市建築の影響に依つて出來たものです、今日までそれがいいと云ふので續けられ、東京、大阪でもどんどんやつてゐる、今安井君のやつてゐられる瓦斯會社、最近の朝日ビルでもさうだが、東京では東京海上を初め丸ビル、郵船、日本石油、日本興業銀行、是が皆その流れに添ふて出來たもので、特に東京海上があゝ云ふ種類のパイオニアで、其後も引續きずつとやつて居る譯で、それが日本の產業振興の時代から現はれて來だんで、大體を云へば大正七年頃からぢやないかと思はれる。

新　樣　式　の　擡　頭

波江—大正末から昭和にかけて若い建築家が輩出して、さうしてドイツ系統の型式をもつた家が東京や大阪に現はれ、丁度世界の各様式が日本に集つた感があつた、最も著るしく建築界を刺戟したのは東京では青山の記念繪畫館、大阪では寶塚ホテル、大阪府廳舍、朝日新聞社、白木屋、尤も此間には帝國ホテルがありそれから東京の博覽會があります。

片岡—大正四五年ですね、あれが建築界のスタイルの表現をして居る、當時の西洋のものを學んでゐた。

波江—京都でも武田博士が學生クラブで大變新しいものをやられましたね、毎日新聞の分館なども……

武田—あれは新しい、昭和より一寸前でしたか。

古塚—日本の毒々しい赤い煉瓦と、白い花崗岩をうまく配置されたあの辰野先生の獨特のものは大正中期まで全盛で、あれでなければ建築にあらずといつた風でした。

片岡—あれは全く辰野さんの流れを汲んだんだけれ共、あれはなんと云つても司法省、裁判所に流れを發するものである、あの建築の堂々たるものがある、霞ケ關に海軍省と三つ出來たでせう、ステーションホテルと。

武田—辰野さんは、ノルマンショウの流れについて行つて居ると云ふことの說を持つて居られた。

建　築　材　料　の　變　遷

武田—マチリヤルの研究が出來たのも矢張りその頃だつた、それまでは材料がなかつただから赤い煉瓦と白い石ばかり、所が僕等が二回目に洋行した時に、あちらには黃色い煉瓦や青い煉瓦や色々ある、日本も將來どうしてもやらなければならぬ、破片なんぞを取つて來て、特に專門の人にやつたりした事がある、それからテラコツタをやつたのも僕等が最初だ、テラコツタを使ひ始めたのは明治三十七八年からで、色々なものが出來たんですが、あれではいかぬ色を附けなければならぬと云ふので可成苦しんで、京都の陶器試驗所で試驗をして貰つた、その結果どこの家でも土を燒いて段々色が出來て來た、それから以後に段々赤い煉瓦がなくなつて、建築の色が多種類になつた、それは確かだと思ふ。

古塚—兎に角白赤は外國には少いですね。

武田—イギリスはさうですよ、白赤です。

片岡—併しそれは辰野さんが英國に留學して居つた當時は多かつたらうが、今ではさう云ふものはあるにはあるけれども。

武田—フエシング・タイルが出來たのは橫河さんが東京の三井本店をやる時に初められた、辰野さんが善いと言ふので妻木さんがやつた。

片岡—明治二十四年に美濃の地震には、煉瓦の家がひどく崩壞したでせう、併乍ら西洋建築はどうしても煉瓦でなければならない、地震の時に壞れぬやうにするにはどうしたら

いゝかと云ふ事に建築家は隨分苦心をした、煉瓦、モルタル、石を如何に使つたらよいかと考へたが、矢張赤煉瓦を使ふより外に仕方がない、西洋にも相當その例がある、オランダのやうな石の材料のない所は皆な赤煉瓦である、日本も材料がないから、サンドストンや煉瓦の變つた色があればいゝけれどもないから止むを得ず材料の關係で赤煉瓦と石を使つた、その時代が相當長く續いた、あれ丈け澤山作つたのは日本丈けだらう

古宇田—私が學生の時、片岡さんが日本銀行をやつて居る時に、辰野さんの話を聞いた、彼處の銀行で鐵骨の鐵のビームを出すのが自分獨特のものでコンストラクショナル・ツルースだ、包んぢやいかんのぢやと云はれて成程さうか知らんと思つて居つた、併し今考へて見ればあれが火でも這入ればどうか知らん、その時も一寸思つた事もありますがね、成程さうか知らんと思つて感心した、

武田—それは僕も聞いたよ。

片岡—隨分無手勝流をやつたものだ……僕自身で善い事を知つて居つたと思つてゐるのはテラカツタの使ひ方が變つたことだ、地震前に使つたのは皆な西洋のを直譯したものだ所がそれは地震の時に落ちて了つた、地震後は全然あんなものをせずに薄くして壁にモルタルでピツタリとくつ附けて了つた、所々金物で引張るけれ共モルタルの方に重に力をかけた、モルタルでやつて居るのは恐らく僕は西洋ではやらん事だと思ふ、針金もいゝがモルタルの力でやつた方が確かだ。

波江—大正十年頃大阪窯業の谷口君がアメリカを見に行つて、煉瓦造の家が段々と少なくなる。煉瓦界から言へば大問題で、セメントの威力が盛なものだと云ふので大阪窯業がセメントを初めた、その當時は煉瓦は將來どうすべきか、と云ふやうなことが問題であつたが、段々調べてみるとコンモン・ブリツクならいゝが、フエイシング・ブリツクでも燒きの程度が日本とアメリカは全然違ふ、向ふは石炭が安いから本當の燒けた煉瓦を慥へるが日本のは燒き方の程度がまるで段違ひだ、生燒けだ、それは石炭が高い關係だ、それでどうしても次の時代はホロー・ブロツクやテラカツター、タイル、さう云ふやうなものを研究したらよいと考へられたもので同時にセメントを初めたと云ふやうな次第であつた、併し設備の方から云つたら、矢張り大正八、九、十年にかけて、便所の陶器、洗面器、その他ストーブなどあの時分にアメリカで非常に調べて來て、名古屋の陶器會社あたりが向ふの窯業を調べて、さうして名古屋附近でもアメリカ流の色々の陶器が出來だした。

片岡—フエイシング・ブロツクを使ひ出したのは花崗岩に見えるやうなのが出來てからで恐らく大正の初めでせう。

武田—岡山縣の三石でやらしたところが非常に高くついて石と餘り違はないです、それで殆ど了ひには使はなかつた。

片岡—伊部の奥に和氣と云ふ所がある、三石より先きだ、伊部は昔、備前燒きをやつた煉瓦の小口形の花崗石らしく見えるのを最も早く使つたのは臺灣の三井銀行、東宮御所の

カーペツト、皆なさうだ。

武田—あの時分の使ひ方は燒いてすつかり融いたものです、小口から何からすつかり同じ大きさに切つて燒いたものです、だから非常に高くついた、とてもいけないと云ふので止めた。

片岡—三井銀行、三井物産の建築をやつた時に鈴木君が、裏の方にそれをどうして使つたかと云ふと、やつぱり花崗石でないとどうもいゝ建築のやうに見えない、三井では兎に角石だと云ふので裏の方まで石でやつて伊部で燒かして相當やつてゐるのを張付けた裏だから氣が附かない、隨分僕等も使つた、あれは毎月何十萬と隨分澤山作らしたものだから、少し作るよりも非常に安く出來る、一時は伊部に僕等も數回行つた事があるが、どつさり何十萬と積んで居つた、所がこんなものは仕樣がない、何とか本當の仕事は出來ぬかと云ふので、段々やつて常滑で研究した。

武田—常滑でやつたのは僕が初めです、藤田吉之助君が財産を投じて終つた、その後を伊奈が引き受けた。

片岡—人造石等もよく進歩したものだ、初め神戸に出來て隨分有名だつた、行つて見ると、花崗石ではない、皆な花崗石の眞似で、今でもありませうが龜井と云ふ左官がやつたのだと云ふのを聞いて、それで呼んで來てやらしてみるとどうしても二間離れたら花崗石か塗か判らぬものをやる、龜井と云ふ者は技能がある、安くて立派なものが出來ると云ふので、餘り使ひ過ぎた、大正七八年には龜井が相當腕を知られて段々職工を養成したけれども養成し切れぬのだ、餘り注文が一遍に來るんで、滑稽だつたのは、愈々工期が迫つてフエーシングを急いで呉れといふと宜しう御座います、職工を何十人でも易々出して呉れた、考へて見ると他の現場のを回してくる、その方は大變迷惑するといふ樣な事であつたそれ程一時龜井の人造磨き出しと云ふものが、關西方面では盛に使はれた、それから之は間違つた觀察かも知らぬが、東京でも花崗石の人造を非常に立派にやつてゐるが、龜井の程うまくゆかなかつた、全く龜井に技能があつたんです、あの時分のだんだん弟子が相當東京に入つてゐる、隨分時がたつて十二三年も經てからそれを見ても立派なものだつた。

武田—僕が明治四十年にヨーロツパを廻る時にドイツに行くと、殆ど皆人造石と石と同じ物だ、見本を携へて貰つて日本に持つて歸つて東京で中條君などに計つて、西洋ぢやこう云ふ風にやつてゐる、こいつを試みたらどうだらうか、全く石に違はんと云ふので色色とやつて見たものです、さうして神戸の兼松記念館をやつてゐる時に、コーナー・ストンの所を石屋が叩いて呉れたけれども、どうもうまく行かぬので叱りながらやつたが其後二三年經つてから誰だかそれをやり出した、さうして特許を取つて居りますね。

片岡—君は取つて居らんのかな。

武田—とらなかつた。外の石屋がやり出した所がそれを壓へて了つた、僕が初めの時に特許を出して置けば問題はなかつたんだ、今は繫爭になつて居りますが。

波江—今度の震災の影響で軟石を使ふやうになつたのは花崗石が火に弱い事が實證され

て盛に軟石を使ひ出した。

武田—あれは辰野さんがなくなつてからです、生前はそんなものが使へるものかと頭からやられた、僕等は長く憤慨して居つたけれども。

波江—例へば姫路の先の龍山石など今に軟石を使ふ時期が來るんだ來るんだと云つてゐたら、住友さんで錻石や龍山を使ひ出してからあの種類のものが建築界を風靡した。

武田—辰野さんの亡くなつた影響とライトの影響だ。

波江—その後だんだん軟石を檢べてみると、金澤の青石、德島の竈に使ふ石、讃州の紫雲石、長崎の德龍石——

古塚—鳥取の復古石、後藤石ね長崎方面から來る——

武田—震災の影響を受けてゐる、安くやらねばならぬので、色々原因はあるけれども。

波江—軟かく見えて割に固い、立山が一番いゝでせう、それに大きさも揃ふ、又大理石のことですが矢橋さんの息子さんが非常に頭がいゝ人で何とかして大量の大理石を安く日本に輸入する方法はないかと、アメリカに行つて調べた結果、ニューヨークからパナマ運河を通つて歸る空船に、ベルマウントの大理石の荒石を底積みにすると非常に安くなる、印度洋を越へた船はアントワープから歸つて來る、底積みにイタリー産の大理石を積むと非常に安く入つて來る、將來日本で大量に大理石が使はれる場合にはその用意をしなければならぬと、その研究をして來た、それからその後工場を大きくして、今はイタリーの大きなものを入れてゆくやうになつた、その當時支那にも行つて、支那の大理石をすつかり調べた、さうすると南京から北京、山東省あたりの清朝、明朝の紀念物は皆大理石である、所がその生產地がどこか判らぬ、非常に苦心してゐますが、今ではないさうですね、像とかなんとか皆な大理石だが、どこから取つて來たのか調べて居るけれども、どこのを取つたか判らない、滿洲のが今日、いくらか出て來るけれども、日本の需要に應ぜられさうもなさゝうだ、赤坂大理石工場が非常に規模が大きくなつた時に亡くなつた、その時やつて居られたのは多量製產で工賃を安くするためには巾木とか額緣とか寸法を一定して閑なときどんどんそれを造つておく方法をとりたい等いつて實際やつてゐた、それにはどうしても建築家の方もよく考へて貰ひたいといつてゐた。

片岡—それは豈大理石のみならんや、何でも標準化すべきだ。

古宇田—神戸の商工會議所ですよ、實際その既成品を使用した、下のモザイクまでもやつた、だから非常に大理石を安く使はれた。

設　備　の　進　歩

波江—話は變りますが、水道衛生の設備等も最近十五年間には隨分進歩しました、故人になつた須賀君は殆んど全力を注いでやつたものです、時には人に云へない苦心もしたものです、それでやつと日本も世界並に一人前となつた。

高橋—色々と有難う御座いました、之で座談會の速記は止めますが、後はどうぞ御自由にお話願ひます、各方面より見て種々の御話を拜聽いたしまして有難う御座いました。

協會の將來を語る座談會

池田　實氏　今林彦太郎氏　落藤　藤吉氏　大倉　三郎氏
片岡　安氏　川村種三郎氏　新名　種夫氏　篠原　太郎氏
武田　五一氏　瀧澤　眞弓氏　竹腰　健造氏　高橋　榮治氏
中西　六郎氏　中澤誠一郎氏　村野　藤吾氏　安井　武雄氏
（出席者五十音順）　鷹取　陽

われわれの先輩が一致團結して本會を現在の有力なる大團體となしたことは誠に感激に禁へない、この先輩の努力の跡を顧るときわれわれはこの偉大なる業績を更に光輝あらしめると共に一面には如何に現代並に將來に對應すべきか、將來の協會は如何に動向すべきか等に就いて一層その責任の重大なるを覺ゆるのであります、九月二十六日天滿橋野田屋に於て「協會の將來を語る座談會」を催し上記のごとき御出席者を得まして各々その忌憚なき感懷を伺ふことが出來ましたのは協會の將來にとつてよき炬火とならう、なほ、冨土岡重一、藤井厚二、本間乙彦三氏は所要のため缺席であつた。

高橋—段々と座談會を催して參りまして、本夕の「建築協會の將來を語る」で打止めと致すことにしたいと思つて居ります、腹藏なき御話を拜聽したいと存じます。

先づ當協會創立の動機と其後只今までの經過の大體を片岡會長から御說明願ふことにいたします。

先　輩　努　力　の　跡

片岡—創立の動機、その間の事情と十五年間の經過を簡單に申上げますが之は前の座談會で既に詳しく話しがあつたから速記にはとらずにおきます……（とその說明があつた）…その熱心さは驚くべきものである、この寄合世帶であれ丈けの事を思ひ切つてやつたのは如何にその當時の會員が向ふみずであつて熱があつたかと云ふ事の證據で、その間協會の最も誇りとするところは、每月一回例會をやつて、そこで會員が熱心なる意見の報告をする、又委員會の仕事なども考へてみると皆な長き生命を持つた仕事であり、直ぐ線香花火のやうになくならない仕事を扱つてゐるから、華々しく行かぬのは當然であります、兎に角直ぐ効果が見えぬことを長い間、今日までも尙やつてゐる、之は他では到底續かないことである、他では當然倒れて了ふのが倒れない、本當の熱は以上に加はらなくとも餘熱が續いてゐるのは本會の誇りとするところだと思ひます、又ともすると會を自分の足場に利用したり、自分の便宜を考へたり、あつちを分捕り、こつちを分け取りするのが、他の團體の常であるが本會はそれがない、兎に角、社會に盡さうと云ふ大きな目的丈けはずつと維持して居る、然し時勢の變遷に充分適應するやうに或る程度方針を變へるとか、或は委

員會を改廢をするとか、もつと狙ひ所を變へるとか、種々の事が必要と思ひますけれども、建築協會が社會に對する責任を、使命をどうして盡さうと云ふ全體の空氣は一定不變であつた、こゝに唯時勢にどう云ふ風に處するかと云ふ問題が殘つてゐるのみである。

協　會　の　意　義

高橋—協會の目的とか、協會の意義に就いて。

片岡—建築界の向上發展を圖り、社會的使命を果さうといふ目的、之丈けは變へられない、何とかして會員が儲けやうとか、商賣をしやうといふのではない。一體よく入會を勸誘するときによく云はれることがある、協會へ入つたらどんな利益がある、雜誌を貰ふ外にどんな得があるかなど、しかし、これは餘り目前のみの考へである、雜誌も配布する、見學もする、だが大なる目的は他にある、即ち建築家が集まつて社會を教育する、社會の爲めに盡すことは建築家の社會に對する義務でありその使命である。

現　代　の　建　築　界

高橋—現代の建築界の樣子に話頭を轉じて戴きませう。

片岡—大分前のことだが議院建築を懸賞にする可否と云ふ事で非常に議論をやつた事がある、その時日本の建築の將來の樣式について隨分激論が交されたのを記憶する。西洋建築の模倣を全然不可なり、と云ふ議論と、それから西洋建築を取入れる以上は西洋のスタイルは捨てることは出來ぬが、さればと云つて日本に立派なスタイルがあるから、と云ふ折衷論が一方にあつてこの折衷論と純國粹式が議論を闘はされた幼稚な時代がある、それ相當に建築界を啓發したかと云ふと、どつちも議論し疲れて何も得ずに議論したつて仕樣がない、實際問題だと云ふので物別れになつた。

武田—長野さんの言ふのはどんな式だつて日本人がやれば日本式だと云ふ、いくらギリシア風のものを作つてみても日本人がやれば日本式だと云ふんだ。

高橋—去年當り再び日本趣味、東洋趣味の問題が大分定義されました。

片岡—京都で美術館の懸賞を決める時に、規定に入れる東洋趣味を基調とせる樣式、と云ふ事で種々議論が起こつた。その時は伊東、武田、佐藤の三博士に岡田君が居られた。その席で濱田耕作博士は一體君等の云ふ東洋趣味を基調とせると云ふ事はどう云ふ事かとの質問で隨分手嚴しく反撥されたものだ、相手が建築に玄人でなくて而も審美學者だからネ、仲々こちらのいふ說明では納得しない、東洋趣味を基調とせると云ふ事はどう云ふ事か、さう云ふものがあるなら見せて呉れ、さう云ふ君等は議論を言つても設計者はどう云ふ風に解釋するか之は無理ぢやないか、との意見だつた。

武田—濱田君は日本式が嫌ひなんだらう、個人的に西洋式が好きなんだ、であゝ云ふ事を云つたのかとも思ふが、伊東博士の考へた東洋式を基調と云ふ言葉は仲々うまい表現だ

と思ふ、然しその懸賞の結果は色々と出て來たがあれは所謂東洋趣味を基調として居るものとは思はれない、僕は東洋の氣持ちのあるもので、氣分さえ出て來ればいゝと云ふ心算だつた。

竹腰—云ふべくして仲々難しい。天才の出現を待つべき問題だらうと思ひます。

片岡—文學博士の大塚安さんは穩健な審美學者で折々建築の批評をした、今から二十年程も前でせう、あの人の論文には本當に敬服して居つたが、こういふ意味だつた、要するに日本で西洋を眞似るのは當然だ、又無理に日本の風を織込でも却々物にならない、時を要する、本當の今の東洋趣味を基調とせる樣な樣式、それは天才を待つより外仕方がない、凡人ぢやいくらやつたつて出來ない、時の力で、或るものが出來上るかも知れない、その例に東京の勸業銀行、元のあれは素人でも餘程印象に殘つたもので、之は非常に東洋趣味を表してゐる、然し木造である、斯う云ふものが石造に模倣出來ると思へぬから石造でやるやうな天才の出現を吾々は望むと云ふ事が書いてあつた。

竹腰—建築界なり、社會なりの人が今建築界に望むでゐることに非常に大きな矛盾がある、それはスタイルにレボリユーションが起ると云ふ期待を持つてゐる、之は殆ど望み得べからざる事である、建築のスタイルは漸進的にゆかなければならぬ、假りにレボリユーションが出來る場合は非常な天才が出た場合である、二千年三千年の歷史を顧みてもよく理解出來る、それは不圖して出來たのではない、一體建築は非常に複雜なもので而も種々のものを綜合したものであるし、又一方社會の實狀に適用して行かなければならぬものであるから繪畫、彫刻と云ふものよりも更に一層エボリユーションでゆかなければならぬものである。

片岡—それは善い議論で誰でも贊成するが、然ればその議論の分岐點を一つ申上げ度い此頃ドイツが最も濃厚であるが、從來のスタイルを全然破つた、新らしい型式の家を作つて、之が現代の建築なりと云つて堂々とやつて居るのは之はレボリユーションだ、こんな馬鹿氣たものと云はれるか、或は讃められるか、そこはどうですか。

竹腰—ああ云ふものは、建築がエボリユーションで進んでゆく途中の一つの刺戟物で、進化道程の一つに過ぎない。

片岡—唐辛子だね、うどんでなくて唐辛子だね、君の意見がそれなればそれで判る、さう云ふ見方も一つの見方だ。

村野—さうすると建築にレボリユーションは全然無いやうな氣がする。

武田—あつたかも知れない、僕はさう云ふ議論で云つて居るのではないので、エボリユーションであるか、レボリユーションであるか、之は何でもない、建築の變化は何でもない、自然に出來て來るんで、人爲を以て如何とも出來ない。例へば今日のドイツでも、フランスのやり方でも、譬へれば同じ兄弟であつても突飛な奴が出來ると同じで、中にはあゝ云ふものが出來る、而しそれが惡ではない、善か惡かと云ふ事は住む人の認識による、

本流であるか末流であるかはそれが過去になつて顧みて多數決であつたものが本流となるんだらう、尖端の試みと云ふ事がドイツでは本流になりつつあるやうに思ふ。本流のスタイルは今云つた様に多數決です、多數決必ずしも善いんぢやない、けれども穩健なものだ、だから本當の味ひのあるものは多數決でないものにある。

片岡—けれ共審美學的に善い悪いと云つても建築の中心の様式、即ち本流であるかどうか判らぬ、現代に居るから。

竹腰—美とか醜とか云ふものは一つのイデオロギイで、觀念を養成されれば醜も美になり、美も醜になるんぢやないか。

武田—美、醜と云ふのは机上の空論であつてはならない、今日の美醜は所謂合理的にゆかなければ、皆なが承知しないと思ふ、その意味に於いて此頃の新しい様式は完全ぢやないけれ共、その方の芽が出かけてゐるんぢやないか、それで從來のクラシツクのやつは今日では確かに過去のものである、それを憧れてゐるのは一種の習慣で、之をゆけば無事なんであつてそれ丈けの事なんだ。

片岡—アメリカでも從來のスタイルを向上する事よりも矢張り新らしいものを取入れる事に非常に努力して居る跡が見えるね、クライスラー、エンパイヤー・ステート、アーヴィングトラスト等と云ふ大建築は何とかして新しく行かう新しくゆかうと、ゴシツクも取り、セセツシヨンのごつごつしたのも取入れ、各長所を繼込で新しくゆかうとする跡が見えてゐる、それが可成露骨で全然舊スタイルは糞喰へでいつてゐる様子だ。

武田—アメリカはフランス流です、フランスで新しいのはあゝ云ふのが多い、所がフランスではそれを認めないので、雜誌なんかぢや書かないが、皆フランスの眞似です。

片岡—フランスはそれをやるけれ共、目立たないやうにやつてゐる、非常に遠慮しながらやつてゐる、ドイツに行くととてもそれがひどいんで、丸で様子が異ふんだ。

今林—私達學生のときに時々新らしい、無論その當時の新らしい外國のスタイルのものが出來た時にこれからかう云ふスタイルになるのかなあと思ひました、然しどうなつたかは之は別問題でありますが少なくとも其後のクラシツク風のものに餘程影響を與へてゐるだけは動かすことの出來ぬ事實です。

武田—此頃出來るものは全然古いものは出來ないと思ふ、古いものであつてもどこかに新しい部分があり新らしいひらめきがある、之迄はドイツはフランスの眞似ばかりして居つた、ドイツは否應なしに眞似をして居つた、所が段々權力の均衡がとれて來て、本當のドイツ人の氣が出て來たのは此頃なんです、あれがドイツ人の眞面目だらう。

村野—ベルリンの町を歩いてゐると、ごつごつして實に不愉快な心持ちになる、以前のものもそう改造し切れないから仕方なしに新しいものが押されて近郊へ延る。そしてこれは民衆の價値付けがあるだらうと思ふ、所が日本ではさう云ふものは一種の社會的の行爲

として表れてゐる、日本では新らしいスタイルは流行ぢやないかと思ふ、ですから可成將來根本的に不審が起つて來るやうなことになりはせぬかと思ふ、ドイツでは社會的の意義を持て居るんぢあないですか。

武田—さうです、確かに社會的意義を持て居る、併しドイツ人の骨頂は眞似ぢやないが日本は他の國の眞似をしてゐるに過ぎない。この頃の新しいものはドイツのものか或部分はフランスのものなのだ、みんな國際的に考へてみるとオリヂンはあるんだ、今度は日本のもので、日本の眞骨頂を表したものが出來るんぢやないかと思ふ。

瀧澤—法隆寺の建築形式は普通に朝鮮のものだと云ひますが、死んだ長谷川君の說によればあゝ云ふプランのものは日本獨特ださうで、法隆寺は斷然型を破つて金堂と塔とを左右に並べたあれでバランスが取れてゐる、シンメトリーを破つた所に聖德太子か、或はその當時の建築家が非常に偉かつた事が判る。

竹腰—かう云ふ時代に一番お困りになるのは教育者だらうと思ひます、吾々のときには稽古をする目標がありましたが、此頃はそれがない混沌たる時代です。

瀧澤—そこを學ぶそこに微妙な精神があると思ふ。

片岡—六十年間はコツピーばかりやつて居つた、建築と云ふ事丈け捉へてみてもさう思へるやうだが他も總てそうなのだ、着物でも西洋人の着てゐる着物を着て平氣で居るんだから、コツピーを何とも思はずにやつて來た。

武田—眞似をするのも善い、これはワン•ステツプだ。

協會の動向と將來の事業

高橋—協會と學會大分建築論に花が咲きましたが次に當協會に對する論議の方に移つて戴きませう。

瀧澤—私は痛感して居ります、兎に角世の中のことは實質と名義とが全く矛盾したものになり易い。學會とか協會とかいふものがあつて內實同じ様な仕事をしてゐるのもその一例です。

大倉—純學術と云ふのと、社會的方面に活躍するのと分ける必要はないと思ひますが。

新名—然しここに異つた目的が二つあれば同じ名ではいけないと思ひます。

村野—形ちを一つにして中で自然に分れると云ふやうにしてもいい。

武田—創立當時の會員の考は建築學會の關西支部と云ふ形ちに仕様と云ふ希望で、特別のものを作らうとは思つてゐなかつた、所が東京の方がしきりに動搖してゐたために、こちらでは別の團體を作つてそれを刺戟しやうといふので支部と云ふ形式を執らなかつた、だから今日から云へば建築學會に合併してもいいと思ふんです、協會と學會の區別が極端に云へば分げられるけれども、中には分けられんものもある、どつちに就いてもいいやうなものがある。

瀧澤—電氣には電氣協會と學會と二つあるやうです。

武田—あれも曖昧なもので、學會の中で協會のやるやうな事もやつてゐる、統一委員とかそんな風なこともやつてゐる、關西はどつちかと云ふと實業側の色彩が多いから協會となつたんぢやないかと思ふんです、建築學會の方も今では建築協會のやる様な仕事をしてゐる、中には會員を澤山作らなければならぬと言ふ必要がある關係もある。

大倉—それは大きな謬りだと思ふ、つまり協會の方の仕事に近づいてゐるんぢやないかと思ふ。

武田—それも矢張り資金難から來てゐる、一體云へばうんと基本金を貰つて堂々とやるんだね、昔工學會と云ふのが唯、一つあつたけれども、土木學會、機械學會、と云ふやうに別れて、工學會は今でもあるにはあるけれ共、藻抜けの殻で仕末が悪い、建築學會の如きものも段々中で分離して行くべきものではないかと思ふ、設備、構造と云ふやうな風に。

篠原—建築學會は象牙の塔に閉ち籠つてゐるんぢやないですか、さう云ふ意味から協會と學會とが並んで存在する必要があると思ふ、學會は餘り社會的に働きかけると云ふのはないやうに思ふのです。

村野—東京特有のローカルカラーが出てゐるんぢやないですか。

瀧澤—強いて區別すれば、東京の社會と大阪の社會との相違と云ふ丈けでせう、東京では東京に在る所の學校が特種の援助を與へると云ふやうな精神上のものがあります。

武田—協會と學會と分れて、建築學會の會員か、協會の會員か、どつちかに入らなければならぬとするとどつちが多いだらうね。

竹腰—關西に居る者は二重の負擔ですね。

池田—協會と並べて見たら費用も考へなければならぬし、範圍も考へなければならぬ、さうして結果は之が合流するか或は片方が潰れるかになるでせう。

協　會　の　雜　誌

大倉—雜誌を一般社會的にして、學會の方は學術的の方面に。

瀧澤—建築學會の雜誌を二種出したらどうかと云ふ事もあつた、結果パンフレツトと云ふ一つになつたが、とにかく會には入つてゐるけれども、ちつとも役に立たぬと云ふ者が大分多いやうですから。

竹腰—學術的のものを出すと云ふことになれば、雜誌は半歳に一遍か、一年に一遍位のもので充分でせう。

中西—建築雜誌の構造の學說なんか四千人の會員の中、判るのは何人か。

瀧澤—兎に角、或る公式を出して來る迄の大變豫備行爲に、隨分頁を食ふ、學說なんか、エツセンス丈け載せればいい、もつと簡單にすれば、あんな尨大な雜誌を出さんでもいいでせう、見た丈けでも憂鬱を感ずる、不經濟ですしね。

安井—協會の雜誌をもつと平易にしたらいいと思ひますがね。

中西—表題の「建築と社會」そのまゝの內容にしたいと思ふ。

武田—僕がヨーロツパから歸る時に、船のサロンに「建築と社會」が置いてあつた、見てゐる人もあつた。

安井—思はない方面に出て居りますね。

竹腰—學會の雜誌は學會の雜誌らしいやうに建築協會の雜誌は對社會的に進み得るやうになる丈け俗に、俗にと云ふと語弊があるかも知れませぬけれども、通俗的にすると、自然と分野が明らかになる。

川村—素人が讀むには一寸難しいし、玄人が見るのは詰らないと云ふやうな、現在「建築と社會」は內容ぢやないかと思ふ。

武田—素人本位ぢや詰らんね、玄人が讀んで居るのに、例へば漫畫を書いたりしたんぢあ。

高橋—編輯係のものが常に考へてゐるのはそこなんです、讀者層を何處に求めるかといふことです、本年の始めでしたか編輯座談會で種々御說を伺つたことがあります、それも結果は會員本位の讀物といふことでした、會員が配布を受けて讀むのには是非それでなければ駄目でしやう、目下その方針で及ばず乍ら努力して居ります、大體會員以外の購讀者四百あります、大部分建築家だらうと思ひます、無論少數乍ら非常な建築に趣味を有する人があります。先程も話がありましたが、題名「建築と社會」に副ふ樣な平易なものにして大衆に呼び掛けるのもよいでしやうが、編輯、經濟兩方共に仲々困難があらうと思ひます、然し協會が社會的の仕事として必要なことではないかと考へます、これは將來に殘こされた重大な問題です。

大倉—社會一般に呼びかけるには雜誌もよいが、講演會とか展覽會といふ樣な事業の方がいいと思ひますが。

武田—展覽會等もよくやりましたし又何か事件が起る度に講演會もやつたりして居りませう、とても東京では出來やしません、あれは大いに社會を益してゐると思ふ、特に震災の時なんか隨分大いにやりました。

安井—考へて見れば社會的には隨分活動して居ります。

武田—尙之から先も大いに社會的に活動する。

集　合　住　宅

中西—協會の仕事として、大正十一年頃に住宅博覽會をやつたと云ふ事は大事業であつたでせうし又住宅改善といふ先驅をなした有意義なことであつたでしやうか、此頃は諸方の電鐵會社や土地會社で切りにやつてゐて、結局小さな住宅の事だと存じます、もうこの方はこのまゝとして方向を轉じて大きな集合住宅の方向に手を附けらるゝのは、協會なぞ

大いに努力すべき性質のものぢやないかと思ひます、個人的或は小さい外の團體で手を附けられないやうな事を協會は努力する必要があると思ふ。

池田—住宅委員會で頻りに研究して居ります、住宅委員會の發表が出たら雜誌にのせますし又種々の方法で發表しませう、そこで協會としてのさう云ふ住宅に對する或る一の根本方針が決つて來て、それから色々活動狀態に入るんぢやないかと思ひます。

村野—大阪市あたりがどうせ色々な集合住宅を作るんでせうから、それと協會の方と聯絡をとつて頂くやうにお願ひ出來たら、いくらか意義あるものが出來はしないか、さう云ふ事を協會の仕事としてさして貰ふ、或は協會で世話をやらして貰ひ、それを市民に見せるやうに、こつちが努力すると云ふやうな事にして頂いたら經濟上の負擔を負はないで、次の時代の意義あるものが出來はせぬかと思ひます。

新名—協會の事業概記に、前に大阪市の囑託を受けて職工住宅の案を作つてやつたと云ふ事が出て居ります、初期の頃には市の方にも人が少なし機關も無かつたからです、然し私は今でもさう云ふ外部からの權威ある助言があつたら私達その衝に當るものは大變やり易いと思ひます。

武田—外部からの助言を求る時日が許されますか。

新名—計畫としては數年前に全體案が決つてゐる、だからその審議をすると云ふ事も出來ることは出來る、設計はその中の一部分づゝ工事を進めて居ります、未だ半分位殘つてゐるんで、後のものを實施するまでに何か、さう云ふ機會がありましたら出來ることは出來ます。

武田—關係を付ける事はいいことで、又努力することはいいが、時間が問題で出て來ない、一ケ月間に仕上げて了へと云ふやうな事が時々あるからさう云ふ事だと出來ないです、もう一つは大底決つた不規則なサイドに入れるんです、貧民窟ですから却々協會に相談しても間に合はぬ。

新名—實際の話なんですけれども、色々の關係がありまして、必ずしも理想的なものを作つて呉れと云ふ事ではない、かうして作ればいい、かうすれば惡くする事は判つて居るが、みすみす作らなければならない事もあります、さう云ふ際には協會でいい案を作つて頂いても、實施案として實施出來ないものが多からうと思ひます。

武田—若し、大規模のアパート等が出來る時等には是非協會の仕事としてやつて貰たい。

大倉—京都の市營住宅は二階建で、二十坪內外のものを庭を一寸明けて、並べて廣い面積を取り、マツチ箱みたやうな普通の借家風の日本の家を、二、三十軒並べて市營住宅式に固める、さう云ふ方針らしい、あれ等はどうしても考へなほす必要がありはしまいかと思ふ。

篠原—餘り先き走りをし過ぎるんだらうと云ふ話もあつたが、要するに一般の人は知らないんぢやないから、さう云ふ風な人に呼びかけ教育してやる事が必要だと思ふ、協會な

んか特にその點に力を入れるべきである。

武田—今急に百萬と云ふやうな住宅が必要になつて而も古い住宅では收容し切れない、と云ふのであゝ云ふ集合住宅が生れて來た、そういふ必要性が起れば日本でも出來るだらう。

中西—事業の方から考へて當面の問題から云つて、計畫と云ふものがないんだらうと思ふ。

武田—ドイツだつて同じやうな事を云つて居つた、もう少し困ればいい。

安井—どうも不經濟ぢやないですかね、ばらばらとして居て百鬼夜行の如く、そして其間何等の連絡も何等の交涉も只町は郊外に無意味に擴がるのでは。

武田—不經濟ですけれども皆少くとも門が欲しい、或は銘々床の間が欲しいとか、さう云ふ種々な、實に八ケましい要求がある。

村野—協會としての意義をなさんだらうと思ふから、必要の如何に拘はらず、もつとやる必要が勿論あるだらうと思ふ、本當を云へば賣れても賣れなくても作つていいものだらうと思ふ。

瀧澤—協會で率先して宣傳するなり、智識を普及して一般民衆を向上さした許りぢや駄目で、それよりももつと具體的には當局を動かさなければならぬ、ドイツやフランスは都市が主體となつてゐる、交通機關も考へ、小學校や幼稚園を設ける事も考へなければならぬ、大阪市に經營させる機運を作ればいい、一般に呼びかけてもさう云ふユートピアがあるかなあ位で過ぎて了ふ。

武田—方針も何も出來るけれ共、本物を作らなければ駄目ぢやないですか、それは詰り資本家を寄せなければ、資本家が賛成してやると云ふ事になれば出來る。

村野—アパートなども最初にいいものが出來れば又段々と出來て來る。

瀧澤—淺谷アパートでも深川アパートでも出來れば兎に角人が這入るんですから、實際協會でやらせると云ふ丁度さつきの、片岡先生が建築條例をやつたやうな勢ひで當局に迫るが一番よい方法ぢやないですか。

武田—民衆に頼るより資本家に頼る方が早い、出來さえすれば出來る、民衆が如何に希望しても資本家がそんなものは引き合はぬと云へば駄目です、どうしても資本の力です。

瀧澤—京都のアパートははやつてゐる、滿鐵でも舍宅をやつて居りますね、ああ云ふのを日本でやつて居りませんですか。

安井—滿鐵ぢや非常にいい成績を上げて居りますからやりさえすれば這入ると思ふんですよ、御心配になる程民衆は顧みないことはないと思ふ。

武田—協會の事業として資本家の方に働きかけるがいい。

池田—大阪に於ける住宅の改善と云ふ事に對する考慮をするために、市あたりから年額十萬圓位づつの補助を貰ふ、さう云ふ建議をする、それから今度は金持のアパート的なも

の普通の大會社の重役と云ふやうなものを焚き付けて、君の所の住宅は駄目だからかう云ふ様にやり給へと焚き付けて、さう云ふ者から金を出させてこつちに任して貰つて理想的なものを作つて渡すとか、何かさう云ふ事で進まなければならぬ、それでなければ三十年賦の低利資金でも借りてそれはどうにかなるものとして日本的のものを造らへてみるか。

竹腰—建築協會でさう云ふものを研究して、技術的のみならず經濟的に考へても必ず儲かると云ふものを資本家に示したら、きつと飛びついて來る。

高橋—永々色々と御話を拜聽いたしました御禮を申し上げます。尙當協會の將來について論すべきことが澤山あらうと存じますが時間の關係上此邊で今晩は一と先づ止めて居きまして次の機會に讓つて頂きます。

寫眞は當日の出席者



（向つて左から　今林・瀧澤・村野（一人おいて）片岡・竹腰・大倉・安井・武田・池田・中澤・落藤・篠原（かくれてゐる）中西・高橋（一人おいて）川村・新名の諸氏）

本會の既往を顧みて

—本會創立當初の實情と其事業の概記—

本會の既往を顧れば大正六年の三月三十日關西建築協會と名づけて創立せられ、次で大正八年一月にこれを今の日本建築協會と改稱し着々本會の目的達成に邁進し建築に關する事項は理論に又實際に據りてその實現と指導とに勉め、常に建築界の先驅となりて社會公益の爲めに活躍しつゝあつたが、大正十五年十月には組織を社團法人に改め愈々その基礎を堅め、會員の如きも國に亘りその數今や千三百名を越ゆるの大を致し我國に於ける最も有力なる團體の一として成長したのである、この間月刊雜誌『建築と社會』を發行し、或は又各種の建築關係圖書を出版し、又一面には各種の委員會を常設して汎く建築各般の事項に關して不斷の調査研究を爲し、その結果はこれを公表して攻究に供し、或は建築に關する重要なる意見を要路に建白し、或は住宅改造博覽會を催して大なる成果を擧げ、或は時に展覽會及び講演會を開催して建築の知識普及を計り來つたる等建築界の進歩發達に貢献したる事績は蓋し鮮少ならざるものがあつた。

茲に今秋その　五周年の記念事業を催すに當つて本會の既往の歴史を追想して見るのも意義あるところであらう。

先づ本會創立當初の實情より初めて、本會の沿革の概記とその事業の概記とを記錄から抽出して見よう。

（1）本會創立當時の實情と當初の經過

此のところは大體創立當時から約二年間に亘りその當時の雜誌の會報より抜き書きしたるもので、これによつて當時の實情を髣髴せしめるところがあらう、先づ雜誌創刊號の會報の序文より茲に轉載すれば

大正の御代數ふればはや六歳、甲寅の夏歐洲の大戰亂勃發してより既に三年、今や世界の國てふ國を擧げて此の大破瀾の渦中に巻き込まれつゝ前途茫々亦漠々。何人か果して此大慘劇の大團圓を豫言し得るものぞ。聖代愈隆昌一度山東の一角に砲火飛び、南洋の遙海に砲煙擧りたるも日昇旗の翻る處亦敵影なく太平洋の波打寄する岸に平和の浦風靜かなる、實にや武威八紘に振ひ日東帝國の前途は淨々たる春の海に似たり。文武は並び進まざるべからず。武勳赫々たる帝國の反面は如何一等國の内容果して如何大八洲を輝らす文化の光は兩洋の魚鼈を驚かし得るや否や。外交に内治に科學に文藝に教育に宗教に哲理に音樂に、はた亦商業界の前途や工業界の現狀や思ひ半ばに過ぐるもの多々概ね然り。

吾建築界の趨勢亦一層の努力を要す、一言以て之れを掩へば「混沌たり焉明治聖代の建築界は所謂過渡期として活動したるもの汲々乎として泰西建築術の輸入咀嚼に努力したるの時機也、今や舞臺は一轉しつゝある也回轉しつゝある也否急轉しつゝある也、さはれ大勢の歸向に着眼しつゝあるの識者を除いては多くは無我無中也只管過去の「スケール」を以て現在を測らんとす唯是明治後期の順潮に舟を放てる也而して舟中の船夫多くは夢を畫いて太平を說く。

關西の建築家は多くは駄眠同舟の水夫と異なるなかりしやも知れず世に「打てば響く」の語に眞理ありとせば關西の建築家は實に太平の春夢を驚かされて醒めたる也東の岸を洗ふ波は西の岸をも打つ一波起りて萬波伴ふとかや、況んや舟中の水夫をや。

醒めたるものは覺らざるべからず、大正の建築界の前途之を如何にすべき乎、知らず建築家は自己のために建築を建てつゝ滿足すべきか否乎、建

築家はあまりに目前の事務に吸々として自我的小天地に跼蹐しつゝあるにあらざるなき乎、今須らく眼界を大にして對社會的に活路を求むる要なきや否や進んでは國民を指導して國家的建築の建設に努力すべきに非ざるか、斯くして建築家は自個を離れて社會と接觸し國民と同化して以て大正の建築を建設するの急務を認めずや、果して然らば同志の糾合を謀り意思を疏通して各自の小我を捨て一致團結據つて以て社會を指導すべき團體の組織は豈徒事ならんや。

機運は自から來る。蓋し天意なるなからんや關西の建築家は東風吹く丁巳の二月以來聲に應ずる琴線の如く今更らに過去を顧みて前途の發展を期するに一致せり、斯界是より多事ならざるを得ず、斯くして吾關西建築協會は櫻花笑まんとする三月下旬呱々の聲を擧ぐるに至る。

本會の創立（前記）

關西建築家の有志は大正六年の二月以來春夢閑眠漸く醒めて各々期する處ありしが談ずれば斯界の前途を語らざるなし、さればにや片岡、波江兩氏の名により一片の檄文飛ぶこと五十二枚期せずして北區魚岩樓に會する建築學會正員の關西在住者實に三十有九名要は關西の建築家の團結を謀り相互の意思を疏通して建築界の向上發展を期するに在り。依つて五名の委員を擧げて創立案を委嘱するに至れり。

當日會合の案内を發せし氏名左の如し

○は出席者　◎は創立委員　●は死亡者

（イロハ順）

一井　九平　◎池田　實　○石田　信夫
○今林彦太郎　伊部　貞吉　○原田　俊雄
○濱野　三郎　○橋本　勉　○長谷部鋭吉
○德永　庸　○大林賢　郎　○小笠原　銅
○置鹽　章　○渡邊　節　◎片岡　安
河合　浩藏　○河合　幾次　○加護谷祐太郎
○萩野壯一郎　●○金剌森太郎　●龜岡　末吉
●○田中　勣　○田中　大作　○田中　豐輔
◎武田　五一　○宗　兵藏　◎波江　悌夫
○中西　甚作　○永瀬　狂三　○內藤　太郎
○村井　三吾　●○牛村　喜勇　○野村　一郎
久保田小三郎　●山本鑑之進　●○山田　靜
●○吉本　久吉　●○松田　亥作　○松本　禹象
藤田旭之助　舟橋　喜一　藤井　厚二
○小林　悉　天沼　俊一　●○佐藤　彰美
○佐藤　四郎　○北村　耕造　○木子　七郎
○光安梶之助　◎設樂　貞雄（當日缺席）
本野　精吾　●瀨戸　文吾

創立委員五名は三月十七日夜會合の結果有力なる團體を組織して親睦を計り併せて建築界の興隆に就き各自の意見を交換し前途の方針を確立せんため次の會則案を作製し之れを諸氏に配布し更に會合して一同の同意を得んとす

議　案

會名　本會を關西建築倶樂部と稱す

目的　會員相互の親睦を計り併せて建築界の興隆に就き常に各自の意見を交換するを以て目的とす

會員　當分建築學會正員の關西在住者を以て組織す　但し會合の場合には建築學會一般會員をも招待する事あるべし

會合　毎月（十三日）一回例會として茶話會を開き春秋二季に大會を開催す（講演會及晩餐會）

役員　理事五名を選擧し庶務會計を司らしむ理事の互選により理事長を選定す、役員の任期は一年とし內三名を半期毎に改選す

本會の創立（後記）

大正六年三月三十日創立委員の檄文により創立總會を大阪ホテルに開く出席者左の如し

井尻　良雄（三月來阪）　池田　實
石田　信夫　今林彦太郎　伊部　貞吉
原田　俊雄　濱野　三郎　長谷部鋭吉
德永　庸　大林賢四郎　小笠原　銅
置鹽　章　片岡　安　萩野壯一郎
金剌森太郎　田中　勣　田中　大作
田中　豐輔　武田　五一　宗　兵藏
波江　悌夫　永瀨　狂三　村井　三吾
牛村　喜勇　山本鑑之進　吉木　久吉
松本　禹象　藤田旭之助　舟橋　喜一
藤井　厚二　小林　悉　佐藤　彰美
佐藤　四郎　木子　七郎　光安梶之助
設樂　貞雄　本野　精吾　瀨戸　文吾
日高　胖（來阪中にて出席）

片岡安氏推されて座長となり議案をして左の會則を議了し引續き役員の選擧を行ひ左の五名當選す

會　則

會名　關西建築協會と稱す
目的　我國建築界の堅實なる發展を期するに在り
會員　當分建築學會正員の關西在住者に限る
　但し會合の場合には一般有志にも及ぼすことあるべし
會合　毎月十三日例會を開き春秋二季大會を催す
會費　毎月金五拾錢とす
役員　理事長一名、理事四名を選擧す、役員の任期は一年とす、理事の改選は半期毎に半數とし引き續き再選するを得ず

役　員

理事長　片岡　安（35）
理　事　武田　五一（32）　池田　實（25）
　葛野壯一郎（23）　宗　兵藏（17）
次點
　設樂　貞雄（17）　波江　悌夫（17）

當日武田五一氏の發議により拾年前より繼續し來れる關西建築家の會合なりし「オキナ」會を解散し本協會に合併せん事を附議し舊會員一同の贊成にて直ちに解散しその所有財産たりし金四拾參圓〇參錢を本會に寄附することに決議せり

尙葛野壯一郎氏の發議により先月二十七日會合の折參會並びに招待を受けたるものは定額を擧金し片岡、波江兩氏の名によりて本會に寄附する事を附議し直ちに一同の贊成を得て擧金は葛野氏に委托せられたり

大正六年五月三日　特別委員會
大阪公會堂建設事務所樓上

委員會の研究大綱を左の通り定め
1　建築行政に關する部
2　建築經濟に關する部
3　社會問題に關する部
4　雜部

次に細部の項目は
1　現行大阪府建築取締規則の改正
2　都市建築法規
3　經濟上より見たる建築材料
4　建築施工上の改良
5　仕樣書及契約書の案
6　下級民住宅問題
7　建築に關係する時事問題
8　建築從事者及職工に關する問題
9　建築に關する迷信及傳說の調査
10　建築に關する報酬問題
11　建築士法案
12　都市住宅

大正六年五月十二日第二回例會に於て各部委員決定

委　員　名

第一部委員會（甲組）「現行關西に於ける建築取締規則改正の研究」
委員長　野村　一郎
委　員　吉木　久吉　前田旭之助　瀨戸　文吾
　設樂　貞雄　光安梶之助　佐藤　彰美
　小林　悉　內藤　太郎

第一部委員會（乙組）「都市建築法規」
委員長　野村　一郎
委　員　片岡　安　武田　五一　池田　實
　吉木　久吉　置鹽　章　木子　七郎
　橋本　勉　藤井　厚二

第二部委員會　「仕樣書及契約書案」
委員長　武田　五一
委　員　大林賢四郎　原田　俊雄　長谷部銳吉
　中西　甚作　山本治兵衛　牛村　喜勇

第三部委員會　「細民住宅問題」
委員長　片岡　安
委　員　園部　文雄　本野　精吾　小笠原　銅
　山本鑑之進　牛村　喜勇　伊藤　正文

第四部委員會「建築に關する災害及時事問題の調査研究」
委員長　池田　實
委　員　木子　七郎　石田　信夫　德永　庸
　濱野　三郎　波江　悌夫　今林彦太郎
　葛野壯一郎　長瀨　狂三　本野　精吾
　加護谷祐太郎　池田　讓次　天沼　俊一

第五部委員會　「建築に關する迷信傳說の研究」
委員長　葛野壯一郎
委　員　置塘　章　永瀨　狂三　波江　悌夫
　池田　實　田中　大作　大林賢四郎
　佐藤　四郎

第六部委員會　「建築協會大會準備」
委員長　宗　兵藏
委　員　田中　勣　松田　亥作　松本　禹象
　舟橋　喜一　井尻　良雄　波江　悌夫

建築材料價格調節委員會
　石田　信夫　木子　七郎　河合　幾次

設樂　貞雄　村井　三吾　小林　悉
光安鍹之助　瀨戸　文吾　松本　禹象
田中　勣

議院建築問題委員會

加護谷祐太郎　本野　精吾　野村　一郎
橋本　勉　片岡　安　葛野壯一郎
池田　實　宗　兵藏　波江　悌夫
武田　五一

大正六年九月十三日　第六回例會
中央電氣クラブ　會議後の座談會
1　議院建築問題
1　建築材料價格調節に就いて

大正六年九月十五日
關西建築協會雜誌第一號刊行

大正六年十月十二日　第七回例會
中央電氣クラブ　會議後の談話會
1　都市と洪水
1　郊外住宅

大正六年十一月十三日　秋季大會　心齋橋はり半
出席者五十三名

大正六年十二月十六日　第八回例會　中央電氣クラブ
講演會
1　我校の生徒養成に就いて　藤本　好雄
1　在米所感　森山　伊望
1　東京國技館の火災に就いて　葛野壯一郎
1　同上所感　木子　七郎
1　神戸郵便局の火災に就いて　波江　悌夫

大正七年二月十九日　第十回例會　中央電氣クラブ
講演
1　座習の利害　葛野壯一郎
1　建築敷地に就いて　設樂　貞雄
1　官公署に於ける建築家の獨立　池田　實
1　施行法の改善に就いて　波江　悌夫

大正七年三月二十三日　春季大會　梅田靜觀樓
出席者四十九名　席上役員選擧
役員名
理事長　片岡　安　主計　池田　實
主記　波江　悌夫　編輯　武田　五一
編輯　野村　一郎　編輯　日高　胖
松本　禹象　編輯補　佐藤　四郎
編輯補　伊藤　正文　本田　登
編輯　瀨戸　文吾

大正七年四月十七日　第十一回例會　中央電氣クラブ
講演會
1　劇と建築　波江　悌夫
1　都市と日光　牛村　喜勇
1　三越呉服店の災害に就いて　石田　信夫
1　同上所感　葛野壯一郎
1　臺北市區改正に就いて　野村　一郎

大正七年五月十七日　第十二回例會
會議後の談話會
1　日本の都市　日高　胖
1　建築學會大會に就いて　波江　悌夫
1　同　所感　葛野壯一郎

大正七年七月十七日　第十四回例會
中央電氣クラブ　臨時談話會
議題
1　明治神宮外苑記念建築物懸賞設計に就いて
1　都市計畫調査委員氏名發表に就いて

大正七年八月二十六日　納涼親睦會
堺大濱一力樓　出席二十四名

大正七年九月十七日　第十五回例會
中央電氣クラブ
研究事項
1　現行大阪建築取締規則改正案

大正七年十月三日　南地明陽軒
日高、光安兩氏送別會

大正七年十二月五日　第一回大會通俗講演會
中央公會堂
1　開會の辭　宗　兵藏
1　都市住宅問題　關　一
1　家相論　葛野壯一郎
1　デモクラシーと建築　佐野　利器
1　大阪市區改正に就いて　片岡　安
1　大阪港の將來　直木倫太郎
1　閉會の辭　野村　一郎

同日第一回大會晩餐會　中央公會堂　大食堂

大正七年十二月六日　北濱つる家　有志歡迎會
歡迎來賓　横河民輔、　後藤慶二、　田邊淳吉
藤村　朗、　安井武雄
（佐野利器、眞水英夫前夜歸京）

大正八年一月十四日　理事會　大阪倶樂部
日本建築協會と改稱

雜誌表紙圖案當選

特　選	淺井新一
入　選	内藤太郎
同	古賀鄉實
同	松本儀八
選外佳作	伊藤清造
同	瀨川博

大正八年三月十七日　第二十一回例會
中央電氣クラブ
理事改選

役員

理事長	片岡安	主記	宗兵藏
編輯	野村一郎	編輯	松本禹象
編輯	日高胖		設樂貞雄
主計	舟橋喜一	編輯補	波江悌夫
編輯補	佐藤四郎		

大正八年三月二十六日
名譽賛助員　辰野金五氏長逝

（２）日本建築協會沿革概記

大正六年三月三十日　創立總會を大阪ホテルに開き本協會の成立を見たり。會名を「關西建築協會」と稱し事務所を東區今橋一丁目一一番地片岡建築事務所に置く
九月十五日　機關雜誌「關西建築協會雜誌」を創刊す
同八年一月　會名を「日本建築協會」と改め從つて會誌名も「日本建築協會雜誌」と變更せり
九年一月　會誌を「建築と社會」と改題し且つ毎月一日發行のことに改め現今に及ぶ
十年五月一日　事務所を西區京町堀上通一丁目五番地不動貯金銀行ビルに移轉す
九月一日　事務所を北區絹笠町九番地大江ビルに移轉す
同十二年十月一日　事務所を北區堂島濱通一丁目堂島ビルに移轉す
同十五年九月十五日　事務所を北區中ノ島二丁目二十五番地江商ビルに移轉す
十月二十日　内務大臣より「社團法人日本建築協會」設立許可を得たり
昭和二年九月十五日　事務所を西區土佐堀通一丁目一番地大同ビルに移轉す
昭和七年五月　事務所を北區中ノ島三丁目三、朝日ビルに移轉す

（３）日本建築協會事業概記

大正六年四月調査研究事項を左の部門に分ち夫々委員を設けて調査研究を始む
1　建築行政に關する部
2　建築經濟に關する部
3　社會問題に關する部
4　雜部
同　六月　大阪市都市改良調査委員會より「都市建築條例の調査」を委任せられ調査完了報告せり
同　九月　本會雜誌名を「關西建築協會雜誌」と名つけ大正六年九月十五日初號刊行
同　九月　左の問題に付特別委員會を設け調査研究意見を發表す
1　建築材料價格調節に付て
1　議院建築問題に付て
同　十二月　都市建築物に關する法律制定の緊急なることを時の内閣に建議し、建築學會、日本建築協會と帶同して其實現を期したり、その結果大正七年三月都市計畫調査會の設立を見、右調査會に於て都市計畫及市街地建築物法の二大法典は立案され次いで兩法案は大正八年第四十二議會に提出され同三月兩院を通過するに至りたり此間本會は右調査會設置の前後官憲と力を併せてその實現に多大の努力をなし建築界十數年來の懸案の解決をなせり
大正七年六月　大阪市の依囑に依り職工住宅設計圖案を作成す
同　七月　大阪市改良計畫案に關し河川の整理、築港の完備並交通系統の統一は大阪市の三重要問題なりとして研究、高唱したり
同　十二月　本會第一回大會を大阪中央公會堂に開き直木博士外五氏の通俗講演會を催せり
大正八年　「都市計畫法案」及「市街地建築物法案」の二大法案の貴衆兩院通過に大に努力し現行法案を見るに至れり
同　十二月　市街地建築物法令に關する講演會を開催す
大正九年三月　大阪住宅經營株式會社の委囑に係る改良住宅設計懸賞募集をなし審査す
同　三月　建築材料統一に關する聯合會が建築學

會外五會より成立したるに付之に參加す

同　九月　大阪商品陳列所に於て櫻楓會大阪支部主催生活改造博覽會開催に付き改良住宅設計當選圖案を出陳す

同　七月　煖房機關及避雷針の件に付大阪府當局へ請願せり

同　十一月　建築に關する第一回講習會を本會事務所に開催

同　十二月　市街地建築物法令に關する講演會を天王寺公會堂に開き池田建築監督官外三名の講演あり

大正十年一月　市街地建築物法施行細則中の建築物最低高度の現定を設くる件に付大阪府知事へ建議す

同　七月　建築材料規格統一講演會を大阪中央公會堂に開き佐藤功一博士外三博士の講演あり會場には建築材料規格統一の見本を陳列して宣傳に努む

同　市街地建築道路の施工に當り一部に假設物設置許可の件に付當局へ建議せり

同　本會事務所内に建築材料見本陳列棚を設置し材料業者の見本陳列に便にしたるも九月一日事務所移轉の爲之れを廢止す

同年九月　住宅改造博覽會開催の爲第一回改良住宅(市内一戸二階建)設計圖案を懸賞募集せり

大正十一年二月　大阪府主催大阪計量博覽會建木材及煉瓦規格見本を出品せり

同　第三回改良住宅(郊外二階一戸建)設計圖案を懸賞募集す

同　三月　建築に關する第二回講習會を大阪市立工業學校に開催す

同　九月　從來かつて見ざる住宅改良の實際の目的を促進するため大阪市郊外櫻ヶ丘に於て大規模の住宅の實物博覽會を開催し(後藤子爵を總裁とし會長は本會長片岡博士)多大の好果を擧げたり(開期約六十日間)

大正十二年二月　神戸市に於ける兵庫縣都市計畫展覽會へ改良住宅設計圖案及模型を出品す

同　三月　當市天王寺公園に於て防火宣傳展覽會開催に際し會場に於て防火に關する講演の爲幹部出張講演、防火宣傳デーには市内に於ける耐火耐震建築物の標示、防火宣傳號の發刊等に努力したり

同　京都市に於て京都博覽會協會主催第二回家庭博覽會開催に付改良住宅設計圖案及模型を出品せり

同　建築に關する第三回講習會を大阪市立工業學校に於て開催

同　六月　大阪市中央公會堂に於て通俗建築大講演會を開き武田博士外七氏の講演あり

同　九月　關東地方大震火災に際し罹災者收容の組立式假建物の考案をなし大阪府市、京都府市兵庫縣市の當局へ建議書を提出し且つ會員より義捐金金一千圓を得て災害地へ寄附したり、又横濱に於ける罹災者救護病院は本會の設計にして大阪府之を建設したり、震災直後調査委員會を設け震災地に委員を特派(東京地方八名、湘南地方七名)して實地調査をなし專門的見地よりの調査事項を講演、幻燈、印刷物等によりて發表したり、該講演會は大阪、名古屋、京都、神戸、岡山、堺の各市に於て開催せり

同　十二月　帝都復興に關する件に付當路各大臣及帝都復興院總裁に對し建議し貴衆兩院議員へ配布を依頼したり

大正十三年三月　建築に關する第四回講習會を大阪市立工業學校に於て開催す

同　四月　日本建築士會外十四團體に依り帝都復興聯合協議會を組織されたるに付之に加入せり

同　通俗建築大講演會を開催す

同　六月　堺市主催都市計畫資料展覽會に改良住宅設計圖案及同模型を出陳す

同　十月　神戸市神戸高等女學校講堂に於て建築學會と聯合し通俗建築大講演會を開催し佐藤博士外三氏の講演あり

同　「關東震火災視察記」を出版す

同　建築職工教化の爲建築協會關西支部と聯合して鐵筋混凝土工講習會を開催す

大正十四年三月　大阪毎日新聞社主催大大阪記念博覽會開催に付各種の建築模型及寫眞類等參考品を出陳せり

同　大阪市、建築業協會關西支部及本協會三者聯合を以て建築職工教化の爲左官講習會を東區久寶小學校に於て開催

同　日本建築勞動協會の依頼により渡江悌夫、吉井長七兩氏同會へ出張講演をなす

同　四月　建築士法案調査委員會を設置し調査研

究す

同　五月　但丹地方大震火災に際し視察員三名を派遣す

同　六月　震災通俗講演會開催但丹地方被害狀況並に耐火耐震建築の必要を宣傳す

同　八月　神戸新聞社主催納涼文化博覽會に住宅模型及圖案其他參考品を出陳す

大正十四年十月　建築職工敎化の目的を以て大阪市、建築業協會關西支部及本協會の三者聯合を以て塗師工講習會を市內渥美小學校に於て開催す

同　十月　全國工業學校の內建築科を有する三十五校へ敎授參考資料として關東震火災視察記を各一部宛寄贈したり

同　十月　大阪府へ社團法人設立申請書を提出し大正十五年十月二十日設立許可を得たり

同　十二月　建築物構造强度計算の標準風壓の件に付大阪府、京都府、兵庫縣各知事に建議す

大正十五年十月　大阪市に於て帝國飛行協會主催「エーア・ディスプレー」擧行に付大阪市と共に是を援助せり、同講演會には片岡會頭講演す

同　十一月　建築職工敎化の爲に大阪市、建築業協會關西支部及本會の聯合を以て混凝土施工法講習會を市內久寶小學校に於て開催す

昭和二年二月　委員會を常設及臨時の二種とし左の五部を常設す

1　第一部(建築法制に關する事項)
2　第二部(建築敎化に關する事項)
3　第三部(建築資料に關する事項)
4　第四部(建築災害構造强度に關する事項)
5　第五部(住宅改善に關する事項)

同　三月　北丹地方震火災勃發に付震源地へ視察員を派遣及京阪神及堺の震害調査をなす、尙「地震と建築通俗講演會」を開催し北丹の被害狀況及耐震耐火建築の普及を宣傳す

同　四月　大阪市都市協會主催を以て大阪市に於て第一回全回都市問題會議開催に付本協會代表として宗兵藏、橫濱勉、池田谷久吉三氏出席し尙參考品として左記を出品したり

1　安政元年地震被害により今村博士の査定せられたる震度比較區域
1　昭和二年奥丹後地震による大阪市內被害調査圖

同　十月　建築職工敎化の爲大阪市、建築業協會關西支部及本協會聯合にて「壁の構造と其仕上」即左官講習會を市內大寶小學校に於て開催せり

同　建築學會主催本協會援助の下に十日間大阪市立都島工業學校に於て建築に關する講習會開催講師佐野博士外八名

同　十一月　府建築課長其他に本協會の意見を開陳し建築法規の改正促進をなしたり

同　十二月　「將來の日本の住居」なる課題の下に懸賞論文を募集す

同　十二月　第四師團防空演習擧行に付模擬都市建設をなして寄附したり

同三年七月　大阪鐵道株式會社の依囑により住宅設計圖案の懸賞募集をなす

同　九月　「建築智識普及展覽會」を開催して大衆に建築智識普及を圖る

同　十月　職工敎化の爲大阪市、建築業協會關西支部及本協會三者聯合を以て地下室基礎工事及防水施行法に關する職工講習會を開催す

同四年二月　日本火防協會主催(火の用心)展覽會に對し防火に關する建築材料其他を出陳して防火宣傳に努む

同　大津市に於ける滋賀縣主催生活改善展覽會へ本會より參考品を出品す

同　三月　政府提案の勞働者災害扶助法案に關し當路及貴衆兩院議員に陳情書提出の要あるを認め當時衆議院は旣に通過したるに付急遽當路並貴族院議員に陳情書を送付して配慮を煩したり

昭和四年四月　市街地建築物法施行規則一部改正意見建議書を大阪府知事に提出したり

同　四月　建築士法案特別委員會を設置したり

同　五月　靑年技術者の爲に第五回建築講習會を大同生命ビル八階に於て六日間開催、講師落藤學士外三氏、講習課目鐵筋コンクリート構造法其他

同　五月　サンマー・ハウス設計圖案の懸賞募集をなす

同　七月　富山市工業學校に於て開校記念住宅に關する展覽會開催に付「住宅良否見分け十ケ條」及「サンマー・ハウス」懸賞圖案等出陳したり

同　七月　大阪朝日新聞社主催朝日會館に於ける建築研究展覽會へ改良住宅懸賞當選圖案及模型

木造耐震建築住宅模型其他を參考品として出品せり

同　八月　「貸家建築に關する展覽會」を開催して貸家建築の改善を高唱す

同　八月　十三日より十八日迄六日間大阪大丸に於て「貸家建築に關する展覽會」を開催す

同五年三月　市立大阪市民館主催の「都市と音響」展覽會へ防音材料、實物模型、學術的資料を出品す

同六年六月　小住宅設計圖案懸賞募集（審査員片岡氏外五名建坪延三十坪以内建築費四千圓以内）

改善住宅設計圖案懸賞募集（審査員片岡氏外四名建坪延三十坪以内建築費三千五百圓）

同　九月　本會後援にて鈴蘭臺生活改善健康住宅展覽會（神戸鈴蘭臺會期自九月十日—至十月十一日）香里園改善住宅展覽會（京阪線香里園會期自十月一日—至十一月十日）

昭和七年三月　日本建築協會紋章圖案懸賞募集（審査員池田氏外六名）

「メートル」法による實用安價小住宅設計圖案懸賞募集

（審査員池田氏外六名建坪一百平方メートル以内建築費二千五百圓以内）

同　七月　創立滿十五年記念事業計畫發表

1　住宅博覽會の開催
2　建築展覽會の開催
3　住宅設計圖案の懸賞募集
4　建築通俗大講演會の開催
5　建築巡回講演會の開催
6　主要建築物及工場の見學旅行
7　「建築と社會」記念特輯號の發行
8　圖書の出版
9　建築會館建設の企畫
10　記念祝賀大會の開催

大美野田園都市住宅設計圖案懸賞募集（審査員酒井氏外八名建坪延十五坪以上三十坪以内建築費一坪當り八十圓内外）

實際に建つる住宅設計圖案懸賞募集（審査員清水氏外八名、建坪延十五坪以上三十坪以内建築費一坪當り八十圓内外）

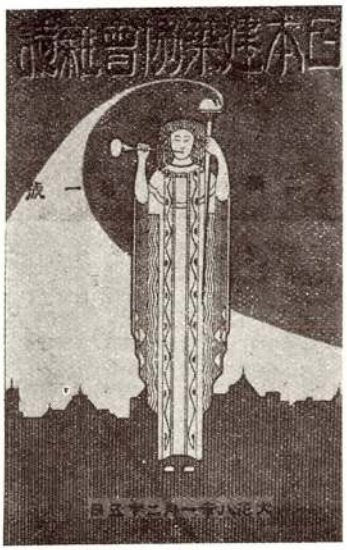
綠ケ丘保健住宅設計圖案懸賞募集（審査員小川氏外八名建坪延十五坪以上三十坪以内建築費一坪當り八十圓内外）

後　記

斯して本會の既往の十五年間の歷史を顧るときは、吾等の先驅の人々は常に一致團結して我國建築界の發展隆昌を冀ひつゝ又絕へず社會との接觸を計りその主張とするところも着々と實行貫徹されつゝあり、現在の如き有力なる大團體となつたことは誠に慶祝に堪へない次第である、そしてこの先輩諸士の努力の跡を顧る時に吾々はその偉大なる業績を讃ると共に益々それが光輝あらしめんが爲めに更に將來の飛躍に邁進すべく吾々會員は茲に一層その責任の重且つ大なるを覺ゆるものである。（了）



第 1 輯



第 2 輯



第 3 輯

雜誌の變遷

此の機會に我が協會の雜誌の移り變りを溫ねて見るのも亦意義あることであらう。雜誌は會の事業の大きな部門である、それだけに會の顏が反映する、他の事業は事の大小輕重を敢て論ずるのではないが皆消え去り忘れられても、こゝに脊丈に及ぶ十五年間の雜誌が會の過去を雄辯に物語る。

雜誌が孤々の聲を擧げたのは大正六年九月で關西建築協會雜誌と銘打つて菊判約百四五十頁平均のもの、表紙は小鳥に花をあしらつてある、その當時の建築雜誌のそれに暗示を得たものらしい。

波江氏が主となり佐藤四郎、須藤眞金氏等が努力された內容も仲々充



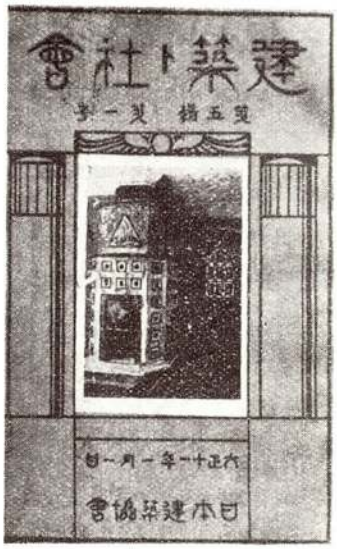
第 8 輯



第 8 輯



第 9 輯



第4輯～第6輯



第 7 輯



第 7 輯



第 11 輯

寶したもので、會の雜誌の方針は實に此の時確立されたのである。大正八年に日本建築協會雜誌と會の改稱と共に變つて、表紙も懸賞募集によつたものを用ひてゐるが、それは今から見れば可成小供らしいものである、表紙の圖案は其後第七輯以後は殆ど恒例となつて毎年行はれてゐるその圖案の進歩のあとは愕くべきものである、內容は表紙の移りからのみでも一端が窺はれる。

第八輯(大正十四年度)から四六倍版になつた內容もそれに從つて進んだ、第十一輯は編輯方針が大分變化した、著しくジヤーナリスチツクになつたが、第十二輯に毎號特輯となるに至つて一大飛躍した。第十四輯の本年までその方針で進んでゐる、本年に入つてからは新築建物の研究



第 9 輯



第 10 輯



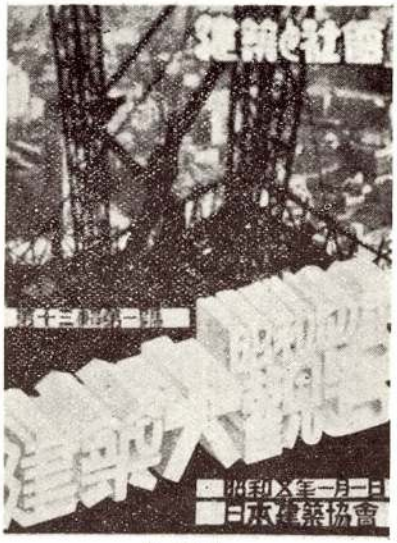
第 11 輯



第 12 輯



第 12 輯



第 13 輯

號の編輯と　左横組となつた事とは特筆に値すると思ふ。

内容に就て見ると最初數年はやゝ學究的の記事が目につく特に都市計畫等には隨分努力してゐる。其後新住宅の普及に力を盡してゐるがそれだけ大衆向きとなり、一方會員の趣味的のものになり俳句小說の類まで載せるに至つたが、その後に來るものは弛みであり緩であつた　各號特輯に至るに及んで會員本位の研究に斷然方針が一定した。

十五年の間編輯に從はれた役員並書記の努力は不朽である。一石は一石に重なつてやがて摩天の壁を造るであらう。永い歲月の間多少の盛衰は有つても常に新らしい氣を盛つて進んで來た我が雜誌に光榮あれ」

（高橋榮治）



第 15 輯



第 13 輯



第 14 輯



第 14 輯

綠ヶ丘保健住宅博覽會開會式

連日の時雨空、名殘なく晴れて、此處北攝の勝地、伊丹郊外綠丘に、我協會主催の保健住宅博覽會の開會式を行ふ。

六甲、能勢の連山は、紫のバツクを成し黄金に實る稻田は、此綠丘を西方より包みて遠く寶塚に連なる。出品住宅は或は綠濃き森の陰、又は亭々たる松樹の下、偖ては碧玉を湛へたる湖畔に、丹瓦、白壁、想を練り、意を凝らして、一團の住宅博、今正に成らんとす。

上、下兩池に狹まれたる遊園地のクラヴ前に三個の大天幕は式場をつくり、清洒のカンバスバンガローは所々に點在して、休憩所又は事務所の用を便じ、落葉たく急造の土竈は伊丹の芳醇を溫む。

バスに、自動車に、偖ては徒歩にて刻々に集る參會者、續々と來る觀覽者、小春の空は長閑なり。

式は村井支配人の司會に始まり、先づ會長武田博士立つて、我協會の創立より其使命の要點を述べ更に今回の十五年記念事業の一部として此博覽會開催の主旨を說明し、後援者各位の助力を謝し、出品者諸氏の努力を賞し、地元各方面の協力を感謝し、更に今後開期中に於ける援助を參會者各位に希望したり。

次に德政幹事は本年四月初旬に此事業計畫の決定より開會に到る間の事務の經過を報告し且出品者各位が此交通通信の不便なる建築處女地に、斯の如き短時日に本日の開會式迄に工を進めたる苦心の多大なることを報告す。

次に葛野副會長は懸賞圖案の成績を報告し續いて會長と共に當選者に賞品を授與す。

次いで後援者大阪時事新報社長の祝辭代讀あり、阪急、綠丘兩社を代表して綠丘土地會社長深川氏の土地の選定より今日に到る迄の經過說明及地元の好意を謝する辭ありて後ち博覽會開催の祝辭を述べらる。

來賓中よりは伊丹町長の祝辭代讀、田中縣會議員の熱烈なる祝賀的演說ありて式を了り直に宴會に移る。魚與樓の折詰に腹鼓を打てば、芳醇、大手柄はグツと五臟にしむ　伊丹の美妓、耳側に喃々すれば、酒盃敦に活況を呈す。式場脇に急造の榮燒竈は來賓に興を副へて宴は大成功に了る。

今回の博覽會に於いて特に記すべき點は、地元伊丹町協贊會の好意である。即ち沿道各戶には軒提燈と小旗とを提げ、要所にはアーチを設け其他通路の修理、清掃等間然する所なき點である。斯の如き擧は、吾々の公共的主旨を理解したる今後に於ける住き模範である。此機會に於いて誌上を以て謝意を表する次第である。

當日重なる來會者は來賓側には古宇田神高工校長、伊丹町長代理、伊丹警察署長、田中縣會議員、町有力者、地元有志、阪急よりは上田專務、安部地所課長、其他の諸氏、時事よりは江口、小堀兩氏及寫眞班某氏、綠丘側は深川社長を始め村井支配人其他の社員大に斡旋に勉めらる。本會よりは武田會長、葛野副會長、幹事古塚、小川(安)、德政、委員伴野、加藤(善)、常務側より鳥井、森本、小川(陽)等の諸氏及大和、鷹取の兩書記であつた筆者此開會を歌ふ一首左に

昔(いにしへ)は猪名(いな)の佐々宮(さ・ゝのみや)、森(もり)の浦(うら)に村里(むらさと)、復活(かへ)す、いま初發(はじめ)てむ　(古埃及語入)

(昭和七年十月十日德政記)

大美野田園都市住宅博覽會開場式に參列して

坪　井　誠　一

我日本建築協會創立滿十五年記念事業の內一大記念事業たる住宅博覽會は豫ねて本會の抱ける現代日本住宅の改善を主眼とした現今世情に鑑み、中產階級に適する經濟的に能率高き小規模の住宅を建築公開し、以て我協會が豫ねて住宅に對し抱ける理想を世に發表し公平なる批判を仰ぎ、併而新興日本住宅の一指針たらしめんとしてゐる次第であります。

近年人口都市集中は近代文化都市の一特殊現象にして殊に我大阪市に於ける人口增加率は近年著しく高率にして、其結果衛生狀態不良、道德上悲しむべき事態の發生、經濟活動の萎縮等の如き結果を來す、此好ましからざる狀態の緩和策として淸楚閑雅なる交通至便の郊外地に田園都市を設くる事は都人士の等しく認むる事でありまして、其意味に於きまして大阪近郊稀に見る理想的の田園都市としての大美野田園都市を卜し住宅博覽會を開催せられたる事は尤も時宜に適したる、又世人の等しく希望したる事と存じまして期待して居るものであります。

此記念すべき博覽會は出品住宅もほゞ完成し、諸準備も整ひまして、斯に九月十日吉日を卜し開場式を擧行せらるゝ事となりまして誠に慶賀の至りであります。

大美野田園都市は南海鐵道高野線北野田驛前總地域四十萬坪を抱擁せる丘陵地にして難波驛より乘車堺東を過ぎたる頃より北河內の平野を望みつゝ二十五分間にして北野田驛に到着する處にありまして、博覽會は驛前の丘陵にあります、驛前博覽會正門アーチを過ぎ、車道と綠帶とペーブメントされた輕快なる步道を通り、噴水のある中央廣場に到ります。廣場に面し參考館を建設して居ります、此參考館は住宅參考資料及材料を陳列公開し、又講演場に當つるため建設中でありましたが來る二十日竣工開館をなす豫定であります、廣場より右折し當日の開場式場に到る　此式場は會期中無料休憩所にするので又簡單なる食堂として高島屋が出張し皆樣へサービスする由であります。

博覽會場は河內和泉の境界に展開せる高燥なる自然の丘陵地でありまして、但し樹木が少ないのが缺點ですが開會式當日は天氣淸朗でありまして東に金剛、葛城、二上山の連峰を眺め西は遙に六甲の連峰あり南は狹山池の谷を隔て遠く紀泉の連山近く天野山あり北は河內平野を隔てて大阪市を望む、實に自然のパノラマをあらはし爽快の感ありました。

式場は紅白の幕を廻し、白布を懸けたるテーブル、整然として式場にふさわし、開會正午、日本建築協會副會長池田實氏開會の辭に次ぎ幹事增山新平氏の博覽會經過報告あり、次に大美野博覽會住宅設計懸賞審査員として私の審査報告次に懸賞當選者賞品授與式を擧行せられ、池田副會長より當選者へ協會賞及副賞の授與があり、終て後援者關西土地會社橫江社長の祝詞朗讀がありまして式を閉じまして祝賀會を開き、祝盃を擧げ歡談時を過しました。

來賓の主なる人は關西土地株式會社橫江社長及建石常務取締役、夕刊大阪新聞記者、高島屋大谷支配人、南海鐵道會社山田旅客係長、出品者側竹中組員、淸水組員、大林組員、今西末吉、大野勝之助、鹿島組員等の諸氏四十名なり。式後參會者は出品住宅の鑑賞をなし歸路に就かれたり。

今回出品住宅は關西一流建築業者が夫々幾多の犧牲と多大の苦心に依り奉仕的に且短日月に施工せられたる事に就而は滿腔の謝意を意する者にして且田園都市に調和し淸楚なる優秀の住宅にして田園都市特有の生垣を廻したる點等甚だ快感をあたふる作品にして小住宅として一指針をなすものと存じましてよろこばしく感じました。

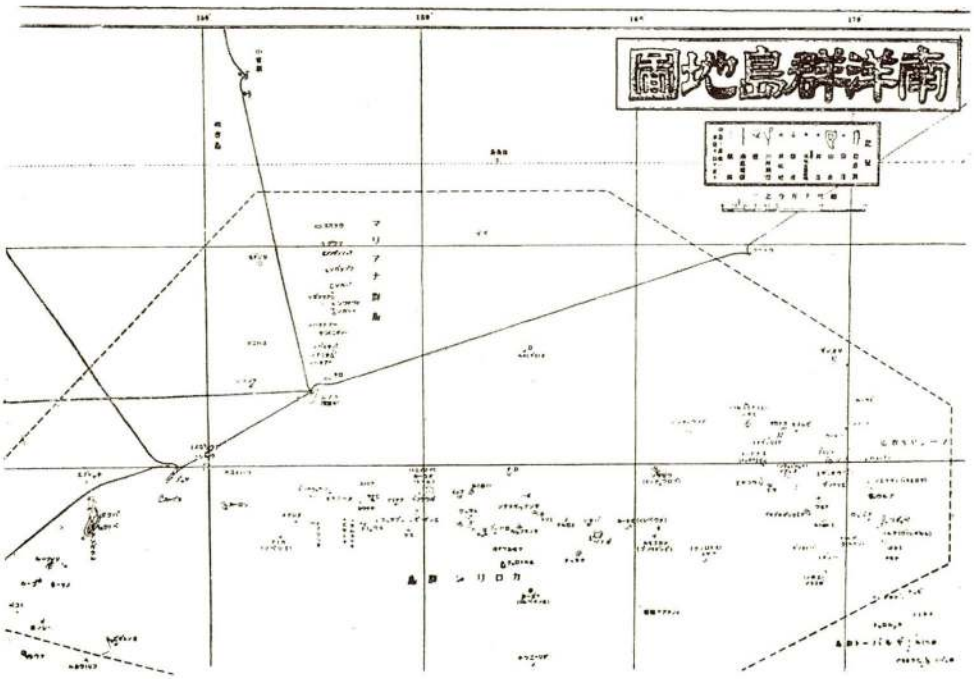
終りに後援者南海鐵道會社が前例になき後援をなされたる結果、此博覽會をして開催する事得た樣な次第であります。此點は同會社へ感謝と敬意を表する者であり、感じましたままを記しまして此博覽會の盛會にして且有意義に終らん事を希望する者であります。

南洋旅行漫談

工學博士　武田五一

武田博士は八月の交休暇を利用されてユートピアの國南洋に旅行されました、その興味ある御視察談を九月二十一日の例會の席上でお伺ひ致しました、本記はその速記で文責は一切記者にあります。

私は毎年暑中休暇には彼方此方少々長途の旅行をする癖がありまして、可なり長い間續けて居りますので、內地ではもう殆ど行つて見やうと思ふ所が無くなりました、今年は滿洲や蒙古へ行く人が多いのでありますが、私は滿洲にも既に三度も行つて、もう此の上行つて見ても、混雜した宿屋に泊るのでは仕方がありませぬから、それ等群集の後に隨いて行くことも止めまして偖て何處へ行つたら面白いかと色々考へた揚句、南洋へでも行つて見たら面白からうかとボンヤリ考へて見ました。所が私は南洋と云ふものに對しては甚だ認識不足でありまして、昨年獨逸へ行きました時に、獨逸語で所謂ヅード・ゼーの面白いことを頻に聞きましたし、又獨逸人がヅード・ゼーに對して非常に興味を有つてゐる話も聞き、歐洲所々の人種學博物館で集めた數多の南洋土人の作つたものも見ましたが、其の南洋とはどんなものか一向分らない。恐らく皆樣——と言つては失禮でありますが、皆樣の中の多くの方も同樣だらうと思ひます。唯南洋南洋と言つて居りますが、其の南洋とはどんなものか、又どう云ふ所が南洋に在るのかと聽かれて、明瞭に答へ得る人は餘り多くないのではないか、私も實はさう云ふ風な意味で南洋を知らなかつたものですから、一度南洋へ行つて見たいと思ふたのであります。然るに恰度暑中休暇の始まる前に、或新聞社の方が來られて、雜談をしてゐる中に、今年は一つ南洋へ行つて見やうかな、と言つた所が、それを新聞のゴシツプに書かれた、それが可なり反響があつて、南洋へは何時行くのか、南洋へ行つて何時歸つて來たか、南洋へ行つたのならば、何か話があるだらうから、一つ話して呉れぬかと云ふやうなことを、まだ第一行くこともハツキリしない中から、彼方此方より聽かれました。其の內にそれを新聞に書いた人が又やつて來て、お前は何時南洋へ行くのだと聽かれたり、甚しいのは、外國へ行つた人からお前は何時南洋へ行つて何時歸つて來たのかと云ふやうな「はがき」を寄越して來ると云ふやうな譯で、私の南洋行の話が可なり擴がつてしまつた爲に、到頭どうしても行かざるを得なくなつたのであります。併し行くことになりましても、南洋と云ふものに對して多少疑懼の念もありました。マア行つても可いが、果して面白いかどうか、又海上も相當荒れると聞いて居りますので、果して安全に行けるかどうか、無論連も無く、一人で行くのでありますから、多少さう云ふ點も心配でありました。そこでツーリスト・ビウローにも行つて、南洋行の情報を調べて



見たのでありますが、ツーリスト・ビウローの人も南洋のことは能く知りませぬが、茲に郵船會社から出して居る南洋に關する印刷物があるから、之を御覽になれば分りませうと一枚刷りのリーフレツトを出して呉れると云ふやうなことで、是も甚だ不得要領でありました、南洋のことを詳しく知つてゐる人は、南洋廳關係の人は兎も角、其の他には甚だ少いやうでありますから、自分が行つて見て、さう云ふ點を紹介するのも可いことであらうと云ふ考で、思ひ切つて南洋行の切符を買つてしまひました。又私は豫て迎苦避樂と云ふことが修養の一つであると考へ、總て健康體の者は成べくさう云ふ風にした方が可いと信じて、夏は寒い方に行き冬は暑い方に行くと云ふ燕などゝは反對に、夏は暑い所に、冬は寒い所に行つて身體を鍛錬すると云ふことを多年實行して居りますので、暑い時に南洋へ行つて、どんなものか見て來るのも可いし、又果して南洋土人はどんな生活をしてゐるのか、あの熱い所にゐて、どうして健康を保持してゐるか、其の保健法と云つたやうなものを見るのも可からう。斯うした色々な考や事情が一緒になつて、此度の南洋行を實行することになつたのであります。

所が一體どんな船が南洋へ行くのかと云ふことさへ分らなかつたのでありますが、調べますと、南洋廳の命令航路として郵船會社の船が一月に二回、略々二週間おき位に出ます。其の船は何れも小さなもので、大抵二千四百噸位から、大きいので三千五六百噸、餘り大きい船は行きませぬ。而も皆古船ばかりで、私が乘つたのは進水後三十二年も經つた、人間で云へば、マア六十五六のお婆さんと云つたやうな船で、錆だらけの可なりひどいボロ

船でありましたが、其の他の船も皆そんなものださうであります。即ち南洋航路と云ふものは郵船會社の方でも餘り重きを置いてゐないらしく、船長以下の乘組員も極めて老朽の人か或は若手の是から修業をしやうと云ふやうな人許りで、働き盛りの船員は南洋航路には乘せないと云つたやうな狀況であります。



南洋サイパン島カナカ土人の踊り

そこで南洋とは一體どう云ふ所であるかと云ふことを申上げますが、所謂獨逸語でヅード・ゼーと云つてゐるのは、極めてボンヤリしたもので、其の後色々調べて見ましたが、私が最初から考へてゐたやうに、誰もハツキリしたことは知らない、恰度支那とは何ぞやと云ふ問題が起ると同じやうに、假に南洋とは如何んと云ふ問題を出したならば、殆んど誰も明瞭に答へ得る人は無いと云ふことが分りました。仍ち私の調べた所に依りますと、ヅード・ゼーと云ふことは、十六世紀頃から言ひ出されたのであります。十六世紀と云へば日本では足利の末期でありますが、當時和蘭、西班牙、葡萄牙の人々の間に航海熱が勃興し、盛に世界中の海を乘り廻して、前人未踏の大陸や島を發見したのであります。コロンブスが亞米利加を發見したのも其の一つの現れでありますが、其の當時葡萄牙人が初て南洋と云ふことを言ひ出したと云はれて居ります。是は一寸面白いことでありますが、十五世紀の末に葡萄牙人が初めて東印度に對する航路を發見し、頻に印度の寶物を船で運んで、其の國を富ましてゐました。而して西班牙と葡萄牙は當時世界の二大强國として、兩國民は總ての點に於て競爭をしてゐたのでありまして、西班牙人は葡萄牙人の印度航路の發見に對して何か他に新しい天地を發見しなければ其の競爭相手に負けてしまふと云ふやうな關係になつた譯であります。所が記錄に依りますと、千五百十三年の九月二十五日と云ふのでありますが、中央亞米利加パナマの地方に勤めてゐた西班牙の官吏が土人の酋長から聞いたことはパナマの南の方ダリエンと云ふところにカンパスと云ふ小さな山がありまして、其の山に登つて西の方を見ると、向ふに非常に大きな海が見えると云ふことでありました其官吏が一日其の山に登つて見た所が、果して西の方に果しも無く擴がつてゐる大きな海が見えたので、非常に欣んだ。即ち葡萄牙人は東の方へ行つて富を得たが、西の方へ行けば斯う云ふ大きな海がある、其處へ行つたら、葡萄牙人の鼻を明かせるだらうと云ふので、それを名づけて太平洋と云ひ、墨西哥から西の方に向つて航路を開いて行つたと云

ふのであります、斯うして西班牙人と葡萄牙人が千五百年から千六百年に掛けて互に競爭して、亞米利加を中心とし、東西に船をやつて、盛に諸方の海を探檢したのでありますが、當時有名なマゼランと云ふ航海者が西班牙のセヴィラの港を出發し、西へ西へと行つて、亞弗利加の南端喜望峯を通り、更に西へ進んで、太平洋の所謂南洋の邊りに來て、非常に澤山な島があるのを見て驚き、又印度洋を通つて、歸つて來たと云ふ記錄が出ましたので西班牙、葡萄牙の航海者は益々爭つて此の邊を探檢した、其の時分は赤道の南の方から北へ上つたらしいのでありますが、此の邊には澤山面白い島があつて、其處には變つた人間が住み、又變つた動植物が澤山あつて、金銀も豐富に在ると云ふやうなことが云はれ、此の邊をボンヤリ「サウス・シー」と稱したのであります。此處には二千以上の島がありますが、それを十五六世紀以後數百の航海者が漸次發見して、斯う云ふ多くの群島の在ることを知つたのであります。即ち日本の眞南に當り、恰度富士火山帶が海に延びて居る線をズツと南に下りて來た所の赤道から北の方二十度附近に在る群島をマリアナ群島と云ひ、其の西南に在るのをカロリン群島、東に在るのをマーシヤル群島と稱し、其の南に在るのがギルバート群島で、カロリン群島の南に在るのがアドミラルチー群島でありますが、今では是等五つの群島を總稱して南洋と云ふのであります。併し人に依りますと、其の外にボルネオ、ジヤバ、ニユーギニア等附近一帶の諸島を南洋の中に入れて居りまして、何れにしても餘り區劃のハツキリした名稱ではありませぬが、一般の常識に從ひますと、先づ大陸に近いジヤバ、キユーバ、フヰリツピン群島などの部分を名づけて表南洋と稱し、それより東の群島を裏南洋と云ふやうであります。尤も裏と云つても裏らしくありませぬし、どう云ふ譯で裏か表か、私共から申せば、寧ろ之を逆に云つた方が宜いやうにも思ひますが、或は西洋人を尊敬した一つの現れかも知れませぬ。即ち大體西洋人の有つてゐる方を表と云ひ、日本の有つてゐる方を裏と云ふのでありませう。それは兎も角其の裏南洋中に於るマーシヤル、カロリン、マリアナの三群島を歐洲戰爭の結果、大正六年から日本が國際聯盟から委任を受けて統治して居るのでありまして、其の委任統治なるものは無論御承知のことゝ思ひますが、國際聯盟の申合せに依つて、日本が此の地方にゐる土人の開發に努め、之を敎導し、是が爲に外敵を防ぐと云つたやうなことで、之を保護すると云ふ立場に在るだけであります。謂はゞ國際聯盟から預つてゐるのであつて、是は日本のものではない。從つて若し國際聯盟と日本とが絕緣するやうなことになれば、日本は當然之を國際聯盟に還して、國際聯盟の方で改めて又他の國の委任統治に歸せしむべき性質のものであります。所が近來滿蒙問題で、日本と國際聯盟との關係が少々面白からぬ風向になつて來まして、日本の國際聯盟脫退說もちよいちよい聞えるのであります。さうなれば、是は當然還してしまはなければならぬことになるから、之を還す前に見て置いた方が可からうと云ふことも、私が今度南洋行を決心した理由の一つであります。又それに關聯して、假に國際聯盟と日本とが絕緣したとして、日本が果して之をおとなしく還すかどうか、どうも

今の樣子では日本がそれではどうか——と云つて還しさうにありませぬ。然らばどうなるかと云ふと、結局武力に訴へても日本が之を保持すると云ふことになるより外ないのでありますが、さう云ふ場合に日本としてどう云ふ風な軍事上の防備が出來てゐるか、無論國際聯盟の規約中には、委任統治區域内には一切兵備をすることは禁ずると云ふ明らかな條項がありますし、又實際其の中には要塞を造ることも出來なければ、軍港を設けることも出來ないのでありますが、一朝有事の際、直に之に要塞を造り、直ぐ築港をするだけの用意が出來てゐるかどうか、それも見たいと云ふ一つの興味もあつたのであります。


南洋サイパン島　カナカ土人の椰子實採集

尙ほ今日の日本人種なるものは、南洋の方からやつて來た民族と、北方の大陸から入つて來た民族とが混血して出來たものであると云ふ學說が有力になつて居りますし、又純粹の日本建築と云ふものは南洋の建築に其の源を發してゐると云ふやうなこともちよいちよい耳にも致し、讀んでも居りますが、實際南洋にはどんな家があるのか、其の實物を見ない以上は果して其の說が正しいのかどうかも分りませぬので、實際に南洋の土人や其の家を目の當りに見たいと云ふ希望もありました。彼是さうした色々の理由から、到頭おみ輿を上げたやうな次第であります。

是等の群島は、十六世紀頃にはマリアナ群島とか何とか云ふやうな名はついてゐないで單にポリネシヤと云つてゐたさうであります。「ポリ」とは「多く」、「ネシヤ」は「海島」と云ふ意味で、即ち多島海と呼んでゐた譯でありますが、其の中東の方のものを名づけてミクロネシヤと云ひ、西の方のものを名づけてメラネシヤと云つて居ります。即ち「ミクロ」と云ふのは「小さい」と云ふ意味で、此の邊は直徑二三町から五六町位の小さな島が無數に集つてゐるから、ミクロネシヤ、「メラ」とは「黑い」と云ふ意味で、黑い人間がゐる島であるから、メラネシヤと呼んだ譯であります。今日でも政治上の分類としては色々の名がついて居りますが、學問上の名としては往々ミクロネシヤ、メラネシヤと呼んでゐるやうであります。而して茲に南洋と云ふのは、餘りボンヤリしたものを指さず、假に今日本が委任統治をしてゐる範圍を指すものと定めて置きます。

そこで其の廣袤はどうかと云ひますと、區域は東徑百三十度から百八十度に達し、南は赤道直下から北は約二十一度の間の所謂立派な熱帶の中に在るのでありまして、東西二千

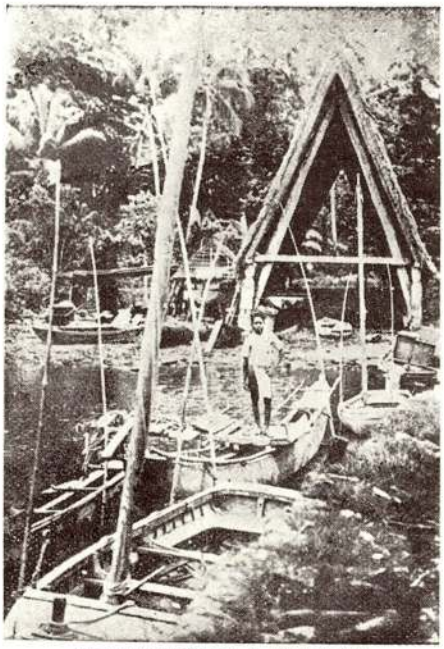
五百哩南北千二百哩と云ふ可なり大きな區域であります。第一日本と比べれば能く分りますが、日本の何十倍と云ふ廣さでありまして、其の中に在る島の數も千六百ばかりに達して居ります。

又其の産物は實に豊富なものでありまして、行つて見ると、如何に熱帶地方の天然が恵まれてゐるか驚くべきものがあります。それは後にお話することにしますが、更に又其の特徴とすべきことは、此の委任統治區域内に在る島には噴火山が非常に多いと云ふことであります。殊に日本の伊豆半島から大島、八丈島、小笠原島を傳つて南下して來るとウラカス、アグリガン、サリガン、アナタハン、サイパンと云つたやうな島々は殆ど皆元來は噴火山でありまして、其内で現在盛に煙を噴いてゐるのが三つばかりあります。船で通ると、左舷に於てそれ等の火山が見られますが、此の火山の多いと云ふのも南洋の一つの特徴でありまして、今でも時々新しい噴火山が海の中に出來るさうであります。全く何も無い海面に突然大爆發を起して、海の中から火を噴く火山が現れ、二日三日經つと又何の形も無くなると云ふやうなことが幾らもあると云ふことでありまして、天然の驚異と云ひますが、實に面白い現象が此の邊には能く起るのであります。而してポリネシヤと云ふ程澤山ある島が皆尖がつた山でありまして、其沼海が非常に深い。一哩も沖へ出ると、五十尋から百尋もある所は珍らしくありませぬ。一町か二町足らずの所でも十尋も二十尋もあつて、迚も錨が利かない。小笠原島が已にさう云ふ風でありますが、是も南洋諸島の特徴の一つでありまして、何れも皆圓錐體狀の噴火山の恰好をしてゐます。古い島は頭が缺けて、がさがさになつてゐますが、新しい島は皆尖つて居ります。そんなものを見るだけでも、日本に居つて不景氣なことばかり見てジメジメして居るより此の邊の天然を見て歩くことは餘程面白いことと思ひます。

是等の群島の名の起源も一寸面白いことであります、マリアナ群島と云ふのは千六百六十八年に當時の西班牙王フイリツプ四世の皇后マリヤ•アンナ•アウストリヤが土人の爲にお金を下賜されたのを記念する意味で、マリヤ•アンナと云ふ皇后の名を取つてマリアナ群島と稱したと云ふのであります。マーシヤル群島と云ふのは、彼のマゼランと同時代の大航海者で、千七百八十一年に此の群島を探檢して廣く世間に紹介した英國の船長マーシヤルの名を取つたのであります。カロリン群島と云ふのは、千六百八十六年是が西班牙のものになつてから、有名な時の國王カロロ二世の名を取つたのであります。

前述のやうな譯で、南洋の島の數は最も小さなものをも入れいば二千に垂んとするものでありますが、大きい人間の住へる島だけでも相當澤山あります。即ち人間が住んで、耕作もやり、相當の産業を擧げて居る島がマリアナ群島だけでも十五あり、カロリン群島には二十幾つあるさうであります。東の方のマーシヤル群島は殆ど皆珊瑚礁であつて、餘り産業の起るやうな島はありませぬ。島の數は非常に多いけれども、特に名高いのは少なく、二十五六しかないのであります。

私は今度カロリン及マーシヤル群島まで行きたかつたのでありますが、横濱を出て、此の島までズツと廻ると、往復四十五六日要かります。四十五六日も要かれば、倫敦まで行けますから、此の邊を廻るのは止めて、サイパン、テニアン、ロタと云ふやうなマリアナ群島だけを見て來ました。マーシヤル、カロリンの方は又更めて行つて見たいと思うて居ります。


パラオ島村落のアタオ(舟着場)とアデヤンカル(舟倉)

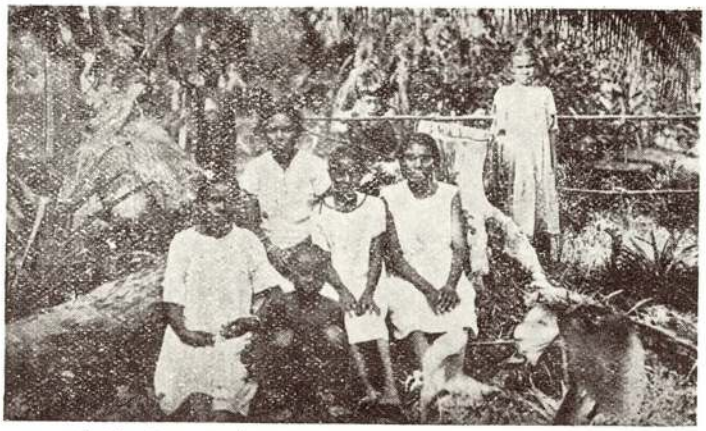
是等の島は悉く珊瑚礁でありますが、ダーヰン著作の有名な「オクヂン•オフ•スペシース」や其の他色々の動物學の本などに書いてある珊瑚礁の有らゆる形體のものが皆備へてゐて非常に面白い。私の行つたサイパンやテニアン邊はまだまだ完全な珊瑚島は出來て居りませぬが、カロリン群島のボナペ島やトラツク島、マーシヤル群島のヤルート島と云ふやうな所に行きますと、實に面白い島があるらしい、繪はかきや、色々の圖面を見ると、皆出て居りますが、最も面白いのは環礁島と稱する環狀の島で、環は總て珊瑚礁であつて其內が海であつて、環の所々缺げてゐる所から船が出入するのでありますが、實に天然の良港になつてゐて、外は非常に荒い波があつても、中は極めて靜で、太洋の眞中に自然の防波堤が出來てゐる譯で唯水深の淺いのだけが遺憾であります。又裾礁(リーフ)と云つて、島の周圍に珊瑚が繁殖し、島を取り圍み自然の防波堤を形成してゐるものがあります。是はサイパン島やテニアン島などに行くと、能く見られます。現にサイパン島の如きも大きな裾礁で周圍を廻らされ、眞中に島がある譯であります。其の他隆起珊瑚礁と云ふのが到る處に在ります。是は何等かの地變に依つて、珊瑚礁がズツと隆起して山になつてゐるのでありまして、サイパン島なども矢張り其の一つでありますが、サイパン島の殆ど半分は珊瑚であつて、殊に眞中に在る千五百尺の山は悉く珊瑚であります。元來珊瑚は水溫が攝氏二十度以上で、三十尋以下の深さのある所でなければ育たぬものださうでありますが、此の邊は前述の通り海の非常に深い所であつて、海水溫度は二十一度から二十五度位で、珊瑚の發育には最も適當した所であります。さう云ふ風な島の狀態を見るのも亦面白いことであつたのであります。

南洋諸島の土人は食肉人種と云ひますが、野蠻人の中でも人間を見ると食ひたくなる、殊に少し肥つた肉の軟さうな人間を見れば、食つたら甘からうなと思ふやうな食人種であるやうに今でも誤解されてゐるやうであります。又事實昔は漂着した船頭其の他を可なり

虐殺したものらしいのでありますが、決して人間の肉を食つて悦ぶやうな人種ではありませぬ。何故さう云ふ誤解が生じたかと云ひますと、南洋諸島の人間は何しろ斯う云ふ風な大海の離島であつて、滅多に他處に行くことは出來ないし、一向產業が起らないので、彼等は金屬に對する執着が非常に强い、金のものは鐵でも眞鍮でも何でも皆欲しがる、釘一本貰つても、非常に欣んで、それをたゝいて色々な飾りにする。さう云ふ風に金屬に對する欲求が非常に强いものでありますから、船が漂着したやうな場合は、先づ以てさう云ふ金屬を奪らうとして、それを邪魔する人間は殺してでも奪ると云ふやうなことがありました。現に明治十七年でありましたか、マーシヤル群島に漂着した日本の船頭が十七人虐殺されたと云ふ事實があります。是は日本人は知らなかつたのでありますが、英吉利の捕鯨船エーダ號の船長がマーシヤル群島の或島で日本人が虐殺されたことを聞いて、横濱に寄港した際當時の官憲に知らして呉れたのであります。此のエーダ號と云ふのは二百噸ほどの木造帆船であつて、今から考へると、小さな船でありますが、それで以て此の邊で鯨を獲つてゐたのであります。それを聽くと、日本では大騒ぎをして、後藤猛太郎と云ふ人が使節として出掛け、到頭敵き討をして來たと云ふことでありますが、其の他西班牙人や葡萄牙人が盛に此の邊を航海してゐた時分に數千の犧牲者が現はれたことは記錄に存して居ります。併しそれは元々人の肉を食ふ爲に殺したのではなく、船に在る金屬性のもの、殊に彼等が最も欲しがつてゐる鐵砲や彈藥を得たい爲であります。又葡萄牙人や西班牙人が此の邊を持つてゐた時は隨分土人に壓制を加へたのであります。今でもさうでありますが元來歐羅巴人は自分等以外の人種は皆野蠻人のやうに考へ、ことに色の黑い人間は猿か何か動物のやうに思うて、非常に虐待をするものでありますが、此の邊の人種は虐待されることを好まない、無論誰でも虐待を好む者はありませぬが、普通以上に氣慨のある土人でありまして、彼等は元と日本から來たのだと云つて居りますが、多少似た所があります。なかなか利かぬ氣の土人でありますから、西班牙人や葡萄牙人が色々な壓制をするのに反抗して、土人全部が一人殘らず虐殺されたやうなこともあります。兎に角此の邊には可なり血腥い記錄も澤山殘つて居りまして、さう云ふことから此處の土人が食人種であるやうに云はれたものと思はれます。

南洋諸島と日本の從來の關係はどうかと考へて見ますと、日本人は海の子と云はれる位で、昔から海洋に出て、漁をしたり貿易をすることは、相當やつて居りましたが、主として琉球臺灣を經て呂宋から暹羅と云ふやうに、大陸寄の方に行きまして、此の方面には餘り關係はなかつたのであります。今申した明治十七年に後藤猛太郎氏が行つた時のことなどは最も關係の深いものであつて、其の時は九月に出て、翌年の一月に歸つて來たので、四箇月も要かつて居ります。尤も二百噸の船でありますから、そんなものでありませうが今では往復三週間もあれば可いのであります。又軍艦が遠洋航海をする時は必ず此の邊を通ります。殊に此の邊は何か航海術を修得するのに都合の好い所と見えて、若い連中が最

初軍艦の操縦を稽古する爲に度々此の邊に出掛けますが、一番初に行つた軍艦は龍驤であります。明治二十三年に東京府の士族の授産事業として南洋通商會社と云ふものを造り、有名な田口卯吉氏が社長となつて、サイパン島に於て何か事業をやらうと云ふので、當時としては相當大金である四萬四千圓と云ふ資本を有ち、二十人近い士族を伴れて行つたのでありますが、是は失敗に了つて、歸つて來ました。先づそんなこと位で餘り大した關係はありませぬ。尤も南洋の西班牙人や土人に物貨を供給する爲に日本人が此の邊にやつて來たことは、明治十七年頃から幾らもあつたことが記錄に見えて居ります。現在南洋貿易をやつて居る主なものは南洋貿易株式會社で、彼方では南貿々々と云つて居りますが、是は明治二十四年からやつて居ります。そんなことで段々我國との關係が出來て來て居りました時に、歐洲大戰が始りまして、青島から逃げて來た獨逸の船が此の邊にうろついてゐたのを日本の軍艦がやツつけてしまつて、パラオからボナペ邊の島を占領し、引續き戰爭中日本の軍艦が守つてゐて、戰爭が濟むと、日本の委任統治區になつたのであります。それが大正三年で、可なり新しいことであります。



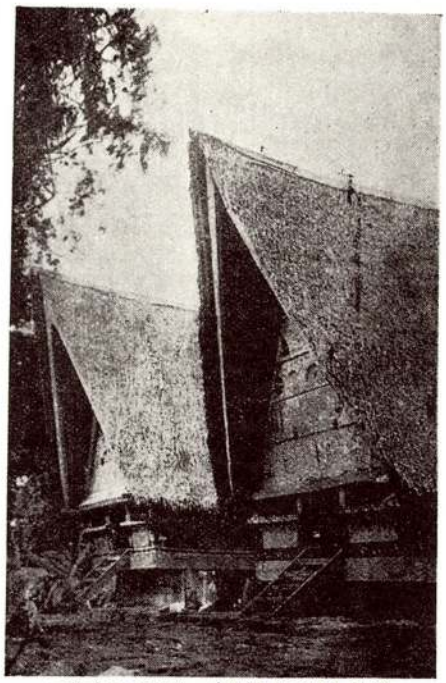
南洋パラオ島　アラバケツにて島民風俗

大體斯う云ふ風な歷史があつたのでありますが、次に南洋の島の特徵をお話しますと、南洋の島は餘程內地と違ふ特徵がありまして、先づ風土病が極めて少い、流行病と云ふものは殆どありませぬ。唯フランベジヤと云ふ南洋特有の病氣が一つあります。是は又非常に妙な病氣であつて、而も甚だ數が多い、併し土人に限つて起るやうで、土人は一年に二千五百六十人も罹病してゐるのに、日本人は唯八人しか罹かつて居りませぬ。其の症狀は黴毒と同じ徵候を呈し、皮膚に腫物が出來、それが段々潰瘍をして、腐つて脫れて來るのでありますが、全身病になると死んでしまふのであります。是は花柳病と違つて、性的關係から來る病氣ではなく、一種の傳染病であつて、人から人に傳染して行くのでありますが、是が從來土人の人口の繁殖力を非常に阻碍して居りました。所が日本の委任統治以來是が特殊の治療法を發見して、即ち黴毒と同樣六百六號を注射してやると、綺麗に治りますので、此の頃は其の數が非常に減つて來たと云ふことであります。是が南洋の特殊な病氣であつて、其の他には殆ど病氣らしい病氣はありませぬ。又此の島、殊に所謂南洋の中

でも我が委任統治をやつてゐる島の中には蛇が一匹もゐない。私の行つてゐる間にも蛇に會つたことはありませぬし、聞いて見ると、實際一向見た者が無いそうであります。又猛獸――と云ふより野獸は殆どゐない。島が小さいから、居れば、皆獲られてしまふからでありませうが、現在此の島にゐるのは野飼の豚だけであります。それが初は普通の豚であつたのでありませうが、野に放養をするに從つて、元の猪の形に段々還つて來て、牙が生へて居ります。それが野獸と云へば野獸で、其の他には何も居りませぬ、牛は居りますが、飼つてゐるので、無論野獸と云ふべきものでありませぬ。さう云ふ風に猛獸毒蛇は全くゐないのでありますが、其の代り非常に猛烈な蜂が居りまして、之に對しては土人は極度に恐れてゐます。私も一度やられましたが、土人は裸でありますから、蜂に取つては何處でも刺すことが出來るので、極めて都合が好い譯であります　非常に強い蜂で、何か之を怒らせるやうなことをすると、必ず猛烈に襲つて來て刺すのでありますが、それが爲に熱を出して死んでしまふことがあるさうであります。殊に土人の小供などには蜂に刺殺された例が幾らもあると云ふことであります。

氣溫は非常に低く、測候所が創設されて以來、其の記錄に依りますと、最高溫度が攝氏の三十一度であります。赤道直下でありながら、僅か三十一度より氣溫が上らないと云ふことは一寸想像が出來ないことでありますが、私が八月の初から八月の終まで居りました間に氣溫が三十度(華氏八十六度位)に達したのは唯一回だけであります。平均溫度は二十九度でありまして、殆ど晝夜の溫度の差がありませぬ。從つて日本の如く春夏秋冬と云ふやうな季節の變化が無い、向ふの人に言はせると、春夏秋があつて無冬の國だ、言ひ換へれば、常夏の國だと稱して居りますが、平均二十九度位ならば、年中夏だと言つても宜い譯であります。而して濕度はどうかと云ふと、斯う云ふ小さな島であつて、深い海に取捲かれてゐるのでありますから、さぞかし濕氣は多いだらうと思はれますが、濕氣は割合に少く、平均六十パーセントであります。即ち日本で云へば、春の終頃の濕度でありまして、日本の夏は九十パーセント位になることはさう珍しくないのでありますから、そんなに氣持の惡い濕度ではありませぬ。風は一年を通じて平均秒速五米であります。五米の風と云ふと、煙突の煙が稍々傾く位のものであります。偶々暴風の吹くこともありますが、極めて稀であります。而して十一月頃から四月頃までに掛けては東北の風がのべつに吹いて居ります。所謂貿易風でありまして、即ち五米位の速さであります。其の他の時期は其の反對で、西南の風が吹いて居りまして、此の西南の風が吹く時期に於て時々暴風雨があります。私が行きました時は雨季でありまして、又西南の風が盛に吹いて居りましたが、暴風雨の爲に航海の出來ないこともある相當警戒しなければならぬ時期で、謂はゞ一番惡い時に行つた譯であります。此時期を南洋の雨期と申して居ります。雨量は非常に多いのでありまして、平均三千ミリから四千ミリと云はれて居ります。日本では一番雨の多い所で千五百ミリしかありませぬ。即ち其の倍以上の雨が降つてゐる譯でありますが、實は此の雨

が多く降る爲に此の邊の人間が生きてゐるのであります。と云ふのは、雨が降ることに依つて、氣溫が非常に低くなるのであります。詰り晝の間にズツと氣溫が上つて來て、攝氏の三十度位まで上りますと、急に空が曇つて、驟雨になり、氣溫が二三度下ります。雨が上ると、又段々高くなつて、三十度位になると、又雨が降つて、氣溫が下ると云ふ譯で、三十度以上には滅多に氣溫が上らない。即ち雨が南洋をして愉快な氣候ならしめてゐる一つの原因であります。もう一つの雨の効用は、南洋諸島は何れも面積が小さく全部岩石層である爲に、井戸を掘ることも出來ませぬが、掘つた所で、水は出ませぬ。それで島民は皆雨水をタンクなどに溜めて置いて飲んで居りますので、雨が降らなかつたら、生きて居られないのであります。其の雨が日本の内地よりは倍以上も多量に降るのでありまして、結局南洋諸島の人間はそれに依つて息をついてゐるのだと云へば、云へるのであります。



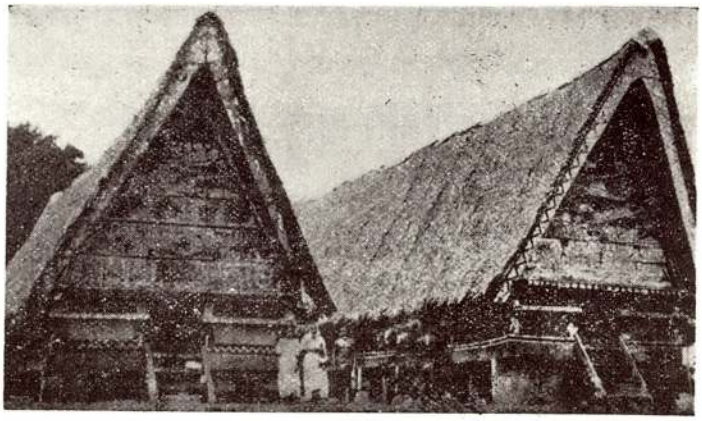
パラオ島アバイ（島民集會所）外部

斯う云ふ風に風が無く、氣溫は低くて非常に氣持の好い所でありますが、時々暴風雨が起りまして、それが又非常な強風が吹くのであります。從來の最も強い記錄としては四十米と云ふことでありまして、それに近い暴風が時々吹くのでありますが、内地ではそんな強い風は吹いたことがありませぬ。所が此の邊の島は皆珊瑚礁で、海岸より中が低いものですから、さう云ふ暴風が吹くと、島全體を浪で覆ふてしまつて、椰子の林が全滅したとか或は島民が悉く海に流されてしまつた、或は海の魚が死んで打ち上げられたとか云ふ記錄があります。從つて此の邊の島に住んでゐる者は餘り安心は出來ない、平常は靜かだと思うて、安心してゐると、時々さう云ふことがあります。大正三年の暴風はサイパン島の椰子林を全滅さしたと云はれて居ります。南洋廳の役人なども何時さう云ふ暴風雨が來るか分らないので、可なり心配して居りますが、實際そんな目に會つたら大變であります。而して暴風が起きるのは何時も此の邊が中心でありまして、日本でも二百十日前後に能く暴風が來ますが、あれは皆此の邊から起つて、クルクル廻つて比律賓を通り、台灣から石垣島を經て、日本へ上つて來るのであります。詰り此の邊はあの二百十日前後の日本へ來る颶風の卵が出來る所であります。だから油斷は出來ませぬが、併し此邊では颶風は初期でありますから、多くの場合さうひどくはありませぬが、此の邊で起つた颶風が石垣島に來る頃には非常に強くなつて來る譯であります。

土人は本島人と云つて居りまして、うつかり土人などと言ふと、叱られますが、本島人と云ふのは、即ち昔の野蠻人で西洋人のサウスシー・バーバリアンと云ふてゐる種族であります。此の本島人は獨逸領であつた時は段々減つて行つたさうでありますが、日本が統治をするやうになつてからは年々人口が殖えて居ります。其の人口が殖えることは可いか悪いか可なり重大な問題でありまして、さう云ふ意味に於て獨逸人は本島人を減すやうにして居りましたのが、現在は一寸方針が變つて來て居る譯であります。或はさう云ふ人間が殖えることは日本の爲にならぬと言ふて居る人もありますが、年々殖えて行つてゐるのは事實であります。此島人の人口增減などは常に國際聯盟に報告して監視されて居ります本島人には二種類あつて、一はカナカ族一はチヤモロ族と云つて居ります。カナカは純粹な土着人で、眞裸であつて、如何にも野蠻人らしい樣子をして居ります。チヤモロはカナカに能く似た人種でありますが、稍々開けて、家も家らしい家に住み、一寸西洋人のやうな恰好をして居ります。私共が見て面白いのはカナカ人で、チヤモロは些とも面白くありませぬ。西洋人の眞似ばかりして居りまして、其の容貌も一寸西洋人に似た所がありますが、カナカ人はさうぢやありませぬ。なかなか利かぬ氣な猛烈な顏をして居ります。現在チヤモロは二千九百五十三人で、カナカは四萬五千八百四十五人居りますが、カナカは本當の原始生活をして居りまして、どうしても不衞生でありますから、其の數は段々減少するよふな形勢でありまして、フランベジアの罹病數もカナカの方が多い譯であります。是等に對して日本人は三萬九千餘行つて居ります。

カナカと云ふのは南洋語で人と云ふ意味ださうでありますが、是は西班牙人が彼奴は猿ぢやない人間だと云ふやうなことから名づけたのであります。チヤモロと云ふのは頭髮を短く切つた人と云ふ意味ださうでありまして、カナカは縮れた髮を少し長くして居りますが、チヤモロの方は散髮すること位知つて居る頭髮の短い人間と云ふ譯であります。尤も土人に聽きますと、チヤモロと云ふのは、日本語だと云ひます、何故だと云ふと「さむらひ」と云ふ言葉が變化してチヤモロとなつたのだと云ふのでありますが、少々當てになりませぬ。實は十六世紀以後歐羅巴人が南洋に來て、土人と交つて出來た者がチヤモロであつて、彼等には歐羅巴人の血が混つて居ります。だから、チヤモロの名前には餘程面白いものがあります。私はサイパン島の公學校（學校は小學校と公學校の二つがあつて、小學校では日本人兒童、公學校では本島人の兒童を教へる）を見に行きましたが、生徒の名前を見ると、其の約四割がフエルヂナンドとか、ホセとか、カロリナとか云つたやうな西班牙系の名を有つて居り、約一割が米國系、同じく一割が比律賓系で、殘りの四割が本當の土人の得體の分らない名前を有つてゐると云ふ譯であります、さう云ふ風に西班牙系の名前が四割もあると云ふことは即ち彼等にもそれだけ多く西班牙人の血が入つて居ることを示すものでありますが、眞黑な小學校の兒童がフエルヂナンドとかカルロスと云ふやうな西班牙人の名で呼ばれてゐるので、一寸異な感じをしました。

然らば彼等はどう云ふ生活をしてゐるかと云ふと、カナカは全部眞ツ裸で、何も衣服は用ひませぬが、唯陰部だけは婦人は腰巻、男は褌をして、之を蔽ふて居ります。そして男はあの赤黒い肌に椰子の油を塗つてテカテカ光らし、其の上に椰子の實から採つた黄色の粉を振掛けて居ります、我々が見ると、可怪しな厭なものでありますが、是が美いのであります。女も同様頭から顔からスツカリ椰子の油を塗つてテカテカ光らし、外に出る時には黄色の粉を塗つて行く、即ち白粉の代りに「おきろい」を塗る譯です　足は何處へ行くのにも皆跣足であります。だから、彼等の足は我々の穿いて居る靴よりは遙に硬い足をして居ります。そして宴會とか、何か寄合をするとか、踊をする時には又相當の飾をするのであります。即ち男は頭に草の蔓を巻き、其處に木の花を挿して、又椰子の若芽を挿て、手の肘や脚の膝の上下に椰子の葉をクルクル捲いて、外側に結び玉を拵え、南京玉の涎掛みたやうなものを頸に掛けて、腹には矢張り南京玉の帶をすると云ふやうな譯で、なかなか綺麗なものであります。女も大體男と同様で、唯野蠻人も女はお臀が大きいのでありますが、腰巻を締めて居ります。斯うして皆得意になつて居る譯であります。是は私の行きましたマリアナ群島のサイパンやテニアンのことでありますが、マーシヤル群島の方へ行きますと、女は腰巻をせず、椰子の葉で造つた腰蓑をして居りまして、それが歩くとパシヤパシヤ音がするさうであります。私は見なかつたのでありますが、寫眞を見ると、マア日本の漁師のやうな恰好をして居るやうであります。カナカは是以上何等の服裝も致しませぬが、チヤモロの方は薄い布で拵えた簡單な洋服を着て居ります。恰度此頃日本で流行るアツパツパのやうなもので、あれは何れ南洋から來たものでありませうが、詰り土人の眞似をしてゐる譯であります。そして彼等は非常に鮮明な色を好みまして、褌でも腰巻でもアツパツパでも色は總て非常に鮮明なものであります。即ち赤と黄と白を用ひまして、青や綠のやうな色は一切用ひませぬ。赤黒い肌の色と赤や黄色が能く調和しまして、それが天然の椰子の幹の灰色の間にうろついてゐる所は實に一種の色彩の調和があつて熱帶趣味が溢れて見えます。



パラオ島コロール島民集會所

さう云ふ風に裸であつて、餘り飾りの付けやうがありませぬから、皆文身をやつて居りますが、是がなかなか特徴のあるものでありまして、トラツク、ポナペ、ヤルート島邊り

の土人は餘程面白い文身をして居ります。即ち頸の所から全身に筋肉の線に沿ふて文身をし、前に述べた飾の所には皆飾の文身が出來て居りまして、私も一寸見ましたが、野蠻人に似合はず、非常に洒落れた文身をしてゐると思ひました。近來は土人もハイカラになつて、ちよいちよい薔薇の花や、ハート型の文身をしたりして居りますが、無論是は南洋土人本來のものではありませぬ。尙ほ南洋土人特有のものに創痕文身と云ふのがあります。鍼で刺して膚に繪具を入れ、創を付けると、其の創痕が隆起して「ひツつり」が出來たり、「ぼつぼつ」が出來ますが、其の「ひツつり」や「ぼつぼつ」を澤山拵えて紋樣を畫くのでありまして、例へば乳の所などに乳の形に沿ふて此の文身をして居ります。餘り美しいものではありませぬが、それを男の誇りとして居ります。詰り斯う云ふ痛い思ひをしても辛抱してゐる勇者であると云ふ一つのシンボルになつてゐて、お嫁が澤山來るのださうであります。

其の他體の裝飾としては、女は裂耳と云ふことを致します。即ち耳朶に孔を穿け、紐などで石か何か重いものをブラ下げて、其の孔が段々大きくなつた所で、其處に圓い石などを嵌めるのであります。詰り佛樣の耳朶のやうに長くなつて、美しいのださうでありますが、是はマーシヤル群島の方に多く行はれて居ります。

土人の中には大酋長(アイバク)、酋長(ルバク)、副酋長(ウルイルルバク)と云ふものがあつて、土人を支配し、其の外に女酋長(アイデイル)があつて、女の社會を統括して居りますが、殊に大酋長は土人の生殺與奪を自由にして殆ど絶對の權力を持つて居ります。是等に對して今日本の南洋統治は如何に取扱つてゐるかと云ふと、之を利用して土人の管轄をして居ります。而して彼等には各々日本の役名を與へ、大酋長を郡長、酋長を村長として居りますが、日本の村長がどんなものか知らない彼等は、村長と呼ばれて滿足し、昔の王樣が村長に成下つて、非常に欣んで日本の爲に働いて居ります。又大酋長と云つても大して偉い人間でもなく、傳統的の酋長の現實暴露の悲哀が其處にある譯であります。サイパン島の酋長の如きも、サイパン島の本島人の戸籍を預つて居りますが、實に人の好いお爺さんで、我々の一寸想像するやうな酋長らしい恐いお爺さんではありませぬ　所謂酋長の娘にも會つて來ましたが、例の俗謠にある「酋長の娘」のやうなものではありませぬ。色は洵に白くないのでありますが、極めて愛嬌があつて、日本語も相當に使ひますし、些ともおかしいものではありませぬ。

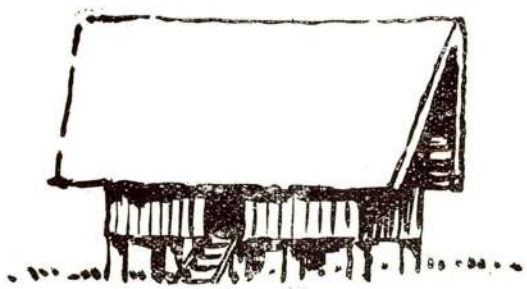
彼等の社會は純粹な共産主義でありまして、個人の所有權は殆ど認めて居りませぬ。そして何事でも合議制でやつてゐるのはなかなか面白いと思ひます。從つて集會所が澤山ありますが、之をアバイと云つて居ります、又靑年團があつて、之をガルデベルゲルと稱し、まだ結婚しない連中は此のガルデベルゲルに屬するのであります、結婚した連中はアバイに集り、島全體の政治をやる譯であります。アバイと云ふのは詰り日本の公會堂に當るものでありますが、此の公會堂やガルデベルゲルの建築は實に立派なものでありまして、寫眞のやうな形をして居ります。此の梁や合掌束などには皆繪が浮彫にしてありますが、そ



アバイの繪　　この繪はパオラ島の歷史を物語るものであります(記事參照)

れは島にあつた色々の出來事を記錄したものであります。仍ちアバイの繪は其の島の從來の歷史を物語るものであつて、其の中には色々敎訓的なこともあり、又色々な事實談もあります。是(標本2)はパラオの島にプールと云ふ小さな島の人間が漂着して來たのをパラオの酋長オカラパラオと云ふ者が世話をしたが之れを虐待をして魚の骨ばかり食はして、碌に食物を與へなかつた。斯うして暫く厄介になつてゐた漂流者は便船を得て自分の島に歸ることになつたときオコラパラオ酋長に、私は島に歸りますが、今後何か御用がありましたならば、何でも致しますから、言ふて來て下さいと挨拶して島へ歸りましたが、其の後彼は虐待されたことが餘程殘念であつたと見えて、木で魚の形を造り、其酋長が釣りに出たとき其魚で其酋長を其の島に引張つて行きて大いにそれを歡待し其歸るとき一つの箱を與へて「これは途中開けてはいけない歸島の後一家眷族が集つて開けて下さい」と云ふたので歸島の後之れを開けて見たら先きにプール人に與へた魚の骨が出て來たので大いに先非を悔いたと云ふ物語を現したものであつて、だから、惡いことをするなと云ふ意味であります。こちら(標本3)はパラオの島に大きな竹の筒が漂着したので、割つて見た所が、中に四人の人が居つた。どうしたのかと聽くと、彼等は星の世界を探檢に行つた歸途だと言つたと云ふことで、詰り大きな竹が漂着したことのある事實を物語つてゐる譯であります。斯う云ふ風な如何にも土人らしい無邪氣なお伽話のやうな物語の繪がアバイの梁や柱、合掌の所など一面に浮彫がしてあつて、アバイと云ふのはなかなか立派なものであります。是が各島に必ず一つや二つはありますが、大概海岸にありますので時々の暴風の爲に壞はされてしまふことがあります。其の他共同の舟置場が矢張りアバイのやうな工合に出來て

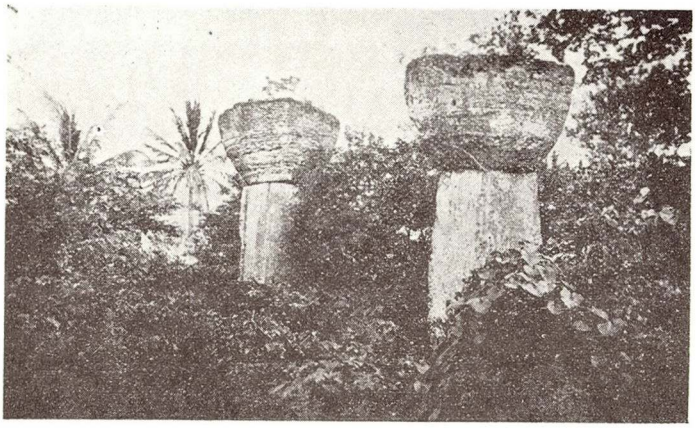
居ります。舟と云つても、普通にカヌーと云ふ丸木舟で、之をジアンゲルと云つて居ります。マア斯う云ふものを各島に於て共同の勞力と出資とで拵えてゐるのであります。



土人の住居はどうかと云ふと、是は後で活動寫眞で御覽に入れますが、大體斯う云ふ恰好（挿畫參照）でありまして何れも入口は梯子で上ることになつて居ります。是で聯想するのは伊勢の太廟でありまして、あの樣式は全く是と同じであります、屋根に千木勝男木のあるのが違ふだけで、下方の構造は伊勢太廟や出雲大社の原始形でありますが、何故かくの如く床を高く上げたかと云ふことが一つの問題でありまして、從來西洋の學者などは、詰り水の中に建てる家であるが故に、水準が高くなつたり、低くなつたりするのを調節する爲だと云つて居ります。所が實際南洋へ行つて見ると、水も何も無い陸の上に斯うした家を建てゝ居ります。何故さう云ふことをやるのか、是は又行つて見ると、能く分ります。即ち非常に光線の直射の强い所でありますから、其の反射光線を避ける爲に、床下を高くして、通風を良くしたものゝやうに思はれます。水の中に建てる家だから床を高くしたのだと云へば、さう云ふ水の中に建てる家を伊勢の山田のやうな所に建てると云ふのは可怪しいのでありますが、反射光線を避ける爲だとすれば、何等不思議は無い譯であります。是は私の今度得て來た土產の一つであります。兎に角土人の住宅はさう云ふ風でありまして、屋根はスツカリ象牙椰子の葉で葺き、下の柱はタマナ即タマハボクと云ふ木を用ひて居ります。是は白蟻に蝕まれないと云ふ特長があつて、非常に生長の速い直ぐ直徑七八寸位に大きくなる木であります。

食物は近頃小學校の本にも出てゐる通り極めて豐富であります。實は私は果物が非常に好きでありますから、美味しい果物を食べたいと云ふ希望もあつたのでありますが、食物としては先づパンの樹と云ふのがあります。土人はメーヌーと申します皆樣も御承知でありませうが、御承知ない方の爲に一寸申上げますと、是は高さ二三十尺位になるものでありますが、葉は樫の葉に似て居ります。實はフート・ボールの球位ありまして、中に芯がありますが、其の緣を食べるのであります。之を燒きますと、甘藷と栗の實の「あいのこ」のやうな味がして、實に甘い、是がパンの代用として常食になつて居りますが、一つ實がありますと、大抵大の男が四人程で食つても餘る位であります。又年中熟してゐるバナナや鳳梨と云ふやうなものが常食でありまして、其の他ヤムと云ふ芋は日本で謂ふ山の芋或は自然薯のやうなものでありますが、非常に大きなもので、之を一つ掘つて來れば、家内中は勿論近所合壁五六軒寄つても十分食ひ切れないやうなものであります　又タロ芋は日本で謂ふ里芋でありますが、是亦大きいものでありまして、殊に其の葉は最も小さいので

も三尺位、大きいのになると、五尺からあつて、其の下に人間が隠れられるやうなものであります。又葛の原料になるタピオカと云ふやうなものが常食になる譯であります。此の外に少し贅澤なものとしてマンゴ、ドリヤン、マンゴスチン、レモンと云ふやうなものが到る處にあります。殊にドリヤンは世界中で一番甘い果物だと云はれて居ります。土人が其の香を嗅ぐと、女房を質に置いても食はなければならぬと思ふ程のものださうでありますが、唯非常に臭いもので、例へば人糞のやうな臭がしまして、我々は其の臭が餘り猛烈なので、一寸手を出し兼ねます。併しそれを食べると、何とも言へない甘い味があると云ふ譯であります。マンゴもマンゴスチンも甘いものでありますが、ドリヤン程は甘くないさうであります。何れにしても斯う云つたやうなものが肥料も何もやらないでも、天然の儘年中出來てゐるのでありますから、土人はパンの樹が一本あつて、バナナが七八本植えてあれば、何等食ふに困らないのであります。加之何しろ島のことでありますから、魚は豊富であります。而もあの邊の魚は馬鹿なやつが多いので、手摑みに獲れます。土人は漁は甚だ下手でありますが、それでも大きな魚を獲つて來て、食膳に供へることが出來ます。



フン墓古石（南洋テニアン島）

斯う云ふ風に着物は要らず、食物は到る處に澤山あつて、何等生活に不安が無いので、土人には一向勉强心がありませぬ。又勉强する必要もない、金を儲けても何の役にも立たぬ。從つて土人の勞力に對して何等期待することが出來ない。是等の島には可なり日本の資本が入つて居りまして、サイパン島だけでも七百萬圓からの大きな砂糖會社がありますが、其處に働いてゐる者は内地の人間ばかりであります。多少は土人を雇つたら可さそうなものだと思ひますが、土人はそんな所に行つて、苦しい思ひをして働く必要がないと云ふので、寢てばかり居ります。パンの實を食つて居れば可いのでありますから、土人にして見れば、當然のことでありませう。私もパンの實は盛に食ひましたが、洵に甘いもので、内地人でも向ふに行つて、さう云ふものを食べてゐさへすれば、非常に樂だなと思ひましたが、日本人はさう云ふものは食はない。土人の食ふやうなものを食ふのは日本人の恥だ、日本人は米の飯を食ふのがエライのだとして威張つて居ります。それでこそ働けるのでもありませうが、土人の生活はそれ程安易なものであります。そして珊瑚は澤山採れるとき

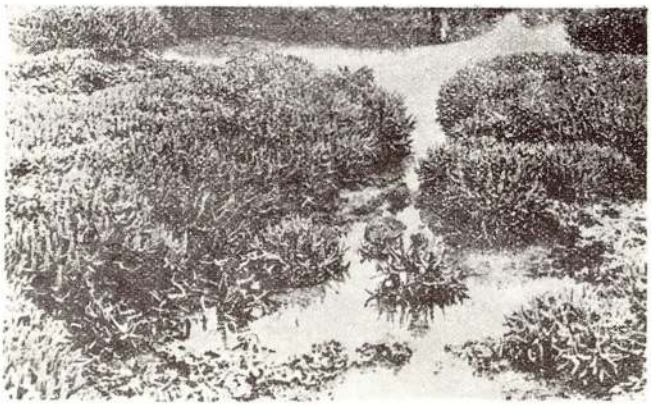
には採れますし、鰹や鮪と云ふやうなものも獲らうと思へば、幾らでも獲れると云ふ譯でありますから、彼等は不景氣などと云ふことは些とも考へて居ませぬ。マア不景氣で困る人は此の邊に旅行でもされたならば、氣分が轉換して可からうと思ひます。

斯う云ふ所でありますが、從來貨幣制度もあつたらしく、ヤツプ島に石貨と云ふものがあります。即ち眞中に孔の穿いた圓い石でありまして、大きいのは直徑八尺からありますが、小さいのでも一尺か二尺位あります　何れも石灰岩でありまして、貨幣と云つても、是で果物を買つたりするのではなく、大きな賣買をするのに用ひるのであります。即ち酋長が島を一つ買はうと云ふやうな時に石貨を以てするのでありまして、此の石貨を澤山有つてゐる酋長が一番富んでゐると云ふ譯であります　此の石貨が何故そんなに貴重なのであるか、圓い石塊を造るのは何でもないやうに思はれますが、南洋には石が非常に少い、パラオの近所に少し出るのでありますが、それを運ぶのには、カヌーが小さいから、それこそ命懸けでなければ運べませぬ。其の運送の勞力に對して價値がありますので、大きい程良いと云ふこともそれに依つて首肯されるのであります。

島民の教育に付ては、日本として現在は小學校程度のものしか造つて居りませぬが、其の外に宗教學校は澤山あります。宗教は今の所ローマン・カトリツクが一般に行はれて居りまして、他の宗教は殆どありませぬ　又ローマン・カトリツクに對して土人は非常な尊敬を有つて居ります。其の坊さんは西班牙人でありますが、之に對して島民は絶對服從でありまして、世界の誰れよりも西班牙の坊さんの方を遙に尊い者と考へて居るやうであります。是は日本の南洋統治上の一つの癌でありまして、何とかしなければならぬと云はれて居りますが、なかなか一寸改まりさうにもありませぬ。私は之に對して日本の天理教と大か本教と云つたやうな新興宗教を入れるやうにしたら可いのではないかと密に考へて居ります。佛教とか神道とか云ふ古い宗教を持つて行つたのでは決して受付けませぬ。迷信の多いフレツシユな宗教ならば却て能く受入れさせることが出來るのでないかと考へるのであります。ローマン・カトリツクが必ずしも悪いと云ふのではありませぬが、是あるが爲に西洋人の勢力を驅逐することが出來ないとすれば、日本が本當に南洋を手に入れやうと云ふのには、どうしても宗教的に之を驅逐するやうにやつて行かなければならぬと思ひます。

土人は踊に對して非常な執着を有つて居りまして、何かと云ふと、直く踊り出します、而もあの獰猛なる顔をした大の男が二十人なり三十人なり揃つて無邪氣に歌を唄ひながら手を打たき、足を踏んで踊るのでありますが、決して男女一緒には踊らない、男は男、女は女で必ず別々に踊ります。踊るのは大抵月夜でありまして、月が出ると、椰子の葉蔭や海岸で必ず二組や三組は踊つて居りますが、どう云ふ譯か南洋廳の方では踊を禁じて居りまして、役人が踊つてゐるのを見ると、解散を命じます　若し土人に踊つて呉れと頼むと、殊に南洋廳の役人の方からでも頼むと、欣んで、直ぐ二十人でも三十人でも例の椰子の葉

を頭に縛つてやつて來て、大きな聲で歌を唄ひ、手をたたき、腰をふらふらさして踊ります。近來は日本の歌を覺えて、土人の歌の中に日本の小唄を混ぜて歌ふのもあります。洵に無邪氣で面白いのでありますが、私の踊つて貰つたのは暴風雨のあつた後で、まだ雨も



珊　瑚　礁

十分上らなかつたのでありますが、時間が無かつたので、已むを得なかつたのであります。所が面白いことには、私の宿屋の庭に來て二十人餘の者が踊つて呉れたのでありますから何かお禮をしなければならぬと思つて、聽いて見ますと、バツトを一箱づつ呉れと云ふのです。煙草が非常に好きで、私が煙草をやりますと、大變欣んで歸つて行きました。それ程無邪氣な者であります。そして土人の家には燈りがありませぬから、夜は月の晩だけ踊るのでありまして、暗夜には絶對に踊りませぬ、踊れないのであります。從つて彼等の月に對する憧れは非常に强いのでありまして、月に對する歌や傳說も相當多く、南洋土人と月との關係は可なり深いものがあると思はれます。

又月に關係がある爲であるかどうか、多少關係もありませう、おかしな話でありますが、土人は婦人の月經と云ふものを極度に神聖視して居ります。仍ちヤルートやクサイ邊の島では月經ハウス(土人語で何と云ふか聽き漏しましたが)と云ひまして、其の時期に達した婦人は必ず一軒の家に集つて、其處には一切男子を近づけぬと云ふやうな習慣が出來て居ります。其の他餘程異樣な風俗習慣が澤山あるやうでありますが、如何にも日が短かくて、すつかり見て廻ることの出來なかつたのは遺憾であります。

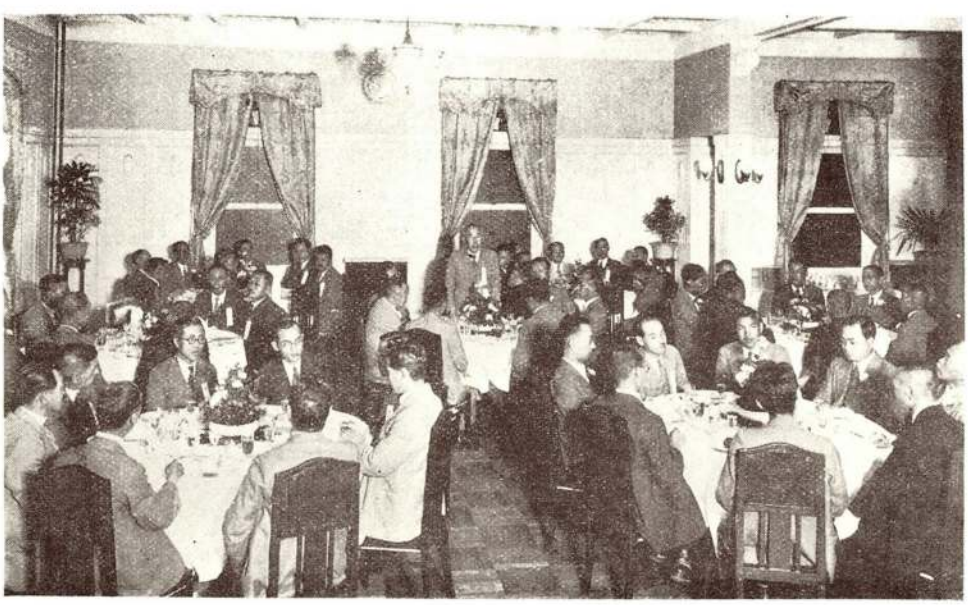
最後に南洋の產物に付て申しますと、今一番多いのは砂糖であります。サイパン島には七百萬圓の資本を以てやつてゐる砂糖南洋興發株式會社と云ふ會社がありますし、テニアンにも資本金五百萬圓位の大きな砂糖會社があります。更に來年はロタにもう一つ新しい砂糖會社が出來ることになつて居ります。砂糖の外にはコプラがあります。是は椰子の中にある白い乳の固つたやうなものでありますが、年々八千噸、價額百七十萬圓位のものが移出されて居ります。即ち大阪邊に來て、石鹼の原料などになるのであります。又近來段々有望になつて來たのはコーヒーでありまして、サイパン島でも相當出來立派な土產物にもなつて居ります　又アンガウル島からは燐礦石年々三百萬噸から出るさうでありまして年額百萬圓で、是亦將來段々大きくなる勢を示して居ります。又水產物としては先づ高瀨貝とか蝶貝と云つたやうな貝類が澤山ありまして、內地に盛に送られます、其の外眞珠、

玳瑁(鼈甲の原料)、鱶、鯣などと云つたやうなものがあります。是等が主な重要物産であつて、將來益々盛になるものと思ひます。

尙ほ古來の遺跡として、テニアンに不思議な碑が遺つて居ります。それは立派なトラバチーンと云ふ石材でありまして、直徑が約五尺、高さが約十二尺で、上は圓い椀のやうな恰好をして、下は角の樣であります。さう云ふものが十二本あつて、今立つてゐるのは五本だけで、七本は倒れてゐます、口碑ではタカ族の碑と云つて居りまして、タカ族は即ちテニアンにゐた先住民族だと云つてゐますが、是が何であるかと云ふことは殆ど想像が出來ない。或人は昔在つた家の柱が遺つてゐるのだらうと云ひますが、柱にしては餘り細長すぎるのであります。或人は又之を生殖器崇拜の遺物だらうと云つて居りますが、或はさうかも知れませぬ　先住民族には幾らも生殖器崇拜の例はあります。併しそれにしても形が少し變だと思ひます。先づタカ族の何かの記念碑だと見るのが正しいのでないかと思ひます。

四府縣建築監督官歡迎會

大阪府の主催で京都、愛知、兵庫各府縣の建築監督官が會合建築取締事務についての打合會が10月6日から2日間大阪府廳で開催された、これは今後の建築行政上に大いなる成績を擧げることであらう、この機會を利用して本會及建築士會關西支部の有志等相謀つてこの人達を6日午後大阪ホテルへ招待して歡迎會を催した、栗屋大阪府警察部長、各府縣建築監督官、菱田內務技師等28名の來賓に主催者側24名を加へたる盛大な盛會であつた。(寫眞は片岡氏の挨拶)



耐震木造建築への一考察

巽　　純一

第 1 章　現在の木造建築
第 2 章　將來の木造建築
第 3 章　耐震木造建築の各種構造方法
　第 1 節　基礎及び土臺
　第 2 節　柱、間柱及び筋違
　第 3 節　梁及び其の他材との結合
　第 4 節　屋根構造材
第 4 章・結　言

第 1 章　現在の木造建築

大正十二年の關東大震災の影響を受けて、我が國の耐震家屋構造は、顯著なる發達を遂げた。特に、鐵筋コンクリート構造、鐵骨構造、及び鐵筋鐵骨コンクリート構造なるものゝ耐震的研究に於ては、實に目ざましき發達を遂げたのである。

然るに、我が國に於ける建築物の大半を占むる木造建築に於ては、多少の改良進歩は行はれてゐるが、鐵筋コンクリート構造鐵骨構造の發達の如く著しからざるは、我々の等しく認むる所である。

木造建築の耐震的手法に關しては、種々なる書物が發行されてゐる。然るに其の各著者に於ける耐震的手法を見るに、皆大同小異にして、僅に簡單なる補強金物を在來の建築物に使用したるに止まるものであつて、我が國に於ける木造家屋構造の根本には、何等變化はないのである。即ち、在來の和風建築構造法の欠點を捨てゝ西洋風建築構造の手法を取入れたのである。この方法に於ても、在來の和式建築よりは、遙に耐震的である事は、一般の認むる所であるが、大正十二年の關東大震災後に於ける、又城崎、但馬及び豆相の地震に於て、この式の構法に依つた建築物の被害の相當大なるは見逃す事が出來ない事實である。又各震災地に於ける復興建築を見るに、何等地震に對する甚大なる被害を輕減するが如き根本的改良を行はず、單に材料を新しくして、舊來の手法を繰返し行つてゐるの類を各所に見受けるのである。かくの如き方法を繰返してゐるのみでは、將來の地震に對して何等の安心をも得る事が出來ず、ひいては地震に伴ふ火災により、莫大なる損害を蒙るのである。或る論者は、木造建築は耐震的である。地震による被害は僅少であるが、地震に伴ふ火災により、其の害を受けるのであると論じて、木造建築を耐震的であるかの如く

主張する人もあるが、地震による火災の發生が、主として木造建築からである事は上述の理由を立證するものではない。勿論火災の原因として其の他の原因に起因する場合もあるが、其の大半は地震により木造家屋が倒壊し、其の結果火を發し、大火に至るのであつて木造家屋を耐震家屋にするならば、この火災の發生を著しく減少する事が出來る。かゝる點より考へても、我が國の木造家屋をより耐震的になすべく研究を進める事が、目下の急務である。

現在の木造家屋の地震に侵さる狀態を見るに

1. 柱に枘穴のある部分、即ち梁、胴差、差鴨居等を取りつけたる個所、特に二方差、三方差、隅柱等複雜なる仕口の部分から挫折して壞れるのである。
2. 枘がゆるんで拔け出し、或ひは仕口がゆるんで梁や胴差がはづれて、其の爲に倒壞するのである。
3. 軸部と小屋組とが緊結されて居らない爲、屋根がそのまゝ地上に落下するのである。
4. 筋違を使用してゐない爲、壞れるのである。
5. 筋違が如何に澤山用ひてあつても、其の使用の個所を誤り、又其の筋違の斷面を傷けたり、甚しく其の斷面が小なるものは、筋違としての効果を有しない　かゝる家屋は倒壞するのである。
6. 建築物全體の形が非耐震的なる爲倒壞する。
7. 屋根が重過ぎたり、壁體が過重である爲、其れ等と軸部の震動が異り、爲に倒壞する。

等以上の項目が其の原因をなすものである。故に上記の原因を除去し、建築物全體が一體として働く如く、構造を仕組むならば、必ず理想的の耐震木造家屋を建築する事が出來る。

建築物を耐震的にする爲に、屋根を出來得る限り輕くし、外壁に重き石、煉瓦等の貼付けを止める等の方法は、其の軸組構造の如何にかゝわらず、必要なるものにして、木造耐震家屋を論ずるには、省略する事の出來ないものであるが、本論に於ては主として其の軸組構造の耐震的手法を論ずるのであるから、其の點には觸れない事にする。

第2章　將來の木造建築

著者の提案する木造耐震家屋構造の概說

前述せる木造家屋構造の欠陷を完全に除去する事の一方法として、著者は木造家屋より枘及枘穴を完全に驅逐し、木材の斷面の全部を、外力に抵抗せしむる如く考案したのである。其の各部の詳細に關しては、後節に於ける寫眞により說明を爲すも、其の概略を說明するならば次の如し。

1. 柱、梁、其の他の材料には絕對に枘及び枘穴を使用せず。
2. (1)の條件を滿足せしむると共に、各材の强度を增大する爲に大なる一個の材を用ひず小なる數個の材を組合せて柱、梁等を構成したる事。

3. 小なる材を組合せて建築する爲の必要より、標準寸法を定めたる事。其の標準寸法は工費の節減、運搬の輕便、良材を得易くする爲、及び市場品に近き寸法となす事、等の意味より 100 mm と 85mm となせり 即ち柱は 100 mm×85 mm, 100mm×100mm の斷面を有するものとする事。數個の材を組合せて一つの材となす時、其の間隔を必ず 100 mm か 85 mm となし、其間隙に他の材を挿入する事が出來る樣に爲したる事。かくする事により、普通の工事現場に於て、數多く出來る殘材を殆んど無くする事が出來たのである。これは工事費の上に大なる影響を與へるものである。何とならば、長き材の兩端の切れつはし材は材と材との間隙に使用する『セパレーター』『スプライス』及び『ラチス』材となるのである。

4. 枘及枘穴なき爲、各材を結合するには『ボールト』及び補强用金物を使用せり。

5. 間柱及筋違の兩者に何等の害傷を與へずして、剛なる壁體を構成する事が出來る。

6. 建築物全體が籠の如き形となり、極めて彈性に富み、又一體として外力に抵抗するから、部分的に大なる應力を受けるが如き事無き事。

以上の六項目が、本構造法の耐震的なる理由であるが、この手法を行ふ結果として、次の如き利點を擧げる事が出來る。

1. 施工簡單なるが爲、工期を短縮し得る事。

2. 在來の如き複雜なる仕口、繼手等無き爲、大工手間を著しく減ずる事が出來る。

3. 現場外に於て其の大半の加工を爲す事が出來る。

4. 壁體內に空氣の層を有する故に、防音、防濕、防暑、防寒、及び保溫等に對して甚だ有効なる事。

5. 壁體內の配線配管自由自在なる事。

6. 工費の節減を爲し得る事。

以上簡單ながら著者の提案する、耐震木造家屋構造の大略を說明したから、次に其の構造手法の實際を寫眞に就いて說明しやう

本建築物は神戶高等工業學校內に設置されたる、工業科學博物館にして、其の內容は建築、電氣、機械及び土木の各科並びに一般物理學に關する、標本機械器具を配置し、出來得る限り自動的に說明の出來る樣な裝置を目下整へ中である。而して本工業科學博物館の內容完成の曉には、神戶市民に工業科學の常識を普及せしむべく、每月日を定めて一般に公開展覽せしむる豫定である。この意味に於て建築物全體も標本となすべく、同一材料にして我が國に販賣されてゐる總ての材料を網羅し使用したのである。

今其の建築の概要を說明せば次の如し。

建　坪　　188 坪

延　坪　　333 坪

基　礎　　割栗『コンクリート』基礎

壁　　木骨構造にして、外部白色『モルタル』塗、腰人造石塗仕上げ、内部テツクス貼付け、一部『ドロマイド』塗仕上げ、木部『ペンキ』塗仕上げ、一部『オイルステイン』塗仕上げ

屋根　木骨小屋組『スレート』葺、一部硝子及び銅板葺、内部『ペンキ』塗仕上げ

床　　一階 寄木張『オイルステイン』塗仕上げ、二階『リノリユーム』張、下地板張

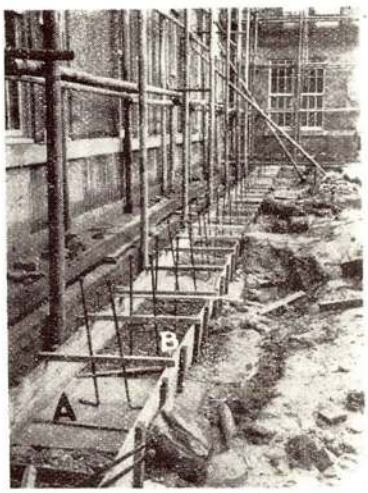
天井　一部漆喰天井

第 3 章　　耐震木造建築の各種構造方法

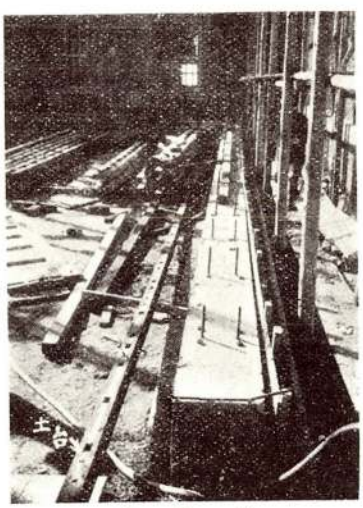
著者提案の耐震木造建築構造を使用して建築したる實例に就き、其の詳細に亘り寫眞を基礎として說明せん。

第一節　基礎及び土臺

第1圖は外壁の土臺とコンクリート基礎とを連結する爲のアンカーボールトにして直徑 19 mm 長さ約 1 米の丸鋼なり。假枠より一定の距離に配置する爲圖の如き裝置を行へり A部は柱下の基礎にして B 部は壁體の下部である柱下基礎の底面は既設建築物の基礎底面と一致せしめたり。



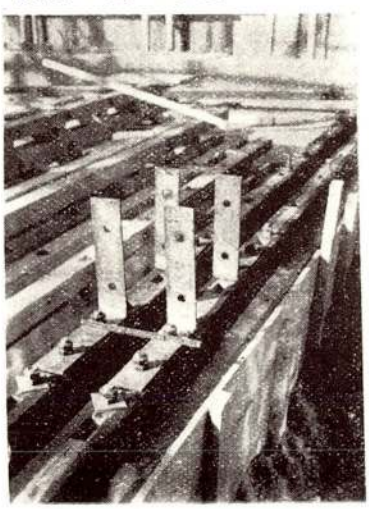
第　1　圖



第　2　圖

第2圖

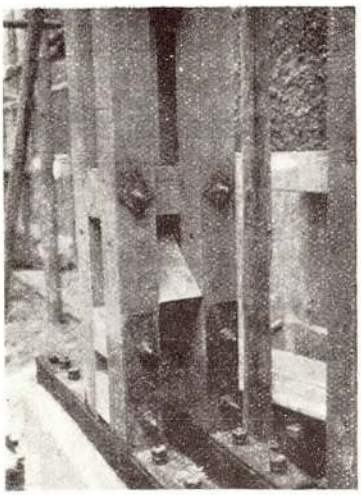
外壁基礎上面にしてこの上に二列に土臺を配置す、土臺用コンクリートは 1.3.6. の調合にして水セメント比は 65% である。



第　3　圖

第3圖

第2圖基礎コンクリートの表面に 85 mm×100 mm の米松材土臺を据え、二重ナツトのアンカーボールトにて、基礎コンクリートと土臺とを約 1 米間隔に緊結す。柱脚は寫眞の如く土臺に枘穴を開け、其の中に柱の枘を入れる。(この部分のみ枘及び枘穴を設く)、柱脚を緊結する爲に巾 80 mm 厚さ 6 mm の鐵板をL字形となし、柱と土臺とを完全に固定せしめたり。其の完成寫眞は第4圖の如し。



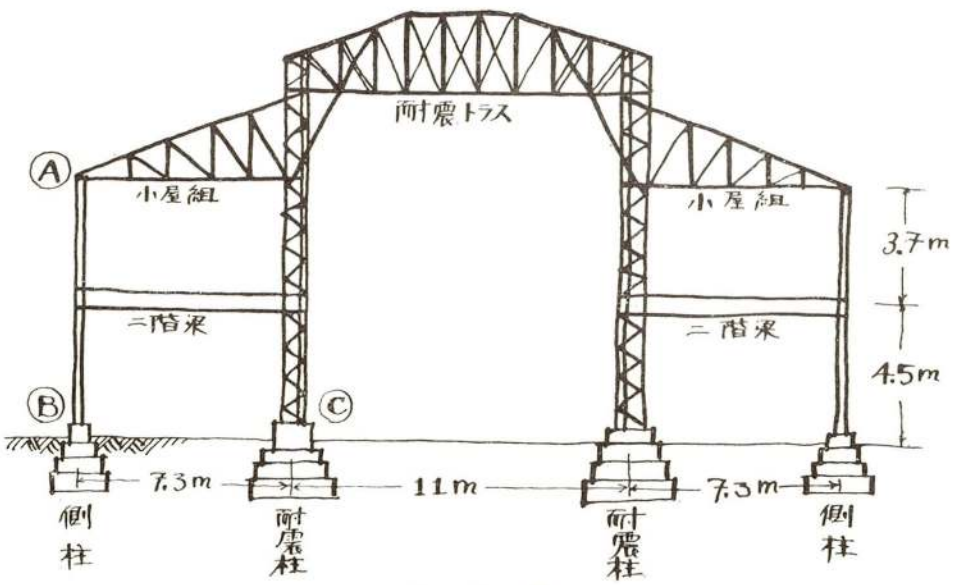
第　4　圖

第4圖

杜脚と土臺並に基礎とを緊結する事の可否に就いては、豆相震災の結果、木造家屋の被害狀況より考へて一部諸先輩の間に論議されてゐる、この學說に對しては、著者も興味を有する一人であるが、本構造に於てかく比較的完全なる固定と做し得る構造に爲したるのは別の考へ方から出發したるものにして、何等上記諸先輩の『柱脚はすべからく緊結すべからず』との說に反するものでも何でもない。勿論柱脚固定、非固定の論議さるるのは、主として地震による水平力の作用に關してであつて、垂直荷重に對しては左程問題にすべきではないと思ふ。今茲に杜脚を固定に近き構造と、本構造物を爲したる理由を說明せん。

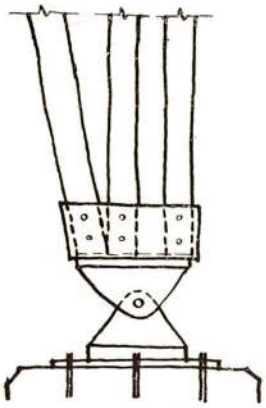
第5圖は本構造の軸部の略圖にして、耐震柱、耐震トラス、側柱、二階梁、及び小屋組より成る。

地震に對する横力に抵抗するものは、本構造に於ては耐震柱と耐震トラスとより成る剛節結構にして、本結構は柱脚滑節として、各材に生ずる應力を求めたのである。然るに其の柱脚は一見固定の如き狀態となつてゐる。（第60圖寫眞參照）この第5圖に於ける耐震柱の脚部（C）部は、純理論的に滑節の構造と爲しかつたのであるが、種々の理由よりかく爲し得なかつた事を遺憾と思つてゐる。しかし本構造に於ても、固定とは認め難く故に滑

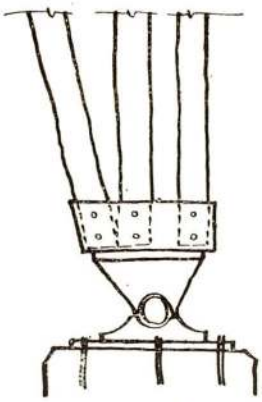


第　5　圖

節と考へても大なる誤りとは考へられないだらう。木造建築にして其の柱脚を完全なる滑節となすことは甚だ困難なる事であるが、至難にして不可能の事ではない。即ち其の一例として第6第7圖の如くすれば、其の目的を達する事が出來る。

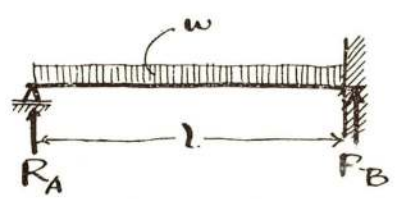


第 6 圖



第 7 圖

上記の如く、地震に對する水平力に對しては、耐震柱及び耐震トラスが抵抗するのであつて、側柱は何等この水平力に對して抵抗せぬものとして、軸組の各部の應力を算定したのである、故に寫眞及び第5圖に於て見らるゝ如く、かくの如き構造物に於ては A 部に必ず用ふる方杖を使用せず、單に小屋根の一部を側柱の上に支へたと云ふ構造に爲したのである。この方杖を使用せない理由の一つとしては、本建築物が隣接建物と接近してゐる關係上、側柱に大なる應力を負擔せしめる事が出來ないのである。即ち耐震柱の斷面の二次率を大となし、側柱の斷面の二次率を小となし、其の梁材及小屋組材の結合の狀態をも耐震柱の方に於て剛に、側柱側に於て柔にするならば、充分この目的を達成する事が出來る。垂直荷重に於ても、水平荷重に於ても、然りであるが、特に水平荷重に於ては、かくする事により側柱の斷面を餘程減少する事が出來るのである。今垂直荷重に例をとれば、第8圖の如く一端固定、他端支持の梁に於て、其の反力の大さを比較するに、等布荷重の作用する場合に於て、支持端に於ける反力 R_A は固定端に於ける反力 R_B の約1.67倍である。即



第 8 圖

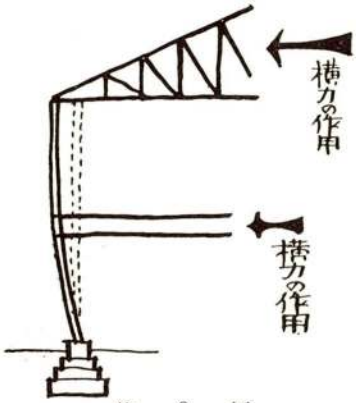
$$R_A = \frac{3}{8}wl$$

$$R_B = \frac{5}{8}wl$$

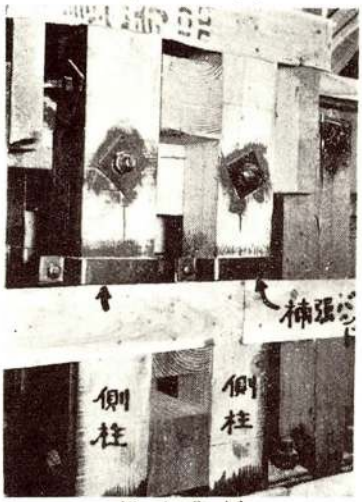
$$\therefore \quad \frac{R_B}{R_A} = \frac{\frac{5}{8}wl}{\frac{3}{8}wl} = \frac{5}{3} = 1.67$$

垂直荷重にしてかくの如くであるから、水平荷重に對しても同樣の事を數式的に求める事が出來る。(算式省略)

第5圖に於ける A 部をかくの如き構造となしたる爲、其柱脚部、即ち B 部を固定に近き構造となしても、地震の横力による被害を蒙る事が少ないと考へる事が出來る。又其の固定の狀態を、第4圖に於て見れば明瞭なる如く、補强金物は軸組構造と直角の方向に附してあるから、軸組の方向の震動に對しては、比較的滑節の構造に近い構造となつてゐ



第 9 圖

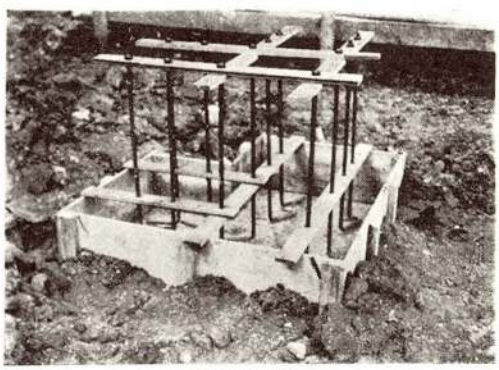


第 10 圖

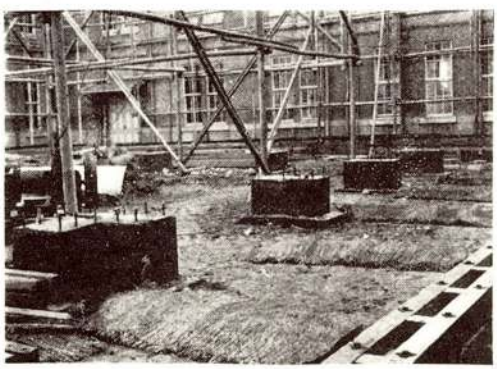
る。故に、本構造物が第5圖の軸組の面と同一の面の方向に水平動を受けた時、側柱が如何に變形するかを考へるならば第9圖の通りである。

側柱の斷面の二次率が小であると云ふ事は、側柱を可撓性に富ましむる爲には極めて便利であつて、本構造法がこの種の建築物を設計するには非常に便利なる所以である。上記の理由により、側柱と小屋組を單に支持の構造となし、方杖を用ひざる事は、本構造に於ける柱脚の比較的基礎コンクリートに堅固に締結したる理由である。即ちこの可撓性に富む柱と、滑節構造となしたる小屋組の支承點、即ち柱頭の構造により、地震より來る水平力を小にして架構に傳へるものである。

第 10 圖は柱、梁、及び小屋組材等の主要なる位置に設けたる補强バンドにして、木材に於ける一大欠點である



第 11 圖



第 12 圖

割れ、即ち木の性質上、或ひは其の他の理由により、木目に沿ひて割れを生ず。これを防ぐ爲め、又割れを生じた後に於ても、ボールト等の効果を充分發揮し得る如く、ボールト締付け部の上下に設けたるものである。かくする事により、木材の一欠點を充分補ひボールトの効果を大ならしむる事が出來る。」

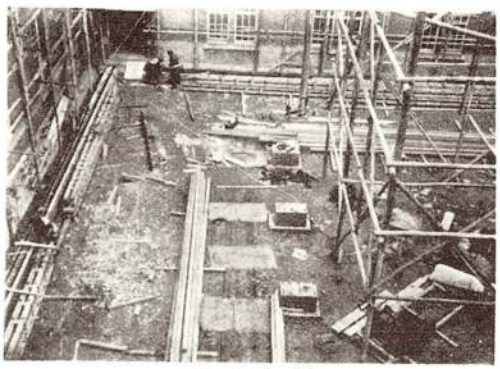
第 11 圖　耐震柱の基礎『アンカーボールト』の配置を示したるものにして、同時に其の施工法をも示すものなり。『ボールト』の直徑は 19 mm にして、隅柱は 12 本、其の他の柱は 8 本よりなる。

第 12 圖　耐震柱の基礎コンクリートを打ち終へ其の假枠を除去したるものなり。この基

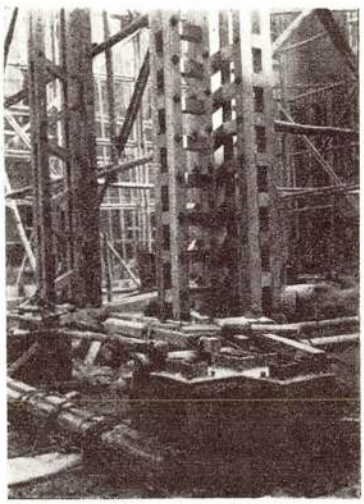
礎コンクリート上に、鑄鐵製柱脚を圖示のアンカーボールトにて締結す。鑄鐵製柱脚の詳細は第 14 圖寫眞を參照せられたし。

第 13 圖

本寫眞は耐震柱の基礎コンクリートと側柱との關係を示すものである。側柱は側壁の一部として、取扱つたから、側柱の位置を本寫眞に於ては、明瞭に知る事が出來ないが耐震柱と相對する部分に側柱が存在するものと考へられたい。



第 1 3 圖



第 1 4 圖

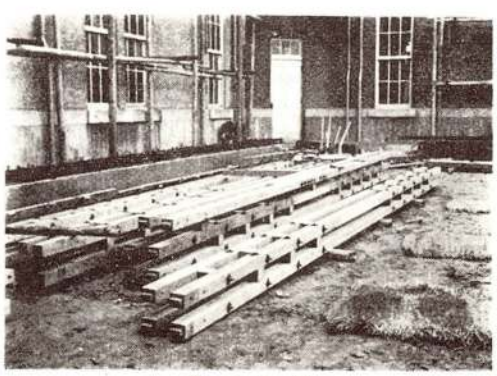
第 2 節　柱、間柱、及び筋違

第 14 圖

耐震柱は豫め地上に於て設計圖の如く假組立てを爲し、これを寫眞に見る如く、基礎コンクリートより少しく後退せしめて起立せしめ、二階梁を側柱と耐震柱とに同時に嵌め込みながら、耐震柱を基礎コンクリート上の鑄鐵柱脚の上に引き寄せ、柱脚に柱材を嵌め込むのである。寫眞は基礎コンクリート、柱脚及び柱下部の構造を示すものである。この柱脚が構造計算に於て滑節と做したる部分である。

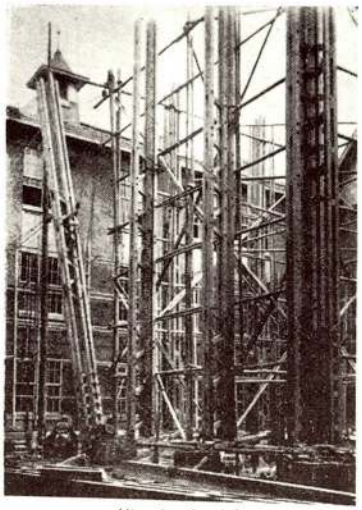
第 15 圖

側柱を地上に於て假に組立てたるものにして、近くに見ゆる部分が、土臺上に來るものにして、其の中央部にボルート穴を多數見る部分は、二階梁の挿入さるゝ所である。本側柱は 100 mm×85 mm の斷面を有するもの四本より成り、其の間は 100 mm×100 mm 斷面の『セパレーター』を以て連結し、四本を一體としたるものである。この『セパレーター』の間隔は、鐵骨構造に於ける『セパレーター』と同じ役目を爲すものである。即ち柱全體としての L/R と、四本の內の一本の柱材の l/r を同一にする如く、『セパレーター』の間隔を決定したものである。こゝに、L は柱全體の長さ、R は四本の柱材を一つに考へた場合の斷面の二次率半徑であり、l は『セパレーター』



第 1 5 圖

と『セパレーター』の間隔、r は柱材一本の二次率半徑を示すものである。この小さき斷面の柱を四箇合して一本の柱としたる理由は後述す。



第 1 6 圖

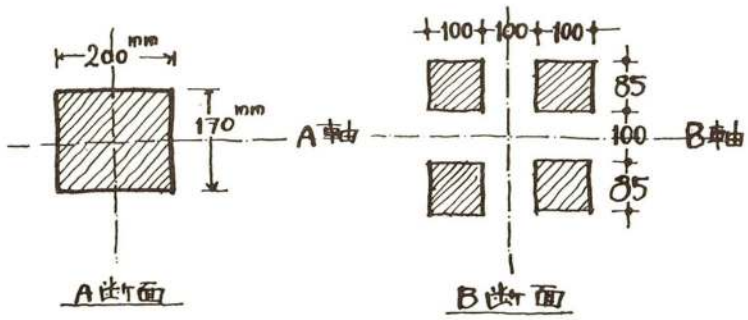
第 16 圖

本圖は耐震柱を地上にて假組立を終へ、基礎コンクリートの附近に、樹立せしめたるものにして、一本は其の作業中のものなり。

側柱の構造は、小なる部材を組合せて、大なる應力に抵抗する事が出來る樣に爲したるのみならず、梁と柱、小屋組と柱、間柱と筋違及び胴差と柱の連結を好都合ならしむる如く爲したるものである。尙其の爲壁體內部に、空氣層を作る事が出來るから、防音、防濕、防寒、防暑等に對して甚だ有效である。先づ其の第一の條件より說明せん。

小なる材にて大なる應力に抵抗する事が出來る

今茲に第 17 圖の如き 200 mm×170 mm の矩形斷面の柱ありとす。この斷面の A 軸に關する斷面の二次率は



第 1 7 圖

$$I_A=\frac{bh^3}{12}=\frac{200\times170^3}{12}=81\,900\,000\ \text{cm}^4 \quad \text{である}$$

然るにこの A 斷面を四等分し B 斷面の如くなすときには、この斷面の B 軸に關する斷面の二次率は次の如くなる。

$$I_B=4\left[\frac{100\times85^3}{12}+100\times85\times92.5^2\right]=311\,200\,000\ \text{cm}^4$$

故に、B 斷面は A 斷面の斷面の二次率の約 3.8 倍に相當す。故に A 斷面より B 斷面の方が、大なる曲能率に抵抗する事が出來る。今假にこの材料を米松と考へ、其の許容應曲力度を 65 kg/cm² とするならば、何程の曲能率に抵抗し得るかを求めん。

A 斷面の抵抗し得る曲能率

$$I_A = 81\,900\,000 \text{ cm}^4$$

$$S_A = \frac{I_A}{y} = \frac{81\,900\,000}{85} = 964\,000 \text{ cm}^3$$

$$\therefore \quad M_A = f.s = 65 \times 964.000 = 62\,809\,000 \text{ kg cm}$$

B 斷面の抵抗し得る曲能率

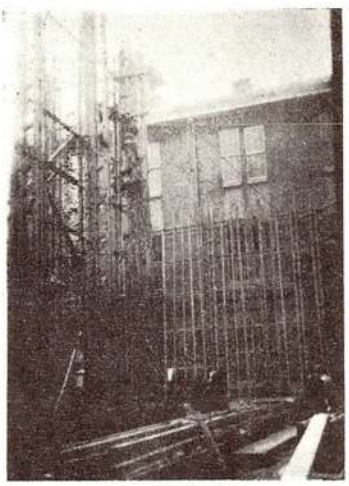
$$I_B = 311\,200\,000 \text{ cm}^4$$

$$S_B = \frac{I_B}{y} = \frac{311\,200\,000}{127.5} = 2\,440\,000 \text{ cm}^3$$

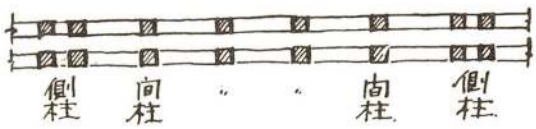
$$\therefore \quad M_B = f.s = 65 \times 2440\,000 = 159\,000\,000 \text{ kg. cm.}$$

即ち A 斷面の抵抗能率は 62 800 000 kg. cm にして、B 斷面のそれは 159 000 000 kg. cm である。故に B 斷面は A 斷面の約 2.53 倍の抵抗能率を有する事になる。

上記の結果より見たるのみにても、等しき斷面積の材料にて、A 斷面と B 斷面に於ける如き、大なる抵抗能率の差を生ずるのである。この B 斷面が、單に大なる抵抗能率を有するばかりでなく、以下順を追ふて說明する如く、それ以外に小なる材料にて、間に合ふと云ふ事より、材料の單價を安價ならしめ、其の結果總工費に於て多大の節約となるのである。



第 18 圖

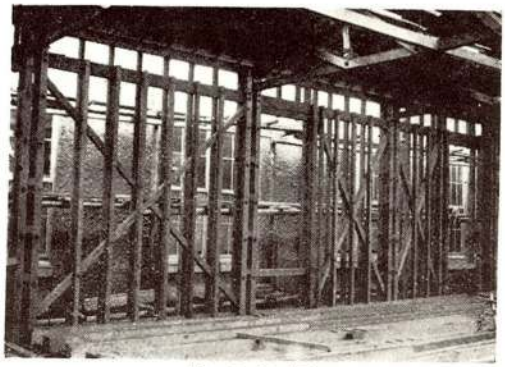


第 19 圖

第 18 圖

耐震柱、側柱及び間柱を各基礎及び土臺の上に樹立したるものにして、舊舘の外壁に沿ひて、立てかけられてゐるものゝうち、『セパレーター』の見ゆるものが側柱にして、然らざるものが間柱である。側柱に關しては既に詳細に說明をなしたる故に、本項に於ては間柱に就き說明を加へん。本構造に於ては、側柱を四本を以て一體となしなしたる故に、間柱もこれに倣ひ、二本を以て一體となしたのである。この二本は側柱と同じ土臺上に建つる必要上、これを第 19 圖の如く配置せり。かくする事により容易に考へ得る如く、胴差及び筋違をこの中間に嵌め込み、胴差並に筋違と柱を『ボールト』にて締結し、壁體を完全に剛となす事が出來る。この場合間柱の見付は任意に決定する事が出來るが、其の見込は側柱の見込と同一にする必要がある。又かくの如く間柱を二つに分離したる事により、これ又曲能率に對する抵抗を增大すると同時に、一階及び二階を通じて同一の材にて構造し得る便利がある。これは工期の短縮と云ふ事に、相當の好結果をもたらすものである。

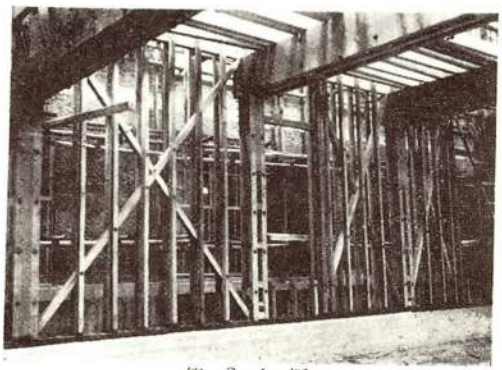
胴差及び筋違の施工されたる寫眞は第20圖第21圖の如きである。



第 2 0 圖

第20圖第21圖は壁體の構造を示すものにして、第20圖は階上、第21圖は階下である。順序として階下の第 21 圖より説明す。

本構造法は、枘や枘穴を使用せず、各材を組合せて建築するのであるから、材の斷面の大さを、統一せなければならない。又統一する事が、萬事に就きて便利である。かゝる理由より、本建築物に於ては、100 mm を以て單位としたのである。この 100 mm なるものは、既製品としては、所謂4吋材に相當するものにして、米材等を使用する時には、非常に便利である。即ち柱は申すまでもなく、梁小屋組材、方杖、其の他種々なる材を、其の一邊、若くは兩邊を 100 mm としたのである。此 100 mm では甚だしく不經濟なる箇所には、第二の基本斷面である 85 mm を使用せり。かく斷面を 100 mm 及び 85 mm と決定するときには、次の様な質問を受けるであらう。即ち構造計算より求めたる應力に對して、必要なる斷面を定める場合其の斷面に極く近き、少し小なる應力の場合は好都合なるも、甚だしく大なる、又は甚しく小なる、斷面が必要なる場合、使用斷面が定まつてゐるならば、不經濟なる材料の使用法を、敢て爲さねばならぬではないかと。しかしこれは單なる杞憂にして、何等心配する必要はない。何とならば、小なる材を數本組合せて、一體となし、外力に抵抗する様に設計するのであるから、其の小なる部材を組合す場合に於て、其の間隔を大小になすならば必要にして且つ充分なる、抵抗力を有する斷面を決定するのに、何等難たからずである。この點が又本構造の特徴の一つである。

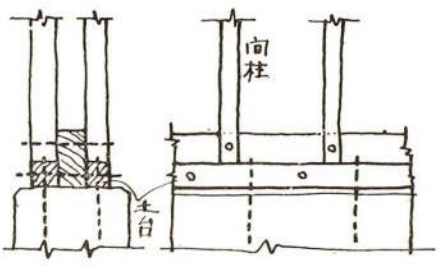


第 2 1 圖

第 21 圖に於て見る如く、梁は 100 mm 厚の木板三枚より成り、これが側柱の中央、兩側に嵌め込まれ、補强金物と共に、ボールトにて締結されてゐるのである。

間柱は土臺の上に枘にて連結す。(この部分のみに枘を用ふ)この土臺と側柱の結合も、枘を使用せずに行ひ得る。其の一例を示さば第 22 圖の如きである。筋違と間柱とは、第20圖寫眞に於て見る如く、各々其の交叉する所は、13 mm φの『ボールト』にて締め付けてあるから、筋違の効果は100%である。何とならば其の筋違に、バツクリングの生ぜざる

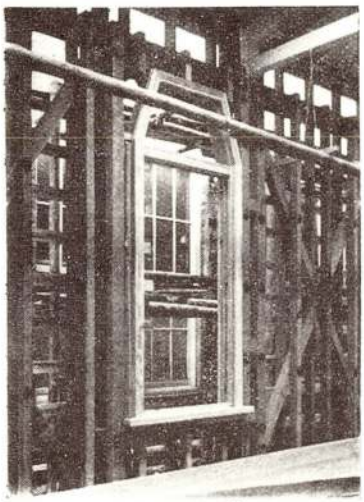
事は申すまでもなく、又在來の筋違の如く、其の筋違の作用點のみに力が働くのではなく各間柱を通じて、力が傳はるから水平力より來る剪力に對する抵抗力は甚大である。又前述せる如く筋違及び柱材の斷面を些少も傷けてゐないから、全斷面を有効に働かす事が出來る。



第 22 圖

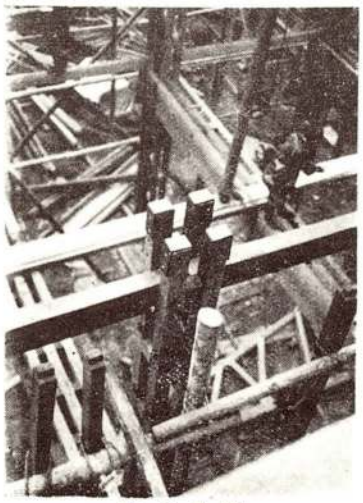
二階梁の上に胴差の一部を見る事が出來るが、これも筋違と同一面に挿入せらるべき部材である。本胴差も側柱及び間柱と各々 13 mm φ の『ボールト』にて締結されてゐる。胴差の斷面は其の幅が 100 mm にして、其の丈けは 182 mm である。この 182 mm なる寸法は根太の高さと同一にて、床板を張り付けるとき根太との關係を良好ならしむる如くなしたるものである。

第 20 圖は周壁の階上の部分である。筋違の取扱ひ方に關しては階下と同じである。側柱の最上部に於ける小屋組との結合部、並に軒桁と側柱、及び間柱の結合に注意されたい。


第 23 圖

周壁構造と窓枠の關係を示すものにして、横材（水平材）は皆側柱、間柱の間に嵌め込み、ボールト締となす。出入口枠も窓枠と同じ構造方法によつて施工する事が出來る。

本壁體の利點は、電氣工事、瓦斯工事、煖房工事、電話工事等の配管、配線を壁體内部に、簡單に隱蔽する事が出來る事である。

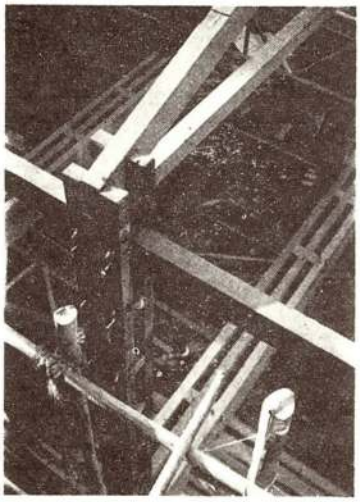

第 24 圖

第 24 圖

側柱上部小屋組との結合部の詳細にして、其の柱の頂上に寫眞の如き補强金物を附し、其の間に小屋組の合掌及陸梁を嵌め込み、（第 25 圖參照）後『ボールト』にて締付くるものである。この補强金物の厚さは 6 mm にして、其の厚みだけ、柱の方に金物をかき込むのである。この金物は主として垂直反力に抵抗するものであるが、尙柱頂部に於ける『ボールト』穴に沿ひて生ずる木の割を防ぐものである。柱

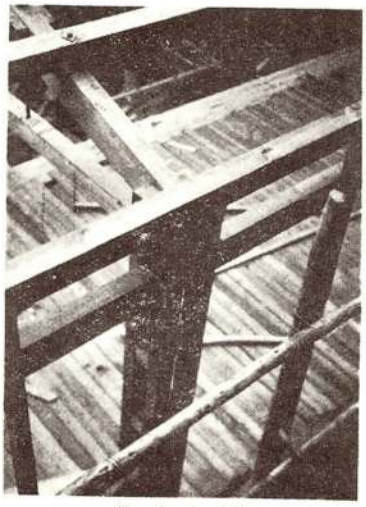
の中央部に於ける『ボールト』より、柱の兩端にける『ボールト』の方が、この割れを生じ易きにより、特にかくの如き部分には注意を施せり。耐震柱の頂點に於ても、同樣の方法を行へり。

小屋組材の水平の方向の分力に對しては、この『ボールト』が抵抗するのである。尙合掌と陸梁を結ぶ在來の小屋組の應用『ボールト』を以て合掌と陸梁を締結すれば、水平の分力に對する抵抗は充分である。



第 2 5 圖

小屋組の下に見る小屋組と直角の方向の材は、柱頂部の繋材にして、軒桁に相當するものは第 26 圖の如く小屋組の上に來る。柱の間に小屋組を挿入する爲、小屋組の斷面は全部其幅を基本斷面の 100 mm とせり

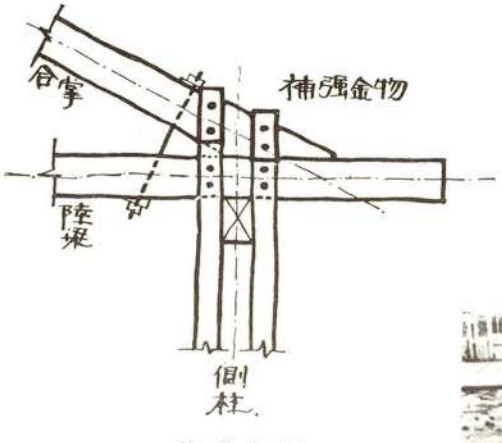


第 2 6 圖

第 23 圖

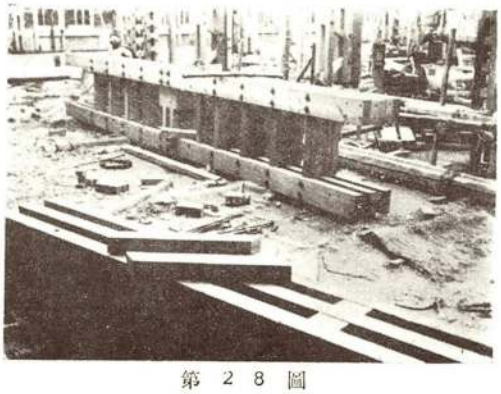
側柱頂部の完成したるものである。

本建築は既設建物に近接し居る爲、採光、通風の關係より、軒を出す事が出來なかつたので寫眞の如き構造となしたのであるが、一般建築に於ける如く、軒を一米程突出せしむる建築物に於ては、第



第 2 7 圖

27圖の如くすれば可ならん。



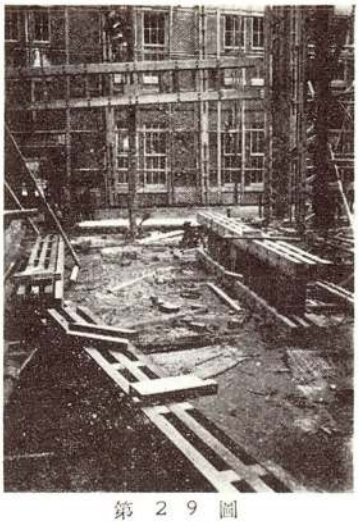
第 2 8 圖

第3節　梁及び其の他材との結合

第 28 圖

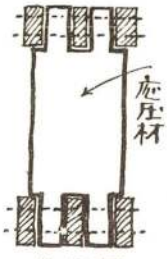
本寫眞は、トラス梁の組立作業中のものにして、應壓材及應張材は、各々三ケ

よりなり、其の巾は各々基本寸法の 100 mm にして、其の丈は 242 mm である」本圖に於ては、應張鐵筋は未だ取付いてゐない。この應張鐵筋は、このトラス梁が寫眞のまゝにて、所定の位置に取付いで後、締めつけるものであつて各三本よりなる。圖中に見る垂直の材は應壓材にして、これは第 30 圖の如き形のものを、上下應壓、應張材の間に挿入し、壓力に抵抗せしむるものである　第 29 圖は組立作業の關係上、上下反對に置いてある。



第 2 9 圖

トラス梁の中央部は三枚合せの普通の梁の挿入せらるる所である。このトラス梁を第29圖の如く釣り上げ側柱及耐震柱に嵌め込むのである。第 29 圖左方に見ゆる梁は、普通の三枚合せ一組のものにして其厚さは各々 100 mm にして、高さは各葉 600 mm である。



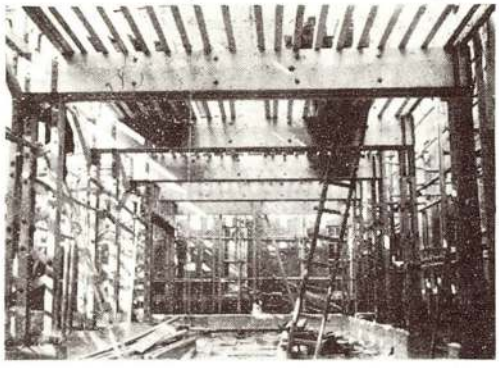
第 30 圖

第 31 圖

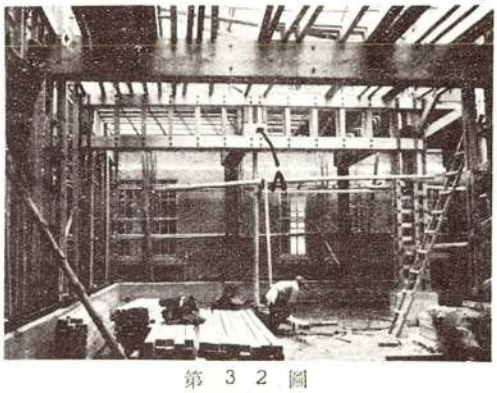
三枚合せの梁を側柱及び耐震柱に取り付けたる所にして、兩柱共其の兩側より6 mm 厚の鐵板にて補強したるものである。

第 32 圖

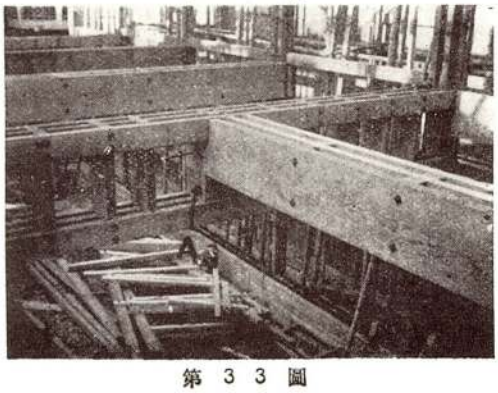
トラス梁の側柱及び耐震柱に取り付きたる所にして、本圖に於て、應張鐵筋を見ることが出來る。又兩柱への補強金物も其の大略を知る事が出來る。トラス梁中央部に見ゆる三箇の木口は、三枚合せ梁の木口にして、この取付き具合の詳細



第 3 1 圖



第 3 2 圖

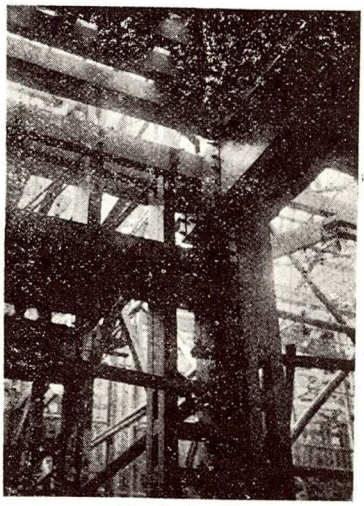


第 3 3 圖

は、第 33 圖の如く中央部の A なる材は、三枚合せ梁受けと應壓材の兩用に兼ねたるものである。

第34圖、第35圖

耐震隅柱にトラス梁と三枚合せ梁とが締結されたる部分にして、第 34 圖は其の一面にして第 35 圖は其の背面である。共に補強金物にて完全に締め付けてある。この部分の構造法が本工事中最難の所であるが、實際施工時に於て、注意して、其の施工法を觀察したるに、設計當時に於て考へた程、困難ならず、割合に簡單に組合す事が出來たのである。本結合部は寫眞に於ては明瞭に知る事が出來ないが、耐震柱、トラス梁、三枚合せ梁を少しも傷ける事なく組合したものにしてこの組合せられたる內部には、一厘の間隙もないのである。即ち、一體となつて働いてゐるのである。



第 3 4 圖

かくの如き複雜なる、又大なる材が四方より集合し來る箇所を、各材に何等の損傷を與へる事なく施工し得る事は、一つに本構造方法の特徵にして、充分誇るに足るものと信ず。在來の建築方法ならば、柱に枘穴又枘穴にして、有効斷面積の如何ばかり減ぜらるゝか知るを得ざる所にして、地震時の被害の最大原因を生ぜしむる箇所である。

木造建築に於て、かくの如き點を改良するにあらざれば、如何に筋違方杖を使用しても木造建築に耐震性を充分に持たす事は出來ない。

第36圖より第39圖までは前記箇所の施工時に於ける寫眞にして其の施工の如何に簡單であるかを知る事が出來る。



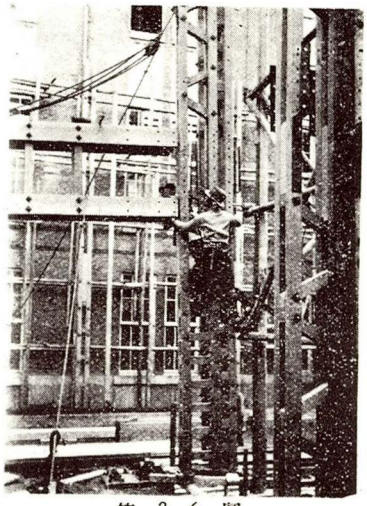
第 3 5 圖

第 36 圖

トラス梁を耐震柱に嵌め込む第一作業である。

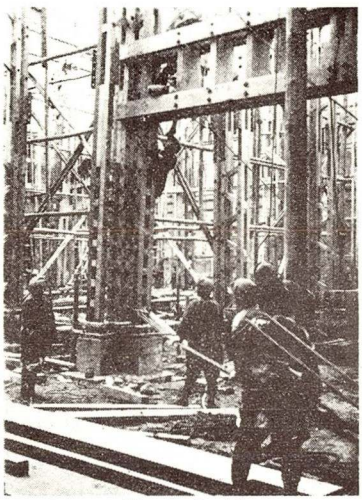
第 37 圖

第一作業が進行して、トラス梁が殆んど耐震柱に挿入された所である

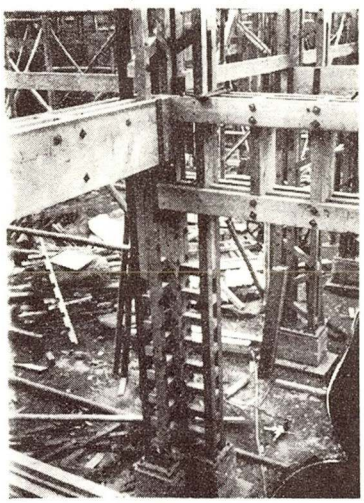


第 3 6 圖

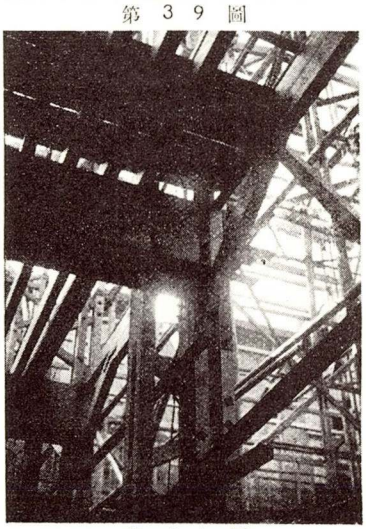
以上兩圖に於て



第 37 圖



第 39 圖



第 41 圖

柱の根元を見れば知り得る如く第 36 圖では最初トラス梁が柱に挿入さるゝだけ柱を後退して建てたるを示しトラス梁が柱に挿入さるるに從つて、柱の根元を基礎コンクリートの上に引き寄せるのである第37圖を見れば其の狀況が明である。

第 38 圖

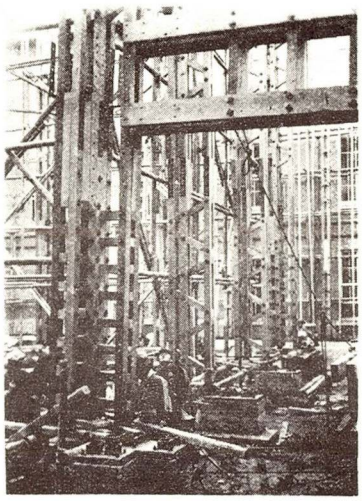
柱脚を基礎コンクリートの上に引き寄せる作業の最初である他の柱に於ても皆この方法により、耐震柱と梁を結合せり。

第 39 圖

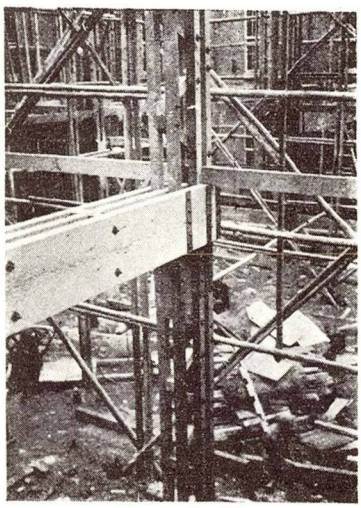
組合せの殆んど完成したるものであつて、締付け用ボールトを挿入すれば完成である。

第 40 圖

三枚組合せ梁と耐震柱との結合部の詳細圖である。これを下方より見れば第 41 圖の如し。この結合に於て、剪刀に對する抵抗は梁より下方に見ゆる 15 本の『ボールト』にてなし、梁內に見ゆる『ボールト』15 本は曲能率に抵抗するものである。金物は補强用なり。

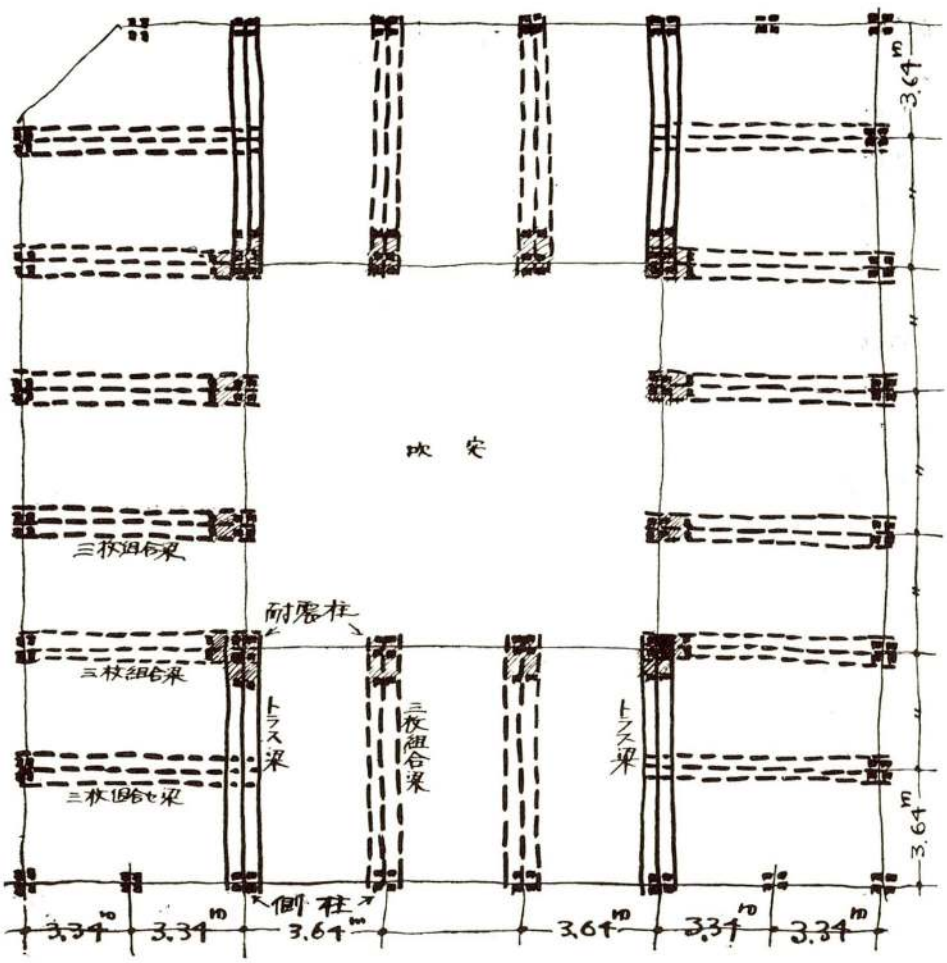


第 38 圖



第 40 圖

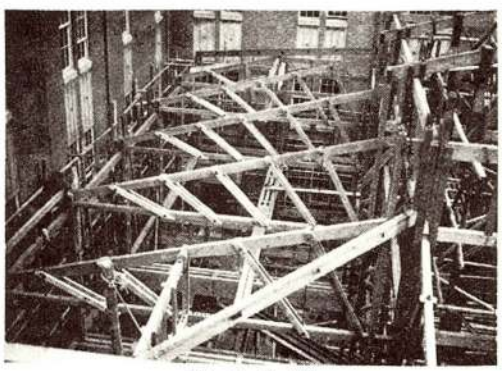
梁伏圖のスケツチは第 42 圖の如し。



第 4 2 圖

第 4 節　屋根構造材

第 43 圖

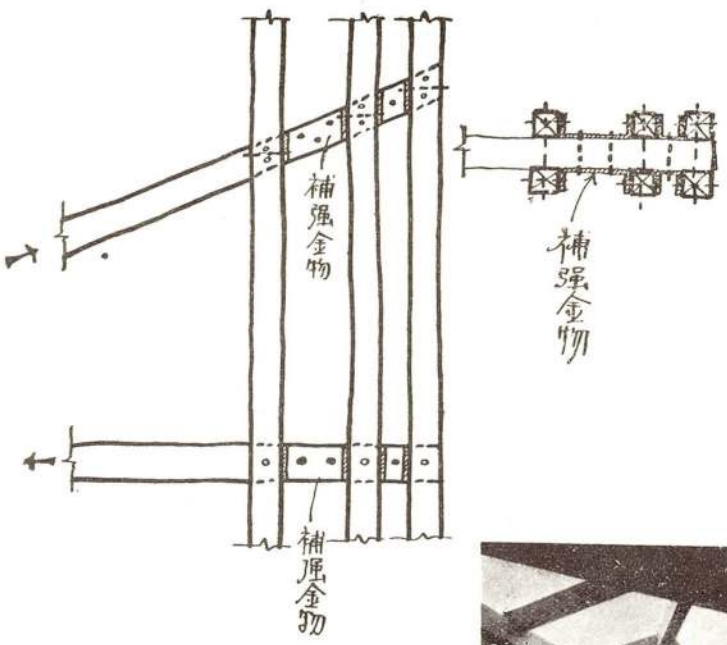


第 4 3 圖

側柱及び耐震柱の間の、小屋組の一般圖である。未だ完成し居らないが、其の大略の構造方法を知り得る事と思ふ。小屋組も其の大略を地上に於て組立て、それを起重機にて吊り上げ、其の兩端を『ボールト』にて締結すればよいのである。梁に比し小屋組は簡單であるから、何の

苦もなく施工する事が出来る。

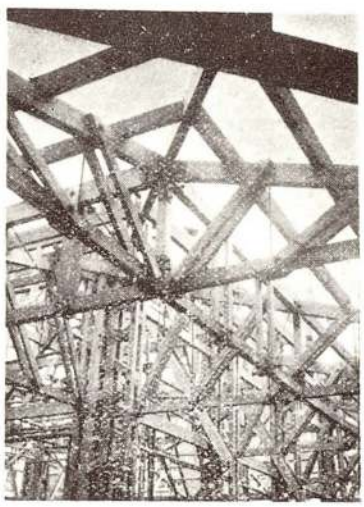
小屋組と耐震柱との結合する箇所には、第44圖の如き補強金物を使用せり。



第 4 4 圖

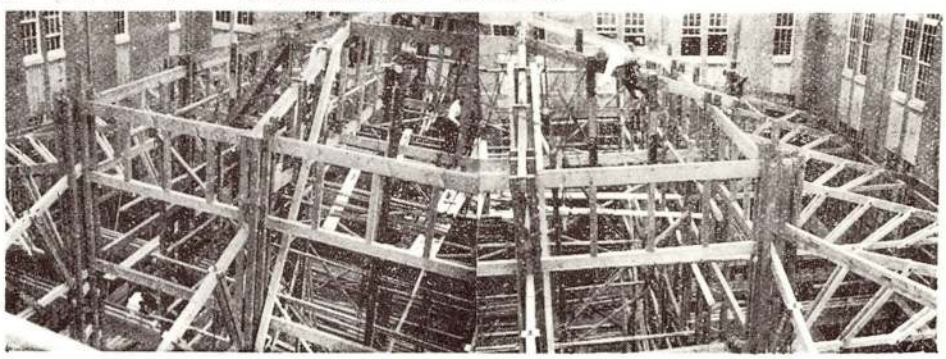


第 4 5 圖



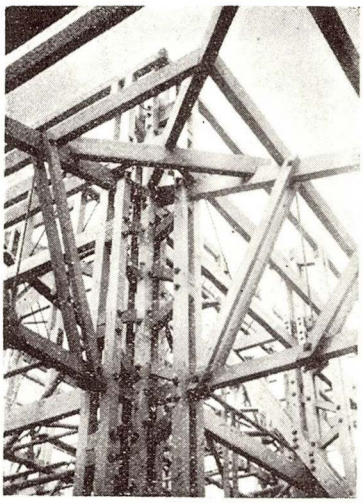
第 4 6 圖

第45圖、第46圖　小屋組隅部構造の一般である。



第 4 7 圖

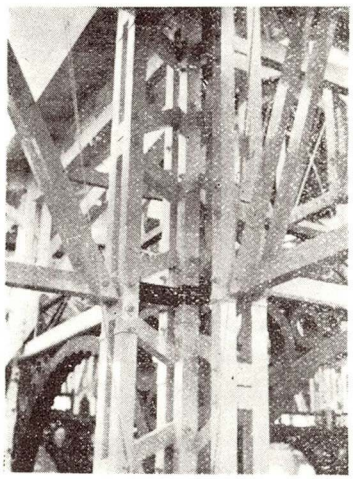
第 47 圖は耐震トラス組立中である。小屋組は地上に於て假組立てを爲し、吊り上げて取り付けたのであるが、耐震トラスはトラスの位置に於て、組立てたのである。この耐震トラスの架せらるる部分は、耐震柱にて取り圍まれたる 10.9 米角の吹抜上部にして、方形屋根となる關係上、井桁に組んだのである。各結合點は補强金物にて充分に補强を施せり。或る材には應張力及び應壓力が共に生ずる事があるから箱金物を使用して、何れの應力が起つても差支へなき樣、設計せり。本寫眞は別箇のものを二枚接合したのであるから、少し明瞭を欠くも、第 64 圖、第 65 圖を參照さるゝならば、其の構造を明瞭に知る事が出來る。



第 4 8 圖

第 48 圖

小屋組隅部、耐震柱との取つけ部の詳細にして、合掌用補强金物を取つけたる所なり。



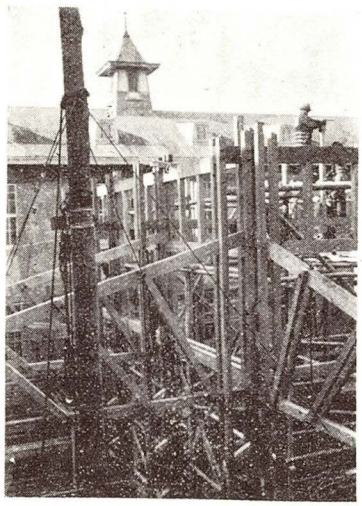
第 4 9 圖

第 49 圖

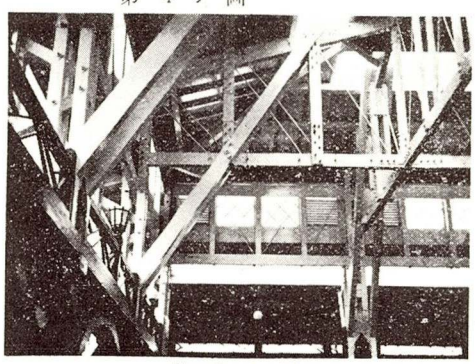
小屋組隅部、耐震柱との取付け部詳細にして、陸梁用補强金物、及び柱の割れ止め『バンド』を見る事が出來る。

第 50 圖

小屋組と耐震柱とを締結する作業中の寫眞なり。



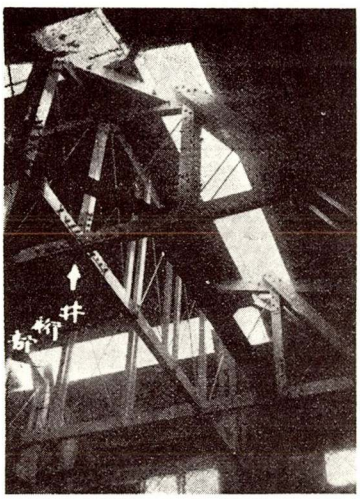
第 5 0 圖



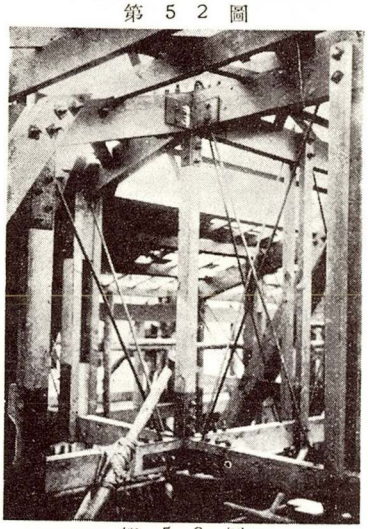
第 5 1 圖

第 51 圖

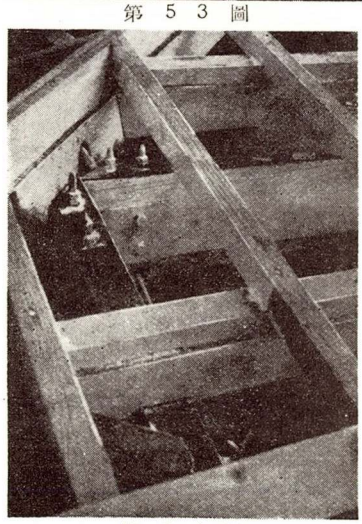
耐震トラスと耐震柱の連結部附近、特に兩者の間の狹み方杖を示したるものである。



第 5 2 圖



第 5 3 圖



第 5 4 圖

第 52 圖

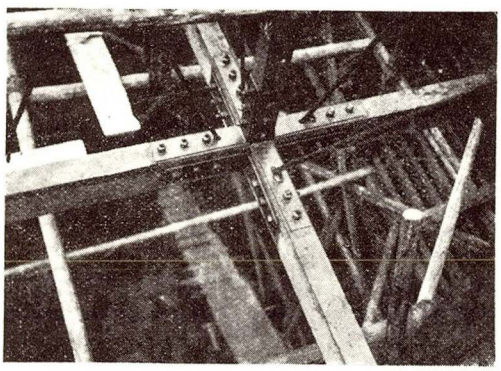
耐震トラス、井桁の部分を示したるものにして、其の詳細は第 53 圖、第 54 圖及び第 55 圖の如し。

第 53 圖

第 52 圖に於て井桁部と矢印を附したる部分の詳細圖である。其の上部を屋根上より見たるものが第 54 圖にして、其の下部の詳細が第 55 圖である。

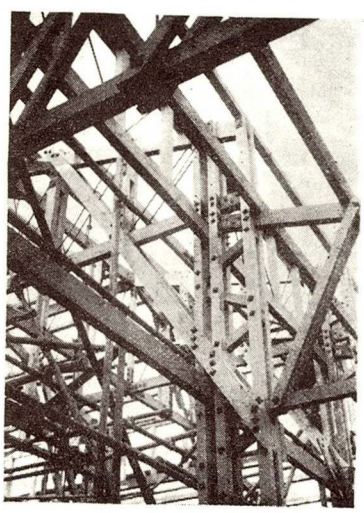
こゝに注意すべきは、各應張鐵筋が補強用金物を貫通して施工しある事にして、かくする事により補強用金物の効果を大ならしむる事が出來る。

本建築物中に於いてかくの如き構造箇所は、全部この方法を以て施工せり。

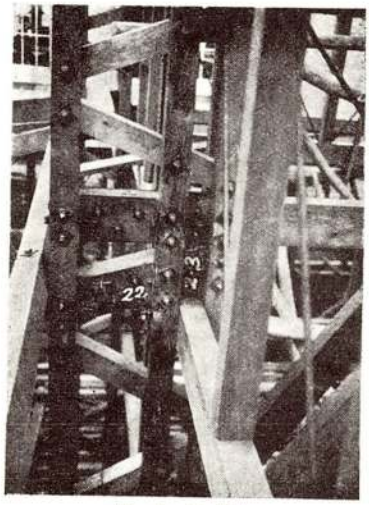


第 5 5 圖

第 56 圖　耐震柱上部の詳細圖にして、小屋組と耐震柱、耐震トラスと耐震柱、並に狹み方杖の構造を一目明瞭ならしむ。又補強金物の使用法も、充分これにて知る事が出來る。この耐震トラスの各材の斷面に於ても、其幅を皆 100 mm となし、耐震柱の間に挿入し『ボールト』にて締結せり。



第 5 6 圖



第 5 7 圖

第 57 圖

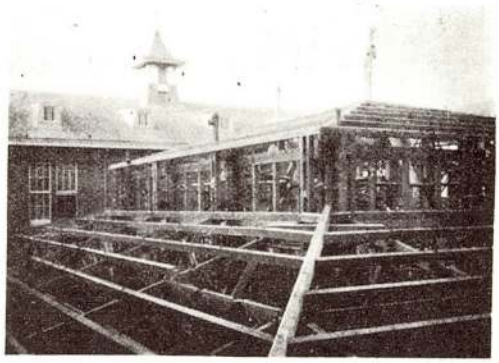
耐震トラス、小屋組及び耐震柱との結合部補強用金物の詳細圖である。

以上各圖の中にて見られたる耐震柱に於て、三本の內二本が相接近して建てられてゐるのに反し、一本のみ少し離れて配置されてゐるのは、構造計算上必要なる、斷面の二次率の關係からであるが、其の二本が相接してゐるのは、耐震トラスや小屋組の面と直角の方向の材と、耐震柱との結合を都合よくする爲である。

耐震柱に於ける『ラチス材』は、剪力に對して抵抗する樣に設計したものである。

第 58 圖

小屋組上の母屋の配置を示すと同時に耐震柱と耐震柱の間を連結する『トラス』を示すものである。本建築は二つの直角なる面に對して同一の構造法により施工されてゐるから、地震による水平力が何れの方向より作用するとも、其の抵抗力は甚大であつて、主として其の水平力に抗するものは、耐震柱及び耐震『トラス』である。又壁體が四周を通じて强固なる筋違により支持されてゐる故、建物全體の扭れに對しても、大なる抵抗力を有するものと信ず。

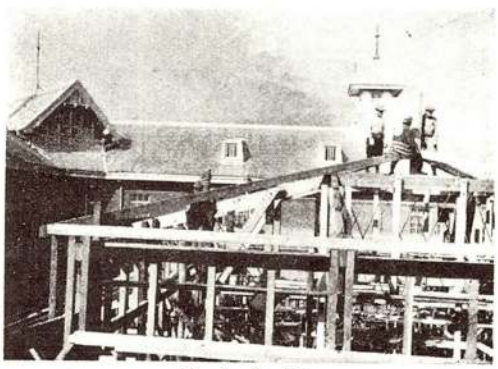


第 5 8 圖

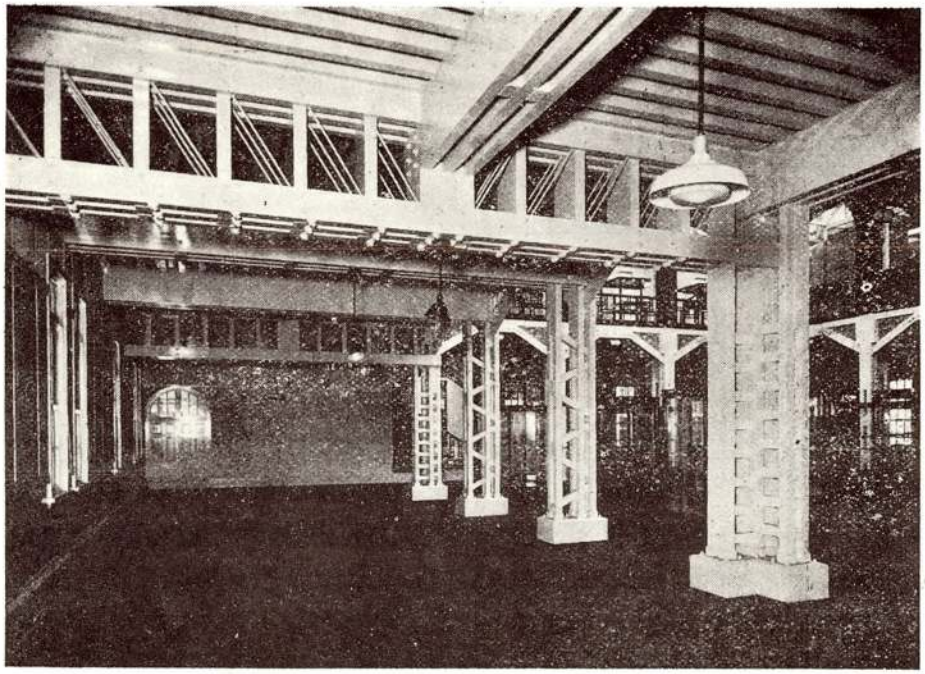
第 59 圖

棟木の取り付け作業である。

以上の部分的なる寫眞に依る說明によりて、其の構造方法の大略を察知された事と思ふ。結論を述ぶるにさきだち其の完成寫眞を揭げて、其の綜合的構造法を示さん。

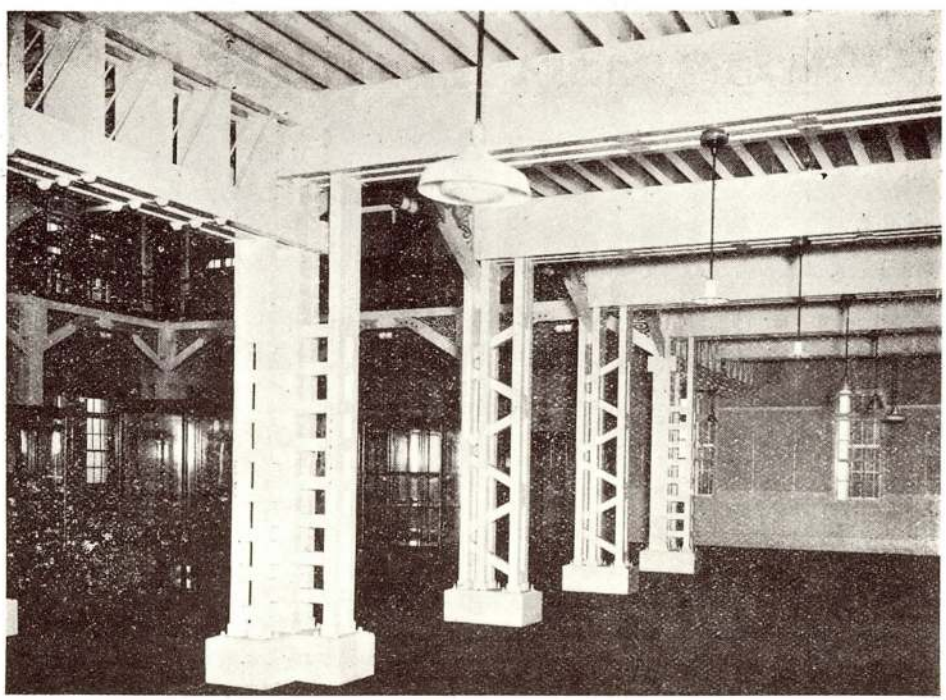


第 5 9 圖



第60圖

第60圖　一階の一部分にしてトラス梁、三枚組合せ梁、耐震柱、及周壁の關係が明瞭である。



第 6 1 圖

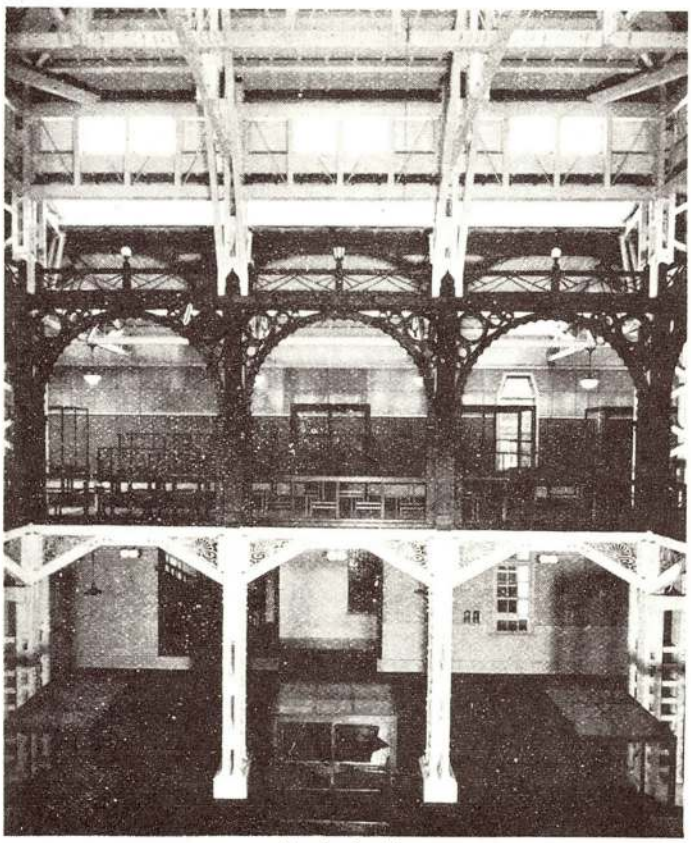
第 61 圖　第60圖と同じく一階の一部分にして、前圖とは直角の方向を見たるものである。

床の構造法は、このトラス梁及び三枚組合梁の中間に小梁を使用せず、直ちに根太により構造し、其の上に床板を張り4粍厚リノリユームを敷きたるものなり。

根太の寸法も 100 mm を其の幅となし、高さは 182 mm である。



第 6 2 圖



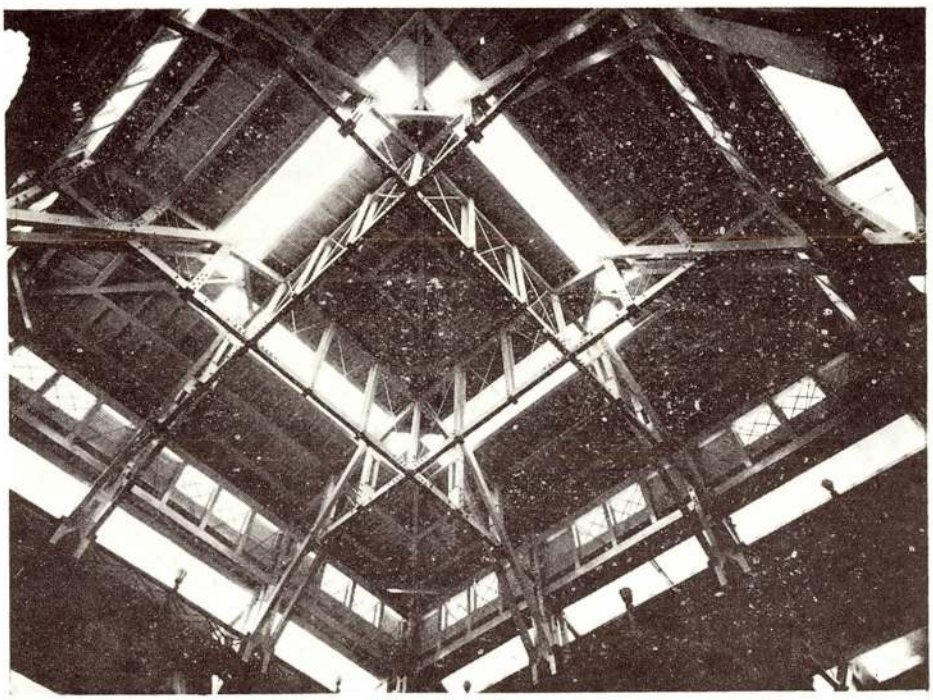
第 6 3 圖

第 62 圖

二階の一部にして小屋組と耐震柱の關係を示すものなり。

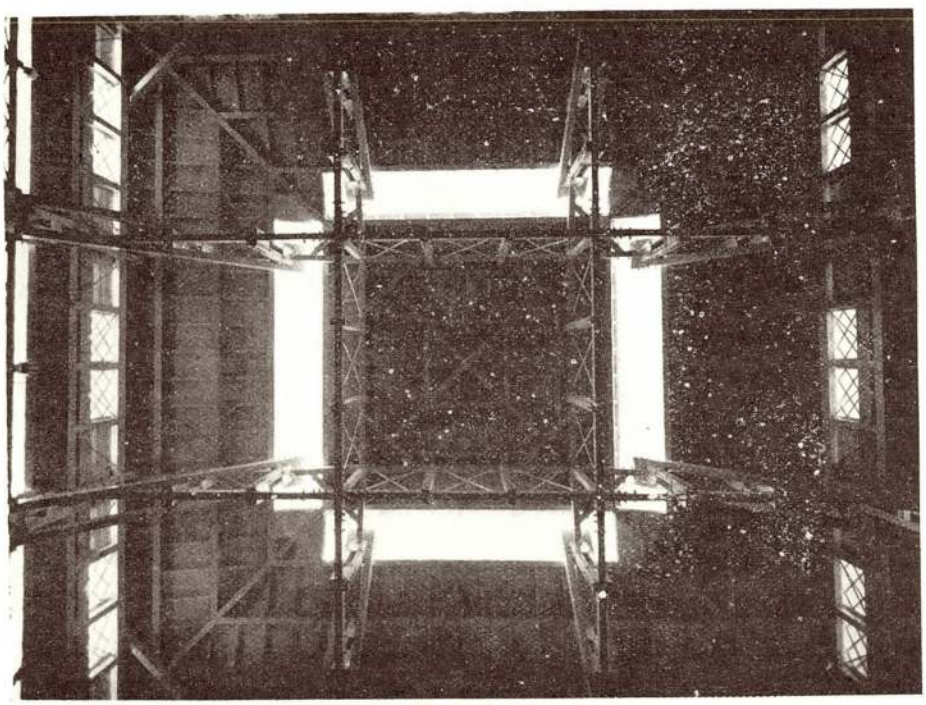
第 63 圖

は中央部吹抜きの部分にして、耐震柱、耐震トラスを正面より見たるものなり。本寫眞により耐震柱と耐震柱の、横方向の連結方法を知る事が出來る。本圖に於て黑く見ゆるものは純裝飾用材にして、何等構造には關係なきものである。



第 6 4 圖

第 64 圖　吹抜上部耐震トラスを見上げたる圖なり。井桁の構造を明瞭に知る事が出来る。



第 6 5 圖

第 65 圖は前圖と同じく、吹抜上部耐震トラスを其の中央眞下より見上げて寫したるものである。耐震トラス、隅木、母屋及び棰の位置を知るに便なり。

第4章　結　　言

本構造方法に類似したる構造方法は、早くより獨逸に於て、Freitragende Holzbauten として盛に使用されてゐる。我が國に於ては、先輩諸兄の二三の方がこの種の構造方法により、住宅建築を建てられたかの如く聞くのみにして、未だ其の利用の充分ならざるを遺憾とし、茲に著者の關係せる建築物の紹介を兼ね簡單なる說明を加へたまでゞある。

著者は未だこの種建築物の各部構造箇所の實驗的研究を完了し居らざる故に、其の結果を發表する事の出來ない事を遺憾に思つてゐる次第である。この實驗的研究の完成と共に其の設計計算方法をも合せて、稿を改めて筆を取る考へである。

この構造方法による建築物を設計監督したる體驗上、其の施工方面より見たる、本構造方法に關する感想の二三を記すれば次の如し。

本構造方法は其の設計當時に考へたる程、施工しにくき構造方法でない。柱、梁、小屋組材及び其の他の構造材は全部先づ最初に仕上寸法に鉋削りをなし、圖面にならつて、現寸圖を畫き、其の現寸圖より『ボールト』の穴の位置を明記し、電氣『ドリル』により穴明け專門の大工が、順次穴を材上に記したる符號に從つてもみあけるのである。これにて下小屋に於ける仕事は完全に濟んだのであつて、以後は現場に其の材を持ち運び、手傳と大工により組立つれば、軸部は完成するのである。上記の如くであるから、在來の如き複雜なる仕口や繼手を、種々なる大工道具により、長時間を費して作る必要は少しもなく、單に尺度、墨、鋸及び電氣『ドリル』さへあるならば、何人にも簡單に施工し得るのである。

著者の關係した建築物に於ては、現場に於ける請負者側の監督は云ふに及ばず、大工の棟梁から手傳に至るまで、皆本構造方法による施工に關して無經驗者であつたから、其の圖面より一々說明を爲し、各種結合部に至つては其の現寸圖に就き詳細なる指示をなしながら工事を進めたる故、其の最初に於ては、相當なる時日を要したるも、工事關係者一同が其の構造方法を了解したる後は非常に能率よく、工事の進捗を見たのである。故にこの種の構造方法により、二三の建築物を施工したる職人を用ひて、工事を行ふならば、其の最初に於ては、相當なる勞力を費して建築された鐵筋コンクリート構造が、現在では建築工事中最も簡單なる工事となつてゐる事實以上に、簡單なる工事となるであらう。

材料に於ても、この種の建築物が、盛んに建築さるゝに至れば、其の標準寸法を定め、既製品を製作して、市場品となすならば、其の工費も著しく安價になるであらう。

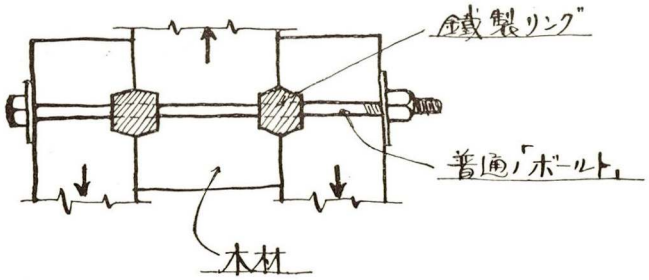
又補强用金物、木材締結用『ボールト』等に於ても、木材の標準寸法が定まれば、これに從つて種々考案され、鐵材と鐵材を締結する『ボールト』ではなく、木材と木材とを締結する爲の特殊の『ボールト』（後に其の一例を說明す）の出現を見るであらう。

かくの如くにして本構造方法の發達を見るならば、其の利用範圍は廣大なるものである例へば本構造法の取りはづし、組立自由なる、移動性に富む點より考へて、博覽會建築、

海岸に於ける或る時期を限つて使用する建築物、其の他震災時に於ける『バラツク建築』及び特殊の工場建築等には最も好都合である。震災時に於ける『バラツク』建築に對しては 或る一定の場所にこの種建築材料の保管をなし、いざ地震となれば種々なる救援材料と共に本構造方法による建築材料を一纏となし、現場に送る如くなすならば、如何に速やかに罹災民を雨露より救ふ事が出來るであらうか。又この種バラツクは地震時に於いて必要であるのみならず一旦緩急あれば軍需品の倉庫として必ず必要なるものである。

木材專用の『ボールト』として考へらるるものには、次の如きものを擧げる事が出來る。即ち、木材は鐵材に比して其の耐壓力が極めて低き故、大なる面積にて、壓力に抵抗する如く設計せなければならない。この目的の爲には第 66 圖の如き『ボールト』を使用すれば可ならん。

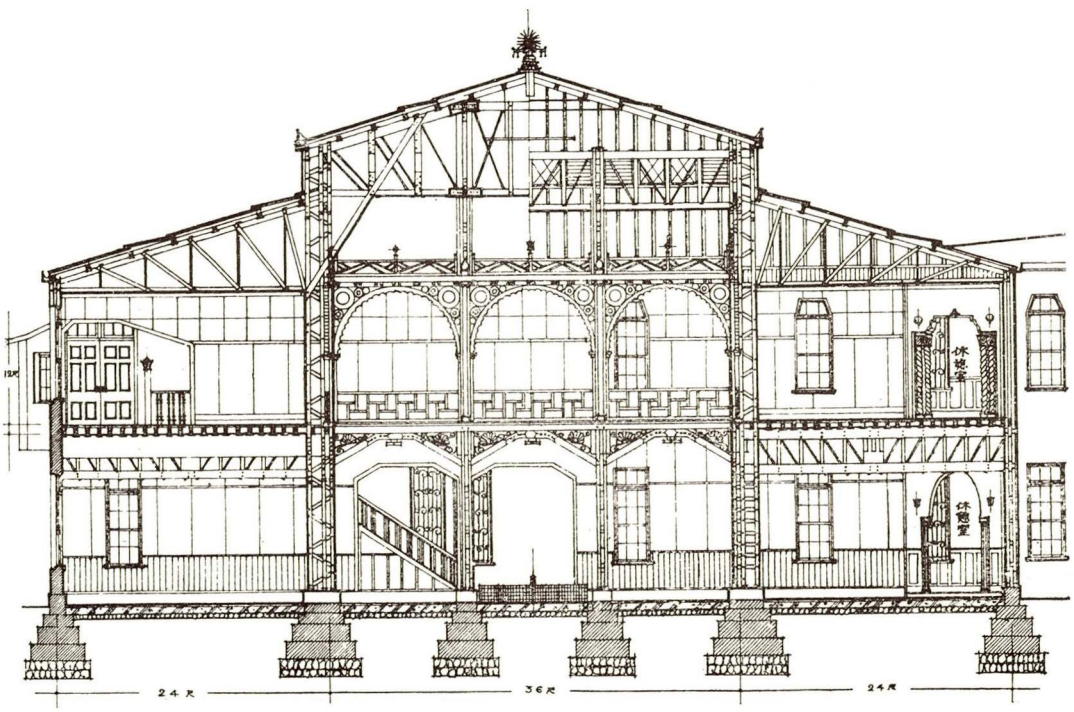
第 66 圖



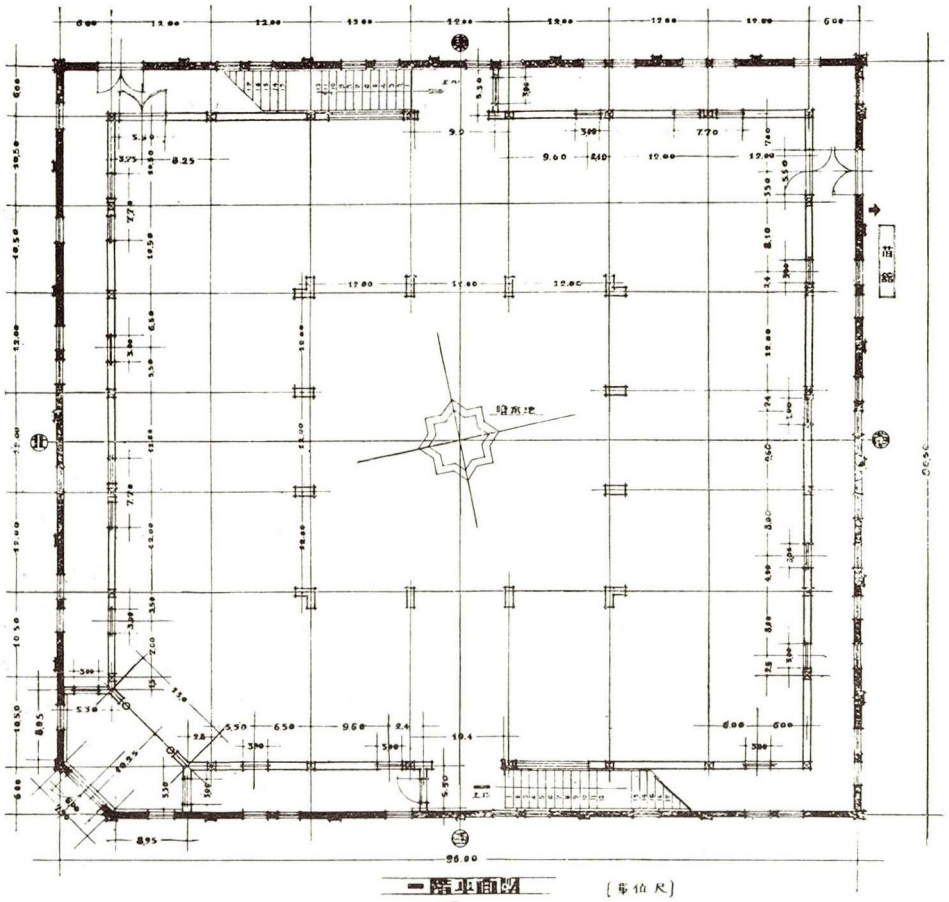
尙住宅建築に本構造方法を用ふるならば極めて簡單に耐震家屋を建築する事が出來る。これ等の詳細に關しては又筆を改める事にする。　（附圖は其斷面圖及平面圖なり）

最後にこの種建築に關する諸先輩諸氏の御鞭撻と御指導をお願ひして筆を擱く。

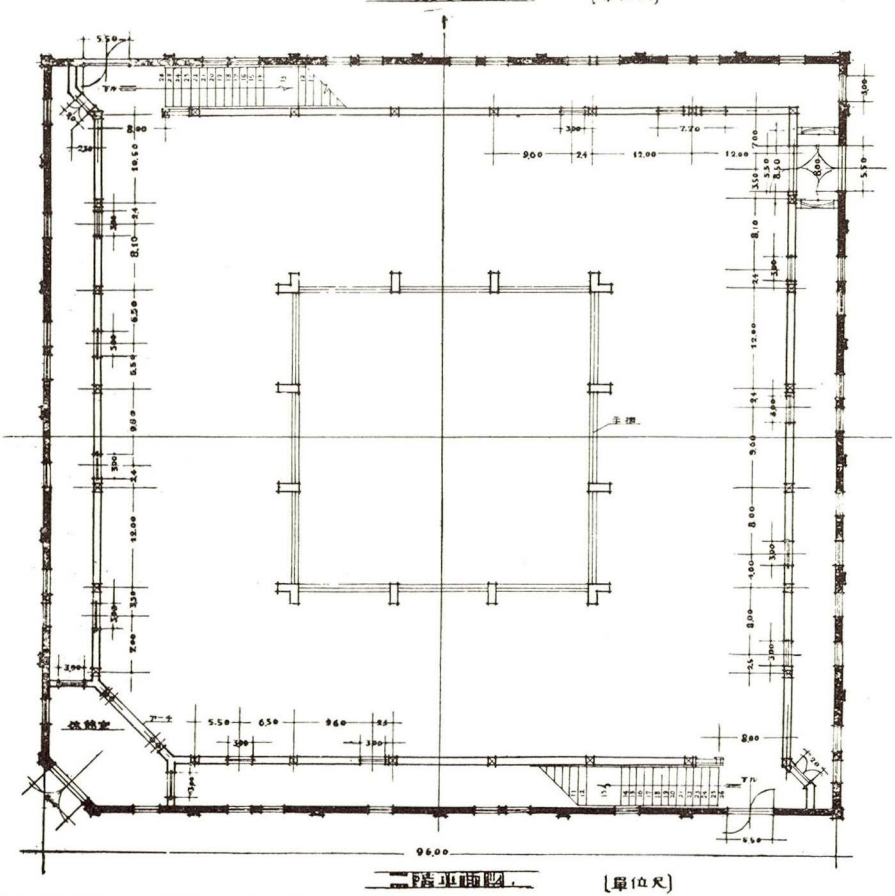
（昭和 7. 6. 17）



斷　面　圖



一階平面図 〔単位尺〕



二階平面図 〔単位尺〕

鎔接と電氣鎔接(下)

鶴田　明

(3) 電弧鎔接

1. 概說並に沿革

融接の一種である事は前述の通りであるが之は鎔接に用ふる熱源として電弧を用ひる方法である。電弧の發生は、二つの炭素電極棒間に飛ばす方法もあり、又は炭素電極棒と被鎔接金屬(以下母材なる字を用ふる)との間、或は金屬電極棒と母材との間に起すものもある。尙空氣中に電弧を露出せしめては鎔接部に悪い結果を及ぼすために瓦斯で包む方法、電弧を塗布劑を以て保護する方法等、種々に考案せられてゐる。何れにしても、電弧を以て母材を鎔融し此の部分に何等かの方法で鎔融金屬を供給して鎔接を完成せしむるものである。

之を分類せんとするには種々なる方面から考へなければならない。

- 電流
  - 直流電弧鎔接
  - 交流電弧鎔接
- 電極棒
  - 炭素電極電弧鎔接
  - 金屬電極電弧鎔接
    - 裸電極
    - 被覆電極
- 作業上
  - 手鎔接
  - 機械鎔接

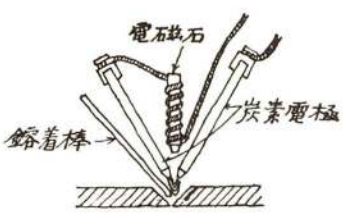
之等のものが又其行ふ方法によつて種々分類せられるが、中には過去に於ける歷史として知られ現在用ひられてゐないものもあり、或ひは新しい形で現れて來たものもある。古い着想から新しいものを生み出す場合も多々あるので沿革を知ると云ふ事も亦必ずしも無駄であるとも考へられない故、發明より現在に至る發達の階梯を略述してみる。

電弧の現象に就ては古くから認められてゐたと思ふが、之を鎔接に用ひる端緒を開いたのは一八二〇年頃英人 Davy 氏が電弧が磁力によつて屈折する現象を發見したのが始まりであると言はれてゐる。其后様々な實驗研究が行はれてゐた様であるが始めて實用的な方法を考案したのが、露西亞人 Benardos 氏であつて一八八七年偶然にも米人 Thomson氏の抵抗鎔接機の實用化と年を同じくして、電極の一つを炭素棒とし一方を被鎔接金屬とし此の間に電弧を發生せしめ鎔接を行ふ事に成功した。續いて伯林の Zerener 氏は一八八

九年二本の炭素電極棒間に電弧を生ぜしめ磁力の作用で被鎔接金屬に吹付ける方法を考案し、一八九二年には Benardos 氏の方法を改良して電極として金屬を用ひ同時に其金屬が鎔融して鎔加材となる方法を露西亞人 Slavianoff 氏が案出して始めて現在用ひられる方法としての形を整へた譯である。然るに未だ以上の方法では鎔接部の性質が不十分であつた所が、二十世紀初頭に於て金屬電極棒の上に鎔劑を塗布する事が考案せられ、此の鎔劑によつて電弧の保護、鎔接部の改良等が行はれる様に工夫せられた。之が Stromenger-Staughter 法と呼ばれてゐる。一方炭素電極を用ひた Benardos 氏法は僅に電弧切斷又は非金屬の鎔接に用ひられてゐたのみであつた所最近米國のリンカーン電氣會社によつて 'Electronic Tornado Process" として全く面目を一新して現れて來た。以上の諸方法に就て以下順を追つて述べる事にする。

2. 電弧吹管鎔接法

Zerener 氏の考案した方法である事は前述の如くであるが、二本の炭素電極間に發生せし電弧を磁力によつて吹付け、恰も瓦斯鎔接に於いて吹管より焰を吹付ける様な工合になるので Electric Blow Pipe Method と呼ばれてゐる。磁力は電弧を起す電流を其儘利用して電磁石とするのであつて、鎔接熱の可減は電弧の長さで調節する様になつてゐる。大體の機構は第十三圖に示す様なものであるが、此方法では電弧の一部分の熱しか利用出來ず又は鎔接部に多量の炭素を與へる爲に脆性を增大する事、或は機械が大きくなる事、作業に熟練を要する等の欠點があつた爲に當時僅に粗雜な仕事に用ひられたのみで發達しなかつた。併し着想としては面白いので或は又何等か改良せられて吾人の前に現れて來る時があるかも知れない



第13圖
ツレーナー氏法 (Zerener Method)

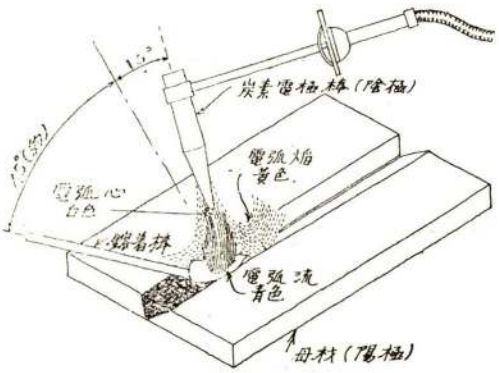
3. 炭素電弧鎔接

此の方法は Benardos 氏によつて考案せられた方法で最近に同じ原理で "Electronic Tornado Process" として更生してゐる

(イ) Benardos 氏法

電極の一つとして炭素棒或は graphite を使用し他極は被鎔接材としてゐる。此等二つの電極間に直流を通じて電弧を發生せしめ、此の熱を利用して母材を鎔融し、一方金屬棒を用意して接合部の材料の不足を共に鎔融しつゝ充填してゆく。電弧の熱は攝氏三五〇〇度位あつて、最初には炭素を正、母材を負の極としたものであるが之では熱の効果が少いのみならず鎔接部に多量の炭素が混入するので普通は炭素棒の方を負、母材を正の極としてゐる。電弧の電壓は二〇～五〇ボルト、電流の强さは二〇〇～五〇〇アムペアーで時に

は一〇〇〇アムペアー位迄用ふる時もある。被鎔接材の大小によつて炭素棒の太さも異り五～四〇粍位用ふる。仕事は上向及び竪姿勢の作業が出來ないので專ら下向姿勢のみで仕事をしなければならない不便がある。鎔接部補足用の金屬棒は勿論被鎔接材によつて異り、鐵金屬には鐵を、眞鍮や砲金等には銅を主體としたものを用ひ、夫々適當な鎔劑を必要としてゐる。

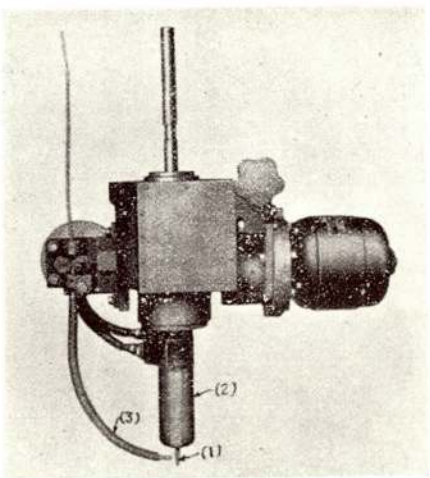


第14圖　炭素電弧鎔接法（Benardos Method）

此の工法は仕事が制限せられる事、電力を餘分に要する事、鎔接部惡化の恐ある事等で金屬電弧法が考案せられて以后は餘り使用せられず現在ではむしろ切斷に利用せられてゐる場合が多い樣である。

（ロ）Electronic Tornado Process

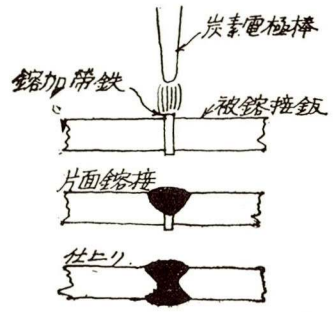
米國のリンカーン電氣會社（Lincoln Electric Company, Cleveland, Ohio.）が極く最近考案した方法であつて、炭素電弧を利用し自動的に作業を行ふ機械鎔接である。床鐵板の鎔接、鋼管の鎔接等に主として用ひられてゐるもので非常によい成績を擧げてゐる樣である。我國に於ては未だ一、二の會社で使用してゐるに過ぎない。



第15圖　Electronic Tornado Head

機械の最も重要なる所は Tornado と稱する炭素棒を保持する部分である。第十五圖の寫眞に示したものがそれである。寫眞中の(1)が炭素電極棒で、此の炭素棒の作業中の過熱を防ぐために(2)の管中に水が循環して冷却する樣になつてゐる。之丈では從來の炭素電弧法と大差はないのであるが、(3)に示す autogenizer と稱するものが炭素電極端に交叉する樣になつてゐる。之は特殊な紙に或藥品が染み込ませてあるもので電弧の發生と共に燒けて水素瓦斯に似た一種の瓦斯體を生じ鎔接部を保護する樣になつてゐる。之の瓦斯體で保護すると云ふ事が鎔接部の仕上りに非常に有効な事であつて、理論としては古くより唱へられてゐた事であつたが之を實用化したのは本工法が始めての樣である。此の外の機械の設備としては一種の磁場を作つて炭素電弧の安定を計つてゐるのも新しい考案の一つであらふと思ふ。此の方法は炭素電極である故勿論何等かの方法で鎔加材を補はねばならない。そこで普通衝合鎔

接を行ふには第十六圖の様にしてゐる。即ち接合せんとする鈑の間に薄鈑を挟み之を片面より鎔接し次で他面より鎔接して完成する様になつてゐる。之等の作業は無論鈑厚によつて單に一面でよい場合と兩面行はねばならぬ場合とある。鎔接熱の調節は電弧の長さで行ひ、電弧の長さは電壓で可減する。



第16圖　Lincoln Electronic Tornado 法に依る鐵板鎔接順序

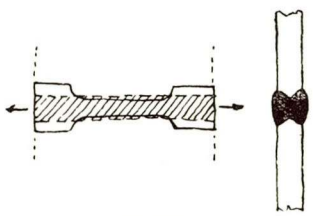
(電弧長)	(Volt)
$\frac{1}{2}''$	42
$\frac{3}{8}''$	38
$\frac{1}{4}''$	34

オートゲナイザーの消失速度は一分間に十八吋、鎔接の速度は被鎔接材の鈑厚が $\frac{3}{8}''$ 乃至 $\frac{1}{2}''$ で一分間九吋半となつて居る。電極棒の徑は仕事の大小により變へるのであるが之には、Tornado の部分を差換へる様になつてゐる。

此の鎔接法によつて出來たものの强度試驗成績を紹介したいと思つたが生憎我國に於て行はれた實驗報告が手許にないので止むを得ず米國に於て行はれたものでリンカーン社の型錄にあるものを紹介する。此の實驗はリンカーン社の研究所の報告である。

實驗は鎔接部のみのものと衝合接手と二つの報告がしてある。

(a) 鎔接部のみのものの實驗は普通の構造用鋼を用ひ、第十七圖に示す様な實驗材を八

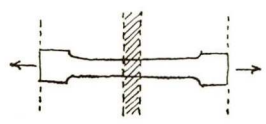

第17圖

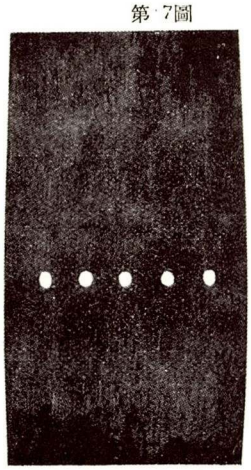
	彈性限度	最大抗張强度	伸度
原鈑	約 30,000 #/in² (21 kg/mm²)	55,000 #/in² (39 kg/mm²)	22% (2" gage)
鎔接部 (8個平均)	58,275 #/in² (41 kg/mm²)	78,287 #/in² (57 kg/mm²)	21.25%

第5表　平均强度

個作つてゐる。其試驗成績は第五表の如くである

(b) 前と同じ鋼板を用ひて衝合接手を作製し其鎔接部を盛上つた儘、或は原板と同じ厚さに削り、又は鎔接部に穴を明けたりして實驗してゐる。實驗の結果は第六表に示す如く何れも原鋼板の部分で切斷してゐると云ふ好成績を示してゐる。

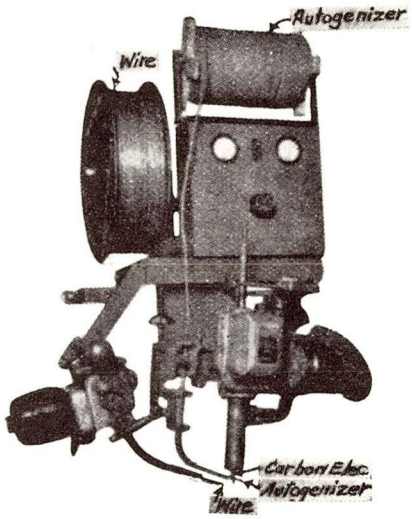

第18圖


第19圖　試驗片 H

番號	試驗片	原板部斷面積 $(in)^2$	鎔接部斷面積 $(in)^2$	鋼板の最大强度 (#/in²)	鎔接部應力 (#/in²)	破壞部
H_3	盛上りの儘	1.058	1.167	55,450 (39.3)	50,250 (35.5)	原鋼板部
H_2	片面削り	1.059	1.113	55,200 (39.0)	52,450 (37.0)	同
H_1	兩面削り	1.048	1.049	55,800 (39.5)	55,750 (39.3)	同
H_4	0.119″徑の孔鎔接部に1個 兩面削り	1.062	1.035	55,000 (38.8)	56,450 (40.0)	同
H_6	同上 孔3個	1.070	0.893	55,150 (39.0)	66.100 (46.8)	同
H_5	同上 孔5個	1.065	0.786	54,750 (38.5)	74,100 (52.5)	同

第 6 表　（括弧中の數字は kg/mm² を示す）

以上の如く現在普通に用ひられる金屬電弧によるものより遙に良好な成績を示してゐるが最近までは鎔加材として帶鋼を用ひたため鋼板床及び鋼管等の限られた範圍の用途を有するのみであつたが極く最近新しい型を考案して鎔加材として普通の鋼線を用ふる様な機械が出來た故、車輪の肉盛り等多少利用する範圍が廣くなつた。機械は第二十圖に示す様に以前のものに別に鋼線を附けて自働的に繰出す様になつてゐる。此の機械は未だ我國には來てゐないらしい。



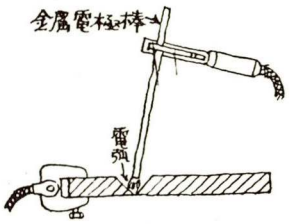
第20圖　新型 Lincoln Electronic Tornado 自働鎔接機

4. 金屬電弧鎔接

前に述べた如く露西亞人スラビアノフ(Slavianoff)氏がベナルドス氏法を改良してその炭素電極の代りに金屬電極を使用したものであつて、始めは金屬製電極棒として裸線を使用してゐたものが後に被覆劑を塗布する事が考案せられ其利用範圍が非常に廣くなり、電流も場合によつて交直流何れでも立派な成績を擧げ得らるる様になつて、其後の研究改良等と相俟つて茲に輝かしい前途を持つ工業として獨立し得る様になつたものである。

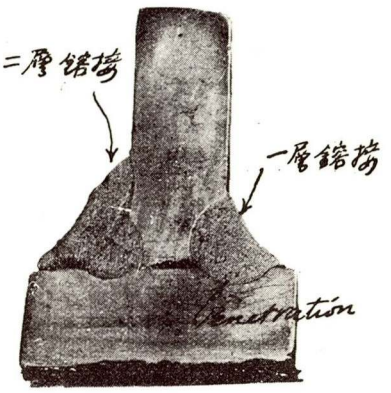
此の工法は第二十一圖の様に被鎔接材と同種の金屬線を一極とし、之と被鎔接材との間に電弧を發生せしめ此の熱を以て被鎔接材を鎔融すると同時に電極棒たる金屬線自身も其先端から順次鎔融して被鎔接部に鎔着し、被接合物と一體となつて鎔接を完成する。

作業方法としては、先づ電弧を發生せしめんとするのであるが所要の電弧長を得る狀態



第 21 圖

で發生せしめんとすれば高電壓を要して鎔接作業者に危險を及ぼす恐があるので、最初に電極を接觸せしめ瞬時にして之を引離すと電弧が發生するので漸次其間隔を離して所要の電弧長とする。電弧が發生すると電極棒より鎔融金屬球が電弧中を通過して母材に鎔着するのであるが此の時溫度の上昇が充分な場合は一部金屬は氣化するに至り、一旦氣化した金屬は母材に觸れて再び液狀となり鎔着すると云はれてゐるが、此の現象は極めて短時間の中に行はれるので金屬の幾何が氣化し幾何が液狀の儘であるか明瞭でない。斯くして適當に作業せられたものを切斷してみると第二十二圖に示した如く鎔着金屬は母材に鎔込み（Penetration）を起して接合してゐる。寫眞の中で鎔込みが明瞭に分るのはピクリン酸で腐蝕したもので、普通切斷した儘では殆んど見分けがつかないのが通常である。



第 22 圖

然るに此の方法に於て裸線を用ふると、電弧が空氣中に露出して居るために鎔融鋼が此の中を通過する際に空氣中の酸素及び窒素に觸れて酸化物或は窒化物を成生し之が鎔接部に混入する恐れがあり、或は交流電源を用ふる場合は電弧を保持する事が困難である、又は軟鋼以外の金屬の接合には餘り結果が思はしくない、等の欠點があつた。

そこで金屬電極棒の表面に適當な藥品を塗布して鎔接部の性質を改良する事が考案せられた、之が一般に Stromenger-Staughter 法と呼ばれてゐる事は前述の通りである。茲に於て鎔接法は全く面目を一新し、交直何れの電流にても差支へなく作業が行はれ、或は鋼線の眞に適當なる被覆劑を塗布して砲金の鎔接に成功し、鐵眞の被覆電極棒を用ひて不銹鋼の鎔接が可能になる等の進歩をなして、スラビヤノフ氏の發明以來僅に四十年を經たに過ぎない今日に於ては、殆んど總ての金屬が、單一金屬或は合金屬を問はず、電弧鎔接によつて接合し得るに至つた。只熱處理或は機械的操作によつて強大なる強度其他を與へられた金屬は鎔接熱による燒鈍のため其特殊性を亡ふので之等のものの接合には未だ適用せらるるに至つて居らないのは遺憾な事である。

(a) 裸電極棒使用の場合

アメリカに於る鎔接は數年以前までは殆んど全部此の裸棒を使用しておつた。此の方法の特長としては電極棒を加工する必要がないので比較的安價である事であるが、次の如き欠點がある。

（i） 使用電流が直流に限る事で交流を使用すると電弧の保持が困難である。

（ii） 鎔接作業中空氣中の酸素、窒素等と化合する機會多く、鎔接部を惡化し易い

（iii） 電弧中に於て炭素其他が消失するため鎔着金屬の性質が稍々限定せられ、軟鋼以外の鎔接には不適當。

裸電極棒の化學的成分としては米國鎔接協會の規定を示せば次の如くである。

	手鎔接用（%）	機械鎔接用（%）
炭　素	0.13〜0.18	0.10 以下
マンガン	0.40〜0.60	0.25〜0.45
燐	0.045 以下	0.045 以下
硫　黄	0.045 以下	0.045 以下
硅　素	0.06 以下	痕跡

（b） 被覆電極棒使用の場合

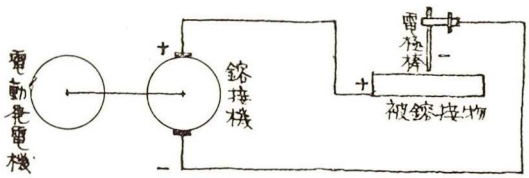
歐羅巴方面で主として使用せられて居り、我國に於ても最初の輸入（大正四年頃三菱造船所に於て）が瑞典の Kjellberg 式被覆棒であつた關係上か、現在は被覆棒が主として用ひられてゐる。アメリカでも最近は被覆棒を用ひ始めた様に聞いてゐる。此の方法の特長は、電流として交直流の何れでも差支へない事、被覆劑によつて鎔着金屬の性質を或程度まで任意に變じ得る事、鎔接作業中鎔融せる金屬の酸化及び窒化等を防いで保護する事等であつて欠點としては被覆劑の材料及び加工手間を要するため多少高價になる事である。

被覆は比較的薄いものと厚いものとある。そして其等の種類に依つて作業技術が多少異るため、或種の電極棒に熟練した者でも異つた棒を用ふる時は相當練習を要する。

被覆劑の成分は各製造所で公表して居ないため判然としないし、又之に關する規格の様なものの制定も困難であるためか世界各國に於ても未だ其規格を定めた所はない。尙被覆する材料が不燃性のもの例へば石綿の様なもので巻いてあるものもあるが、此の目的は單に電弧と空氣の接觸を防ぐと云ふのであらふが餘り用ひられてゐない様である。

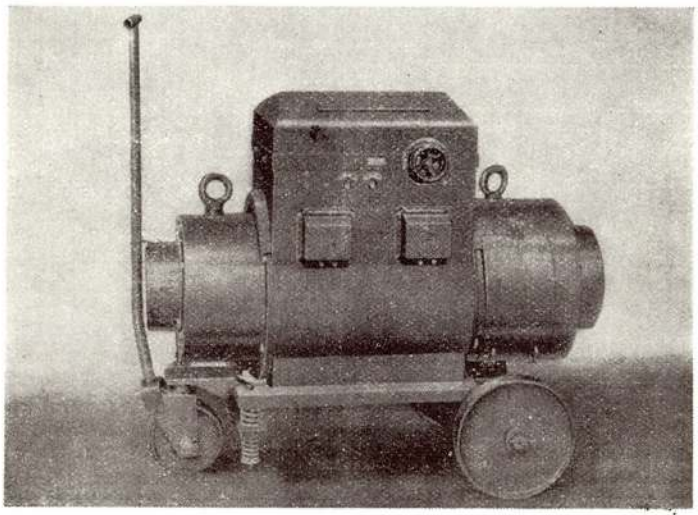
（c） 直流電流使用の場合

使用する電極棒は裸、被覆の何れでも差支へない　直流鎔接回路の大體の關係は第二十三圖に示す様に交流電源を受けて電動機によつて直流を發電し之を鎔接機に導く様になつて居るもので直流鎔接機は電動發電機の部分と鎔接機の部分と一つの機械の中にあるので、大さが大きく重量も重くなる。從つて工場作業の様に固定した場合には差支へないが、建築現場の様に足場の上の作業には面白くない。仕事の難易よりすれば直流の方が電弧が安定で少し位長くなつた時でも電弧が切れる様な事が少い故容易であるが、長電弧が惡いと云ふ點か



第23圖　直流鎔接回路

ら、兎もすれば長くなり易い直流より交流の方を推賞する說もある。併し仕事が容易なればよく仕上げ易い故、差支へない限りは直流の方が間違ひがないであらふ。電弧を切る事は鎔接部に悪い影響を與へ易い。直流鎔接機の一例は第二十四圖に示す。



第24圖　直流鎔接機

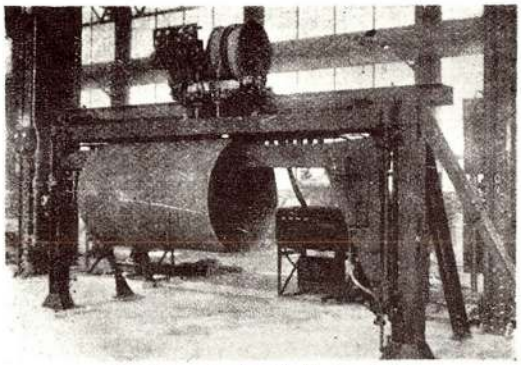
直流鎔接機は交流電源で電動發電機を運轉するものが普通であるが其他にガソリンエンヂンで行ふものもあり又は工場內でベルトによつて運轉するものなどある。ガソリンエンヂンによるものは電力の供給不可能な土地で行ふ場合に使用するもので、建築の仕事には餘り用ひられないものであらふと思ふ。尙直流機は相當高價である事が欠點で現在の様に未だ仕事が少い時とか小規模な工場では一寸手が出し難い欠點がある。此の直流鎔接の場合には裸線を用ひて普通の針金の様に長くして置けるので、之を自働的に機械力によつて繰出し、其他總て機械的に鎔接を仕上げる機械が出來てゐる。之を機械鎔接と呼んでゐる。

機械鎔接（或は自働鎔接）

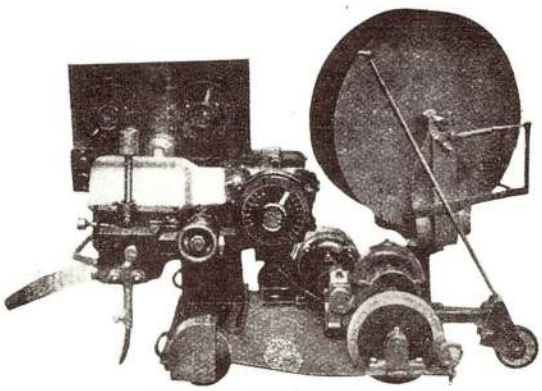
此の機械鎔接は既に十數年以前より種々の方法が考案せられたが何れも實用の域に達しなかつた所遂に一九二二年米國 General Electric（G.E.）會社によつて完成せらるるに至つたもので其後各會社によつて夫々特長がある方法が案出せられ、現在では G.E. 式の外に Westinghouse 式或は獨逸の A.E.G. 式等がある。

（前述の Lincoln 社の Electronic Tornado 法も此の機械鎔接の一種であるが炭素電極法である故此處に述べるものとは趣を異にしてゐる）

次に G.E. 式に例を取つて大體の說明をしてみる。機械鎔接機はその機構が大約、鎔接頭、制御裝置、鎔接機の三つの部分から成立つてゐる。鎔接頭は電極棒を保持して制御裝置の助けにより、(一)電極棒を加工場に接觸せしめ、(二)直に少し少く引離して電弧を發生せしめ、(三)電極棒の消耗する割合に應じて繰出し、電弧の長さを常に適當に保持しながら電極棒を前後に動かす働きをする。鎔接機は一般に鎔接機と稱せられるものとは異つて、此の場合には加工物を保持し、又は鎔接頭をのせ或は之を動かすもので加工物の形によつて適當に製作する様になつてゐる。



第25圖　直線機械鎔接機



第26圖　移動機械鎔接機

機械鎔接機は（a）直線的に鎔接するもの、（b）圓の周に沿つて鎔接するもの、（c）機械が移動すもの、等ある。（a）はタンク、パイプ等の縦の繼目を自働的に鎔接するに利用せられ、（b）はタンク、パイプ等の圓周に沿つて鎔接するもので加工物が回轉する様になつてゐる。（c）の移動機械鎔接機は床或は之に類する船の甲板等に利用せられるもので、車のついた臺の上に乘つて居り車の進行、鎔接等が總て機械的に行はれる

機械鎔接の特長は

一、鎔接速度の大なる事で手鎔接の三倍乃至六倍の速度である。

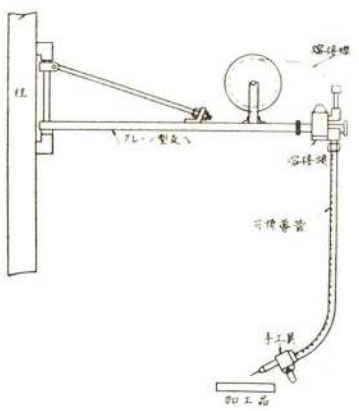
二、製品が良好且つ一定してゐる

三、鎔接者によつて生ずる種々なる問題が可及的除き得られる。

等であるが一方欠點としては製品の範圍が限定せられ一般的でない。特に建築用としてはタンク等の類以外には餘り利用し得られない。

半機械鎔接

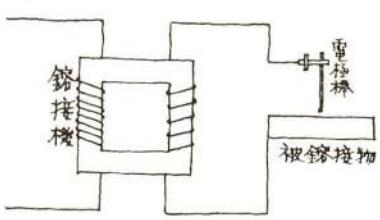
之は手鎔接と機械鎔接の中間のもので、電極棒の供給、電弧の保持等を機械的に行ひ、接合部に沿つて電極棒を運行する事は手で行ふもので其裝置の大要は第二十七圖に示してある様なものである。之は機械力と人力とを半々に利用する如く其利點と缺點とも相半する様である。



第27圖　半機械鎔接機

(d)　交流電流を使用する場合

一般に供給せられる一一〇ボルト內外の交流電源を受けて直に鎔接機に導くものである、そ



第28圖　交流鎔接回路

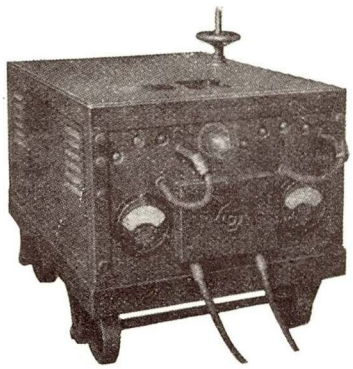
の電流回路の大體は第二十八圖に示してある。鎔接機中の主なる部分は變壓裝置であつて次の如き部分から成立つてゐる。

一、電弧鎔接用變壓裝置　　二、電弧安定裝置

三、冷却裝置　　四、計器

斯く其機構が簡單であるため、形も少さく、重量も輕いので手輕であつて建築の現場等に用ひて便利であるが、電力の効率が悪く、又電弧が不安定なので仕事は相當熟練を要する等の欠點がある　價格は直流機の三分の一乃至四分の一位である故此點も小規模な場合等には好都合であらふ。只交流を用ふる場合に最も注意を要するのは電極棒で、被覆劑が簡單に剝離せず、且つ電弧を充分保護し、鎔着金屬の性質を良質のものとする様なものを撰擇すべきである。

交流鎔接機にも可搬式と固定式とあるが只車輪の有無位のものである。第二十九圖には可搬式の交流電弧鎔接機の一例を示してある。



第29圖　交流鎔接機

鎔接機に附屬してゐる計器とは一次側或は二次側のボルト及びアムペアーを示すメーターであつて古い式の鎔接機には餘りついてゐなかつた様であるが最近のものには大抵取付けてある。計器は二次側(鎔接電力)を測定する様にしておくと便利で、仕事をしない時には

{ボルタメターは一一〇ボルト內外
{アムメターは零

を指してゐる。次に鎔接を開始すると指針は

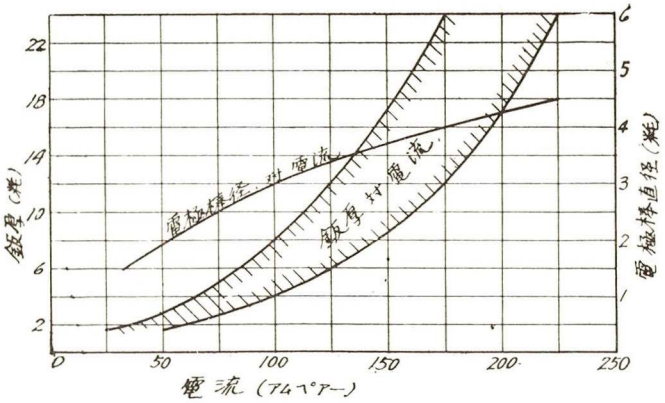
{ボルタメターは二〇乃至三〇ボルト
{アムメターは一五〇アムペアー內外

を指し、(數字は調節によつて異る)之の針が安定してゐる時には鎔接が順調に行はれてゐる事を示し、左右に振れてゐるのは電弧の長さが一定しない事を示してゐる故、メターを讀んで仕事の狀態を監督し得られる便利がある。

(e)　電流の强さと仕事との關係

鎔接に使用する電流の强弱、適否は鎔接部の仕上りに重大な結果を與へる。而して電力は加工物の質量、電極棒の太さと相對的の關係を有してゐる。之を具體的に述べると、薄い鐵鈑を鎔接する場合に太い電極棒で强電流を用ひると鎔融が早く過熱或は燒き切る恐れがある。反對に厚い鈑の時に細い電極棒で弱い電流を用ひれば、鈑の方の鎔融が不完全で鎔込みが不充分となり、丁度油紙の上に水滴を落した様に殆んど浸込まない。然らば或仕事に對して最も適當な電力は如何と云ふ問題が起つてくる。

電流の強さが一定の加工物に對して最も適當した場合は熟練した鎔接者なれば仕事の上から判斷するが一般にどの程度であるかと云へば、之は使用する電極棒によつても多少の差異はあり、又或範圍を持つものである。第七表は普通の被覆棒の大體の標準であつて、鈑厚と電流の强さ、電極棒徑と電流の强さ、等の相互の關係を現した圖表である。勿論總ての電極棒が之に據らねばならぬと云ふ樣な事ではなく之は單なる標準を現したものである。



第7表　鈑厚、電流、電極棒徑の關係

アメリカに於て裸棒を用ひてゐる標準は第八表の樣な狀態であつて、一般に我國より多少强い樣である。

電極棒徑(吋)	電流(アムペアー)	鈑厚(吋)
1/16	50～75	3/16 まで
3/32	75～100	1/4 まで
1/8	100～150	1/8 以上
5/32	150～200	1/4 以上
3/16	175～225	3/8 以上
1/4	200～250	3/8 以上

第8表 米國に於ける鈑厚と電流の關係

電極棒徑(吋)	アムペアー	ボルト	電弧長(吋)
1/16	50	15～18	1/16
3/16	175～200	18～22	1/8～3/16
1/4	250以上	20～26	3/16～1/2

第9表　米國に於ける電壓の標準

電壓(ボルト)は簡單に云へば電弧の長さを我々に示すもので、ボルトが昇れば電弧が長くなる。であるからボルトの標準も知つておく必要がある。(第九表は米國の標準)

電弧長が鎔接部の性質に及ぼす影響に就て米國に於て實驗せられたものがある故其大略を示してみたいと思つて第十表に揭げておいた。("A Metallographic Study of Some Metallic Arc Welds" By H.M. Boylston)

此の電壓も勿論夫々電極棒の特性によつて異るものであり、又或範圍なれば差支へないのである故第九表は只單に參考迄に揭げたものである。

(f)　歪に就て

歪の問題は單に電弧鎔接のみならず總て鎔接にはつきものであつて、從來屢々此の問題による失敗もあつた樣である。否今日と雖も隨分惱まされてゐる事實がある。其故鎔接の實施に際しては此の點

試驗片	電弧長(吋)	ボルト	アムペアー	抗張强度(#/in²)	備考
1	1/8	20	160	51,217	高溫中　短
2	3/16	24	130	48,467	同　長
3	1/8	20	230	50,150	常溫中　短
4	1/4～5/16	28	190	44,933	同　長

第10表　電弧長と强度の實驗成績
(夫々數多の平均値を示す)

深く研究し、或は經驗を經る事が大切であつて百の空論よりも一つの經驗に若くはないので、此點大に實際家諸賢の研究を熱望してゐる。

次に從來行はれてゐる歪防止法を紹介するが筆者の體驗ではないので遺憾乍ら單に紹介するに止める。

(1)對稱的に行ふ方法　鎔接線の中央より左右對稱的に僅宛つ鎔接を行ふ方法で一回の長さが十五糎位迄を限度とし出來れば二人で左右同時に行ふ方法である。

(2)充分緊結する方法　鎔接せられる鈑を他の堅固な鈑に充分緊結して行ふ方法で一般によく用ひられてゐる。

(3)反對に曲げて置く方法　之もよくみる方法で豫め曲る方を豫測しておいて、始めに其反對の方に曲げておくのであつて、實驗的に數多くの歪みを測定し之によつて豫め曲げる量を見當つければ相當有効なものであるらしい。

(4)他に熱を導く方法　歪は熱の作用によつて起るものである故、加工品に比して大なる熱の良導體、例へば銅の如きものと充分連結して置いて熱を之に導かんとするものであつて小形の銅製容器中に水を流して鎔接部の傍に載せておいても有効であると云はれてゐる。

(5)電極棒徑の細いものを用ひ數層に鎔接する方法　之は電極棒を加工品に對して細過ぎる位のものを用ひて數層に鎔接せんとするものであるがその棒徑如何によつては强度の上に多大の疑問がある故果して良方法かどうかと思はれる。理論上よりすれば熱が少い故歪も僅で濟む事は想像せられる。

(6)水によつて冷却する方法　造船方面で用ひられてゐる樣で鎔接部の反對側から僅の水滴を掛けて冷却せんとするもので、急冷による金屬組織の惡化と云ふ事が想像せられるが、それは程度問題で僅な水滴なれば特に惡い影響もないと云はれてゐる。

以上の外に鎔接して組立てる順序に注意する事が大切であつて、熱によつて無理の起らぬ樣に組立の順序を定めれば或程度まで歪が防止せられると云はれてゐる。又過熱及び鎔接速度が遲すぎる事は歪を防止する上に非常に有害であつて、從つて必要以上の鎔着金屬を附ける事も不經濟ばかりでなく反つて歪を增すために有害無益であらう。

以上の諸方法は未だ全く完全に歪を除去し得ると云ふ譯でなく何れも單に最小限に止めると云ふものであるが、尙之等の諸方法を利用し得ない場合も屢々ある樣である。歪に對する防止方法に就て經驗者諸賢より有益な發表あるを心から望んでゐる

(g)　監督及び檢査

鎔接を信賴し得ない重大な理由としての一つに監督及び檢査方法の不備が擧げられてゐる。併し鋲構造に於る鋲の燒過ぎ或は初張力、又は混凝土の工事に於る其廻り方の完全か否か、果して所期の强度ありや否や等に就て現在の檢査方法が充分完全であらふか。疑問を持てば種々の問題が起つて來る。併し大過なく使用し得てゐるのは全く經驗からであら

ふ。鎔接の監督や檢査方法は混凝土等に比して勝るとも劣らない種々な方法があり、從つて其信賴度もそれ丈け高い譯であるのにも不拘、檢査方法の不備であると云ふ聲を聞く事は一に新しい方法に對する不馴れから來るのではなからうか。從來全く鎔接を信賴しなかつた我海軍當局に於ても軍事上の見地から一度之を採用して以來種々なる問題を解決して新造艦艇には總て之を利用して好成績を擧げてゐる事實、或は鐵道省に於ては先づ檜山川鐵橋の補强工事に使用して、工事の簡易、費用の節約に成功して以來其眞價を認め、今や全國鐵道橋の補强工事は總て鎔接を以て行ふ計劃であると云ふ事も聞いてゐる。之等の事實に鑑みても檢査方法が一般に考へられてゐる程不確なものでなく相當信賴し得られるものである事が判ると思ふ。要は馴れると云ふ事で其爲には自ら鎔接する經驗を得又は研究を行ふ事が大切であらふ。

鎔接の檢査は先づ、鎔接前、鎔接中、仕上り後の檢査と三段に分ち得る。

條　件	强度(#/in)	順　位
新しいペンキ	9,033	(1)
清淨金屬	8,837	(2)
新しい油	8,789	(3)
赤錆付	8,573	(4)
乾燥油	8,515	(5)
乾燥ペンキ	8,402	(6)

實驗は夫々1人で6個、3人の平均
試驗片は添鈑繼ぎ ¼″ 隅肉

第11表　不純物附着の實驗成績

鎔接前の檢査としては、材料の品質檢査、鎔接者の技倆檢定、鎔接用機械器具の檢査等あるが、それ等はむしろ準備作業に屬し、現場としては被鎔接部分が設計通り仕上つてゐるかどうか、又は錆、ペンキの類の附着せるもの等を充分清掃してあるかどうか等に就て調べる。鎔接する面に錆やペンキの類が附着してゐる場合に就て實驗したものがある。(G.F. Rogers 氏發表) 第十一表が其結果で實驗者の結論としては

(一)　應張强度の變化と云ふ點よりは錆、油等は除く程の事もない。

(二)　併し實驗の結果より見て、不純物は鎔着金屬中の氣孔及び鎔滓を助長し、表面を清掃したものが最も仕事が行ひ易い。ペンキは燃えて仕事が非常に困難である。

(三)　ペンキと油は量よりも時間が大切で乾いたものは相當惡影響を與へる。

即ち此の實驗より考へるに鎔接面に附着してゐる油や塵芥は可及的清掃し、錆に就ては必ずしも鐵の地肌を完全に出す程でなくてもよいが浮錆は充分拂ひ、黑皮(Mill scale)は鎚打ちして鐵線刷毛で清掃した程度以上としたい。

被鎔接箇所が設計圖通りに出來てゐるかどうかと云ふ事を檢するに際して普通の檢査法と少し異る點は衝合鎔接部の間隙の適否及び開先の角度が正確であるかどうかを特に調べる必要がある。之には適當な型鈑を薄鐵鈑で作ると便利で、米國あたりでは既に使用して居り我國では場内丈で製作使用してゐる工場がある樣である。

鎔接中の監督としては、先づ電流、電壓が適當であるかどうか、電極棒の運行狀態、電弧の長さ、若し直流の場合には電極の檢査等に就て行ふ。之の監督を行ふには使用する電

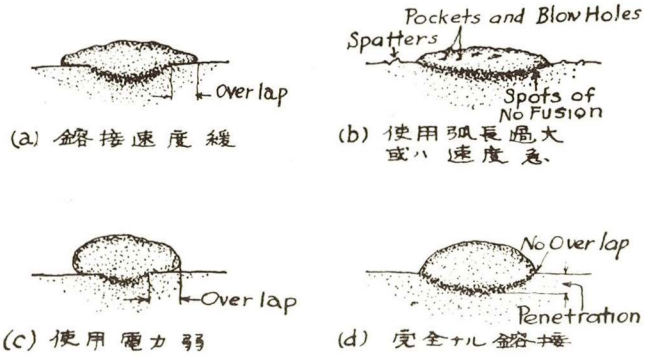
極棒の特性を充分知悉すると同時に監督者自身が相當其方法を會得して居り、是非の判斷が正しく出來なければならない。次に若し多層鎔接の場合は一層毎に充分鎚打ちして、表面を覆つてゐる鎔滓を除かねばならない。若し之を怠ると次の層との間に不純物が混入し易い。又鎔接後充分鎚打ちする事は鎔着金屬の質を緻密にして强度並に伸度を增す樣な良い結果を與へる故、此點も考へて鎚打ちは充分行ふ樣に心掛ける可きである。

鎔接仕上り後の檢査、問題となるのは此の檢査に就てである。混凝土は出來上つた後で檢査する方法は只外觀より判斷する丈けであつて、たとへ切取つて試驗しても其結果が惡い場合施工を遣り直す事は殆んど不可能であると考へてもよいであらふ。鎔接は外觀の判斷の外に次に述べる樣な檢査方法があり、たとへ現在に於ては實驗室的なものであるかも知れないが何時かは實用化する時があると思ふ。又惡ければ直に削り取つて再び施工を行ふ事も出來る。それ丈信賴し得られるのではないであらふか。

鎔接仕上り後の檢査としては現在次の如きものがある。

（i）外觀檢査　　（ii）鎚打ち檢査
（iii）石油浸出檢査　　（iv）空氣又は液體檢査
（v）標準ゲージ檢査　　（vi）X 線による檢査
（vii）磁力利用檢査　　（viii）電氣抵抗測定による檢査
（ix）伸度計檢査

（i）**外觀檢査**　は肉眼で表面より見て良否を判斷する方法で不馴れな人が考へると實に賴りない方法であるが經驗者の言によれば最も手輕で比較的正確に判斷出來るとの事である。表面から檢査する方法は 漣形の波の平均せるや否やも見るが、主として鎔着金屬と母材との境を見るもので、此部分に重なり（Overlap）が出來てゐるのは鎔接の不良を示してゐる。第三十圖は原因と結果との一例を示したもので、經驗を經れば容易に判斷し得る。海軍及び鐵道は何れも此の方法で行つてゐる樣であつて、當事者の言によれば充分であると云はれてゐる。

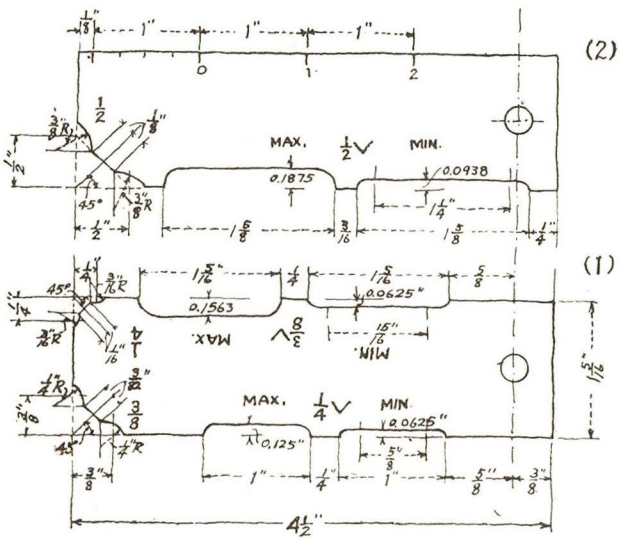


第30圖　各種ビート斷面

（ii）**鎚打ち檢査**　鎔接部を幾分避けて輕く鎚打ちを行ひ、それによつて鎔接部に破損を來すや否やを調べ、或は特殊の聽診器を用ひて音によつて判斷する方法で、外觀檢査同樣に音を聞き分ける程度の熟練を要する。特殊の聽診器とは普通のものと同樣で只普通のものゝ肌へ當てる部分にゴムを附して密着を完全ならしめたものであると云はれてゐる

（iii）**石油浸出法**　鎔接部を清掃し石油を塗つて之を拭ひ放置すると氣泡、裂疵等から石油の殘りが浸み出して來る其狀態で判斷する。海軍當局では特に大切な部分には「グラインダー」で削り均らした後、此の方法を實施してゐる由である。又之を反對に表面には白色の粉末を塗り、裏面より石油を塗れば不完全な部分より浸出して來る故一見直に判斷し得る。漏れ止めの檢査としては簡單且つ正確であると云はれてゐる。

（iv）**空氣又は液體檢査**　タンク等で實際に水を入れてみる或は空氣又は煙の類を入れて壓力を掛けてみる等する。出來れば確な檢査法に違ひないが利用する範圍が局限せられる。



第31圖　ゲージの寸法

（v）**標準ゲージ檢査法**　外觀檢査に附隨してゐる。主として鎔接部の形の適否を檢査するもので米國に於て使用せられてゐる。此の今一つの目的は經濟的見地からも來てゐるので盛り過ぎを防止して電極棒の浪費を防がんとしたものである。第三十一圖は其形の一部を示すもので(1)は $\frac{1}{4}$″ 及び $\frac{3}{8}$″ 鈑の衝合鎔接（圖中Vなる記號を附す）及び $\frac{1}{4}$″ と $\frac{3}{8}$″ の隅肉鎔接用である。(2)は同じく $\frac{1}{2}$″ 鈑用である。之を鎔接部に當てて形を檢査する方法である。

（vi）**X線による檢査**　X線を鎔接部に當てて寫眞を撮つて、その內部にある氣孔、鎔滓等を發見せんとしたもので厚さ十糎位迄の鈑を透過し得ると云ふ。併し鎔込み（Penetration）が判斷し得ない事と設備費が高價であり且複雜なため現場には適さないと云はれてゐる。併し米國ではボイラー其他に既に利用し、現場用として簡單に目で見るものも出來て盛に用ひられてゐる樣であるから、或は近き將來に於て各所に利用せられる樣になるのではないかと考へられる。併しX線は厚さ十糎位迄で且つ十萬乃至二十萬ボルトの高壓を要する欠點があるため、G.E. Doan 氏はガムマ線を利用する事を發表してゐる。之によると三十糎位まで透過し且つ道具も簡單で現場に用ふるに便利であると述べられてゐる

（vii）**磁力利用の檢査**　鎔接部の裏面に强力な電磁石を取付け、表面より鐵粉を振り掛けると鎔接內部の構造如何によつて磁力の偏倚が異なり鐵粉は夫々異つた模樣を畫く。豫めその狀態と內部の良否とを調べて置けばその模樣より判斷し得られる。此の方法は T.R Watts 氏の發表になるもので、最近我國に於ても造船方面では實地に就て研究中である

が、費用も少く好成績との事である。

（viii）**電氣抵抗測定による檢査**　鎔接部の左右に極く僅の電流を通じ鎔接部を流れる時の抵抗の相違によつて判斷せんと試みたもので、簡單な測定器も考案せられてゐる様である。

（ix）**伸度計法**　此の方法は Rosenthal 氏が理論的研究を行つたもので、檢査せんとする構造物に一定の載荷をなし、之によつて生ずる材片の彈性的關係變位を測定し、若し鎔接部に欠點あれば之に異常を呈するために發見し得られる。此の測定に用ふる裝置も甚だ簡單であると云はれ、之の方法は特に構造物の檢査に適當であると稱せられてゐる。

以上の如く檢査法も種々あり、或は實驗室的のものに過きないものもあるが、追々實用化されて行くらしい。併し最も簡單なものは外觀檢査で經驗者に依つて行はれれば大過ないのであるから、鉄の鎚打檢査が熟練せる監督者に依つて行はれた場合大過ない事と對照して、實地には最も之が適當であると考へられてゐる。

（h）**見積豫算に就て**

我國に於ては建築構造には今迄僅に補強の程度に使用せられてゐたために充分なる資料を得られなかつた。見積りや豫算は實際の統計より判斷するのが最も正確なものであらふが右の様な事情で確たる調べが出來ない。造船方面では相當な統計も出來た様であるが構造方法が異るので餘り參考にならない。斯様な狀態であるが最近施工せられた東京の住友ビルヂングは從來のものに比し相當多量の鎔接を使用した事と、同所の主任技師池田宮彦氏の努力とによつて、此の工事に就ての正確な記錄が發表せられた故同氏の講演の一部を參考のため紹介すれば

鎔接工一人一日（約八時間）の仕事の量

工場鎔接……電極棒　145本（42.65 立方吋）

現場鎔接……　同　114本（33.51 立方吋）

所要電力

電極棒一本（正味十二吋費消）に就き……約0.25 キロワット時

米國に於ては全鎔接の建物が澤山あつて之等の統計を取つたものが發表せられてゐる。米國の鎔接は裸棒、直流で電流も我國に比して強いものであつて、鋼滴の飛散が多少多くとも速度の早いのを以て目的としてゐる様であるから、我國のものとは少し異つてゐるが參考のために其表を第十二表に揭げてみた。之は全鎔接の建物三つ、工場では鉄で現場では總て鎔接としたもの三つであつて、同じ様な建物の略豫算を作るに便利である。第十二表の利用方法の一例を擧げると、Boston Edison Office Building と同じ様な構造の工場鉄現場鎔接建物で、總建物鋼材噸數三〇〇〇噸のときは第十三表の様にして算出する併し之等のものは夫々の建物の構造概要を紹介しなければ仕方がないが紙數の關係上省略して、只工事概要の載せてあつた書物丈を御知らせする。

	Providence Court House	Boston City Hospital		Boston Edison	Dallas P. & L. Company		Dallas Gas Company		Du-Pont Co.
	(現場)	(工場)	(現場)	(現場)	(工場)	(現場)	(工場)	(現場)	(現場)
1—消費電極棒 (#)	1,800	.....	1,120	2,600	7,100	4,650	6,000	5,000	3,220
2—使用電力 (K.W.H.)	3,810	.....	4,150	6,120	.....	9,460	12,200	9,990	8,395
3—建物鋼材總量 (t)	811	492	492	1,314	1,215	1,170	700	1,000	1,576
4—鎔接工手間 (時間)	831	.....	557	1,206	3,140	1,768	2,000	1,640	1,411
5—⅜"隅肉全長 (吋)	.....	.....	.....	51,921	97,500	56,415	13,200	51,600	65,400
6—他の隅肉全長 (吋)	.....	.....	.....	8,593	25,400	17,842	49,800	28,200	.....
7—總ての隅肉合計 (吋)	54,864	37,138	25,509	60,514	122,900	74,257	63,000	79,800	65,400
8—建物噸當り隅肉 (吋)	67.6	75.5	51.9	46	101.2	63.5	90	79.8	41.5
9—建物噸當り鎔接工手間 (時)	1.02	.....	1.13	.917	2.58	1.51	2.86	1.64	0.895
10—建物噸當り電力 (K.W.H.)	4.7	.....	8.43	4.66	.....	8.09	17.4	9.99	5.33
11—建物噸當り消費電極棒 (#)	2.22	.....	2.27	1.98	5.84	3.98	8.57	5.0	2.04
12—鎔接機 (月)	4.7	.....	3	7.5	.....	9.1	.....	9.3	8.0
13—鎔接機 1 臺當り鋼材 (t)	172 5	.....	164	175	.....	128.6	.....	107.5	197
14—鎔接機數	2	.....	3	4	.....	5	.....	5	4
15—建物階數 (地下共)	8*	.....	9	14	.....	19	.....	13	14

第12表　米國鎔接建築數量の記錄 (F.P. McKibben 氏調べ) * 印……17階の塔の中

1—所要電極棒	3000×1.98	= 5,940 #
2—鎔接工手間	3000×0.917	= 2,751 時
3—隅肉全長	3000×46	=138,000 吋
4—所要電力	3000×4.66	= 13,980 K.W.H.
5—鎔接機	3000÷175	= 17.2 臺
6—工期5ヶ月として鎔接機臺數は	17.2÷5	= 4 臺
7—又は同じく3ヶ月として	17.2÷3	= 6 臺

第13表　鎔 接 數 量 器 見 積

Du Pont Co. Building……F.P. McKibben:— "Contract and Work Procedure on a 14 story Field-Welded Building" **Engineering News-Record** Vol. 105 No. 24. Dec. 11. 1930.

Boston City Hospital……A.S. Coombs:— "All-Welded Hospital Building Elected in Boston" **Welding** Vol. 3 No. 3 March. 1932

Edison Company of Boston……J.T. Whitney:— "Welding Field Joints on a 14 Story Office Building" **Journal of American Welding Society.** Dec. 1930

Dallas Power & Lighting Co…… "Highest All-Welded Office Building" **Engineering News-Record** Vol. 105 No. 12 Sep. 18. 1930

他の二軒に就ては自分の手許では未だ見當らない。

(4) 特殊電氣鎔接法

抵抗鎔接と電弧鎔接と兩様を利用してゐる方法、或は原子水素鎔接等の特殊な方法に就て極く大要を述べてみたいと思ふ。

1. パーカソンヨン鎔接法（Percussion Welding）

之は一九〇五年に米國 Westinghouse 會社の、J.W. Chubb 氏によつて考案せられたもので、電氣抵抗鎔接法の中の抵抗衝合鎔接の特殊なものである。即ち普通の方法によつては熱傳導の大なる金屬、或は電氣抵抗の少いものは殆んど不可能である事を前に述べたが、それ等のものを接合する事に成功したものである。

概念的に說明すると、普通の抵抗衝合鎔接の様にして、一寸離すと（〇・〇一秒乃至〇・〇〇五秒）瞬間的に電弧が發生して接解面の一部を鎔融狀態にする。此の時に衝擊的に壓力を加へて鎔着せしめるもので即ち一部分に電弧鎔接の理を利用した譯である。此の方法によれば鉛、アルミニユーム、銅等の普通の方法では全く不可能であつたものが出來る様になつた。此の方法には靜電的方法と電磁的方法とあつて、始めに靜電的方法が考案されたのであつたが、これでは直徑三粍位までの針金に限られてゐたが、後に原考案者によつて電磁的方法による機械が考案せられて、直徑十三粍位迄鎔接出來る様になつた。此の方法の利用範圍としては、その裝置が非常に高價であるために特殊な場合に限られてゐるが貴金屬等の接合に比較的簡單な靜電的方法が用ひ得られるであらふ。

2. サイクアーク鎔接法（Cyc-Arc Welding）

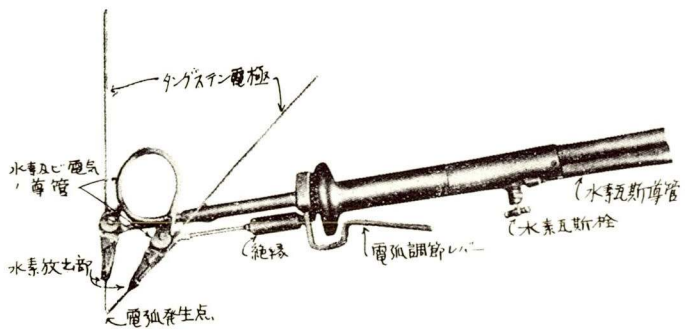
前述のパーカツション法と殆んど同様な考へ方によるものであつて、之は英國に於て發達したものである。始めには主として造船方面で眞鍮の管を船體の隔壁に簡單に鎔接する事に利用せられた。此の方法も鎔接せんとする兩金屬間に短時間の間電弧を發生せしめ、之を急激に壓着せしめるもので、此の作業は總て自働的に行はれる様にたつてゐるので仕事が Cyclic に進むため Cyc-Arc なる名前が附せられたものである。此の方法によると直徑三十五粍程度のものまで出來るが、鎔接時間は前述のものより稍々長く〇・一秒乃至二・五秒位の間である。電流は六～十二粍位の金屬線を接ぐのに二〇〇乃至五〇〇アムペアー位で時間は一秒內外程度である。

總て之等の鎔接法は、前のパーカツション法でも同様に、自働的に行はれるものであるから鎔接すべき材料の種類や太さに應じて、電流の強さ、電弧發生の時間等を最初に正しく調整して置けば後は誰がやつても平均した製品が出來上る様になつてゐる。

3. 原子水素鎔接（Atomic Hydrogen Welding）

此の鎔接方法は電弧を利用した一種の瓦斯鎔接であると云ひ得る。一九一一年に米國の General Electric 會社の I. Langmuir 氏が水素瓦斯中で金屬線を熱するとその熱のた

めに水素瓦斯が熱解離して H なる原子狀水素となり、之が器壁に到ると其處で再結合して元の分子狀水素 H_2 に歸り其際器壁は著しく熱せられる事を發見した。其後同氏は二三の人が水素に關して行つた實驗結果を總合して「乾燥した水素瓦斯中に於て電弧を發生し、此の熱によつて H_2 狀態のものを解離して H の瓦斯とし、此の原子水素を相當の距離の金屬に吹き付けその場で再び H_2 に再結合せしめて其の再結合熱によつて鎔接を行ふ」と云ふ事に考へ付いて種々研究の結果遂に一九二六年此の原子水素鎔接なる特殊な方法を考案した。即ち此の方法の原理は以上說明した樣に、電弧は單に H_2 を H 狀態にするために用ひられるもので、直接鎔接に用ひられる熱は原子水素瓦斯の再結合熱である故、一種の瓦斯鎔接とも考へられるのである。其故此の方法では必要に應じて補給金屬棒を用ひる事もあるが薄鈑の場合は使用しない場合もある。鎔接部の性質は強い還元性を有してゐる原子水素に依つて包まれてゐるため酸素或は窒素等の浸入を防いで、延伸性に富む非常に良いものであると同時に原子水素焰は非常に高溫度であるので、今迄困難視されてゐた薄金屬板或は特殊合金の鎔接が容易に可能となつた。



第32圖　原子水素鎔接電極保持器

此の方法に用ひられる電流は交流で電弧電壓は六〇乃至九〇ボルト、電流の强さは一五乃至七〇アムペアー、水素瓦斯の壓力は 〇・七瓩/粍² 位で其量は一時間連續使用で 〇・七乃至一・二七立方米位必要である。電極棒としてはタングステン電極を使用し、保持器は第三十二圖の樣な特に考案せられたものを用ひてゐる。そして之は電弧の發生と瓦斯の供給とが同時に行はれる樣になつてゐる。鎔接速度は金屬の種類、厚さ等によつて異るが、鐵板の重ね接ぎの場合の鈑厚、電流 速度等に就て調べたものが第十四表である。

鈑厚（吋）	電流（アムペアー）	速度（吋/分）
1/32	15～20	3.0
1/16	20～25	5.0
1/8	30～35	3.5
3/16	35～40	3.0
1/4	40～45	2.2
3/8	45～50	2.0
1/2	50～55	1.5

第14表　原子水素鎔接

鎔接部の性質に就ては種々な實驗の結果

（イ）鎔接部の延伸性が大なる事

（ロ）壓延に充分堪へる事

（ハ）屈曲が自由である事

（ニ）仕上り面が綺麗で滑かなる事

等の利點があると云はれてゐる。設備、消耗品等が高價であり、水素瓦斯の取扱ひに細心の注意を要する等の多少の欠點もあるが、特殊金屬の鎔接又は薄鈑鎔接等普通電弧

鎔接で不可能な方面への利用に廣い將來を有してゐる事と思ふ。

結

鎔接一般に就て、特に電氣鎔接に就ては多少委しく各方面に亘つて述べた積りで讀者諸賢の研究の一助ともなれば望外の幸ひである。併し鎔接は可成り廣く各專門に關係があるため筆者の淺學により測らざる誤謬があるかも知れない。諸賢の御叱正を樂にしてゐる。本文は既に述べた様に成る可く簡單に說明する積りであつたものが、多少細い點にまで立入つた爲めか、自分の考へとしては建築界に於ける鎔接利用の現狀、或は研究者への一助として參考書等に就ても述べたいと思つてゐたのが、紙面の都合で割愛する事にした。尙新しい術語を何等の說明なしに使用してゐる爲に疑問を起さしめる點もあつた事と考へられる。若それ等に就て御問合せがあれば能ふ限りの努力は惜しまない積りである。末筆ではあるが本文起草に當つての參考書類は相當廣い範圍であるため列擧するのが困難であつたので本文中隨所に擧げて置いたが、夫々の原著者に更めて謝意を表し擱筆する。

（昭和七年八月記）

會　　報

役　員　會

常　務　會

時　　昭和7年9月5日午後6時—同8時30分
所　　建築倶樂部
出席者　理事　片岡　池田　監事　津田
　　主記　伊東　小川　富士岡　鳥井
　　主計　岡部　編輯　高橋　中山　森本
議　事　1 9月例會に關する件
　　1 講演會準備委員增員要求の件
　　1 同潤會より送付に係る職工向分讓住宅設計圖案懸賞募集規程紹介の件（百枚送付）
　　1 紋章及賞牌の件
　　1 15年事業へ金1萬圓也一時振替の件
　　1 會員詮衡其他
報　告　1 創立滿15年記念事業各準備委員會經過報告
　　1 第3回全國都市問題會議終了に關する件
　　1 朝鮮貯蓄銀行主催懸賞當選圖案報告
　　1 15年事業會計報告
　　1 朝日クラブ給仕心付贈與の件延期報告
　　1 雜誌10月號編輯計畫報告

常　務　會

時　　昭和7年9月19日午後5時30分—8時30分
所　　建築倶樂部
出席者　理事　片岡　主記　小川　富士岡　鳥井
　　編輯　高橋　森本
議　事　1 定款改正委員會報告の定款改正案の件
　　1 紋章決定に付會告の件
　　1 協會員胸章決定に付會告の件
　　1 會旗新調及諸印刷物に紋章入印刷の件
　　1 賞狀案の件
　　1 昭和8年度用會員名簿作成の件
　　1 請負契約書及規程に關し代表委員3名選出方の件
　　1 博覽會總裁其他職名に關する件
　　1 綠ケ丘住宅博開會延期に關する件
　　1 協會出品住宅請負契約の件
　　1 旭ケ丘住宅博覽會に關する件
　　1 職工講習會に關し敎化委員會より意見報告
　　1 材料委員會委員1名增員の件
　　1 祝賀會準備委員7名增員の件
　　1 見學準備委員會擔當常務の件
　　1 住宅委員會報告に係る香川縣明善高女校舍所展覽會に圖表貸與に關する件
　　1 災害强度委員會より要求に係る雜誌交換の件
　　1 收入缺損補塡の件
　　1 會員詮衡
報　告　1 見學準備委員會より成案報告
　　1 材料委員會委員八木盛二氏委員辭退申出の件報告
　　1 9月例會準備報告
　　1 8月分會計報告
　　1 滿15年記念事業各準備委員會報告

常　務　會

時　　昭和7年10月3日午後5時30分—同9時
所　　建築倶樂部
出席者　理事　池田　監事　小笠原　主記　伊東
　　小川　富士岡　主計　松井　編輯　高橋
　　森本
議　事　1 10月例會に關する件
　　1 展覽會委員會より補助費要求に關する件
　　1 定款改正委員會より報告の定款改正案に關する件
　　1 滿洲建築協會より照會に係る件
　　1 協會出品住宅賣價決定の件
　　1 建築倶樂部報告に係る同倶樂部規則一部變更に關する件
　　1 博覽會趣旨書配布先等の件
　　1 會員詮衡

報　告　1 創立滿15年記念事業各準備委員會經過報告

例　　會

時　　9月21日午後6時30分—同9時30分
所　　建築倶樂部
記　事　1 來會者は受付にて會費と食券とを引換へ各自隨意地階本みやけ食堂にて夕食をなし午後6時半には續々會場に參集し殆んど滿員の盛況を呈す
定刻富士岡主記は理事代理として開會の挨拶を述べ武田博士の今夏南洋旅行をせられしことを紹介し
同博士より南洋旅行漫談の題下に3時間に亘り南洋の風土、風俗其他（講演は別項掲載）に付詳細なる漫談ありたる後同博士の横濱出帆より南洋に於ける旅行先々の活動寫眞を映寫し興味を添へ午後9時閉會せり

創立滿十五年記念事業各種委員會

實際に建つる住宅設計懸賞圖案審査會

第1回
時　　昭和7年9月1日午後2時—5時
所　　建築倶樂部
出席者　審査員　清水榮二　澁谷五郎　瀧澤眞弓　波江悌夫　長谷部鋭吉　古塚正治　松井清之助　本野精吾
理事　池田實　常務　高橋榮治

第2回
時　　昭和7年9月2日午後2時—午後8時
所　　建築倶樂部
出席者　審査員　清水榮二　澁谷五郎　武田五一　瀧澤眞弓　波江悌夫　長谷部鋭吉　古塚正治　松井清之助　本野精吾
理事　片岡安　池田實　常務　高橋榮治

住宅博覽會部

幹　事　會

時　　9月3日午後5時30分—同9時
所　　建築倶樂部
出席者　幹事　今林　小川　坪井　增山　村野
理事　池田　擔當常務　小川　鳥井
記　事　1 入選懸賞圖案集のパンフレット作成の件
1 博覽會幹事合併に關する件
1 各出品者(綠ケ丘)に電燈電熱の配置圖提出方の件
1 綠ケ丘圖案展並出版物に關する件
1 各出品者(大美野)に對し生垣其の他に關し注意事項通知の件
1 博覽會日誌備付の件
1 其他

幹　事　會

時　　9月19日午後6時－同8時
所　　朝日ビル倶樂部
出席者　副委員長　安井　幹事　今林　小川　芝田　坪井　德政　增山
擔當常務　小川　鳥井　森本
記　事　1 綠ケ丘住宅博開期に關する件
1 住宅圖案展覽會の件
1 其他

委　員　會

時　　9月14日午後5時30分—同9時
所　　建築倶樂部
出席者　副委員長　安井　幹事　小川　芝田　坪井　德政　增山　村野　委員　久保田(廉)　伴野　加藤(善)　小西
擔當常務　小川　鳥井　森本
記　事　1 懸賞圖案當選者及審査概評等新聞紙にて發表に關する件
1 綠ケ丘住博瓦斯埋管不能の件
1 博覽會々長顧問其他推薦の件
1 大美野住宅博趣意書及大美野田園都市に關する起草の件
1 其他

兩住宅博覽會懸賞當選圖案出品住宅圖案展覽會

時　　9月26日より同29日迄4日間開催す
所　　長堀高島屋6階
兩住宅博開會に先だち各出品住宅の圖案、並懸賞入選圖案を一般に公開したり

觀覽者日々相當多く豫想以上の好成績を收めたり

會員動靜

入會者

會員

青柳和貴男君　住吉區阪南町西4ノ25（ライジングサン石油會社技術課）

角田　政一君　豊能郡豊中町高砂通1（自營）

佃　十俊君　此花區上福島北2丁目福島教會青年ホーム（陸軍造兵廠大阪工廠技術課）

同（地方在住）

野村　伸君　山口縣厚狹郡小野田町寺町

特別賛助員

中原　元助君　東區南本町4ノ59

田中　昌司君　西區江戸堀南通4ノ19

田邊　駒造君　東成區北清水町33ノ2

高橋忠二郎君　北區中崎町4

窪島　宗治君　東成區赤川町9ノ528

矢野　彌一君　西區南堀江1ノ24

普通賛助員

泉　量一君　此花區下福島1ノ60 重寶商會内

木村正太郎君　東成區赤川町519（八島建築事務所）

廣田　透君　府下泉北郡高石町羽衣802

一氏　勝喜君　臺北市千歳町2ノ4上原宅（臺北州内務部土木課營繕課）

苅郷　實君　港區東田中町4ノ94ノ1（大林組住宅部）

矢野正三郎君　港區九條北通3ノ508ノ1（都島工業學校建築科）

伊東　和雄君　市外吹田千里山141

退會者

會員

三木　榮逸君　神足　繁雄君　高井　久治君

小川　久市君　三宅重二郎君　宮崎治三吉君

本間　嘉平君　横山　金三君　高田　昌平君

中山伊勢市君　仁木　敏治君　戸松　茂君

藤井　令三君　鳥野　民男君

同（地方在住）舟橋　喜一君

普通賛助員

小野　陸治君　木谷喜太郎君　山田　昭君

杉　正已君　荒武　磐君　吉原與一郎君

改名

會員　安立　正君（舊名　安立　糺）

轉勤轉居

會員

菊谷　簡一君　此花區大開町1ノ73 淺野八十松方

松村　俊雄君　京都市上京區等持院東町47

櫻井謙二郎君　奈良市油留木町28

岡野　金作君　此花區秀野町28ノ4

清水榮二郎君　神戸市灘區備後町4ノ33

山口　正城君　住吉區住吉町1311　長谷川方

津田　敏雄君　津田建築事務所　東區北濱4ノ14

矢崎　高儀君　府下三島郡高槻町新京町

山本　延次君　住吉區住吉町244ノ7

大西　卓爾君　住吉區田邊駒川町5ノ5

吉田　健治君　奈良市法蓮町1.203ノ10

村上　徹一君　神戸市灘區六甲宮山町1ノ12

增田　直一君　兵庫縣加古郡加古川町332寺家183

毛和　泰三君　神戸市灘區六甲八幡町4ノ2

白川　雄一君　大阪市外吹田町1431（高畑）

山崎　英二君　兵庫縣武庫郡御影町東明字 4番12ノ1

大原　芳知君　府下豊能郡箕面村字西小路141

小川　陽吉君　天王寺區勝山通2ノ58

地方會員

正木　英雄君　東京府下矢口町小林273

中村松一郎君　福岡縣戸畑市明治町1鴻池組出張所

小津　利一君　東京府荏原郡世田ヶ谷町代田中原736

特別賛助員

服部　吉雄君　濃速區元町2ノ34

平木　臻君　姫路市神屋町77

能勢　丑三君　京都市上京區大宮竹殿町40

清野彌三郎君　京都市銀閣寺畔石橋65

普通賛助員

高橋　茂君　神戸市灘區深田町5ノ6

石井　富司君　京都府綾部町裏町30

千本　成一君　府下北河内郡三郷村高瀬226ノ1

川久保梅次郎君　金澤市川端町77
桃井　正之君　西宮市壽町39
福本　米治君　西淀川區加島町1038
井澤(篠原)實君　高知市鷹匠町
近藤　正夫君　朝鮮京城並木町22
齋藤小三郎君　東區本町4ノ46ノ1　伊藤萬建築工事場大林組本町出張所
枝吉　德藏君　京都市左京區岡崎東福之川町10伊庭方
中村　忠司君　神戸市須磨區松野通3ノ53ノ10伊豆倉茂氏方
安家　正明君　東區横堀6ノ7
大武　美德君　山梨縣立都留高等女學校
後藤　幸男君　此花區島屋町42鴻池組北港變電所作業場

建築倶樂部室

我建築倶樂部は去る五月多數要望の聲に應じて生れましたが日尚淺きにも不拘、爾來各方面より非常な好評を以て迎へられ日增しに利用者の數を加へ日々賑やかな日が續いております事は誠に其設立の主旨に適つた事と喜んでおります。

但しなるべく氣樂に、より多く皆樣の御活用を希はん爲めに當初入會金の免除加ふるに會費月壹圓と云ふ極めて低廉な制度を以て而も急速に開設いたしましたので諸設備萬端貳千數百圓借入れし借室料の如きも今尚半額を建築協會に負擔を乞ふ等經濟的には可なりの惱みを持て居りました處襲きの頃より會員の內之等の事情に勘悉せられる方がありまして將來堅實なる發展を期せん爲めには多少基金を持つ要あらん吾等は應分の額は自發的に寄附いたすべしとの御申出がありましたので七月半幹事會開催右につき協議いたしました結果其御厚意を拜受するに決議いたし併せて他にも同樣の篤志家あらん事を豫想いたしまして幹事其他の關係筋に其申出を募りました處幸にも各方面より多大の御同情の下に其主旨に御贊同を頂きまして時節柄にも不拘多額の御寄附を賜りました事は私共の尤も光榮とする所で誠に有難く厚く御禮を申述べます。尚目下取纏中のもの十數件御座いますが取敢ず一應中間御報告を兼ね今日現在の御芳名を別記いたしました此處に會員一同に代り深甚の謝意を表する次第で御座います。

御寄附芳名錄　(順序不同)

金五百圓也　合名會社竹中組殿
金五百圓也　株式會社大林組殿
金參百圓也　株式會社名古屋製陶所殿
金參百圓也　東洋陶器株式會社殿
金參百圓也　株式會社錢高組殿
金參百圓也　株式會社鴻池組殿
金貳百圓也　合名會社清水組殿
金貳百圓也　大倉土木株式會社殿
金貳百圓也　東洋リノリユーム株式會社殿
金貳百圓也　淡陶株式會社殿
金貳百圓也　大阪窯業株式會社殿
金貳百圓也　大阪陶業株式會社殿
金貳百圓也　伊奈製陶株式會社殿
金貳百圓也　旭硝子株式會社殿
金貳百圓也　久保田鐵工所殿
金壹百五拾圓也　日本ペイント株式會社殿
金壹百五拾圓也　國產放熱器株式會社殿
金壹百圓也　西原衛生工業所殿
金壹百圓也　大阪暖房商會殿
金壹百圓也　建材社殿
金壹百圓也　淺野物產株會式社殿
金壹百圓也　日本アスベスト株式會社殿
金壹百圓也　松尾鐵骨橋梁株式會社殿
金壹百圓也　新田ベニヤ製造所殿
金壹百圓也　株式會社須賀商會殿
金壹百圓也　奥村電氣商會殿

以上であります御寄附金處理方法は全部取纏めました上更に御報告申上げますが大體備品買入各事業補助並基本金等に充當いたす豫定で御座います尚目下取纏中のもの、其他の篤志家の御申込み等を考慮いたしまして當分〆切を延期いたし明年以後の新名簿調製の際芳名錄を共に印刷いたす豫定であります何卒一層本倶樂部を御利用下さいまして此上共何かと御後援賜度先は御禮旁御挨拶迄申上げます

昭和7年10月1日

建築倶樂部　代表者　岡部　顯則
幹事代表　設樂　貞雄

◎クラブ會員章9月22日より御渡しておりますまだ御受取なき方は金壹圓にて現品御引替いたします。

社團法人 日本建築協會役員及委員（昭和七年）

役員

會長　安實一郎
副會長　銅雄
副會長　郎吉知信一
監事　則助正治郎清吉實郎衛吉郎知則吉郎郎安二一良郎男重夫二次一治吾信雄郎三一郎郎忠助八清三吾
監事　五
主事　岡
主事　田
主事　笠原　敏太
主事　東川　陽
主事　片原　芳
主事　池井　重顯之
主事　武士岡　榮太
主事　小津部　清子
主事　伊小大鳥富岡松呼高中增森池伊岩小小大岡落河河片加小小酒白芝新清末武高德鳥中中伴富藤堀牧松松增三村　橋　榮太
主事　山　榮
主事　田　藤
主事　本田　宗太
主事　東尾　保
主事　川　陽一
主事　川原　芳
主事　部　顯藤
主事　藤　一太
主事　合盛　益
主事　岡　藤　誠彌
主事　寺西　勇　一三
主事　井石　登　喜
主事　田名　知種
主事　水澤　榮周
主事　田橋　政　五
主事　井　村　義
主事　榮太
主事　貞重太次
主事　岡賢猷
主事　士本田　野　之
主事　井本　田
主事　木野　來
主事　藤
議員

委員

【法制委員會】

長　吉介夫生夫市治吾平武
委員　郎　吉
幹事　太　善之和出種兵正藤亟信
主委同同同同同同同　彦　熊日間名原塚野田田
第一分科　林　垣藤
第二分科　今一加北伊作新椎古村山吉

幹事　次　豐置
幹事　郎　誠寬治
主委同同同同同同　一三　榮瀨
委員　漱　藤
委員　一經
委員　亮
委員　敬
委員　保
委員　久
委員　藤
委員　井田
委員　藤
委員　内
委員　松
委員　武
委員　玉坪石工楠酒武内松
第二分科　一三郎澈郎一一三

【教化委員會】

長　雄郎重吉郎吾三八水三
委員　武三知淳五金貞儀春金
委員　井勇忠
委員　井田島
委員　木政野本本山
委員　安酒芝小鈴德伴松山横
第二分科

【材料委員會】

長　光
委員　重
委員　室
委員　松
委員　長
第一分科　郎男信雄
主委同同　太喜
主委同同　平登
主委同同　松石
主委同同　高白塙福
第一分科　勇
第一分科　田
第二分科　良次吉吉
幹主委同同　一初三末
幹主委同同　與尾
幹主委同同　西田岡
幹主委同同　小山高松
第二分科　一助一登吉郎雄
幹主委同同　太米正彌茂龜五
幹主委同同　廉
幹主委同同　川井
幹主委同同　野中田口賀
幹主委同同　須阪境平山桐城須伴
第三分科　秀
第三分科　藤
第三分科　吾
第三分科　圭
第三分科　部
第三分科　渡

【災害强度委員會】

長　吉茂雄平郎喜史雄
委員　藤　茂幸太智尙芳
委員　田野澤原島浦田
第一分科
第一分科　落黑小大篠中三山
第一分科　事查員
幹主委同同同同同　世藏雄平衛二雅三夫郎
幹主委同同同同同　貞鐵正直兵一楠俊　次
幹主委同同同同同　柳田手野源　隆　猷
幹主委同同同同同　勝口本野　田
第二分科
第二分科　青矢井大川川桐佐谷堀
第二分科　事查員

【住宅委員會】

長　郎　一
委員　莊　壯野葛
第一分科
幹主委同同同同同同同同　藏郎修一二次雄彥雄三藏　金野　安川　松　木　崎澤村間元邊邊　淺小赤佐篠末中本森渡渡　々
第一分科　事查員
幹主委同同同同同同同同　平信衛勇郎造雄　新山　保　尾　崎　益林藤　南岩河　丹　增　岩　盛　三良　太
第二分科
第二分科　事查員

【定款改正委員會】

長　實一勉安銅信助治吉二郎重次吾雄夫郎光八助吾吾　誠　濱　岡　原　井　橋藤口　田澤政村江賢本室本梶安野部藤圭　之　榮藤一太知周金義悌太重儀之　池坪横片小鳥松井高落川兒芝末德中波藤松松光村渡　田井　笠
事員
委幹同委同同同同同同同同

社團法人 日本建築協會創立滿十五年記念事業委員會委員（昭和七年十月現在）

創立滿十五年記念事業局

局長　片岡安

總務部

部長　池田寶

庶務係

係長　富士岡重一郎
委員　伊東宗太郎
同　小笠原銅吉
同　小川陽知則
同　大原芳治雄
同　岡部顯信
同　高橋榮郎
同　津田敏助
同　鳥井清吉
同　中山榮太郎
同　松井清之助
同　增田
同　森本藤
同　呼子

宣傳係

係長　高橋榮治男
委員　岡田孝一郎
同　河合貞參
同　片岡長清
同　增田勉
同　横濱

財務係

係長　岡部顯則
委員　大林賢四郎
同　籠田定憲
同　設樂貞雄二
同　清水榮造
同　竹腰健夫
同　波江悌一郎
同　中澤誠之助
同　松井清之三
同　山脇友盛二
同　八木盛正
同　呼子

會計係

係長　松井清之助
委員　小笠原銅則
同　岡部顯吾
同　德政金
同　光安梶之助

住宅博覽會部

綠ケ丘住宅博

委員長　武田五一
副委員長　葛野壯一郎
幹事　小川安一郎
同　芝田知重
同　德政金吾
同　古塚正治
委員　有山福重郎
同　岡本新次郎
同　籠田定憲二
同　加藤誠吉尾
同　加藤善夫喜
同　鈴木末悌
同　波江悌夫喜
同　中島智太郎
同　西田儀太郎
同　西村辰次郎
同　伴野貞三二
同　藤井厚信
同　南
同　保田虎太郎
擔當常務　小川陽吉信
同　鳥井
同　森本藤吉

大美野田園都市住宅博

委員長　武田五一
副委員長　安井武雄
幹事　今林彦太郎
同　坪井誠一平
同　增山新吾一夫
同　村野藤雄
委員　芦田政
同　飯高達寬
同　木村正一雄
同　久保田廉
同　久保田筆雄良
同　小西一五郎人
同　澁谷隼雄
同　須藤義一八
同　中村正
同　藤木儀
同　松本一郎
同　丸盛三
同　山脇友三
同　八木盛二
擔當常務　小川陽吉信
同　鳥井
同　森本藤吉

展覽會部

委員長　宗兵藏
副委員長　坪井誠一雄
同　安井武雄
幹事　淺野金藏助
同　浦英之吉
同　加藤善三郎
同　酒井勇三郎
同　篠原太郎
同　須川廉太郎弓
同　瀧澤眞一郎次
同　中西六美樹
同　永山美武平
同　姬野亟吉
委員　池田谷久一郎次
同　石川純賢恒壽介
同　飯伊東滿壽次郎實
同　折居新田米喜男市次
同　岡本宇井登兵周太郎吉
同　古阪白石原澤幸興三
同　椎末高岡永中野良雄胖助二
同　林澤村順藤
同　幸與義次
同　三
同　太郎
同　次
同　雄
同　丹平藤上茂盛金藏知則
同　日野井中木渡原部
同　高溜厚
同　野井
同　村
同　山八
同　渡
擔當常務　大岡顯

講演會部

委員　河盛益太郎實
同　古宇田敏雄清
同　津田增信武
同　增田
同　吉田

見學部

委員長　松室重光
幹事　久保田廉
同　小西一良
同　伴野貞三
同　樋口辰太郎
委員　設樂貞雄
同　竹腰健造
擔當常務　呼子正
同　松井清之助

出版部

委員長　藤井厚二
委員　石川純一郎
同　落藤藤吉
同　篠原太郎
同　新名種夫
同　瀧澤眞弓
同　古塚正治
同　村野藤吾
擔當常務　高橋榮治

會館部

委員長　波江悌夫
幹事　中澤誠一郎
同　山脇友三郎
委員　今林彦太郎
同　阪井米吉
同　野村一郎
同　松井貴太郎
擔當常務　森本藤吉

祝賀會部

委員長　小笠原銅衛
幹事　岩尾保郎
同　兒玉慶太郎
同　佐藤正次郎
委員　荒川義夫
同　大倉三郎
同　河村新一
同　小寺彌一
同　阪口芳三郎
同　谷民藏
同　高松平太次郎
同　堀田猷郎
同　牧野忠
擔當常務　伊東宗太郎
同　渡部圭吾
擔當常務　中山榮太郎
同　富士岡重一

編輯後記

◇秋になりました。收穫の秋が來ました、十五年の收穫の秋であります。博覽會に、展覽會に、講演會に、祝賀會に、出版に、この豊饒の收穫を記念する各樣の仕事がなされつゝあります。雜誌も記念號を出すことになりました。

◇記念號には成可く記念事業の記事で纏めたいと思つたのが因をなして、大變發行が延びました、それに先月末記念出版の住宅圖案が十日程雜誌に影響しました申譯ありません。

◇會長副會長の稿を卷頭にして三つの座談會を中心の記事に納めました。特に第一回の創立當時を語る會の如きは十六年前創立總會の人々を其儘御集りを願つたので特に意義あるものとなりました。
住宅懸賞圖案の發表。出品住宅圖集。此間の例會での武田博士の南洋視察談の速記錄それに先月構造號に納め切れなかつた構造諸論を加へて一大篇が出來上りました。

◇記念出版の第一の住宅圖案集が發行され旬日に三版を重ねました、善く出來た而も廉いとの好評で關係者も嬉んで居ります、精々御宣傳の程御願ひいたします。建築法規集は各方面から督促されて居りますが大阪府の細則が出ない限り何とも仕樣がありません、今少し御待ち願ます。

◇來月は最近建築研究の第3卷で南海ビル歌舞伎座を紹介いたします、十二月は委員會の報告を集める豫定です。(高橋榮治)

「建築と社會」定價表
本號に限り特價八拾錢
毎月1回1日發行

冊數	定價	郵稅
1冊	50錢	2錢
12冊	6圓	24錢

廣告掲載料金

普通	1頁	1回	15.00
普通	½頁	1回	8.00
普通（前附第1頁）	1頁	1回	45.00
普通（前附第2頁）	1頁	1回	40.00
普通（後附第1及最終頁）	1頁	1回	25.00
アート（中挿）	½頁	1回	20.00
表紙2	1頁	1回	60.00
表紙3	1頁	1回	45.00
表紙4	1頁	1回	80.00
建築事務所錄	1欄	1回	1.50
（建築關係業者案內）	1欄	1回	5.00

御注文
御注文はすべて前金で本會直接又は特約店へ振替貯金又は爲替で御拂込を願ひます郵券代用は一割增、代金引換はお斷り致します。

昭和7年9月27日印刷
昭和7年10月1日發行（第15輯第10號）

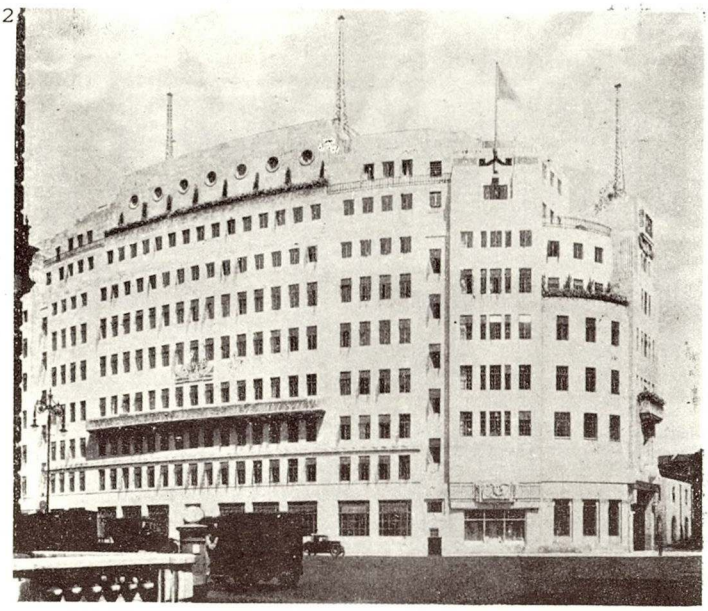
發行・編輯　鷹取陽
印刷人　兵庫縣武庫郡今津町浦風56番地
印刷所　大阪活版所　大阪市東區內淡路町1丁目7番地
發行所　財團法人 日本建築協會
大阪市北區中之島3ノ3朝日ビル
電話長本局(23)4500番(6)
本局(23)5470番(5)
本局(23)5540番(3)
振替口座大阪39975番
特約販賣店　柳々堂書店
大阪市西區京町堀羽子板橋北
電話土佐堀2440番
振替口座大阪22084番

禁轉載
本誌に掲載せるものは、一切これを無斷にて轉載し又は單行本に上梓その他の複製行爲をなすことを禁ず。

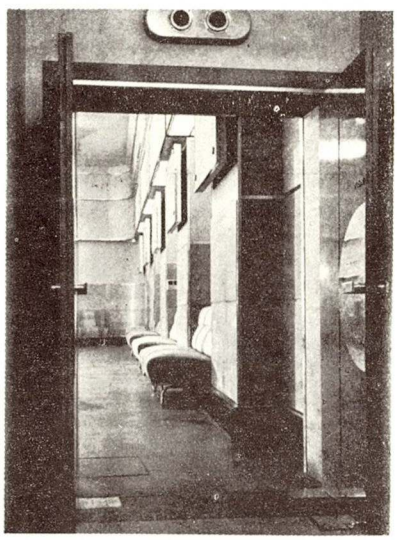
1



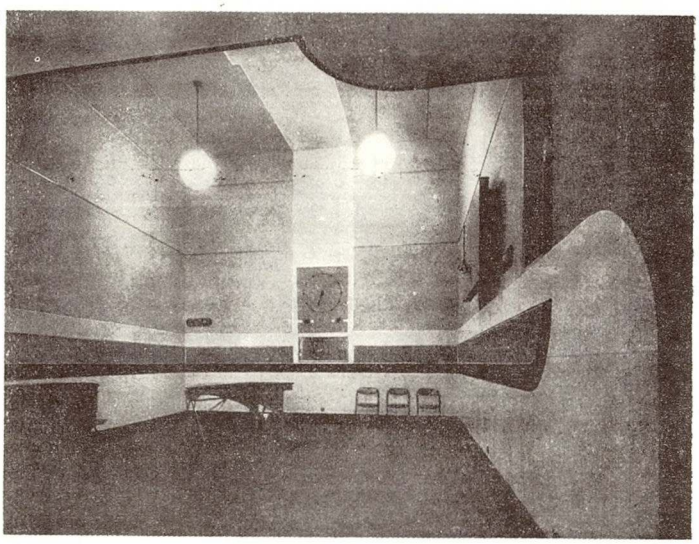
2



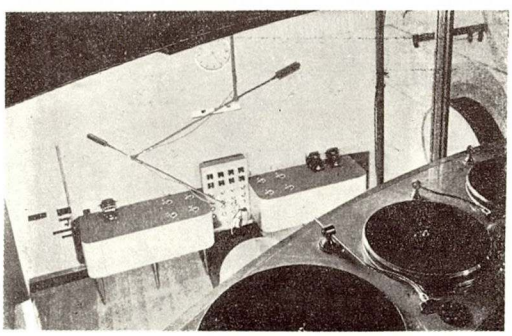
3



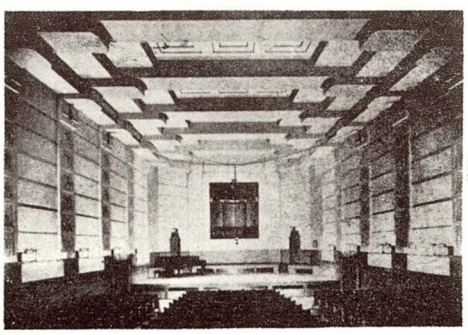
4



6



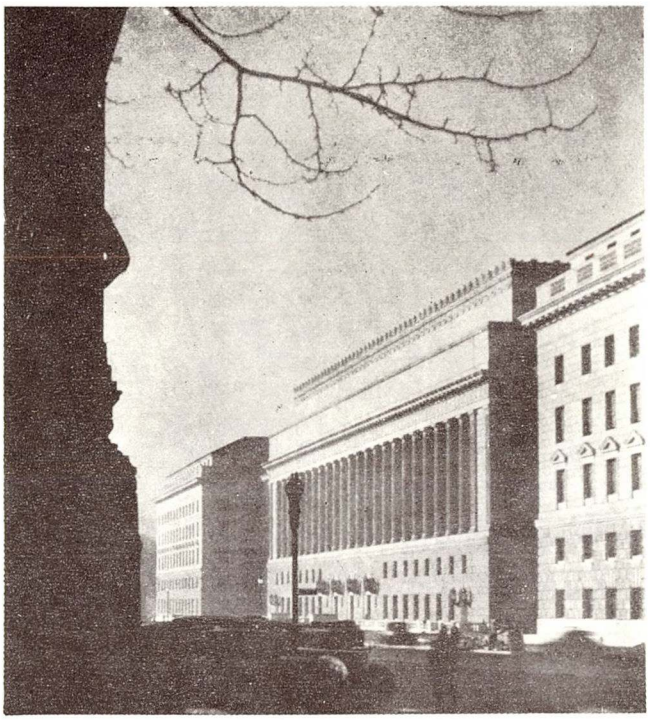
5



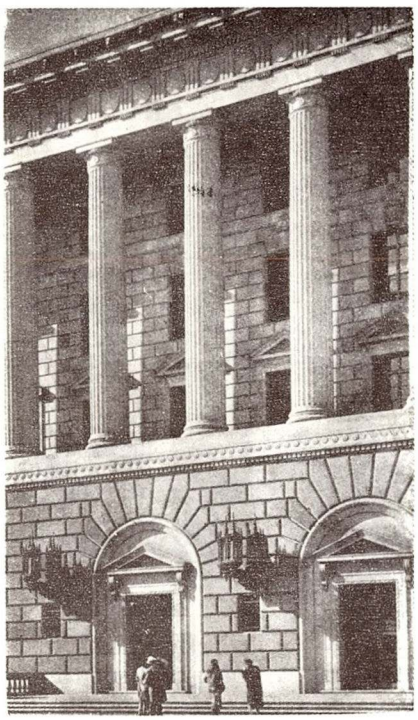
英國・倫敦放送局　1～2 外觀　3 オーケストラ・スチユヂヲ　設計 バル・メーヤー氏

4 ダンスバンド・スチユヂヲ　5 音樂室　6 蓄音器スチユヂヲより下を見る

1



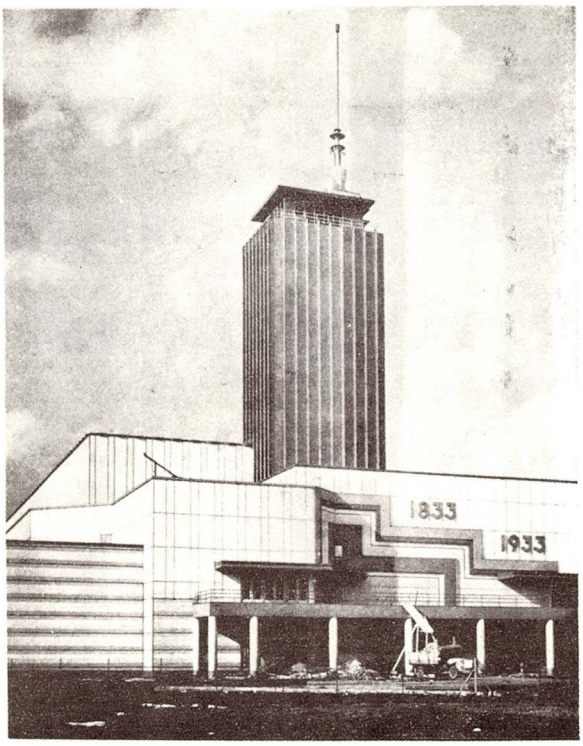
2



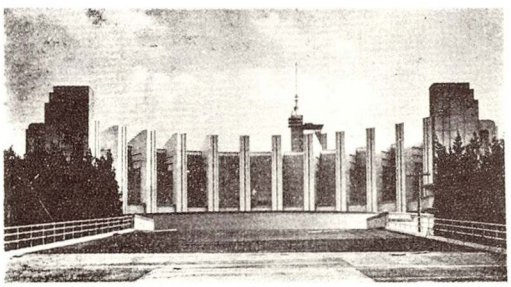
3



4



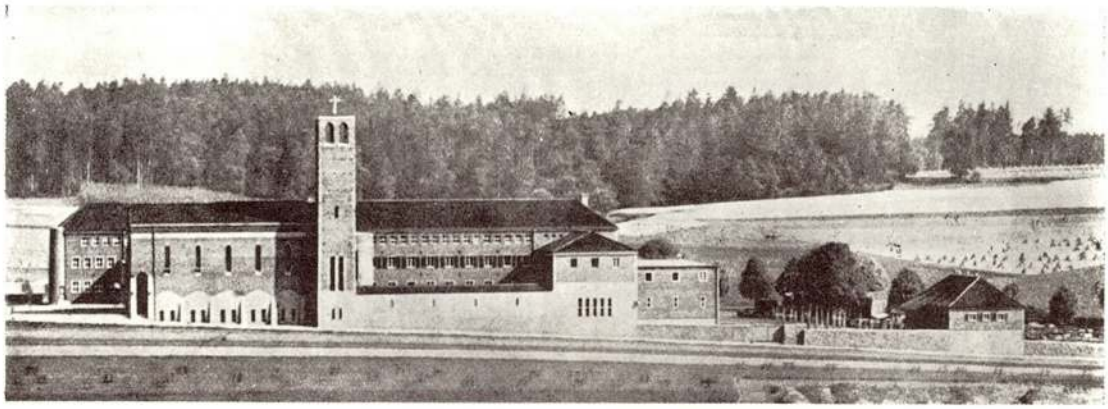
5



1～3　米國・ワシントン・商業省　　設計　ヨーク＋ソーヤ兩氏

4～5　進歩の一世紀博・科學の殿堂　　設計　ク　レ　ト　氏

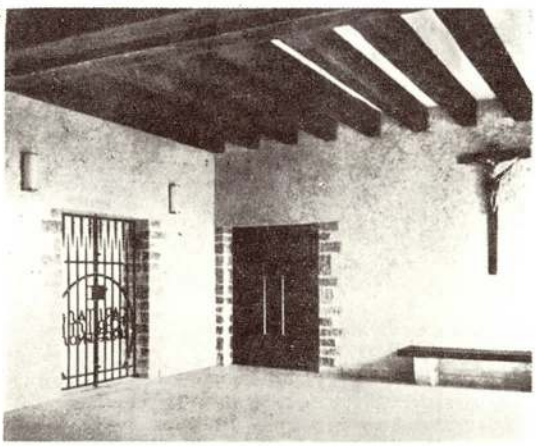
1



2



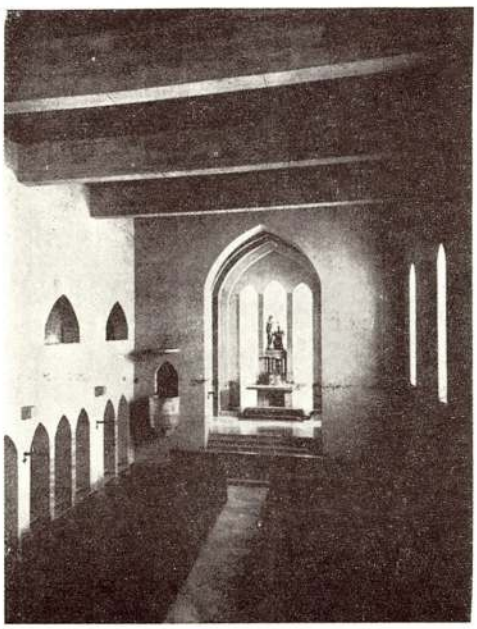
3



5



4



6



1～4　獨乙・フライブルグ・ミツシヨン學校　　設計　ビナンド氏

5～6　獨乙・エツセン・國立病院小兒科　　設計　ボーデ氏

庭園の設計と施工

この技術と特長！

庭園の設計と施工は最も新らしき、造園學を應用して古き經驗と研究を凝らした、弊園獨特の設計と施工は、經濟的に實用的に眞に皆さんの戸外休養所としての御要求は完全に具備して居ます。

造園樹木の大栽培場を有つて各樹木を多く栽培して居ますから、主要造園材料たる、樹木が最も安く良い品が使へます從つて造園費用が尠くて完備した立派な庭園を造る事が出來るのです

この二拍子揃つた獨特の技術と特長、この魅力こそは……斷然他の追從を許しません。

「造園案内贈呈す」

兵庫縣川邊郡山本

金岡養樹園

庭園工務部

電話池田一〇〇三番

（順路阪急電車山本驛下車一丁）

養樹園に生産される品と販賣品

庭園用樹　街路並木
果樹苗木　觀賞樹木
花卉球根　種子
農藝器具　農用藥品

カタログ無代進呈

純國産日金印シリンダー錠

◆商工省奬勵金受領
◆優良國産品撰奬
◆價格低廉機能優良
◆至便至利安全無比



シリンダー錠の種類及寸法

種類	ケース 長	ケース 巾	ケース 深	バックセット		フロント 長	フロント 巾
501	145m/m	92m/m	29m/m	63m/m	2½″	203m/m	32 m/m 1¼″
502	〃	94m/m	19m/m	67m/m	2⅝″	〃	25 m/m 1″
503	106m/m	70m/m	16m/m	50.5m/m	2″	148m/m	22 m/m ⅞″
504	145m/m	94m/m	19m/m	67m/m	2⅝″	203m/m	25 m/m 1″
505	〃	92m/m	20m/m	63m/m	2½″	〃	32.m/m 1¼″
特殊安全裝置 505	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
1002	108m/m	86m/m	19m/m	〃	〃	152m/m	25m/m 1″

特徴及用途

◆合鍵絶無、盗難除完全
◆生命財産の安全無類
◆ボタン一つの作用にて外部より開扉不能も内部よりは開扉自由
◆鍵を用ひずして開閉等の非常時に安全
◆鍵無しては内部より開扉自由
◆故地震火事便利至極
◆貸事務室、アパートメント、ホテル、住宅玄關、應接室用として編成必須
◆不體裁な棒鍵に代ふるに優美高雅なるニッケル製鍵となる
◆五〇四號は特殊裝置を施し安全なる構造とつて安全に更に居りますから重要室、玄關用として最適
◆マスター鍵は御希望に應じます



本社　大阪市西淀川區大仁東二丁目
電話土佐堀（44）五八五五番二八五〇番
四一〇六番

出張所　東京市丸ノ内有樂町報知ビル
電話丸ノ内（23）四九七二番
三六〇四番

日本金具株式會社

1



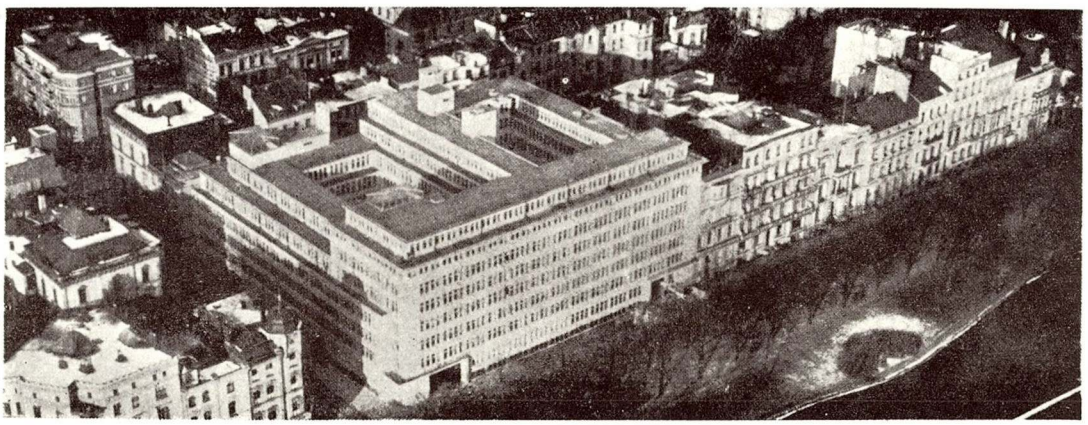
2



3



4



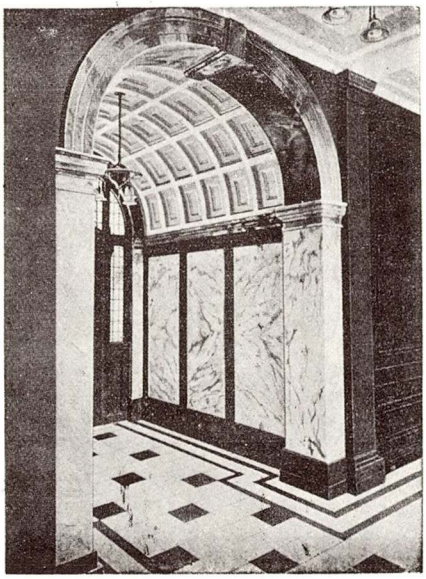
1～2　**獨逸・伯林・シエルハウス**
3～4　**獨逸・漢堡・シエルハウス**

設計　エミール・フアーレンカンプ氏



DUNLOP RUBBER FLOORING





弊社製ゴム床敷は既に数多の官衙、會社、汽船並に諸家庭に敷込まれ、快適なる其の感じは御使用家各位の御満足御賞讃を得つゝあります。
御必要に應じ何時にても社員を派し詳細に亘り御要求事項を御説明申上げます。

神戸市脇之濱
ダンロップ護謨(極東)株式會社
各地出張所

ダンロップ護謨床敷

最優良セメント防水劑

専賣特許 **アスニュー** （主劑アスファルト）

高谷式防水工事施工

塗布セメント急硬劑	テープラス
防水、防錆塗料	ティーエス
鏝仕上用アスファルト	ティーエスセメント

文研印ノーラスターオイルペイント

艶消耐水耐熱油性塗料

バグナル株式會社

大阪市東區京橋前ノ町三番地
電話東五二〇一　五二〇二番

建築と社會第15輯第10號

廣告索引

ア 淺海商店……40
淺野スレート株式會社……34
旭硝子株式會社……49
安藤組……22
イ 岩元商會建材部……40
エ 榮進社……33
鉛粉塗料株式會社……14
オ 大倉土木株式會社……12
大阪伊丹商店……20
大阪ガス株式會社……24
大阪橋本組……25
大阪窯業セメント株式會社……國際ウラ
大林組……2
大野製作所……表紙 2
押谷商店……46
オリエンタル化學工業所……17
キ 木下謹三商店……20
桐田商會……47
金岡養樹……國際ウラ
協和商會……37
ク 國藤工務所……52
黒川化學工業所……28
關西土地株式會社……1
關城化學工業株式會社……表紙 4
ケ 京阪電車……21
コ 鴻池組……27
金剛商會大阪支店……32
サ 佐久間パブコ工業株式會社……18
笹岡家具裝飾店……36
三稜社……45
シ 清水組……23
ス 須賀商會……43
ゼ 錢高組……13
ゼネラル工業所……59
タ 竹中工務店……11
淡陶株式會社……26
ダ ダンロップ護謨株式會社……國際ウラ
大和工業株式會社……51
テ 寺井洋家具部……56
ト 東京電氣株式會社……31
東洋リノリユーム株式會社……54
ナ ナンコク商事株式會社……35
內外土木建築材料合資會社……50
南滿鐵業株式會社……36
ニ 日本ペイント株式會社……41
日本建築紙工株式會社大阪支店……45
日本金具株式會社……國際ウラ
日本生命……56
日本パイプ製造株式會社……53
日本エレベーター製造株式會社……4
日本ドアーチエツク製造所……35
西原衛生工業所大阪支店……38
西孫南店建築金物部……39
ノ 野澤幸三郎商店……44
バ バクナル株式會社……15
フ 福原工場……57
藤田商會……30
ベ 米國貿易株式會社……58
ベニス工房……32
マ マルエス工業株式會社……19
ミ 三木商店……28
三井物產株式會社……29
綠ケ丘土地株式會社……60
ミナト製作所……57
三宅茂雄商店……46
宮島康夫商店……37
ヤ 矢橋大理商店……30
山本窯業商店……52
ヨ 横河橋梁製作所……42
米本商店……48
レ 玲光社(木內眞太郎)……48